# 関東管領始末記

千坂精一

# 関東管領始末記

目次


第一話　おおいなる陰謀……1

東国武士団が平氏一族を打倒して武家政権を樹立すると、北條時政は嫡男義時と謀って鎌倉幕府をわがものにしよう企んだ。
将軍に担いだ源氏の頼朝・頼家・實朝三代を葬って滅亡させると、同志の国人梶原景時、比企能員、畠山重忠、和田義盛らをも次々に斃して執権の座を確たるものにした。
北條義時は『承久の乱』後皇族を将軍に迎えて朝廷との融和を図ろうとして拒絶され、公卿の藤原家から迎えて時機を待った。

第二話　傀儡将軍の貴公子たち……10

五代執権北條時頼は意の儘にならなくなった九條頼經、頼嗣二代の将軍を謀叛を理由に京へ送還し、有力御家人の三浦光村一族をも斃して得宗家による安定政権を樹立した。
そして悲願であった皇族将軍を実現させた。
後嵯峨帝の第一皇子宗尊親王であった。
側役上杉重房は十一歳の親王を政治的野心を抱かぬ文人将軍に育てていったがやはり二十五歳で排除されて京へ送還され、重房は若宮惟康親王の傅役として鎌倉に留まった。

第三話　雌伏の長い隧道……19

七代将軍になった惟康親王もまた、長じて父宗尊親王と同様京へ送還された。
鎌倉に残った上杉重房は御所宿直役の足利頼氏と親交を深め、孫の清子を頼氏の孫貞氏に嫁がせて高(尊)氏、直義の兄弟を産んだ。
後醍醐帝が討幕の挙兵をしたとき高氏は父の服忌中を無理矢理北條高時に命ぜられて出陣し、他の軍勢と協力してどうやら鎮定はしたものの幕府が衰退して時代が大きく変わろうとしていることを実感した。

第四話　海路の日和……28

後醍醐先帝が隠岐を脱出したことによって状勢が一変し、幕軍の新田義貞も寝返った。
北條高時は六波羅の防衛を一族の名越高家と病臥中の高氏に命じた。
高氏はやむなく出陣したが、高時への怨念が昂じて謀叛を決意し、上杉憲顕の提言で後醍醐先帝に帰順して倒幕の綸旨を賜った。
高氏が六波羅を陥すと、一旦帰国した新田義貞が鎌倉を攻め陥とし、足利・新田の源氏が平氏の北條を滅亡させた。

第五話　落日燃ゆ……39

信濃へ逃れた北條高時の遺子時行は二年後諏訪・滋野らの国人に担がれて鎌倉を攻めた。
無勢で防ぎ切れぬ高氏の弟直義は入牢中の護良親王を奪われては一大事と弑しておいて三河へ退き、高氏の救援を待った。
高氏が時行軍を一掃した恩賞に後醍醐帝は諱の尊治の一字を与えて尊氏と名告らせた。
だが、鎌倉に居座る尊氏を幕府復活の野心とみた後醍醐帝は尊氏を捨てて義貞を採り、あらためて義貞に尊氏追討を命じた。

第六話　陽はまた昇る……50

尊氏は義貞の朝廷軍と箱根で戦い勝利して京に攻め入ったが在京の朝廷軍に敗れた。朝敵の汚名を着せられたのが敗因であった。
落ち延びた九州で国人たちを平定した尊氏は軍勢を陸海二手に分けて京に攻め上った。
迎え撃つ新田・楠木軍は兵庫で食い止めるべく布陣したが分断されてしまい、楠木軍は湊川で包囲されて潰滅し正成は自刃した。
いっぽうの義貞も劣勢とみるや丹波路に後退し、さらに京を目指して敗走した。

第七話　覇権奪取……60

後醍醐帝に見限られた新田義貞は越前に後退して敦賀の金ケ崎城で再起を図った。
京を占拠した尊氏は後醍醐帝を幽閉すると光明帝に譲位させて両統迭立を復活させた。
後醍醐帝は神器を携えて吉野に脱出し、朝廷が分裂して南北朝時代に入った。
義貞は足利軍と交戦中に眉間を射貫かれて昏倒し、最早これまでと自害して果てた。
尊氏が北朝から征夷大将軍に任ぜられた翌年後醍醐帝が五十二歳で崩御された。

第八話　兄弟相剋……71

室町幕府は将軍の執事に高師直、副将軍直義とともに鎌倉に配された嫡男義詮を補佐する関東執事に上杉憲顕と高師冬を据えた。
七年後に楠木正成の遺子正行が挙兵したが、高師直軍に攻められ四條畷で戦死した。
その師直と直義の確執が因で兄弟争いが起こり師直、師泰が討たれて和睦したが、尊氏が吉野朝村上帝から〈直義追討〉の綸旨を受けて直義を捕え入牢して病死させた。
関東執事上杉憲顕は越後国に蟄居となった。

第九話　好機到来……82
出没を繰り返していた北條高時の遺子時行をついに捕えた尊氏は鎌倉龍ノ口で斬首した。
鎌倉の基氏の補佐には畠山國清を据えた。
尊氏が悪性腫瘍に罹り五十四歳で逝去すると二代将軍義詮は國清失脚のあと父尊氏の兄弟相剋のとき弟直義側にいて越後へ蟄居させられた外戚の伯父上杉憲顯を関東管領に迎えて公方基氏の抑えに据えた。
憲顯が鎌倉山内に邸を構えたので兄弟らは犬懸、宅間、扇谷にわかれて蟠踞した。

第十話　諫死と隠棲……89
上杉憲顯が高齢で病没した後任に犬懸朝房と宅間能憲が選ばれ〈両管領〉といわれた。
そのあとの山内憲春のとき公方氏満が野心を燃やして将軍の座を狙ったので留めたが聞き入れられず、諫死して悪夢を醒めさせた。
のちに管領になった犬懸朝宗は六十歳で二十一歳の新公方満兼を迎え孫のように扶育して引退後も見守りつづけたが、満兼が三十三歳で病歿すると葬儀のあと屋敷へは戻らず領国上總の胎藏寺に隠棲したまま世を去った。

第十一話　禅秀蹶起……102
上杉四家は宅間家の衰頽で三家になった。
管領山内憲方は父憲顯が管領就任のとき嫡子憲將が病弱だったため兄憲藤の嫡子犬懸朝房に越後守護を譲ったことが口惜しく、朝房の弟朝宗に越後守護と管領交替制の交換を提案して同意を得たので憲方のあとを犬懸朝宗山内憲定、犬懸禪秀(氏憲)と継承してきた。
ところが次の山内憲基が管領奪還を画策して公方持氏を取り込み、禪秀を謀叛人に仕立てて幕府の救援を求め犬懸家を滅亡させた。

第十二話　ふたつの大乱……115
五代将軍義量が病死したので公方持氏は前将軍義持に猶子を願い出たが拒否された。
後継將軍は義持の弟四人の籤引で決まった。
新将軍義教は従属せぬ公方持氏の討伐を管領憲實に命じた。やむなく持氏を攻めて自害させた憲實は法体となって西方行脚に出た。
その後、下總の結城氏朝が持氏の遺子を擁して挙兵したが鎮定され、結城父子は戦死、三人の遺子は京に送られる途中垂井で二人が斬首され少年の永壽王丸は放逐された。

第十三話　扇谷家宰　太田資長（道灌）……123

永壽王丸は管領憲忠に迎えられて公方成氏となったが遺恨を抱いて憲忠を騙し討ちしたので公方派と管領派の対立になり、幕府の助勢を得た管領派が成氏を古河へ駆逐した。
扇谷上杉の家宰太田道灌は、河越、岩槻、江戸城を拠点にして関東を征圧し、大いに武名を挙げたので山内顕定に乗っ取られると囁かれた主君扇谷定正は疑心暗鬼になり、それが昂じてついに相模の糟谷館に呼び出すと道灌を騙し討ちにしてしまった。

第十四話　山内顕定と扇谷定正の対決……135

太田道灌の謀叛は顕定の謀略と知った定正は顕正を斃すべく成氏、景春と手を結んだ。
定正を迎え撃つ顕定は、相模實蒔原、武蔵須賀谷原、同高見原で三度戦ったがいずれも敗北を喫し、翌年須賀谷原での四度目の対決もまた敗れて歯が立たなかった。
それから五年後の高見原の対決で定正が落馬死したことから顕定は漸く勝利したが、山内宗家はみずからの手で犬懸、扇谷家と抗争して倒し団結の支えを喪ってしまった。

第十五話　山内顕定の最期……143

顕定が扇谷家との抗争をつづけているあいだに伊豆の早雲が関東に触手を伸ばしてきた。
まず小田原を攻めて相模西部を掠め奪った。
顕定に攻められている扇谷朝良は駿河の今川氏親と伊豆の早雲に来援を求めた。
早雲は武田攻めに失敗したことから上杉が武田と結ばぬよう早手回しに和を求めていた
越後守護代長尾為景が守護上杉房能を討ったので顕定が弟の仇討ちに為景を攻めたが逆に逐われて長森原で返り討ちされてしまった

第十六話　落日の譜……150

顕定は古河の足利政氏の弟顕實を養子にしていたので実子憲房との後継争いになったが、憲房を支える家臣たちが多かったので顕實は古河へ逃げ帰ってしまいけりがついた。
だがその憲房は五十九歳のとき上野平井城で病歿した。嫡子憲政はまだ十九歳であった。
扇谷朝定が北條氏綱に拠点の河越城を奪われて武蔵の一隅に追い遣られてしまったことにより、山内憲政もまた上野平井城を中心とする関東の最北隅だけになってしまった。

第十七話　河越無残……157
山内憲政は扇谷朝定が北條氏綱に陥とされた河越城の奪還を図り古河の足利晴氏を奉戴した連合軍で河越城を包囲して糧道を絶った。
城将北條綱成は小田原の氏康に救援を依頼した。氏康は今川義元との紛争を武田信玄の調停で和睦し八千の援軍で河越に向かった。
上杉方は数を恃んでのんびり落城を待っているところへ氏康の奇襲を受けて慌てふためき、混戦のなかで扇谷朝定は戦死し、憲政は辛うじて戦場を離脱すると平井へ逃げ帰った。

第十八話　管領憲政関東落ち……167
北條氏康に平井を攻められた憲政は越後の長尾景虎（謙信）を頼るしかなく、景虎の父為景が守護房能と管領顕定を弑しているので不安だったが確約を得て半信半疑で落ち延びていった。案ずるより産むが易く景虎は誠意をもって憲政を迎え入れ庇護してくれた。
いっぽう嫡子龍若丸は常陸の佐竹義昭を頼るよう命ぜられた妻鹿田新介に裏切られて北條氏康に差し出され斬首されたが、新介もまた不忠者と罵られて晒し首にされた。

第十九話　越後の春……179
憲政は景虎に御館と称ばれる管領館を建てて貰って安穏な日々をすごした。
だが景虎は多忙だった。武田信玄に逐われた信濃衆が次々に頼ってきていたのだ。
景虎は信玄と川中島で交戦を繰り返した。
憲政がなんどすすめても辞退していた景虎がついに家名を継承してくれた。
そして将軍足利義昭からの命を受けて信長打倒の上洛大遠征を決意した謙信（景虎）は麾下の諸将に『動員令』を発した。

第二十話　御館の乱……192
三月十五日の出陣を目前にして謙信は九日に厠で倒れ昏睡状態のまま十三日に身罷った。
謙信は二人の養子長尾政景の二男景勝と北條氏康の七男景虎のどちらを後継者にするか決めていなかったので相続争いが起こった。
勝利した景勝は景虎の籠もった御館を破却することにしたので憲政は春日山城内のいずれかに安住の場所を与えて貰おうとして城へ向かう途中見知らぬ下級武士に景虎側と間違われて斬り捨てられ敢えない最期を遂げた。

# 第一話　大いなる陰謀

東国武士団が平氏一族を打倒して武家政権を樹立すると、北條時政は嫡男義時と謀って鎌倉幕府をわがものにしよう企んだ。

将軍に担いだ源氏の頼朝・頼家・實朝三代を葬って滅亡させると、同志の国人梶原景時、比企能員、畠山重忠、和田義盛らをも次々に斃して執権の座を確たるものにした。

北條義時は『承久の乱』後皇族を将軍に迎えて朝廷との融和を図ろうとして拒絶され、公卿の藤原家から迎えて時機を待った。

## 一

関東管領というのは室町幕府の職制で、鎌倉におかれた政治機構鎌倉府の統轄者鎌倉公方（または関東公方ともいわれた）を補佐した。

幕府で将軍を補佐し政務全般を総轄する管領が足利氏の支族斯波、細川、畠山三氏の交代就任だったのにたいして、関東管領は将軍家の外戚上杉氏の世襲であった。

だからこれは、上杉氏歴代のはなしなのである。

上杉氏といえばなんといっても謙信が有名であるが、じつは謙信は上杉氏の血筋ではなく上杉氏が守護職を兼ねていた越後國の守護代長尾氏の出身で、最後の関東管領上杉憲政に家名を譲られた人物なのだ。

それはさておき、さっそく本題に入ろうと思うのだが、いきなりでは途惑われる向きもあろうから、因って来たるところの概略から話をすすめることにしよう。

まずは武家政権が確立した鎌倉初期にさかのぼる。

源頼朝が征夷大将軍に任じられて鎌倉に幕府をひらいてから六年目の建久九年（一一九八）十二月二十七日、稲毛重成が亡妻追善で相模川に架けた橋供養に出席した。

稲毛重成の妻は頼朝の妻北條政子の妹であった。

頼朝はその橋供養の帰途に落馬したのが因で、二週間後の翌年正月十三日に五十三歳で死去したという。

ところが、初代将軍死去というこの重大事が幕府の公式記録『吾妻鏡』に記載されていないのである。

『吾妻鏡』は治承四年（一一八〇）五月源頼政挙兵から文永三年（一二六六）七月前将軍宗尊親王帰洛にいたる

八十七年間の重要史料なのに建久六年（一一九五）正月から十二月の巻十五のあと巻十六は建久十年（一一九九）二月六日から正治二年（一二〇〇）十二月までで頼朝の死を含む建久七年（一一九六）正月から同十年（一一九九）正月までの三年一箇月が欠落しているのである。

故意か、散逸か、書かなかったのか、疑問が残る。

巻十六は、二月六日頼家、頼朝の遺跡を継ぐではじまり、三月二日頼朝四十九日佛事、四月二十三日頼朝百箇日佛事とあるだけで死因の記録がどこにもないのだ。

頼朝は倒れてから二週間生存していたということは心臓麻痺ではなく脳卒中か蜘蛛膜下出血であろうが、それならそうと記述しても差し障りはないはずで、記録されていないということはなんとも不可解で訝しい。

かえりみると、治承四年八月の頼朝伊豆での挙兵はかならずしも源氏の再興を希ってのものではなかった。

頼朝はそのつもりだったろうが、味方した豪族たちは関東に残った平氏の支族が多く、彼らは徴税だけして給付をしない京の平氏政権への不満が昂じて東国に自治権を確立しようとして立ち上がったのであった。

だが、誰を棟梁に立てるといっても抽ん出た者がおらず結束を欠いていたところへ恰好の人物が現れた。

それが伊豆に流されてきた源氏の御曹司頼朝であった。

頼朝を担げば京の平氏への報復という大義名分が立つということで挙兵した東国武士団の蹶起であったのだ。

だから平氏を倒して鎌倉幕府が成立するともはや源氏の血統は無用になり、頼朝の影は薄くなっていった。

頼朝の法要記録はあるが、死因が判然りしない。

藤原定家の日記『明月記』にも、頼朝急病とあるのみで病名は明記されていない。死因は謎に包まれていた。

こうなると下司の勘繰りで、諸説紛々としてくる。

ある説は、

「橋供養の帰途、稲村ヶ崎の辺りで義仲、義経や平家公達の怨霊が海中から現われたので愕いて落馬した」

というし、またある説は、

「壇の浦で戦死したと思った平教経が女装で頼朝を襲い、重傷を負わせた」

ともいう。

これら荒唐無稽なものは採るに足りないが、二、三おなじ説が唱えられていることに注目させられた。

「女装して女の家に忍び込んだ頼朝を、政子が宿直の近習に命じて斬殺させた」

というのである。

これなら女好きの頼朝と嫉妬深い政子のことだからあり得る話だと頷ける。

その後、この話を眞山青果が戯曲に書いていることを知った。調べてみたら『頼朝の死』という作品で、宿直の近習は畠山重忠の嫡男重保になっていた。

頼朝の死因についてはいつまで詮索していても際限がないからこのくらいにしておいて、東国武士団の蹶起が成功して平氏を滅亡させたことによって源氏の将軍を必要としなくなったのではないかということについては、二代将軍になった頼家から訴訟親裁権を取り上げて北條時政・義時父子ら宿老十三人の合議決裁にしてしまったことで、将軍無用論が表面化したことがわかる。

幕府の頂点に立つ将軍という独裁者が有名無実の存在になると有力豪族たちがたがいに腹を探って牽制し合い、猜疑心を抱いて蹴落とそうとする相剋が激しくなる。

まず頼家の乳母夫で傅役でもあって権勢を誇っていた梶原景時が宿老たちの反感を買って槍玉に挙げられた。

御家人六十六人からの要請によって鎌倉幕府を追放され、一族を率いて京へ向かう途次に駿河國清見ヶ関（静岡市清水区興津清見寺町）で討たれた。

ついで頼朝の弟阿野全成が謀叛の疑いで捕えられた。

全成の妻は北條時政の娘であったが、頼朝の乳母だった比企局の甥能員は娘若狭局を頼家に嫁がせて将軍家の外戚になっていたので、能員が時政の勢力を削ぐために仕掛けた先制攻撃だったのであろうと推測される。

だがその直後に頼家が病に罹り危篤に陥ったことから時政は形勢逆転の好機とすかさず頼家の承諾なしに家督譲渡を取り仕切り、本来嫡男一幡が相続すべきものを関東二十八箇国の地頭職と惣守護職にとどめて、関西三十八箇国は頼家の弟千幡（後の實朝）に与えてしまった。

頼家は三日後に死病から生き返って小康を得たがあとの祭りで、すでに政治生命は絶たれてしまっていた。

これを千幡擁立を目指す時政の陰謀と看破した能員は、時政追討を目論んだが事前に漏れてしまった。

時政は気づかぬ体で自作の薬師如来像開眼供養の仏事に託けて能員を北條邸に誘き出すと謀殺し、間髪を容れず小御所を襲わせて六歳の一幡とその母若狭局はじめ能員を気遣い集まってきていた比企一族を全滅させた。

この〈比企の乱〉は宿老勢力争いの幕開けであった。

怒った頼家はただちに和田義盛と仁田忠常に時政追討を命じたが、義盛がその使者を時政に差し出してしまったことで忠常はやむなく立ち上がって討ち死にした。

時政は頼家死歿を朝廷に奏上して十二歳の千幡を征夷大将軍に任じさせると實朝の名を賜わらせた。

北條政子はやむなく頼家を出家させ伊豆國修善寺に幽閉して難を逃れさせようとしたが、翌年殺された。

つぎに北條時政が狙ったのは畠山重忠であった。

畠山重忠と京都守護職平賀朝雅の妻はどちらも北條時政の娘であるが異母姉妹で、重忠の妻は伊豆國の豪族伊東入道祐親の娘の子、朝雅の妻は後妻牧ノ方の娘である。

重忠の嫡男重保が上洛して朝雅と面会したおりに、諍になって重保に罵声を浴びせられたことを根に持った朝雅が、牧ノ方に讒言したのがことの起こりであった。

牧ノ方に乗せられた時政は、息子の義時や時房らの反対を押し切って畠山重忠・重保討伐に立ち上がった。

重保が時政の娘婿稲毛重成に呼び出されて鎌倉で騙し討ちにされたことに抗議するため重忠が軍勢を率いて鎌倉へ向かう途次に、武蔵國二股川（横浜市旭区二俣川）で待ち伏せしていた幕府軍と合戦になり戦死した。

ＪＲ横浜駅と小田急線海老名駅とを結ぶ相鉄線の鶴ヶ峰駅から国道十六号線へ出て鶴ヶ峰交差点を右に下ったところに、昭和三十年（一九五五）重忠の七百五十年忌追悼で地元有志が建てたという〈武州鶴ヶ峯畠山重忠公古戦場跡碑〉があり、その近くの薬王寺（横浜市旭区今宿）には畠山霊堂、重忠地蔵尊、家来たちの六つ塚などもあり、また二俣川駅の南に位置する万騎ヶ原にも〈畠山偉勲碑〉があってその遺徳が偲ばれている。

初代将軍頼朝についてはさだかでないが、梶原景時、阿野全成、比企能員、二代将軍頼家、畠山重忠とつぎつぎに排除して伸し上がってきた時政だったが、その傲慢無礼の極みが命取りになるときがやってきた。

その原因をつくったのはまたも牧ノ方の欲望であった。

牧ノ方は義理の娘政子の子實朝を廃して、娘婿の平賀朝雅を将軍に擁立しようと画策したことが露見した。

この謀叛はいかに実父と雖も捨ておけず、政子・義時姉弟は大豪族の宿老三浦義村を抱き込んで父時政を失脚させると、出家して伊豆國北條（伊豆の国市韮山）に隠棲することでことをおさめ、義時が執権の座に就いた。

義時はすぐさま平賀朝雅を討つと禍の芽を摘みとった。

この年元久二年（一二〇五）十二月二日、頼家の子善哉（公暁）が鶴岡八幡宮別当尊暁の弟子になった。

## 二

義時が執権になって八年経った建暦三年（一二一三）正月、實朝・義時体制打倒の陰謀が露見した。

注進してきたのは御家人千葉成胤で密使を捕えていた。

信濃國の泉親衡という者が頼家の子千手丸（後の榮實）を奉じて謀叛を企て、加担を誘ってきたというのだ。

義時はことの次第を實朝に言上すると、大江廣元らと相談して御家人の同調者を隈無く探索させた。

すると、同調者のなかに和田義盛の子義直・義重兄弟と甥胤長の名があったので評定衆は愕いた。

和田義盛は頼朝・頼家・實朝三代にわたり武士団を束ね取締る幕府中枢の侍所別当職を勤める大重臣である。

そんな義盛の息子や甥が幕府打倒の陰謀に加わるはずはないのだが、これは独裁権を維持しようとする義時が父時政の遺志を継いで拮抗する勢力を潰滅するために

種々策を用いて挑発するその一方策だったのである。
このとき上總國にいた義盛は、報らせを受けるとただちに鎌倉に駆けつけ、實朝に陳情して宥免を懇願した。
實朝も疑心暗鬼だったので宥したが、義時は胤長だけは赦免しなかった。元も子もなくなってしまうからだ。
義時は胤長を陸奥國に配流しておいて、誅殺した。
その義時の酷い仕打ちに、義盛は怒り心頭に発した。
和田義盛は忠節無比の鎌倉武士であったがどちらかというと政治的駆け引きに欠ける単純な性格だったので、いとも容易く義時の術中に嵌ってしまった。
義盛は同族三浦義村と糾合して義時討伐を図った。
北条義時の専横をゆるさぬ国人たちが義盛に応じた。
だが、幕府の重職執権を斃そうとするのは叛逆である。
北條氏打倒の確たる勝算がなければ起つべきではないと覚った三浦義村は、義盛に同心の起請文を書いておきながらよくよく考慮したすえに蹶起を思い留まった。
しかし義時のことだから、義盛を斃しておいて同族の義村にも言い掛かりをつけてくることは考えられた。
ならば保身のため先手を打っておくに如くはない。
そう考えた義村は、義盛の動静を義時に告げた。
真逆こんなに早く義盛が謀叛するとは思っていなかった義時は、義村のおかげで急遽幕府の防衛態勢を整えた。
ために和田勢は御所を包囲して炎上させたところまで守勢に立ち、僅か二日間の戦闘で衆寡敵せず、由比ヶ濱に追い詰められた義盛は一族とともに討ち死にした。
義時は義盛と同族の三浦義村をも斃して権勢を恣にしたかったのだろうが、義村の泣いて馬謖を斬るにひとしい捨て身の画策によってことは成し遂げられなかった。
だが、和田義盛の謀叛を鎮圧した義時は、執権とともに侍所別當をも兼ねて、三浦義村を取り逃がした禍根は残しながらも幕府内での指導的地位を確立させた。

## 三

北條時政が歿して四年後、四月に承久と改元される建保七年（一二一九）一月二十七日に大事件が起こった。
史上有名なこの将軍暗殺事件は万人周知のところなので経過は省略するが、惨劇の被害者三代将軍源實朝、加害者實朝の甥公曉はわかっていても、公曉を動かした黒幕は誰か今日にいたるも諸説あって謎に包まれている。
なかでも執権北条義時の陰謀説がもっともらしい。
当日、實朝の右大臣拝賀の行列が鶴岡八幡宮に向かったときに、北条義時は不可解な行動をとっているのだ。
實朝の牛車の直前を騎馬行進していた義時は楼門を潜って間もなく急に気分が悪くなり、捧持していた剣を隣にいた源仲章に譲って行列を離れ宮内で休息したのちに小町の自邸に帰ってしまったことが疑惑を持たれたのだ。『吾妻鏡』は鎌倉幕府の事績編述であるはずなのに

明らかに北條執権寄りになっていて、事件の前後に態々弁解がましい記事を載せているのがなんとも訝しい。

その記述というのはこうである。

事件の前年七月九日のところに、

〈義時が昨日将軍の鶴岡参拝に同行して夜帰邸し休息したとき、夢の中に薬師十二神将のうちの戌神が枕許に来て「今年の神拝は無事であったが明年拝賀の日には供をしないように」と告げたという〉

とあり、さらに翌年事件後の二月八日のところには、

〈義時が大倉薬師堂に詣でたとき、去る二十七日戌の刻の難を免れたのは、白い犬がそばに現われとたんに気分が悪くなって御剣を源仲章朝臣に譲り、伊賀四郎朝行だけを供させて自邸に帰ったのだが、恰度白い犬が義時のそばに現われたその戌の刻ごろ、この堂の戌神将の像がここから消えていたと禪師に言われた〉

とあって、この前後の記述は取って付けたようにわざとらしく、違和感があるのだ。

わざわざこんなことを記述するということは、幕府内で北条義時元兇説がまことしやかに囁かれていたに違いなく、それを打ち消すための弁解だったのであろう。

義時に嫌疑がかかる原因は皇族将軍擁立にあった。

(将軍を徹底的に有名無実の傀儡にする)

義時の野望を実現する手段は唯一つ、

(次期将軍を皇族から迎える)

ことであった。

そうすれば後鳥羽院の院政下にあって幕府と張り合う公家とも協調が図れるし、一石二鳥の効果があった。

そこで義時は、姉政子と弟時房を京へ派遣した。

政子は院の乳母卿二位藤原兼子と話し合いをすすめて、後鳥羽院の第三皇子六條宮雅成親王か第四皇子冷泉宮頼仁親王を候補に選ぶ密約を交わすことに成功した。

だからといってそのことで義時を疑うのは早計である。

というのは、義時はまだ藤原兼子からの沙汰待ち状態であったのだからそのまえに将軍暗殺事件を起こそうものなら話は毀れてしまうから暴挙に出るはずがない。

義時の嫌疑についてさらに釈明しておくと、建保四年(一二一六)六月實朝は東大寺大仏建立の首の鋳造に成功した宋の工人陳和卿を引見したとき、中国の医王山詣でを勧められてその気になり大船建造を命じた。

中国へ渡海するなど将軍職の放棄に等しい無謀な計画だと義時たちは反対したが、實朝は諾き入れなかった。

翌年四月に大船は竣工したが由比ヶ濱での進水に失敗したので結局実現しなかったのだが、もし義時が實朝排除を考えていたのならこのとき渡宋させたであろう。

さらに、實朝の乳母は政子の妹阿波局なのである。

この時代の乳母というのは、生母に代わり幼児に乳を与える単なる養育係というだけではなく、幼児との絆が

固かったから、その養君が成育し軈て権力の座に就いたときには一族を挙げて権勢を恣にできたのである。
だから、實朝は北條一族にとって大切な存在なのだ。
その實朝を義時はみずから弑逆するであろうか。
こうなるとどうやら義時の嫌疑は晴れそうである。
もうひとり、疑わしい人物がいる。三浦義村である。
権謀の人三浦義村の妻は公曉の乳母であった。
源氏の血統の公曉が次期将軍になったときには、三浦義村が北条義時に代わって優位な立場になれるわけだ。
だからといって公曉が實朝を討てば義村に唆した嫌疑がかかり、謀叛人ということで誅伐される破目になる。
だが、今日まで、
「御父上の御敵は叔父實朝将軍と執権北條義時である」
ことを執拗に吹き込んでその気にさせておいて、いまさら仇討ちを思い留まらせることなどできなかった。
そうかといって公曉が實朝と義時を討ったとしても、公曉が将軍になり義村が執権になれる保証はなかった。
北条義時の嫡男泰時はすでに三十七歳になっていて、侍所別當として武士団を完全掌握していたのである。
その泰時の妻は三浦義村の娘であった。
義村は和田合戦のとき同族和田義盛を裏切り北條時政に恩を売って生き延びてきたように、ここは義時にそうして北條氏との対立を避けようと考えをめぐらした。
義時に公曉の實朝暗殺計画を打ち明けて拝賀式の御剣捧持役を途中で誰かに代わらせて難を避けさせる。
そうしておいて公曉に實朝を殺害させれば義時の皇族将軍擁立計画が早まり、義村は感謝されて一目置かれる。
つまり義村と公曉は一心同体と看做されているのだから、義村の潔白が証明されれば義時の信頼が高まる。
その権謀術数を義村に打ち明けられた義時は愕いた。
「だが将軍を討ったあとの公曉の始末をどうつけるか」
将軍を弑した者を捨ておくわけにはいかなかった。
「公曉は将軍を討ったあとはかならずやわれらを侍みましょうから、匿うとみせて剛の者に討たせましょう」
義時は義村の言葉を疑った。将軍を討った叛逆者といっても親の敵という名分があるから、三浦が庇護すれば幕府を二分する騒動になるやも知れなかった。
かといって、義村が処分を引き受けると明言するのを疑うわけにもいかなかったので、義時は渋々承諾した。
そして、事件は起こった。
この日は雪になったので止むのを待って酉の刻（午後六時）から将軍實朝右大臣拝賀の儀式が執り行われた。
義村は病気と称して嫡男小太郎朝村を参列させ、義時は途中で気分が悪くなったといって捧剣役を源仲章に代わってもらい、實朝と仲章が公曉の兇刃に斃れた。
これで、源氏の貴種を絶やして東国武士団が自立する北条義時と三浦義村の共同謀議は見事に成功を収めた。

## 四

三代将軍實朝の不慮の死により義時は二階堂行光を上洛させて懸案の皇族将軍を督促したが、朝廷は将軍暗殺の不祥事を起こした幕府の弱体化を懸念して渋った。

義時は諦めず、源氏の血筋を絶ったあとの将軍は有名無実の傀儡にする所期の目的からいっても是が非でも皇族から迎えねばならず、そうすることによって幕府と張り合っている公家とも協調できて好都合であった。

あせった義時は、ちょうど實朝の死を弔う勅使として下向してきていた藤原忠綱にしつこく督促した。

忠綱の弔問使は表向きで、実は幕府の様子を探る密命を帯びていたので、交換条件に難題を持ち出した。

「地頭職のなかに院のお気に召さぬ者がいて、そのことが幕府の心証を悪くしているのですから、まずはその者たちを改補なされるのが先決でござりましょう」

「その地頭職とは、どこの誰でござるか」

「摂津の長江と倉橋荘の地頭職どもでござるよ」

この両荘は後鳥羽院の女房亀菊の所領であり、皇族将軍承認について地頭職更迭を条件にするとは公私混同もはなはだしく、幕府も見縊られたものであった。

怒り心頭に発した義時は、藤原忠綱の帰洛を待ってすぐさま弟時房、嫡男泰時それに大江廣元などを姉の政子邸に集めて地頭職改補要求を拒絶することを主張した。

そして、時房を使者に立て千騎を与えて上洛させた。

この幕府の強硬な態度に院側も硬化して皇族将軍拒絶の報復手段に出たので、交渉は決裂してしまった。

義時はやむなく皇族将軍を諦め、後鳥羽院の后任子の実家で親幕派藤原（九條）兼實の孫に当たる左大臣道家の四男二歳の三寅（後の頼經）を迎えることでなんとしても京から征夷大将軍を迎えねばならぬ折合いをつけた。

そして四月十二日に承久と改元された六月三日に宣旨が下り、三寅は京を発して七月十九日に鎌倉に下着した。

渋々宣旨を下したものの朝廷に楯突く義時に激怒した後鳥羽院は、そのおさまらぬ胸中を第四皇子の順徳帝に明かしてひそかに倒幕計画を練っていった。

翌承久三年（一二二一）四月、順徳帝が譲位して第一皇子懐成親王が仲恭帝になった。この時点で後鳥羽院の第一皇子土御門、第四皇子順徳の両帝が上皇になった。

翌五月十四日、後鳥羽院は倒幕に立ち上がり、京都守護職伊賀光季を誅殺すると、親幕派の西園寺公經父子を幽閉しておいて、〈北條義時追討〉の宣旨を下した。

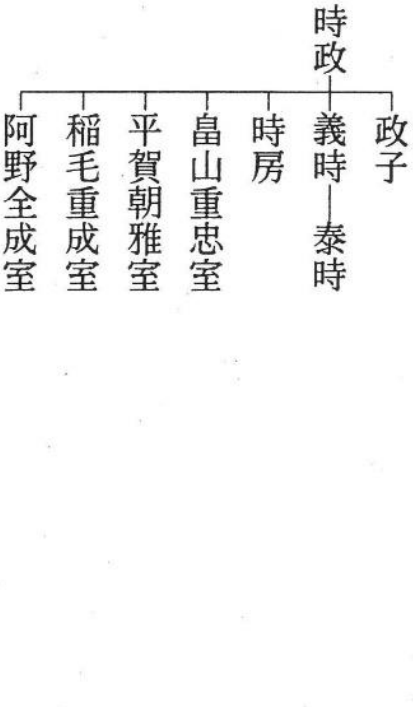
推進者は後鳥羽、順徳両院をはじめ坊門、高倉の公家などで、土御門院は局外者、摂関家は反対派であった。

幕府は北條政子の御家人結束の出陣宣言を受けて信濃、遠江以東十五箇国二十万の軍勢を動員し、義時の嫡男泰時を総大将に弟時房を副将に添えて都に攻め上った。

朝廷倒幕派は、この大軍に一箇月で潰され惨敗した。
後鳥羽、土御門、順徳院と仲恭帝は比叡山に逃れたあと東坂本の梶井御所に移り、『宣旨』を撤回した。
これが世にいう〈承久の乱〉である。
朝廷と幕府のもっともはげしい対立であった。
六月十六日、幕府は朝廷監視のため泰時を京六波羅の北に、時房を南に駐在させた。これが〈探題〉である。
乱後一箇月経った七月三日幕府は上皇の処置を決定し、出家した後鳥羽院を隠岐へ、順徳院を佐渡へ配流した。このとき、土御門院はみずから土佐へ落ちていった。
三上皇配流という史上稀な結末であった。
さらに幕府は、仲恭帝に代わって即位歴のない後鳥羽院の兄宮守貞親王を後高倉院として院政を執らせた。
そして、仲恭帝に譲位を促すと、後高倉院の第一皇子茂仁王を即位させて後堀河帝としたのである。
このとき、義時ははじめて天皇の廃立にかかわった。
これを契機にして王朝は衰微し、幕府は隆盛を極めて、北條執権政治は益々強力なものになっていった。
その三年後、十一月に元仁と改元される貞應三年（一二二四）六月十三日北條義時は六十二歳で急死した。
父時政のあとを受けて鎌倉幕府を統轄し、武家政権を拡大充実させて権力の座に上り詰めた義時であったが、その突然の病死によって拮抗する勢力を有する三浦義村を粛正できなかったことが唯一の心残りであったろう。
さすがの義時も、天命には勝てなかった。

〔皇室略系譜〕

〔北条氏略系譜〕



# 第二話　傀儡将軍の貴公子たち

五代執権北條時頼は意の儘にならなくなった九條頼經、頼嗣二代の将軍を謀叛を理由に京へ送還し、有力御家人の三浦光村一族をも斃して得宗家による安定政権を樹立した。

そして悲願であった皇族将軍を実現させた。

後嵯峨帝の第一皇子宗尊親王であった。

側役上杉重房は十一歳の親王を政治的野心を抱かぬ文人将軍に育てていったがやはり二十五歳で排除されて京へ送還され、重房は若宮惟康親王の傅役として鎌倉に留まった。

## 一

鎌倉幕府の将軍候補として鎌倉入りした藤原道家の四男三寅は、七年後の嘉禄二年（一二二六）一月二十三日名を頼經と改めて僅か九歳で四代将軍に就任した。

ここに二代執權北條義時が要望した補佐役執權の意の儘になる傀儡将軍が実現して、執權政治が確立した。

三代執權北條泰時は、四年後の寛喜二年（一二三〇）十二月九日、十三歳になった将軍頼經に二代将軍源頼家の娘で二十八歳にもなっている竹御所を娶せた。

だが、執權職に重宝な幼将軍も成人すると自我が芽生えて判断力、批判力が備わり邪魔な存在になってくる。

二十七歳になった操り人形頼經に自分の意志で手足を動かす気配が出てきたので、泰時の孫四代執權經時は頼經の嫡男で六歳の頼嗣に将軍職を交代させた。

執權の勝手で廃立させられた頼經は憤懣遣るかたなく、出家すると〈大殿〉と称ばせて鎌倉に居坐った。

それが騒動の火種になった。

二年後の寛元四年（一二四六）三月二十三日に經時は病に倒れたので二十歳の弟時頼に執權職を譲った。

その一箇月後に經時は二十三歳の若さで世を去った。

すると、若輩時頼を侮った一門の有力者名越光時が不平不満の蟠る大殿頼經を擁して執權職奪取を謀った。

名越家の不穏な行動はかねてから燻りつづけていた。

というのは三代執權泰時が仁治二年（一二四二）六十歳で身罷ったとき、嫡男時氏はすでに十二年まえに二十八歳で死去していたので、十九歳の孫經時が継承した。

このとき、泰時の弟朝時は分家して名越家を興し北條

一門の最右翼だったので執權就任の好機だったのだが、二代義時の法号をとって〈得宗家〉と称する嫡流家が厳然として揺るぎなかったので無念の出家をしていた。

光時は、父朝時の悲願成就を謀ったのであった。

執權時頼はこの名越光時の謀叛を僅か二箇月で鎮圧すると、光時の伊豆配流をはじめ加担した千葉秀胤、三善康時らを追放して、不穏分子を幕府内から一掃した。

その後、大殿を自称する頼經は担がれたのではなく、光時と気脈を通じて〈得宗家打倒〉に積極的だったことが判ったので、執權時頼は頼經を京へ送還した。

累は頼經の父九條道家、兄摂政一條實經ら一族に及んだのだが、頼經の嫡男頼嗣だけは不問に付した。

頼嗣の妻が亡兄經時の娘檜皮姫だったので時頼が遠慮したというより、突然の暴挙だったので次の将軍候補がまだ念頭になく、やむなく執行猶予にしたのだった。

その翌年、つまり寶治元年（一二四七）六月に執權時頼は名越騒動の延長戦ともいうべきか、評定衆三浦光村と大殿頼經との密約説を口実にして三浦一族を挑発した。

乗せられた三浦光村は一族郎党を鎌倉に集結させた。

このとき、執權時頼は光村の兄泰村だけは討伐しないと約束したのだが、三浦一族と不仲の外戚安達景盛、義景父子らが断わりもなく泰村を襲ってしまった。

三浦泰村らは頼朝の墓所法華堂に籠もって防戦したが衆寡敵せず、一族近親ら五百余人は自刃して果てた。

執權北條一族と肩を並べるこの三浦一族を最後にして、有力御家人のすべてを抹殺した時頼は、ここに北條得宗家による鎌倉幕府の安定政権を樹立したのである。

## 二

それから四年の歳月が経過した。

建長三年（一二五一）の暮れも押し迫った十二月二十六日、思い掛けない風説が時頼の耳に入った。

将軍頼嗣が僧了行らと時頼排除を企んでいるという。

時頼はただちに密偵を放って不穏分子らの密会場所を突き止めさせると不意を衝いて将軍頼嗣、僧了行をはじめその場に居合わせた佐々木氏信、武藤景頼、矢作左衛門尉らを一網打尽にして陰謀の経緯を吟味させた。

その結果、僧了行らに支持されて将軍頼嗣自身が執權時頼排除の急先鋒であったことが歴然としたので、時頼は即座に頼嗣から将軍職を剥奪した。

そして翌年二月二十日、十四歳の頼嗣を京へ強制送還することにきめると、朝廷に対して、

「九條家との関係を絶つ」

ことを正式に申し入れた。

後深草帝の勘気に触れた九條道家は蟄居させられ、関東申次は西園寺實氏に、摂政は近衛兼經に代えられたの

で、失意した道家は体調を崩し六十歳で世を去った。
時頼は、執權就任当初から曽祖父二代義時が希んで果たせなかった皇族将軍のことを気にかけていたので、このたびの将軍の失態は朝廷側にあるこの機会に攻勢をかけて曽祖父義時の遺志を実現させようと思い立った。
そこで時頼は、さっそく執權補佐役の大叔父（祖父泰時の弟）連署極楽寺重時の加判をもって重時の嫡男六波羅探題赤橋長時から後嵯峨院に奏請させた。
時頼が、後嵯峨院を選んだのには理由があった。
それは、病床にあった祖父泰時から聴いた話である。
仁治三年（一二四二）正月九日四條帝が事故で崩御された。まだ十二歳の少年だったので皇子がなかった。
慌ただしく皇継問題が取り沙汰され、四條帝の外戚にあたる九條道家は順徳帝の皇子岩倉宮忠成王を推して西園寺公經ら有力公卿たちの賛同を得たので、親幕派であるところから執權北條泰時に経緯を急報で伝えた。
事態を知った泰時は、重大事だと深刻に受け止めた。
幕府にとって承久の乱の主謀者である後鳥羽院、順徳院の系統は断じて敬遠しなければならないのだった。
泰時は、あのとき討幕に与せず中立の立場を堅持した土御門院の系統から選ぶべきだと考えて、安達義景を使者に立てて上洛させると、忠成王擁立を制止して、
「これは鶴岡八幡宮の神意である」
ことを強調する高圧的な態度に出て、幕府は土御門院の皇子邦仁親王を推す意志を強硬に貫いた。
この泰時の強引な介入を先例にして、以後幕府は天皇の廃立にかならず干渉するようになってゆくのである。
遺恨の流れを断って安堵した泰時は四月に發病すると五月に出家したが、六月十五日に六十歳で世を去った。
つづいて順徳院が九月十二日に崩御されたので皇位継承を争った当事者がいなくなり、火種は消えていった。
このときの邦仁親王が、いまの後嵯峨院なのである。
後嵯峨院は、即位して天皇になれたことで幕府に深く感謝して、なににつけても好意的な態度をとった。時頼はそこに付け入って皇族将軍を要求したのであった。
打てば響く後嵯峨院の反応は早かった。
六波羅探題赤橋長時からの報告によると、後嵯峨院はわが子の将軍就任を承諾すると、二人の皇子の名を挙げていずれにするか決めよとの御下問があったという。
執權時頼は、年長のほうの皇子を迎えることにした。
これが鎌倉幕府初の皇族将軍になる宗尊親王である。

## 三

宗尊親王は仁治三年（一二四二）十一月二十二日、その年一月二十日に践祚し三月十六日に即位したばかりの後嵯峨帝の第一皇子として生まれ中書王と命名された。
生母は、藏人木工頭平棟基の娘棟子である。

中書王は、曽祖父後鳥羽院の寵愛深かった曽祖母承明門院の許で養育された。承明門院は内大臣源通親の娘で在子といい、祖父土御門院の生母であった。

中書王は、寛元二年正月、三歳のときに親王宣旨を下されて、以後〈宗尊〉と称されることになった。

その二年後の正月、父後嵯峨帝は宗尊親王の弟君第二皇子久仁親王に譲位して上皇となり、院政を布いた。

宗尊親王は第一皇子であるにもかかわらずなぜ皇位継承できなかったのか、疑問に思われる向きもあろう。

当時はおなじ父親の子でも生母の出自によって較差がつくといういまでは理解できない時代だったのである。

宗尊親王の生母は平棟基の娘であるが、久仁親王の生母は太政大臣西園寺（藤原）實氏の娘姞子だったのだ。

公卿の社会では、

「藤原にあらざれば人にあらず」

とまで一族が権勢を誇っていた名門なのである。

皇位継承できなかった宗尊親王は、翌年六歳のときに御高倉院の第一皇女式乾門院利子の猶子になった。

式乾門院は、丹波國何鹿郡八田郷（京都府綾部市）周辺に広大な荘園を所有していて死後は猶子である宗尊親王にすべてを譲与するというのだから、これなら皇位継承できずとも裕福で安穏な生涯を送れるはずであった。

余談だが、〈何鹿〉という地名について述べておく。

〈いかるが〉といえば現在法隆寺のある奈良県生駒郡斑鳩町のことで、むかしそこに聖徳太子が造営した斑鳩宮があったことからそれが地名になったときいていた。

ところが、奈良から遠く離れているこの綾部市周辺がなぜおなじ〈いかるが〉なのか不審に思って古書を調べてみたら、丹波地方に伝わる『丹波志』のなかに、

「この郡に斑鳩ことに多し。ゆえにこの名起これるならんと論じたり」

と記述されているという。

つまり、綾部市のほうはたまたまそこに斑鳩が群居していたことからおなじ地名になったようである。

話をもどす。

宗尊親王が猶子になって四年後の建長三年正月二日、式乾門院が身罷った。五十五歳の生涯であった。

翌年正月二十日、宗尊親王は十一歳で元服したので、やがては広大な荘園を相続することが確実になった。

そのころ、鎌倉幕府の使者として六波羅探題赤橋長時が、後嵯峨院に皇族将軍を奏請してきたのである。

三月十七日に仙洞御所に呼び出された宗尊親王は、父後嵯峨院から、

「関東下向」

を申し渡された。

宗尊親王が皇位継承できなかったことに同情していた公家たちは、鎌倉幕府将軍に乞われたことを悦んで、

「天皇になり給わずばこれより優ること何事かあらん」

たがいにそう言い合って、心から祝福したという。

宗尊親王は、荘園管理全般を取り仕切っている藏人の藤原修理大夫重房に側役として同行するよう命じた。

重房は、このとき宗尊親王から食邑（領地）として与えられた八田郷上杉荘の荘名をとって上杉左衛門尉重房と名告り、嫡男大膳大夫頼重にも宗尊親王が式乾門院の猶子になるまで養育されていた承明門院の藏人を辞任して同行できるようにとりはからってもらった。

上杉荘は、京都駅から山陰本線で綾部駅まで行って舞鶴線に乗り換え、渕上駅のつぎの梅迫駅で下車して北へ向かったあたりで、現在綾部市上杉町として残っている。

十九日早朝、宗尊親王は輿で仙洞御所を出立すると六波羅に入り、探題赤橋長時の先導で鎌倉へ向かった。

足柄峠を越えて関東へ入った一行は四月朔日鎌倉に下着すると、宗尊親王はひとまず執權時頼邸に落ち着いた。

その三日後、前将軍頼嗣が京へ強制送還されて行った。

## 四

宗尊親王が鎌倉へ下着してから五日後の四月五日、追っ掛け朔日付で征夷大将軍に任ずる旨の宣旨が届いた。

執權得宗家にとって念願の皇族将軍誕生である。

時頼は、曽祖父義時のたっての希いがここにようやく実を結んだことをよろこび、肩の荷をおろした。

これで幕府の権威は高まると同時に、公卿とも円滑にことが運ぶようになるだろうから一石二鳥であった。

それから四年後の建長八年（一二五六）、二代つづいた公卿の前将軍が相次いで身罷った。八月十一日に父藤原頼經が三十九歳で、つづいて九月二十五日には嫡男頼嗣が僅か十八歳で病歿したのである。

この年、執權時頼は赤班病（麻疹）や赤痢といった重病に罹って気弱になったのか、十月五日に改元された康元元年十二月二十二日に執權職を六波羅探題赤橋長時に譲ると、これまで寺領や堂塔を寄進した信仰あつい松田山中の最明寺（現足柄上郡大井町）に入り、道隆禪師の戒師によって出家し、最明寺入道と号した。

正元二年（一二六〇）三月十八日、十九歳に成人した宗尊親王は、北条時頼が手許において猶子にしていた前摂政関白近衛兼經の娘宰子を娶せられた。

これまでの単調な生活に色取りが添えられて身辺が賑々しくなり、新鮮な日々を送れるようになっていった。

側役の上杉重房は、鎌倉の生活に慣れて幕府の内情にも通ずるようになると、執權の意の儘にならぬ将軍は排除されることがわかり宗尊親王の安泰に苦慮した。

重房は政治的野心のまったくないことが保身の最善策と悟り、宗尊親王が暗君になりきることを考えた。

そこで重房は、宗尊親王に歌道、管弦、蹴鞠などを教えて文弱に流れるように仕向けた。公家社会出身の重房

はどれも嗜んでいたので自分自身もともに娯しんだ。
文学は政治に無害だからと文人将軍に育てていった。
その結果、實朝とまではいかぬが和歌将軍になった。
新年の歌会をはじめ、御所での和歌会、時宗邸での一日千首の続き歌会などが盛大に行なわれた。
宗尊親王は歌会での阿や迎合に飽き足らず、三百六十首を選んで京の冷泉爲家に送り、批評を請うところまでのめり込んでいった。こうなると趣味の殿様芸の域を脱して正真正銘の歌人だといってもけっして過言ではない。
こののめり込みは、上杉重房のほかには誰にも心を許せない孤独感のあらわれであったかも知れないのだ。
宗尊親王がそんな傀儡将軍の生活を送っているうちに歳月は過ぎ去ってゆき、弘長三年（一二六三）十一月二十二日に北条時頼が三十七歳で病死すると翌文永元年八月二十一日には赤橋長時も三十五歳で歿してしまった。
自分を皇族将軍に選んでくれた当時執權だった時頼と、六波羅探題で鎌倉まで先導してくれた長時の二人が世を去ってしまうと、支えを失った宗尊親王は躰の中を風が吹き抜けて行くような虚しさと不安におそわれた。
そんな落ち込んだ日々を送っていた宗尊親王だったが、昨年四月に誕生した若宮惟康親王が生育してゆくにつれてようやく心が晴れてきて、二十三歳で親になった自覚とともに徐々に不安な状態から立ち直っていった。
赤橋長時亡きあとの執權には叔父政村が、執權を補佐する連署には時頼の二男時宗が就いて新体制になった。
このとき政村は六十一歳、時宗は十五歳であった。
政村は、時宗の曽祖父三代泰時の弟にあたる。
政村の年齢からすれば隠退してもおかしくないのだが、執權を得宗家に戻すには時宗が若すぎたのである。
幕府首脳の顔触れが変わって宗尊親王の身にも変化が起こるかと思ったが、なにごとも起こらずにすんだ。
翌年の九月に姫宮掄子が誕生して賑々しくなった。
平穏裡に二十五歳を迎えた文永三年（一二六六）、突如として宗尊親王の身辺を揺るがす大騒動が起こった。

## 五

乳母日傘で大事に育てられた宗尊親王は、生来から虚弱体質だったようで、『吾妻鏡』のなかにもたびたび、
「御悩」
「御溫気退散」
の記述が出てくる。
この年（文久三年）、正月十七日の鶴岡八幡宮参詣も体調が思わしくなく三十日に延引してしまった。
そして、その後も恢復が思わしくなかったらしく、
「御悩」
「御溫気退散」

を繰り返し、四月にはついに病床に臥してしまった。
宗尊親王はこれまで医師を呼ぶことなく、もっぱら護持僧松殿僧正良基だけを侍らせて加持祈禱させていた。
それが誤解を招き、始祖朝時以来野心を抱く名越一族が宗尊親王を利用し、たびたび病気を装わせて良基に、
〈時宗呪詛、調伏の祈禱〉
をさせているとの風評が立った。
六月二十日、執權政村邸に連署の時宗、評定衆の金澤實時、安達泰盛の三人がひそかに集められた。
緊急招集の内容は、
〈宗尊将軍排除〉
の相談であった。
宗尊親王は、これまで文事遊芸好みの将軍で執權専制政治には無害だったが、成人してくると将軍を利用しようとする者が出てきて、危険な存在になってくる。
〈名越との不穏な風説〉
がその現われであった。
政村は六十三歳の老齢、時宗は十六歳の少年。宗尊親王と名越一族が結託して政村から時宗に執權を譲るまでのこの不安定期を狙われたら危険このうえなかった。
「禍の芽は早いうちに摘みとることだ」
政村、時宗、實時、泰盛四者の合意ははやかった。
この日、たまたま僧良基が高野山へ向かったのをさいわいそれを恰好の理由にして〈逃亡〉と極め付け、風説をまことしやかにでっち上げる行動に移った。
『吾妻鏡』はこのときのことを、
「廿三日　甲申　晴る。酉の尅、御息所ならびに姫宮にはかにもって山内殿に入御し、若宮相州の亭に入御す。よって人々多くもってかの所に馳せ参ず。およそ鎌倉中騒動す。その故を知らずと云々」
と変事の様子を記述している。
つまり、二十三日午後六時、御息所宰子と二歳の姫宮掄子は山内の別邸に、三歳の若宮惟康親王は時宗邸に移されて、宗尊親王の御所は厳重に包囲された。
ただならぬ出来事をききつけた近国の武士たちは、
「すわ、一大事」
と駆けつけてきて鎌倉は人馬で埋まり騒然となった。
『吾妻鏡』は、
「廿六日　丁亥　天晴る。近国の御家人蜂のごとく競ひ集まり、屋に餘り巷に滿つと云々」
と伝えている。
七月四日、将軍職を剝奪された宗尊親王は執権邸に移され、さらに越後入道勝圓（時盛）の佐介邸へ移された。
このとき側役の上杉重房は、宗尊親王から若宮惟康親王の傳役を命ぜられて、鎌倉に留めさせられた。
八日、宗尊親王は京へ送還されることになった。

その帰洛の輿はひそかに大倉幕府の北門から出た。
ひそかにといっても供は北條一門数名を含む武士十九名、雑兵四百余人という厳重な警護態勢であった。
鶴岡八幡宮の赤橋まできたとき、宗尊親王は輿を停めて若宮の方に向けさせるとしばらく祈念したあと、鎌倉を去るに当たりその想いを和歌に託した。

帰り来てまた見んことも固瀬川
濁れる水のすまぬ世なれば

めぐり逢う秋はたのまず七夕の
同じ別れに袖はしぼれど

詠みおえた宗尊親王は、輿を上げさせた。
行列は、窟堂のあるいわや小路から武蔵大路を経て西へ向かっていった。
宗尊親王の脳裡に十四年まえ鎌倉へ下着したとき入れ替わりに京へ送還されていった前将軍藤原頼嗣のすがたが浮かび上がった。あの轍を踏まされた思いであった。
傀儡将軍は幼少年期までで、成人すると個性が出て操り人形ではなくなるから、野心家が近づく危険が生じてくる。そこで執権は禍の芽を摘みとるべく謀叛の嫌疑をかけて抹殺する。それが傀儡将軍の辿る道であった。
宗尊親王も二十五歳の青年に育ったから幕府にとっては危険な範疇に入ってきたわけだ。そうでなくても次期執權になるはずの時宗より九歳も年長なのであるから、遅かれ早かれ廃される運命にあったのである。

## 六

『吾妻鏡』は、
「七月廿日　庚戌　天晴る。戌の刻、前将軍家御入洛、左近大夫將監時茂朝臣の六波羅の亭に着御す」
で終わってしまっていて、その後の宗尊親王がどうなったのか気掛かりだったので、あれこれしらべてみた。
その結果、わかったことはこうである。
七月二十日、宗尊親王は十四年ぶりに帰洛したが密かに六波羅探題北條時茂邸に入ったまま拘束されていた。
後嵯峨院は傷心の皇子が帰ってきたというのに、鎌倉から〈宗尊親王謀叛〉の報を受けていたので幕府と北條得宗家を憚ってか父子の対面を許さなかった。
宗尊親王は、二十四日に探題北條時茂から若宮惟康親王が征夷大将軍になったことを知らされたが、父とおなじ運命を辿るに違いないと思うと不憫でならなかった。
やがて幕府の拘束が解けた宗尊親王は、十月九日にいまは亡き承明門院の萬里小路邸に移って隠棲した。
育ての親承明門院は九年まえ八十七歳で歿していた。
幕府は余程後味が悪かったらしく、後嵯峨院に義絶を解くよう奏請すると、宗尊親王に領地を贈った。
つまり、賠償金を払ったのであろう。
宗尊親王は、後嵯峨院に対面を許されてようやく平穏

な生活が戻ってきたのだが、翻弄されただけで終わってしまった二十五年の歳月を思うと虚しさだけが残った。
失意のうちに詠んだ和歌がある。

猶たのむ北野の雪の朝ぼらけ
　跡なき事に埋もるる身は
誰かまた神のちかひを頼むべき
　われ無き名にてしづみ果てなば

この哀調を帯びた和歌が癒えぬ傷痕を現わしている。
それから二年後の文永五年（一二六八）正月二十四日に、後嵯峨院の長寿を祝う舞楽会が執り行われた。
宗尊親王は院の御所冷泉殿での会に参列して、圓満院圓助法親王、高雄門跡性助法親王、聖護院覺助法親王、梶井門跡最助法親王、青蓮院慈助法親王らの弟君や妹君の綜子内親王らと邂逅できてひとときをたのしんだ。
その直後の二月七日、幕府から蒙古古世祖の国書を奏上してきた。
その内容は、
「大蒙古皇帝、書を日本国王に奉る」
ではじまり、高麗が蒙古に朝貢するにいたった事情を述べたあとで、
「問を通じ好を結び、以て相親睦せん」
と修好を要求し、
「兵を用うるに至りては、それ孰か好むところぞ」
そう軍事行動があり得ることを示唆して結んでいた。
後嵯峨院は連日評議を重ね、さらに伊勢皇大神宮に勅使を派遣して奉幣のうえ、返牒しないことに決した。
三月五日、幕府では突然時頼の二男で十八歳の時宗が執權になり、六十四歳の政村は連署に下がった。
翌年も朝廷は蒙古に返牒せず、三年後に返牒を作成したが、幕府はあえて送らずに握り潰してしまった。
外寇問題で国情騒然とするなか、文永九年（一二七二）二月十七日に後嵯峨院が五十三歳で崩御されたので、宗尊親王はその年の暮れに出家して院の菩提を弔った。
法号は覺惠と称した。
その二年後の文永十一年（一二七四）八月一日、宗尊親王は死出の旅に発った。三十三歳であった。
蒙古軍が壹岐、對馬を侵し、筑前（福岡県）に上陸してくる〈文永の役〉の二箇月まえのことである。
宗尊親王が猶子になった式乾門院の広大な遺産は、いったん姪の後堀河帝の皇女室町院疇子に引き継がれ、疇子の死後宗尊親王に返すという遺言をされたのだが、その室町院より宗尊親王のほうが先に死歿してしまった。
結局将軍職もまっとうできず、荘園主にもなれずにただときの権力者の都合に振り回されて中途半端で終わってしまった宗尊親王は、なんとも気の毒な人であった。

# 第三話　雌伏の長い隧道

七代将軍になった惟康親王もまた、長じて父宗尊親王と同様京へ送還された。

鎌倉に残った上杉重房は御所宿直役の足利頼氏と親交を深め、孫の清子を頼氏の孫貞氏に嫁がせて高(尊)氏、直義の兄弟を産んだ。

後醍醐帝が討幕の挙兵をしたとき高氏は父の服忌中を無理矢理北條高時に命ぜられて出陣し、他の軍勢と協力してどうやら鎮定はしたものの幕府が衰退して時代が大きく変わろうとしていることを実感した。

## 一

鎌倉幕府六代将軍宗尊親王が北條一門の名越教時と結託して執權の得宗家を倒そうと企んでいるとの風評が立ち、執權北條政村、連署北條時宗、評定衆金澤實時、安達泰盛の合意によって宗尊将軍が廃位され京へ強制送還されたとき、第一皇子惟康親王は三歳の若宮だった。

ある日、突然父宗尊将軍や母御息所宰子、妹君掄子らと離されて御所から連署時宗邸に移された。なにが起こったのか側役上杉重房はなにも説明してくれなかった。

将軍職を剝奪された宗尊親王は、家族たちとの訣別の対面も許されずに京に送還されてしまったのだった。

上杉重房は、宗尊親王の側近とはいっても飾り物の名目将軍付では幕政への参加もならず、無位無官の退屈な存在であったが、そのぶん傍観者の立場にあったので外部から幕府首脳の動きを凝っと見詰めつづけてきていた。

こんどの、

〈宗尊将軍排除〉

の理由などは、まったくのでっちあげであった。

得宗家打倒を企む名越教時と共同謀議したとはまったくの捏造であり、教時ほどの野心家が非力な傀儡将軍などを当てにして蹶起などするはずはなかった。

得宗家は、名越教時を牽制すると同時に、宗尊将軍も排除しようとする意図があったのであろう。

その思惑とは、いったいなんなのか。

上杉重房は、あれこれ思案をめぐらしてみた。

このとき、次の執權になる時宗は十六歳であった。

（そうか、そうだったのか）
いかに将軍が飾り物にすぎないとはいえ、執權が年下では軽んじられ侮られる虞があった。
執權は傀儡将軍に見縊られるようなことがあってはならないのだ。
時宗が執權になったとき、将軍が九歳年長では、
〈長幼の序〉
が邪魔になる。
だから幕府は、近々執權に就任する時宗のために宗尊将軍を排除することにしたのだと上杉重房は確信した。
重房の読みどおり、宗尊親王が京に送還されてわずか二十日後に三歳の惟康親王に将軍宣下があって従四位下に叙せられた。ことは計画どおりにすすめられた。
惟康親王は父君同様傀儡の宿命を負って就任した。
二年後に執權の政村が連署に、連署の時宗が執權に交替して、時頼以来二代の中継ぎを経て得宗家に戻った。
惟康親王は、将軍になって四年後に源姓を賜り、従三位左近衛中将に補されると、翌年は尾張権守、さらにその翌年は従二位に叙された。
二年後の八月一日に前将軍宗尊親王が薨去された。
その年文永十一年（一二七四）十月、突然元・高麗連合軍が九百艘の軍船を仕立てて五日に對馬、壹岐、二十日に筑前博多に来襲してきた。不意の外寇に九州を統轄している幕府の出先機関九州探題は慌てた。

ただちに鎮西奉行少貳經資、大友頼康のもとに御家人菊池氏らが郎党を率いて参集し、迎撃態勢を布いた。
だが、いざ戦闘となるとはじめてわかったことなのだが、敵の戦法はまったくちがっているのに途惑った。
こちらはまず古式に則り、鏑矢を射って合戦の合図をしておいてから、一騎ずつ敵前に進み出ておもむろに名告りをあげて一騎打ちにとりかかるのだが、元・高麗連合軍のほうは個人戦ではなく集団戦法であった。
太鼓や銅鑼を打ち鳴らして鬨をつくるので、こちらの武者の乗馬が驚いて立ち止まってしまうのである。
そこへ矢尻に毒を塗った射程距離の長い短弓や、初めてみる鉄砲とよばれる火器などの兵器で撃ちかけてくるので、この戦法のちがいに幕府軍の士気は空回りしてしまい、ついに敵軍の博多上陸をゆるしてしまった。
幕府軍はじりじりと後退して水城城に追い詰められてしまったが、そこで敵軍は思わぬ行動に出たのである。
上陸戦に成功したのだからそこを拠点にして橋頭堡を確保するはずなのだが、このとき敵軍はどうしたことか全軍を船に引き揚げさせてしまったのである。
このとき、元・高麗連合軍乗船の九百艘は大風によって沈没したのを台風と伝えられているが、陰暦十月下旬は陽暦の十一月中旬であり台風シーズンではない。
このときの軍船は、元が高麗に命じて急造させたというから粗製濫造船であったはずで、そこへ大勢の兵士を

乗せたのだから不安定だったところへ、博多湾外の玄界灘は冬季風波の激しさで有名であるから、台風ならずとも玄界灘の荒波に堪えられずに沈没したのであろう。

実情はどうあれ、鎌倉は外敵撃退の捷報に沸いた。

執權時宗はこの勝利に甘んずることなく、外敵の再来襲に備えて幕府をあげての臨戦態勢を図った。

この非常事態にあっても、惟康将軍の動きはなにもなかったから、傀儡将軍はやはり蚊帳の外であったのだ。

側役の上杉重房は、宗尊親王のときの経験から、たとえ側近といえども距離をおくことにつとめると同時に、何人も近づけぬように気配りを怠らなかった。

執權時宗が危惧したとおり、七年後の弘安四年（一二八一）五月に元・高麗連合軍が再び攻めてきた。

朝鮮半島からの東路軍は〈文永〉のときとおなじ九百艘に四万の兵力だったが、こんどはそれに中国本土からの江南軍、旧南宋兵中心の二千五百艘に兵力十万が加わっていた。いっきに日本国を攻め滅ぼすつもりだった。〈文永〉の体験から石塁を築くことにして、かなり完成していたのだが、この大軍に攻められてはひとたまりもないはずであった。

ところが、このとき信じられないことが起こった。

大風である。つまり今日でいう台風の襲来であった。

閏七月朔日は、陽暦の八月二十三日にあたる。

いかなる人力をもってしても自然の猛威には勝てない。

このときの台風は、敵にとっては天災であったが、わがほうにとっては天佑、つまり天のたすけであった。

このときの台風を〈神風〉というようになるのはずっとのちのことである。

ともかく、こうしてときの執權北條時宗は天佑神助によって困難を乗り切ることができたのだ。

その強運の時宗も天命には勝てず、三年後の弘安七年（一二八四）三月二十八日に病に倒れ、闘病僅か数日にして四月四日に三十四歳で死去してしまった。

## 二

八代執權北條時宗の急病死によって、十四歳の嫡男貞時が九代執權になったが幕政を執り仕切れる年齢ではなかった。

このとき惟康親王は二十一歳になっていたので、新執權の貞時より年長になってしまった。側近の上杉重房が懸念する危険状態に陥ってしまったのである。

執權が少年で、補佐の連署北條業時も新任されたばかりで首脳陣が弱体化してしまったので、内管領平左衛門尉頼綱と外戚の秋田城介安達泰盛の二人が実権を握った。

内管領というのは、はじめは得宗家を取り仕切る北條嫡流家の家令にすぎなかったのだが、そのうち得宗領の

政務ばかりではなく執權の手足となって働くようになり、執權政治が得宗家の独占になってからはしだいに勢力を増していって、得宗領の家人を御内人と称し他の家人を外様とよんで区別するようになっていった。

その御内人の代表格が内管領でしかも平頼綱の妻は執權貞時の乳母であったから鬼に金棒であった。

いっぽうの安達泰盛は、叔母が北條時氏の妻松下禪尼、妹が北條時宗の妻潮音院尼で現執權貞時の母であった。

こうした安達氏は、頼朝将軍時代から直参の御家人で、北條氏とも姻戚関係が深く、三浦氏滅亡後は北條氏に次ぐ勢力を保つ鎌倉幕府の双璧であった。

安達泰盛から見れば、得宗家を笠に着る平頼綱などはたかが鎌倉御家人の陪臣にすぎないと見縊っていた。

こうした両者はなにかにつけて睨み合い、少年執權貞時を挟んで激突を繰り返していった。

そして、ついに平頼綱のほうが堪忍袋の緒を切った。

弘安八年（一二八五）十一月八日、この日安達泰盛父子の出仕を知った平頼綱は郎党を殿中に潜ませておいた。

そうとは知らぬ泰盛父子は、出仕したところを討ち取られてしまい、甘縄の屋敷も焼き払われてしまった。

頼綱は、安達氏に心を寄せる御家人たちを容赦なく虱潰しにしてその矛先は遠く九州にまでおよんだという。

安達泰盛父子を粛正し、その勢力を一掃した平頼綱にもはや恐いものはなく、幕府の政治も一手に握った。

執權が将軍を傀儡にして実権を握ったように、こんどは内管領が執權貞時を傀儡にしてしまったのである。

こうして鎌倉幕府は将軍の実権が執權に移り、さらにその家臣である陪臣の内管領の手に移ってしまった。

これを、のちに〈霜月事件〉といった。

その後の頼綱は、実権を握るとその子弟を幕政に参加させて、各機関の奉行人たちの不正を暴き、怠慢を弾劾する恐怖政治をおこなって、専制君主気取りであった。

人はいったん調子に乗ると自制がきかなくなるもので、ついには二男飯沼助宗を将軍の座に就けようとした。

これはさすがに家族騒動が起こり、嫡男宗綱に密告されて失敗に帰し、宗綱をのぞく一族すべてが誅殺された。

## 三

執權北條得宗家の専制強化で台頭した得宗家被官の内管領平頼綱と、鎌倉幕府創立以来の御家人安達泰盛を中心にした北條一族と外様勢力とが対立した〈霜月事件〉は、つまり北條得宗家内管領が外様勢力の排除を目的として起こされたものであった。

結果として専制強化を達成した内管領平頼綱が自滅してしまったものの、執權北條氏に対抗し得る唯一の安達氏が斃れたことによって北條氏の安泰が保証された。

この大騒動で鎌倉は兵火に焼かれ、惟康将軍邸も焼失したのだが、幕府内の紛争であるのに二十二歳の惟康将軍が影響力を及ぼした形跡はなく、なんで足許に兵火が及んだのかまったくわからず仕舞いであった。

側役上杉重房も事件の経緯を報らせてはいなかった。

この幕府の内紛は惟康将軍に類が及ぶことはなかったが、その後べつのところで不穏な動きが出てきた。

二年後の弘安十年（一二八七）六月、惟康将軍は權中納言兼右近衛大將に任じられ、八月に霜月事件で焼失した御所が新築落成したので新居へ移った。

だが、そのひと月後幕府は佐々木宗綱を使者に立てて上洛させると、関東申次西園寺實兼を通じて惟康将軍の右近衛大將を解任し親王に立てられることを奏請した。

こんなことはまったく異例であってはならないことであったが、朝廷はこの奏請を受諾してしまったのだ。

十月二日、惟康将軍に親王宣下が行われ、二品（位階の第二位）親王となって帯剣を許され、右近衛大將は解任された。これは将軍更迭を暗示するものであった。

上杉重房は惟康親王が宗尊親王の轍を踏まされると覚ったが如何ともし難く、傍観するより仕方なかった。

親王に戻されての将軍職の不安定な日々がつづいた。

正應二年（一二八九）惟康親王は二十六歳になった。

主宰者を自認して執權や内管領の意の儘にならぬ年頃になった惟康親王は、ついに前例に倣って更迭された。

理由が曖昧だから既定方針どおりというよりほかない。

惟康親王は京へ送還されるとき、うしろ向きにすすむ逆様の網代輿車に乗せられて行ったという。

このとき、側役の上杉重房は親王に同行しなかった。

仕える主君の式乾門院和子内親王、猶子の宗尊親王ともすでに身罷っていることが躊躇させたのだが、それよりなにより供する者が内管領平頼綱の二男飯沼判官助宗と七人の名立たる剛の者という護衛集団だったので、重房など入り込める余地などはなかったのだ。

八代将軍には後深草院の第二皇子で十四歳の久明親王が迎えられ、十月二十五日に鎌倉に到着した。

惟康親王の鎌倉出立が九月十四日だからこれはあまりにも早く、すでに準備が整っていたのであろう。

源氏三代のあとの公卿二代、皇族四代は、いずれも北條執權による傀儡将軍の盥回しであった。

それから六年後の永仁三年（一二九五）、幕府は二十歳になった久明将軍の室に惟康親王の王女を迎えた。

このことは、惟康親王に対する罪滅ぼしであったろう。

惟康親王は薙髪して出家したが、その後の人生が長く、嘉暦三年（一三二八）十月三十日に六十三歳で歿した。

## 四

有力御家人安達泰盛を斃して鎌倉幕府を独占掌握した執權北條得宗家ではあったが、開府初期から付かず離れずにいる源氏一門二家の存在が無気味であった。

上野の新田氏と、下野の足利氏である。

前九年、後三年の役で八幡太郎と称ばれて勇名を轟かせた源義家が、その功により上野新田と下野足利の荘司になったことから、四男義國が足利荘に居を構えた。

その義國の嫡男義重が新田荘を開発して新田太郎と称し、妾腹の義康が足利荘を本拠にして足利氏を称した。

治承四年（一一八〇）八月源頼朝の挙兵のとき、新田義重は召しに応じなかったというが、このころ異族の足利俊綱が上野府中（前橋市）に出没して焼き払っていたので動けなかったのであろう。十二月に参上している。

さらに義重は、二年後の壽永元年七月に頼朝の勘気を蒙ったとあるが、これは頼朝が義重の娘に言い寄ってきたので義重が本妻の政子を憚って他家へ嫁がせてしまったために怒りを買ったのが真相のようである。

女好きの頼朝と嫉妬深い政子を考えればあり得る話だが、迷惑このうえなく、そんなことで疎んじられた義重が気の毒である。

いっぽう、弟の足利義康は頼朝に信頼されていた。

義康が足利荘に入ったときすでに足利を名告る豪族がいて旧市街の西方織姫公園の背後にある兩崖山に城を築き、麓の本城一丁目付近に館を構えて蟠踞していた。

この足利氏と混同するとややこしくなるので切り離して、まずは先住の足利氏について説明しておこう。

この足利氏は、天慶の乱（九四〇）で平將門を討伐して首級を上げた田原（俵）藤太こと藤原秀郷の裔である。

嫡流家は陸奥へ行って藤原四代の栄華をつくり上げた。

下野に残った分流のひとつ淵名兼行の子成行が足利大夫を名告って足利氏を興した。その成行が天喜二年（一〇五四）に兩崖山城と館を築いて足利荘に定着した。

この年は陸奥の俘囚安倍頼時の子貞任が陸奥守鎮守府將軍源頼義に抵抗した〈前九年の役〉の最中であるから、頼義の子義家を祖とする足利氏はまだいなかった。

藤原姓足利氏のほうは成行のあと家綱、俊綱、忠綱とつづき、同族からは小山、結城、下川邊氏が出ている。

足利太郎俊綱は、〈保元の乱〉（一一五六）のとき源姓足利氏の祖義康とともに源義朝のもとで活躍した。

その後、この藤原姓足利氏は、同族小山氏や源姓足利氏との対抗上、平氏と深く結びついて行った。

両足利氏は渡瀬川を挟んで、藤原姓は旧足利市を中心にした北岸一帯を、源姓は南岸の梁田御厨（現足利市梁田町から八幡町にかけての一帯）を領有していた。

義康の所領は兄義重の上野新田荘と境を接していた。
俊綱の子又太郎忠綱は豪勇の士で、小山朝政と権勢を争い、平氏方について戦った。
治承四年六月以仁王の平氏追討の令旨で源頼政が挙兵したとき、平重衡に従って宇治川（京都府宇治市）に出陣し、先陣をきっての活躍で勇名を馳せた。
翌養和元年（一一八一）頼朝に叛いて常陸で挙兵した志田義廣に与したりして源氏に抗していたので、平氏滅亡後はやむなく足利荘にもどったのだが所領はすでに源姓足利氏の領有するところとなってしまっていた。
やむなく北方の足尾山地内に逃れたのだが、足利義康の軍に追撃されて皆澤という山中の小さな集落に入ったところで追いつかれてしまい、奮戦むなしく忠綱はついに討ち取られて、藤原姓足利氏は滅亡してしまった。
忠綱を斃した足利義康は、足利荘全域を領有した。

## 五

おなじ源氏の一門でも兄新田義重は頼朝の旗揚げに応じなかったので鎌倉幕府から疎外されたが、弟の足利義康は頼朝に全幅の信頼を置かれてたのみにされていた。
その証に頼朝は義康に熱田大宮司藤原季範の孫娘を娶せた。季範の娘は頼朝の生母であるから義康は頼朝の母方の従妹の婿になったわけで、義理の従弟になった。
さらに頼朝は、義康の嫡男二代義兼に妻政子の妹時子を娶せた。これで義兼は頼朝と相婿、義兄弟になった。
この義兼が建久七年（一一九六）持仏堂を建立して剃髪すると鑁阿と号した。鑁阿寺は義兼の居宅跡である。
義兼は頼朝に協力して鎌倉幕府創設に貢献した。
二代執權北條義時はこの源氏一門の足利氏の擡頭を警戒して、対立を避け一族に取り込もうと思案した。
二代義兼に妹を嫁がせた縁を継続して足利氏を北條一族に取り込み、雁字搦めにしておこうと謀った。
北條の娘を嫁がせておけば足利氏の監視にも役立った。
義時は嫡男三代執權泰時の娘を三代義氏に嫁がせた。
こうして足利氏を虜にする義時の知恵は継承された。
足利氏は三代義氏までは源義家の『義』を諱の通字にしていたが、四代泰氏は北條泰時の一字を頂戴した形にして北條得宗家に臣従している体を装ったのであろう。
御家人たちに人気があった泰氏は北條一門名越朝時の娘桔梗を娶っていたが、桔梗の兄光時に不穏の噂が立つと執權時頼は桔梗を離別させて自分の妹を娶せた。
形振り構わぬ時頼の遣り口に泰氏は振り回された。
北條執權は足利三代義氏までは得宗家の娘を嫁がせていたが、源氏の通字をとらず執權の一字をいただく泰氏からは北條傍流の娘を嫁がせるようになっていった。
これは足利氏を飼い馴らしたとみた現れかも知れな

い。

事実五代頼氏、六代家時、七代貞氏と少年の家督がつづき、清和源氏出身の名声に翳りが出てきていた。

ともあれ、執權時頼の一字を戴いて五代当主になった少年頼氏は、その後皇族将軍宗尊親王の御所宿直役を命ぜられた。ここで頼氏は上杉重房と出会うことになる。

頼氏は執權北條時頼から二代執權義時の弟五郎時房の娘を娶されたが、上杉重房は宗尊親王に仕える頼氏に公家の教養を身につけさせようと考えて、京育ちのわが娘を頼氏の家女房に入れて支えさせた。

頼氏と上杉重房の娘とのあいだに誕生した男子は、長じて六代執權赤橋長時の一字を頂戴して家時となると、長時の姪（弟時茂の娘）を娶された。

この六代当主家時は、有力御家人の安達泰盛と誼を通じていたので反北條と極め付けられて遠去けられた。

家時は、遠祖源義家が、

「わが七代の孫にわれ生まれ代わりて天下を取るべし」

と置文（遺書）したその七代目に当たっていたので義家が自分に憑依したと思い込んで源氏再興を夢見たが、北條執權が抑える鎌倉幕府は磐石で揺るぎなかった。

安達泰盛から離反させられ、幕府からも疎んじられたわが身に天下取りは叶わぬと悲観した家時は、

「わが命を縮めて三代のうちにて天下を取らしめ給え」

そう置文すると、僅か三十五歳で自害してしまった。

七代を継いだ少年は九代執權貞時の一字を頂戴して貞氏と名告った。

金澤顯時の娘を娶ったが、家女房になった上杉重房の孫娘清子とのあいだに二人の男子をもうけた。

長子は嘉元三年（一三〇五）に生まれ、二子は徳治二年（一三〇七）に生まれた。のちの尊氏・直義である。

## 六

長子又太郎が十三歳のとき祖父家時が自害するという衝撃的事件が起こったが、事情は知るよしもなかった。

二年後の元應元年（一三一九）に十五歳で元服した又太郎は十四代執權北條高時の一字を戴き高氏と名告った。

まもなく結婚したが、押し付けられた正室は赤橋久時の娘でのちに十六代執權になる守時の妹であった。

高氏が元服して五年後、後醍醐帝の倒幕計画が露顕したので六波羅探題は土岐頼兼、多治見國民らを斬罪に処すと主謀者の日野俊基、資朝を捕縛して俊基を鎌倉へ送るという〈正中の変〉が起こった。

『太平記』のなかにその行がある。

全四十巻中の〈巻二〉にある〈俊基朝臣再び関東下向の事〉がそれである。

もっともよく知られている道行文で、京から鎌倉への

道中の地名が華麗な掛詞の中に織り込まれている。
「落下の雪に踏み迷ふ片野の春の桜がり、紅葉の錦をきて帰る嵐の山の秋の暮（以下略）」
この七五調の文章は、格調高く音律的で人の心を引き付ける魅力がある。
歌舞伎作者河竹新七（黙阿弥）の書く作品の台詞も七五調なので、声に出して読んでいるといつかその調子に乗せられて知らぬまにすっかり暗誦できてしまう。
この『太平記』の道行文も同様で、七五調の華麗な文章を声に出して繰り返し読んでいると、意味はわからずともいつかしぜんに暗誦できてしまう。
話は逸れたが、それから七年後の元徳三年（一三三一）八月に後醍醐帝は神器を捧持して大和笠置山城（京都府相楽郡笠置町）に行幸すると、そこで兵を挙げた。
その直後の九月五日に父貞氏が五十九歳で死去した。
その服喪中の高氏に執權を退いてなお実権を握っている得宗家の高時から笠置山城攻略の出陣を命ぜられた。
大佛貞直、金澤貞將との連合軍であった。
高氏は、服喪中にもかかわらず出陣を命じた高時の非情な仕打ちに深く傷つけられて、憎悪の念を抱いた。
西上した足利・大佛・金澤の幕府軍は河内赤坂城（大阪府南河内郡千早赤阪村）で挙兵した楠木正成ら小豪族の抵抗に遭って手古摺ったが、どうやら反乱軍を鎮定して九月二十八日に笠置山城を陥とすと翌日後醍醐帝を捕えて神器を奪取した。最後まで抵抗した楠木正成も十月二十一日に城が陥ちるといずこともなくすがたを消した。
いったん京の六波羅へ引き揚げて休息した幕府軍は、隊形を整えると鎌倉へ凱旋した。
神器は幕府が擁立した光厳帝に渡され、翌年後醍醐帝は隠岐（島根県隠岐郡隠岐の島町）へ配流された。
こうして鎌倉幕府はいちおう蜂起した反幕勢力を鎮圧したものの、高氏はこんどの出陣でその勢力が凄まじいいきおいで擡頭してきていることを目の当たりにして幕府の衰退を実感した。
もはや出先機関の六波羅には反幕軍を抑える権威はなく、それは大勢が変化する兆しなのかも知れなかった。
高氏は、このとき、
（なにかが大きく変わろうとしている気配）
を目敏く感じとったことであろう。
時代が大きく移り変わるときがきつつあるのだった。
巨岩が砕け雪崩を打って深い谷底へ落下してゆく夢を見た高氏は、なにかを感じとったのであろうか。
足利氏と上杉氏の道連れは、いま雌伏の長い隧道を抜け出ようとしていた。

# 第四話　海路の日和

後醍醐先帝が隠岐を脱出したことによって状勢が一変し、幕軍の新田義貞も寝返った。
北條高時は六波羅の防衛を一族の名越高家と病臥中の高氏に命じた。
高氏はやむなく出陣したが、高時への怨念が昂じて謀叛を決意し、上杉憲顯の提言で後醍醐先帝に帰順して倒幕の綸旨を賜った。
高氏が六波羅を陥すと、一旦帰国した新田義貞が鎌倉を攻め陥とし、足利・新田の源氏が平氏の北條を滅亡させた。

## 一

大佛貞直、金澤貞將の両将と後醍醐帝が挙兵した大和笠置山城を攻略して鎌倉へ凱旋した足利高氏は、大藏谷の自邸に籠もって得宗高時に出陣を命ぜられて中断してしまっていた父貞氏の喪に服した。
高氏の服喪を知らぬはずはないのに、北條一門の頂点に立つ得宗家総領の高時は、源氏の嫡流高氏を走狗の如く使うことによっておのれの権威を保とうとしたのだ。
高氏は朝廷軍との戦いを憚り、亡父の喪中を理由にして辞退したのだが、高時はきき入れてくれなかった。
高氏の悲嘆を承知で出陣命令を下した高時の非情な仕打ちに高氏は深く傷つくと同時に肚が立った。
高時は得宗家の嫡男に生まれ、十四歳の少年で鎌倉幕府の執権職に就いたが、在位僅か十一年で俄かの病いを理由に武家棟梁の座を放棄して二十四歳で出家した。
武人に向かぬ性格だったのか、高時は隠退すると闘犬と田楽に興じ、その熱中ぶりはまさに病的であった。
得宗邸では十日に上げず闘犬が催されたので、大名たちは血眼になって大金を投じ猛犬集めに狂奔した。
また、田楽についても大名たちはそれぞれに田楽法師を招いて高時の歓心を買おうと競演に夢中になった。
高氏は武人にあるまじき軟弱な高時に嫌気がさしていたので、いつか心はしだいに鎌倉から離れていった。
源頼朝を棟梁にいただいて武家政権の鎌倉幕府を樹立した関東武士たちも、弘安四年（一二八一）元、高麗軍の外寇、同八年（一二八五）北條執権と双璧の安達泰盛父子を斃した霜月騒動以来四十年内憂外患がなかった。

そんな太平つづきのうえに、武家の頂点に立つ得宗高時が武事を忘れて遊興に耽っているので、関東武士たちもいつか有事を忘れて平和惚けしてしまっていた。

そんなところへ、後醍醐帝が北條高時を討って政情を回復しようと企てた〈正中の変〉が起こったのだ。

そのとき、北條一門の大佛貞直、金澤貞將とともに出陣を命ぜられた高氏は、西国で朝廷を支持する新興勢力が凄まじい勢いで擡頭してきているのを思い知った。

数を恃んだ幕府軍がようやく鎮定したものの、その戦意はまったくちがっていて、小豪族の集団にすぎない朝廷軍ではあるが旭日昇天の勢いであるのに驚愕した。

高氏は、幕府の衰勢を感ずるところがあったので凱旋しての服喪中もずっとそのことを考えつづけていた。

亡父の喪が明けてしばらく経ったころ、高氏はこんどは体調を崩して病床に臥してしまった。

呼び寄せた幕府の薬師にも高熱の原因がわからず、

「たぶん遠征のお疲れが出たのでござりましょう」

ぐらいにしか診断してくれなかった。

だが高氏は、親の喪に服さぬは子にあるまじきことと祖霊の怒りを招き、その咎を受けての祟りかと悩んだ。

そして、無理に戦場へ引っ張り出した高時を怨んだ。

源氏の嫡流が三代将軍實朝で途絶えてしまったいまとなっては、つづく足利こそが源氏の嫡流であった。

ただしくは源義家の子義國の嫡男が新田義重で二男が足利義康なのだが、義重は頼朝の再挙に参戦が遅れたことから頼朝は義康のほうを重用して義重を疎外したので、いつか足利のほうが格上になってしまっていた。

代々源氏の再興を希い、六代家時は遠祖源義家が、

「わが七代の孫に生まれ代わりて天下を取るべし」

と置文したその七代目に当たっていたので再興を狙ったが、当時の北條執権は磐石でつけ入る隙がなかった。

おのれの非力を悔み、地団駄踏んだ家時は、

「わが命を縮めて三代のうちに天下を取らしめ給え」

そう置文すると、僅か三十五歳で自害してしまった。

高氏はこの話を母清子からたびたび聴かされていて、

(われこそが祖父家時の三代の孫である)

ことを少年時代から自覚して重荷になっていた。

体調を崩したことで思考のときを与えられた高氏は、あらためて源氏の嫡流であることに思いを馳せた。

すると、北條高時ごときに牛耳られている謂れはないことに思いいたり、高時への憎悪が募っていった。

(足利家は今日でこそ北條執権の膝下に屈しているが、もとをただせば北條の主筋に当たる源氏の流れを汲む名門なのだ。源氏将軍家の御家人であった北條執権がわれを走狗に使うのは不当である)

高氏はあらためて高時にそう反撥した。

## 二

そのころ、京では大きな動きがあった。

後醍醐帝の第六皇子で梶井門主の比叡山天台座主尊雲法親王が還俗して護良と改め、吉野で挙兵した。

戦死したと伝えられていた楠木正成が、河内の金剛山千早城に拠ってこれに呼応し、赤坂城を奪回した。

すると、播磨佐用荘（兵庫県佐用郡佐用町）の土豪赤松圓心則村も護良親王の令旨に応じて苔縄城（赤穂郡上郡町）に挙兵、出雲の鹽谷判官高貞らもこれに応じた。

幕府は楠木正成、赤松則村討伐に懸賞をかけて、河内路に阿曽沼治時、長崎高貞勢、大和路に大佛家時、工藤高景勢、紀伊路に名越元心、安東圓光勢を派兵した。

幕府大軍の猛攻を受けて赤坂城が陥落し、千早城の攻防戦が激化していき、吉野城も陥落した。

このとき大塔宮護良親王は、村上義光が親王の鎧を着て身代わりになり、包囲する幕府軍のまえで割腹して見せているあいだに虎口を脱して無事に高野山へ逃れた。

いっぽう隠岐へ流されていた後醍醐帝は、公家千種忠顕の手引きで配所を出ると鳥賊釣り舟に潜んで島を脱出し、伯耆（鳥取県）の土豪名和長年（西伯郡大山町）に迎えられて船上山（東伯郡琴浦町赤碕）に遷座した。

両統迭立の約束を無視し、帝位独占を希んで島脱けまで敢行した後醍醐帝は、在世中に後醍醐と諡号して生涯その称号で通した稀有の帝であるが、そうした理由は摂政、關白をおかずに天皇親政を行ったことで〈延喜の治政〉といわれた醍醐帝のようにやりたいと志したのだ。

両統迭立というのはつまり天皇家内部の紛争なのであるが、戦前の学校では詳しくおしえてくれなかった。

ことは後鳥羽院が執権北條義時追討の宣旨を下したことにはじまるのだが、この倒幕運動は幕府の大軍に潰されて惨敗した。

幕府は後鳥羽院を隠岐へ、第四皇子順徳院を佐渡へ配流したが、このとき倒幕に反対した第一皇子土御門院もみずから土佐へ落ちていったので、三上皇配流という史上稀な結末になった。これが〈承久の乱〉である。

さらに幕府は順徳院の第一皇子仲恭帝に代わって即位歴のない後鳥羽院の兄宮守貞親王を立て、後高倉院として院政を執らせると、仲恭帝に譲位を促して後高倉院の第一皇子茂仁王を即位させて後堀河帝としたのである。

ここのところはまえに詳述してあるが、両統迭立の端緒になるところなので復習をかねてくどくど述べた。

後堀河帝のあとは第一皇子四條帝が僅か二歳で即位したが、十二歳のとき急な事故で崩御されてしまった。

四條帝に子がないところから皇継問題が取り沙汰され、順徳院の皇子岩倉宮忠成王が候補に上がったが、幕府は〈承久の乱〉の主謀者後鳥羽院、順徳院の系統を嫌って倒幕に与せず中立をまもった土御門院の系統から選

ぶよう介入して第二皇子邦仁親王を推すことを強行した。

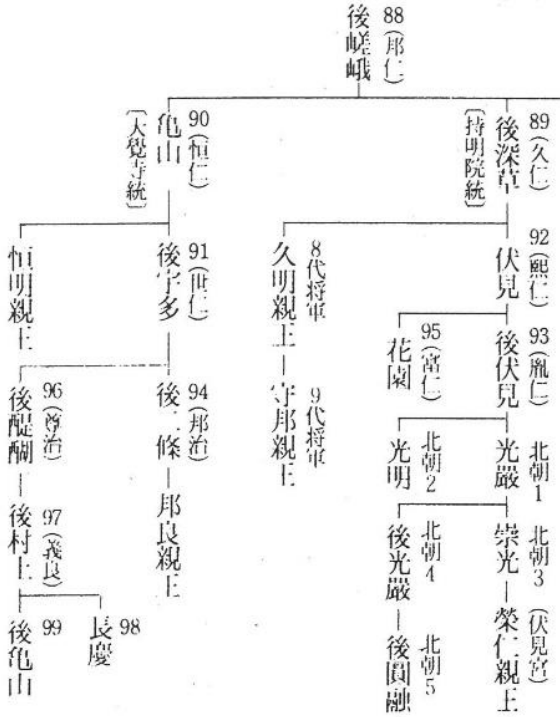
後嵯峨帝になった邦仁親王は幕府の介入で図らずも皇位に即けたことに感謝して、幕府に好意的であった。

のちに執権北條時頼が皇族将軍を要求してきたとき、後嵯峨院は第一皇子宗尊親王の就任を承認している。

後嵯峨帝は在位四年で第二皇子久仁親王（後深草帝）に譲位すると、さらに十五年後には第三皇子恒仁親王（亀山帝）への譲位を促し、両帝の治世三十年にわたり〈治天の君〉として院政を布き、重要問題はすべて幕府に相談して決めるという穏やかな態度をとりつづけて融和を図った。

この皇位継承に介入したことによって、以後幕府は天皇の廃立にかならず干渉する即位指名権を握った。

〔天皇家略系譜〕



後嵯峨院は後深草より亀山のほうを愛していて、亀山に世仁親王が誕生すると皇太子に立ててしまった。

後深草と亀山の順で皇位を継いできたのだからつぎは後深草の熙仁親王で、そのつぎが亀山の世仁親王になるのが順序であるはずなのだから後深草は不満であった。

もうひとつは、亀山の皇子が即位して後宇多になると後深草を差し置いて亀山が院政を継いだことである。

後嵯峨院が薨去すると、後深草系と亀山系のあいだで皇位継承をめぐっての競い合いが激しくなっていった。

亀山系が亀山帝のあと皇子後宇多帝を即位させたので、正嫡後深草の皇子熙仁親王が継ぐべきと騒動になった。

亀山院は円満に収めようと幕府に収拾策を相談した。

執権北條時宗は妥協策をとって、熙仁親王を亀山院の猶子にして後宇多帝のあと即位させることにした。

こうして、ようやく後深草系が皇位を取り戻した。

後深草系は旧習を守る保守思想の親幕派であったが、亀山系のほうは革新思想の天皇親政派であったので、そのために倒幕王政復古を目指す風聞が絶えなかった。

皇位に即いた後深草系の伏見帝は、その噂を幕府に密告して皇位を独占しようと謀り皇子胤仁親王の後伏見帝即位を実現させたが、亀山系の巻き返しによって後宇多帝の皇子邦治親王に奪い返され後二條帝の即位になった。

そのあとは後深草系の伏見院第六皇子富仁親王が花園帝となって即位したので両系の交代皇位継承に戻った。

調停に手を焼いた幕府は、以後皇太子にすることと皇位を継承させることはともに両系の和議によって決めることとして幕府はいっさい干渉しないことを上奏した。

文保元年（一三一七）四月に提案されたこれを〈文保の和談〉というのだが、しかし拗れに拗れた問題だけに後深草、亀山両系のあいだに和談の余地はなかった。

そこで幕府は、亀山系の要求に沿ってつぎの東宮（皇太子）には後二條帝の第一皇子邦良親王を立て、そのつぎに後深草系伏見院の第一皇子量仁親王（後の北朝初代光厳帝）を立てることを提案して和談の端緒にしようとしたのだが、この案はまず東宮を立てる亀山系に有利ということで結局和議はひらかれなかった。

だが、後深草系の後伏見帝のあとを亀山系の後二條帝、そして再び後深草系の花園帝とかわるがわる即位したのだから〈両統迭立〉はすでに実施されたのだ。

両統というのは、のちに後深草系を〈持明院統〉、亀山系を〈大覚寺統〉と呼称したからいうので、補足すると持明院は京都市上京区上立売町付近にあった寺で、藤原北家中御門家の庶流がその持仏堂持明院に因んで名づけたものという。後深草帝が譲位後御所にしていた。

いっぽうの大覚寺は京都市右京区嵯峨にある古義真言宗の大本山で、もと嵯峨帝の離宮であったが淳名帝の皇后になった嵯峨帝の皇女正子内親王が寺としたあと親王

が入って門跡寺となっていたが、後宇多法皇が仙洞（上皇の御所）にしたあとは大覚寺統の皇統が入寺した。

大覚寺統は亀山法皇の遺詔（遺言）によって関東申次西園寺公衡が法皇の第三皇子恒明親王の立太子を画策したのだが、後宇多法皇は第四皇子尊治親王を持明院統花園帝の皇太子にしてしまった。のちの後醍醐帝である。

## 三

その後醍醐先帝が隠岐島を脱出して船上山へ遷座したことによって状勢が一変し、先帝の綸旨と親王の令旨が国中を馳せ廻って天下大乱の様相を呈しはじめた。

これらのことは藤原北家勧修寺流出身の上杉の許に京の公家筋から届いていたので、高氏も知っていた。

このとき宮廷の大番役で京にいた新田義貞は、大佛家時軍に取り込まれて大和道から紀伊道を進撃していた。

世が世なら源氏軍団の一方の旗頭として足利軍に勝るとも劣らぬ軍勢を指揮するはずの義貞が、いかに頼朝から疎外されてきたからとはいえ千早城攻めの大軍のなかにあってこの小勢では大佛軍と区別がつかなかった。

義貞は、三十一歳の青年武将であった。

義貞は、この千早城攻めに参加してその幕府軍の戦力の低下、あまりにも拙劣な戦いぶりに首を傾げた。

（この士気の衰退は末期的症状だ）

そう看て取った義貞は、その夜陣営に一族の大館宗氏、堀口貞満、由良國繁、一井政家それに老臣の船田義昌を集めて北條執権を見限る相談をした。

朝廷側に加担するには、先帝の綸旨なり親王の令旨がなければ信用されないので、重臣を船上山へ走らせなければならないのだが、伯耆は遠く、そのあいだに戦局がどう動くかはかり知れなかった。

そこで、吉野山を脱して高野山へ落ち延びたという護良親王の令旨を受けることにして、船田義昌が野伏に身をやつして陣営を脱け出すと、親王のあとを追った。

この策が成功して、船田が令旨を受けて無事に帰ってきたので、義貞は大佛家時に病気と称してその旨を届出ると、早々に兵をまとめて上野新田荘へ帰国した。

その後、播磨で蹶起した赤松則村軍を摂津で迎え撃った六波羅軍が破れて、幕府へ救援を要請してきた。

さきに出兵した大佛、名越、長崎、工藤らの軍勢は、千早城を詰の城として上赤坂城を本城、下赤坂城を前衛の城とする構えで再起した楠木正成に翻弄されて、赤坂城は陥としたものの千早城攻めに手を焼いていて、とても六波羅救援の軍は割けなかったのである。

そこで得宗高時は、六波羅防衛の救援軍に一族の名越高家とふたたび高氏を向けようと考えた。

幕府から出仕を命ずる使者が大蔵谷の足利邸に来たとき、すでに六波羅危うしを知っていた高氏は、

（うむ、きたな）
そう肚を括って使者に、
「体調がすぐれず、出仕御免の届を出してあるはず」
そう返答をして帰したが、ほどなく得宗高時から、
「非常事態ゆえいそぎ出仕されよ」
高時らしい有無を言わせぬ強硬な督促であった。
「兄上、わたしが参りましょう」
潔癖性の弟直義が代理出仕を申し出た。
「強引な得宗殿にひけをとらぬよういってまいれ」
「畏まりました」
得宗屋敷は幕府に近接した現寶戒寺の場所にあった。
高時の命令は、予期したとおり、
「名越高家と連合していそぎ六波羅防衛に出陣せよ」
であった。
「兄は心身に変調をきたしており、長途の出陣には耐えられぬ体調ゆえ、こたびはお赦しをいただいて療養につとめ、全快後は得宗殿のご期待に添うべく努めまする」
直義はそう釈明したが、聴き入れられず、
「直義、足利は幕府の藩屏であろうが」
「承知いたしております」
「ならばなにゆえ火急のときに出陣いたさぬ」
直義は返答に窮して、独断で、
「お許しいただければ、兄に代わりそれがしが軍勢の指揮を執って出陣いたしまする」
高時がそうせいと収めると思ったが、案に相違して、
「当主が陣頭に立たねば軍団の士気にかかわる」
そう語気を荒めた。
直義は、憤然として、
（ならば、得宗殿こそ幕府軍の先頭に立たれるべき）
胸を張ってそう叫びたいところを辛うじて抑えて、
「得宗殿のご意志を兄に伝えまする」
そう型通り平伏しておいて屋敷に戻った。
直義から一部始終を聴いた高氏は、
「おのれ高時、足利を見縊りおって」
そう烈火の如く怒った。
先年は父貞氏の服喪を無視しての出陣命令であったし、このたびは体調不良で出仕御免の届を出してあるのにまたも無視された。
高氏は、高時の非情な仕打ちに肚を立てた。
そこへ、出陣の連絡を受けて上杉憲房、憲顕、高師直、畠山直宗が駆け付けてきた。
重臣たちは高氏の怒りに同情を示したあとで、直義を含めた六人が別室に籠もり密議をはじめた。
高氏は出陣に気がすすまなかった。
昨年の笠置山城攻めのとき、手強い朝廷軍の抵抗に遭って、高氏は幕府の屋台骨を支える軍団の士気がすっかり衰えてしまっていることを目の当たりにしていた。
そこへもってきて、昨年は父貞氏の喪中、こんどは高

氏自身の体調不良を知りながら、出陣を命じた高時の血も涙もない非情さに怨み骨髄に徹していた。
そうなると幕府への忠誠心はまったく失せてしまい、むしろ野心が頭を擡げてきた。
（得宗高時打倒）
鎌倉幕府を見限る謀叛である。
藤原北家出身の上杉に公家から京の動静がつぎつぎに入ってくるにつれて、高氏の返り忠に拍車が掛かった。
高氏の思いを聴いた重臣たちに反対者はいなかった。
（京へ到着するまでの状勢によって去就を決める）
ことで一致した。
高氏は幼時から母清子が上杉家所蔵の諸書を与えて育てたために知識詰めになっていて決断が遅い優柔不断な性癖になってしまっていたが、動乱期には即断即決より日和見のほうがいいのかも知れなかった。
こんどの総大将は北條一門の名越高家であった。
官位は高氏よりも低く、年齢も二十歳と若い。
昨年の大佛貞直、金澤貞將はいずれも高氏より地位、年令ともに上位だったが、こんどの編制で高氏は誇りを著しく傷つけられて出発まえから戦意喪失であった。
その心底を察知してか、高時は高氏に、
「得宗家の下知に従い、忠誠を尽くし二心なきを誓う」
旨の『起請文』の提出と、妻登子、嫡男千壽王を鎌倉に留め置くことを要求してきた。謀叛防止策である。
高氏は登子に、万一鎌倉に不穏な動きが起こらば千壽王を連れて足利荘へ脱出するようしかと申し付けた。
こうしておいて高氏は、三月二十七日弟直義、上杉憲顯、重能、高師直、畠山直宗らの重臣、それに一族の宿将ら三千余騎を率いて鎌倉を進発し、京へ向かった。

## 四

高氏は、遠征の途次ずっと去就について考えつづけた。
このまま得宗高時に面従腹背して幕府の崩壊を待つか、それとも見限って朝廷側につくか二者択一であった。
だが、返り忠したといっても先帝の綸旨か親王の令旨がなければ、朝廷方の武将たちは信用しないであろう。
また先帝も、昨年幕府軍の一翼を担って攻めてきた高氏をはたして信用してくれるかどうかが不安だった。
あれこれ考えを巡らしているうちに、いつか領国の三河へ入り矢矧（岡崎市矢作町）まできてしまった。
途中駿河で今川が、ここで吉良が加わって一族勢揃いしたので、あらためて軍議をひらいた。
高氏は大藏谷の屋敷で吐露した胸中をあらためて述べたところ、今川も吉良も賛成して激励してくれた。
これで鷹揚な高氏も肝が据わった。
あとは後醍醐先帝の綸旨を受けることだけであった。
「どうしたものか」

高氏の呟きにそれぞれ押し黙って思案に耽った。
その静寂を破って、母方の従兄上杉憲顯が口を切った。
「このたび同伴しております重能は、父の養子に入りましたのでわれらと義兄弟になりましたが、実は父の妹加賀局が嫁した勸修寺の別當宮津入道道宏の子でございますれば、お役に立てることと存じまする」
勸修寺というのは、後醍醐先帝が崇敬している六十代醍醐帝にあやかりたいと希い、生前から諡号を後醍醐と決めて生涯その称号で通そうとしているその醍醐帝が、母后追善のため上杉の遠祖藤原定方に創建させた皇室所縁の寺であるから、別當の子重能を使者に立てれば高氏の意志を信用してもらえるだろうというわけである。
「それはよいところに気がついた」
高氏は帰順を表明した文書を上杉重能に託すと、細川和氏をつけて船上山へ倒幕の綸旨を受けに密行させた。
後醍醐先帝の綸旨を待つ高氏は、京へ入るまえに受けたいものと希って、軍団を悠くりすすめて行った。
そして、近江の鏡宿まですすんだところで上杉重能と出会い、首尾よく綸旨を賜ったことを確認した。
高氏は、従軍の諸将をあつめて後醍醐先帝の綸旨を披瀝し、倒幕軍に参加して源氏を再興する心情を伝えた。
源氏を斃した北條一門の頂点に立つ得宗高時は平氏の系であるから、諸将は高氏を裏切りとは考えなかった。
足利勢は幕府軍のまま四月十六日に京へ到着した。

六波羅は平氏の全盛時代に現存する六波羅密寺を中心に鴨川の東（東山区）五條と七條のあいだに一門衆の居宅六波羅殿があった跡地に鎌倉幕府が政庁をおいて尾張、加賀以西諸国の政務裁判を総轄していたが、承久の乱以後に五條通りを挟んだ南にも探題を常置して朝廷を監視した。
北方探題は十三代執權極楽寺基時の子越前守仲時、南方探題は七代執權北條政村の曽孫左近將監時益であった。
両探題は高氏らの到着を待ち侘びていたらしく縋り付くようにして迎えてくれたが、六波羅全体の士気はこの二年のあいだにすっかり衰えてしまっていた。
三日おくれて名越高家四千余の軍勢が到着した。
高氏は、さっそく両探題、高家と軍議をひらいた。
そして、高家に赤松則村討伐を任せて、高氏は伯耆船上山へ遠征することに決した。
六波羅を出発した名越軍は山陽道を行き、足利軍は山陰道をすすんで老ノ坂峠を越え丹波国桑田郷篠村荘（亀岡市篠町）に入った。ここは足利領のひとつである。
高氏は、平氏が滅亡した文治年間に源爲義の孫義信（延朗上人）が篠村荘を領知したとき、石清水八幡宮を勸請したという篠村八幡宮に向かった。
ここで高氏は、全軍を前にして後醍醐先帝の『倒幕の綸旨』を示して北條一門を見限ることを表明し、高時から壮途を祝して与えられた頼朝から政子へ伝えられた由

緒ある源氏の白旗を境内の柳の木に掲げ、鏑矢一筋を神前に捧げて源氏再興の『願文』を奉納した。

境内にその〈旗立柳〉と〈矢塚〉が保存されているし、『願文』も八幡宮に保管されているという。

戦勝祈願をおえた高氏は各地豪族に檄を飛ばし、船上山の名和長年から早馬が届いているはずの赤松則村と千種忠顕に六波羅攻撃の日を約しておいて引き返した。

老ノ坂峠を越えて京へ入った足利軍は、赤松、千種両軍と示し合わせて五月七日未明に六波羅へ攻め入った。

山陽道をすすんだ名越軍は山城國淀付近の久我畷で赤松軍と交戦し、高家は四月二十七日に敗死していた。

高氏が篠村八幡宮で戦勝祈願した二日まえである。

三方から攻め込まれた六波羅勢は防ぎようがなく、南探題北條時益は自刃し、北探題北條仲時は光厳帝、後伏見、花園院を奉じ夜陰に紛れて遠路鎌倉へ落ち延びていったが、二日後に近江の番場（米原市）で追い付かれ、蓮華寺に籠もった仲時は逃れられぬと諦めて自刃した。

この青年武将に殉じた幕臣は四百三十二名という。

光厳帝と後伏見、花園院は高氏によって京へ帰された。

後醍醐先帝は光厳帝の即位を否定して上皇にし、みずから帝に復帰すると、正慶の年号を元弘に復した。

光厳帝の即位は正当であったが、楠木正成の旗標〈非理法權天〉どおり法は権力に勝てなかったのである。

## 五

高氏は後醍醐先帝から倒幕の綸旨を受けるとただちに鎌倉へ密使を走らせたので、妻登子は気丈にも機を窺って四歳の嫡男千壽王を伴い本領足利荘へ脱出していた。

いっぽう護良親王から倒幕の令旨を受けていったん上野新田荘へ帰国していた新田義貞は、船上山からの密書が届くと六波羅攻めの翌八日荘内の生品神社で旗揚げして、近国の豪族たちに檄を飛ばし、出陣を要請した。

高氏の倒幕目的は源氏の再興であったが、義貞のそれは開府以来疎外されつづけた北條執權打倒であった。

出陣の当日、足利千壽王を奉じた紀五左衛門が五百余騎を率いて駆けつけてきた。義貞の『起請文』と鎌倉攻めを足利との連合にする高師直の深謀遠慮であった。

とにかく出撃した新田・足利連合軍は十一日に小手指原（所沢市）で幕府軍と激突して翌日久米川（東村山市）でこれを破り、分倍河原（府中市）も突破した。

鎌倉へ近づいた義貞は全軍を三手に分けて巨福呂坂と化粧坂へ進ませ、本隊は腰越から極楽寺坂を目指した。

そして、二十二日早朝鎌倉へ突入した。

幕府軍は留守部隊で支え切れず、得宗高時は兵をまとめて東勝寺に入ると前執權金澤貞顕とともに自害して果てた。殉じた者は八百七十余人と伝えられている。

東勝寺跡から屏風山の山腹に向かったところに〈高時

腹切り矢倉〉といわれている洞穴がある。

源頼朝が征夷大將軍となった建久三年（一一九二）以来百四十二年つづいた鎌倉幕府はここに滅亡した。

八月五日、後醍醐帝による論功行賞がはじまった。

足利高氏　武蔵、常陸、下總、
同　直義　遠江、
新田義貞　上野、播磨、
同　義顯　越後、
脇屋義助　駿河、
楠木正成　摂津、河内、
名和長年　因幡、伯耆、

が割り当てられたが、これらの武将たちに勝るとも劣らぬ戦功のあった赤松則村はなぜか現状の播磨佐用荘を安堵されただけで、いちどは与えられた播磨守護職はほどなく取り上げられてしまった。

# 第五話　落日燃ゆ

信濃へ逃れた北條高時の遺子時行は二年後諏訪・滋野らの国人に担がれて鎌倉を攻めた。
無勢で防ぎ切れぬ高氏の弟直義は入牢中の護良親王を奪われては一大事と弑しておいて三河へ退き、高氏の救援を待った。

## 一

足利高氏は論功行賞で最高の恩賞に与かりながら、思惑はずれで素直に謝意を表する心境にはなれなかった。
高氏と新田義貞が寝返ったことで倒幕を早めたとして朝廷側の武将楠木正成、名和長年、赤松則村らより厚く遇されたことや、鎌倉幕府の本拠を倒した義貞より出先機関の六波羅を葬った高氏のほうが叙位も恩賞も上位だったことは、新田が足利の末の一族と認めたことの証しで納得がいくのだが、高氏の野望はほかにあったのだ。
高氏は源氏再興を希って北條執權家打倒に蹶起したのだから、武家集団の頂点に立つ征夷大將軍に任じられなければ所期の目的を達成できなかったのである。
ところが高氏の希むその征夷大將軍は、すでに帝の皇子大塔宮護良親王に与えられてしまっていた。
護良親王は十歳のころ比叡山の大塔に預けられて天台座主尊雲法親王となっていたが、父帝が隠岐島へ流されたのを知ると還俗して護良とあらため吉野で挙兵した。
だが、幕府軍に敗れて高野山へ逃れはしたが、そこで諸国に令旨を発して兵をあつめ捲土重来を期していた。
そのあいだに高氏と義貞が謀叛して幕府を倒した。
帰京した後醍醐帝は護良親王が諸国の兵を集めて合戦準備をしているという噂をきいて愕き、使者を送って、
「天下はすでに鎮まれり。すみやかに出家にもどって叡山座主に専念せよ」
そう諭した。
だが、護良親王は聴き入れず、
「足利高氏はたったいちどの戦功で武士たちの上に立ち

高氏が時行軍を一掃した恩賞に後醍醐帝は諱の尊治の一字を与えて尊氏と名告らせた。
だが、鎌倉に居座る尊氏を幕府復活の野心とみた後醍醐帝は尊氏を捨てて義貞を採り、あらためて義貞に尊氏追討を命じた。

権勢を握ろうとしております。早く討たねば北條高時より悪逆で強大な敵になりかねませぬ。そんな危険を放置しておいて出家に戻ってしまってはいったい誰が朝廷をまもりましょうや」

そう主張して、頑として引き下がらなかった。

後醍醐帝はやむなく征夷大将軍を与えたが、高氏討伐は根拠のない推理にすぎず大義名分なしとして退けた。

こうして後醍醐帝は、護良親王に押し切られて征夷大将軍を与えたようになってはいるが、じつのところ天皇親政を志すくらいの帝なのだから武家の棟梁も朝廷が握ろうと考えていたとしてもおかしくはない。

高氏は護良親王の征夷大将軍が不満であったが、もう一人護良親王を心よく思っていない人物がいた。

後醍醐帝の寵妃（側室）で三位の局といわれる阿野廉子である。

父は藤原北家三條流の四位右中將阿野公廉。

廉子は才気煥発な美少女に生育したので、藤原北家西園寺流の左大臣洞院公賢の養女になり、十八歳で中宮西園寺禧子の上臈に召し出された。

二十歳のとき寵妃に召され、後醍醐帝とのあいだに三人の皇子と二人の皇女を儲けた。

恒長、成長、義良親王と祥子、惟子内親王である。

廉子は、その美貌と才器が禍を招いてしだいに独占欲が強くなり、横暴な振る舞いが目立っていった。

元弘の変で後醍醐帝が隠岐へ配流されたとき、廉子はただ一人敢然として従った気丈な才女であった。

このとき、尊長親王が土佐（高知県）、宗良親王が讃岐（香川県）に配流されたのだが、廉子の三人の皇子はいずれも十歳以下であったために流罪を免れた。

廉子は帝に献身的に尽くしてきていたので、後継者はわが子のなかから選んでくれるものと信じていた。

それが年長とはいえ護良親王が重用されたのである。

生母は北畠師親の女親子で、親房の叔母にあたる。

護良親王が高氏を憎んでいるのには理由があった。

それは、高氏が六波羅を打倒したあと護良親王に仕える殿法印良忠の配下が商家の土蔵を破って財宝を奪うという事件が起こったので捕縛して六條河原で斬首すると、

「大塔宮の侯人、殿法印良忠が手の者ども、在々所々において昼強盗をいたすあひだ、誅するところなり」

そう書いた高札を立てた。

憤懣遣るかたない良忠は、護良親王に讒訴した。

「われを失脚させようとする高氏の陰謀ではないのか」

疑心暗鬼を生じた護良親王は、高氏の抹殺を謀った。

ことあるごとに高氏を憎み、讒言を繰り返した。

高氏は、護良親王との対立は避けられないと覚悟した。

もはや斃すか倒されるかであった。

護良親王のほうも高氏追討に立ち上がるべく、内密の

うちに諸国へ令旨を遣わして、兵を集めはじめた。
これを知った高氏は令旨を手に入れると、阿野廉子を動かして後醍醐帝に、
「大塔宮は帝位を奪い奉るために諸国の兵を集めておられます。その証拠もはっきりいたしております」
そう奏聞すると、確かな証しとして令旨を差し出した。
帝の信頼を一身に集めている寵妃阿野廉子の口添えもあって、高氏の奏聞を信用した後醍醐帝は、
「大塔宮を流罪に処すべし」
そう激怒すると、清涼殿での集会に事寄せて護良親王を呼び出した。
なにも知らぬ護良親王が前駆二人、供侍十余人の微行で参内したところを、殿内の鈴の間あたりに待ち受けていた結城親光と名和長年が捕えて馬場殿に押し籠めた。
閉じ込められた護良親王は弁明を許されなかった。
そして、決定は覆えることなく鎌倉に遠流された。
護良親王の身柄を預かったのは高氏の弟直義で、二階堂の谷に土蔵造りの牢屋をつくって親王を閉じ籠めた。
付き添いは南御方という女官一人だけであった。
後醍醐帝は〈流刑〉としただけでここまでの処置を考えていたわけではなかったであろうが、直義は兄高氏の含むところに同調してきびしく取り扱ったのであろう。

## 二

護良親王を鎌倉に幽閉することに成功した高氏は、当面の競争相手を失脚させたことで溜飲を下げたのであるが、じつはほかにもうひとつ気懸かりなことがあった。
ほかでもない北條一族滅亡のことである。
鎌倉はおなじ源氏の新田義貞が倒したことなので、北條高時以下一族を全滅させたと伝え聞いても果たしてそうか疑心暗鬼で、なにを聞いても隔靴掻痒の感があった。
さいわい弟直義が、護良親王から剥奪して阿野廉子の第二皇子成長親王に与えられた征夷大将軍の執政として鎌倉に下向していたのであらためて探索させたところ、
高氏の妻登子の兄でこのとき十六代執權であった赤橋守時は洲崎千代塚の合戦に敗れて建長寺山門近くの本陣に引き揚げて自刃。
大佛貞直は極楽寺坂口で新田義貞の弟脇屋義助軍に突撃を敢行して戦死。
金澤貞將は化粧坂口で討死。
鹽田國時、俊時父子は手傷を負って鎌倉の自邸までもどり自刃。
得宗高時は葛西ヶ谷の東勝寺に籠もっていたが、敗走してきた内管領長崎高重らと最後の一献を汲み交わしたあとそれぞれ切腹して果てた。その数二百八十三人。
こうして北條一族はほとんど死歿したのであるが、肝

賢の得宗家の血を引く三人の生死が不明であった。
高時の遺児萬壽丸と亀壽丸、それに弟泰家である。
泰家は新田義貞軍との小手指ヶ原、久米川の戦いに金澤貞將、北條貞國両軍の援軍として参戦し、義貞軍をいちどは堀兼に敗退させたが、江戸、豊島、葛西、河越らの諸将が加わった新田の大軍に敗れて府中を明け渡し、敗兵をまとめて鎌倉へ退却したはずであったが、鎌倉で討ち死に、自害した一族のなかにいなかった。
泰家は逸早く戦火を潜って逃亡していたのである。
また高時の遺児は、弟泰家が鎌倉危うしのときに嫡男萬壽丸を生母の兄五大院宗繁に、二男亀壽丸は諏訪盛高（のち入道照雲頼重）に託して鎌倉を脱出させていた。
ところが五大院宗繁は、鎌倉を征圧した新田義貞の、「北條残党を匿った者は誅殺、密告者には恩賞を与える」の布令に逃げ場を失い、恐れ戦いて萬壽丸を新田の本営に差し出したので、憐れにも斬首されてしまった。
いっぽう高時の弟泰家は無事に京へ逃れて刑部少輔時興と名告りを変えて潜伏していたが、身の危険を払拭できず庇護を求めて權大納言西園寺公宗を頼り、のちの金閣寺の場所にあった山荘北山殿に匿われた。
このころ、信濃國で北條家再興の烽火が上がった。
信濃國は北條氏の守護国で、その広大な所領からあがる収穫高からみても強力な基盤であったにちがいない。
長野新幹線上田駅で上田電鉄に乗り換えて終着駅の別所温泉は古くから知られた温泉境であるが、むかし独鈷山、夫神岳、女神岳に囲まれたこのへん一帯を信濃國小縣郡鹽田荘といい、この鹽田平に鹽田城があった。
守護になったのは二代執權北條義時の三男極樂寺重時で、その四男義政が建治三年（一二七七）この地に移り弘法山麓の鹽田城（上田市前山）に居を構えた。
以後、國時、俊時と三代つづき、近くにある曹洞宗寶珠山龍光院は國時開基の鹽田北條氏菩提寺である。
信濃國は長いあいだ北條氏支配の下にあったから、「北條家再興」をこころざす与党の国人たちが多くいた。
北條高時が新田義貞に斃された二年後には奥信濃常岩牧（飯山市常盤）で常岩氏の挙兵があったが、朝廷の守護方市川助房によって鎮圧されたし、府中松本（松本市）での反乱は元弘の乱の恩賞で甲斐國（山梨県）から入った小笠原氏と村上氏によって鎮圧された。
そのほか地方でも、遠く九州豐前の規久高政、豐後の糸田貞孝、伊豫の赤橋重時、紀伊の佐々目僧上、越後の小泉、大河、陸奥の曽我らが決起したし、武蔵の本間、澁谷などは鎌倉を襲ったが奪回するにはいたらなかった。
いずれも、「北條家再興」の目的はおなじくしていたものの、中心になる人物が

いなかったので相互の連携がとれず、各個ばらばらの蹶起になってしまって統制がとれぬまま線香花火で終わってしまっていてもはや頽勢挽回は不可能状態であった。

そのころ北條泰家を匿っていた西園寺公宗が動いた。

西園寺家は代々朝廷の関東申次職に補任されていたので幕府に好意的であり、北條執權家贔屓であったところから、公宗は泰家の意を体して先代高時残党首魁の密謀に荷担し、信濃の北條時行（亀壽丸）、越中の名越時兼と連繋して諸国に散在している北條与党と糾合し、二組で一斉蜂起して京、鎌倉の同時奪取を企てた。

すなわち、公宗が橋本俊季、日野氏光らと持明院統の後伏見法皇を奉じて後醍醐帝を倒そうと謀った。

刑部少輔時興と改名している北條泰家を京側の大将にいただき、信濃の諏訪一族や滋野一族に担がれている北條時行と東西で呼応して起とうとしていたのである。

公宗はまず山荘北山殿に後醍醐帝の臨幸を仰いで暗殺する手筈をととのえた。

この陰謀を知った公宗の弟公重は、西園寺家の破滅を恐れて密訴したのでことは露顕してしまい、公宗　日野資名、氏光、三善文衡らは捕えられて流罪になった。

泰家は逃亡したのだが、捕えられて誅殺された。

その後の西園寺家は、公重が密訴の功績を認められて家督を許されたので、危ういところで断絶を免れた。

いっぽう信濃のほうでは、京で蹶起が失敗したからといって鉾を納めるわけにはいかず、建武二年（一三三五）七月十四日に北條時行を担いだ諏訪神党一族を中心にした信濃武士団が後見諏訪頼重指揮のもとに蹶起した。

主力の諏訪頼重、保科彌三郎、四宮左衛門太郎の軍が船山郡青沼（千曲市）の守護所を急襲して守護小笠原貞宗率いる村上、市河隊らと激戦になり九日間攻防が繰り返されたが、守護軍が川中島南部に釘づけになり府中が手薄になったところへ時行、頼重の本隊が攻め入って國司の首級を揚げ、東信濃を経て上野へ攻め込んだ。

この北條軍の勢いに各地の豪族たちが続々と馳せ参じたので、すすむほどに大軍になっていった。

武藏を南下した北條軍は、女影原（日高市）で澁川刑部義季軍と岩松兵部經家軍を破り、小手指原（所沢市）で小山下野守秀朝軍を破ると、井出の澤（町田市）で迎え撃つ高氏の弟直義軍とも押し気味に戦った。

形勢不利と見た直義は、必死の阻止を命じておいていそぎ鎌倉へ馳せ戻ると、征夷大將軍成良親王を奉じていったん三河へ退いて頽勢を挽回することにした。

翌二十三日、成良親王とともに鎌倉を出立した直義は、山内まできたところで迷いを払って意を決した。

それは、大塔宮護良親王についてのことであった。

慌ただしく出立してきたので二階堂の土牢に押し籠めたまま放置してきたが、鎌倉へ攻め込んだ時行がそれを知って救出すれば大事にいたってしまう虞れがあった。

大塔宮は時行の父高時を斃した朝廷軍の征夷大將軍だったから八つ裂きにしてもおさまらぬ仇敵であったが、兄高氏に対してはおなじ怨みを抱く者同士であった。

（時行が大塔宮と手を結べばどうなる）

そんな危険人物を生かしてはおけなかった。

（大塔宮を弑し奉ろう）

そう決断すると、一行のなかから近臣の淵邊伊賀守義博を選んで呼び出した。

「われらは無勢であるためいったん鎌倉を立ち退くが、美濃、尾張、三河、遠江の軍勢を集めて取って返せば、北條の残党などは瞬く間に討滅できる。それよりも当家にとって窮極の敵は兵部卿親王（大塔宮）なり。宮を死刑にする勅許はないが餓死を待つよりは弑し奉ろうと思う。其方は急ぎ薬師堂谷へ馳せ戻って宮を弑せよ」

そう命じられた淵邊は、主従七騎で急ぎ引き返した。

暗い土牢のなかにいる大塔宮は昼夜の区別もつかず燈を挑げて読経していたが、淵邊が迎えに参上した旨を申し出て輿を据えるのを見ると、すべてを察して、

「其方はわれを殺めにまいったな。よし、心得たり」

そういうより早く淵邊の太刀を奪おうとして走り寄るところを淵邊が太刀を取り直し宮の膝の辺りを強かに打ち据えた。半年あまりの牢生活で足が弱っていた宮は、心は逸れど躰が動かずその場に倒れてしまった。

淵邊はすかさず宮の胸の上に乗りかかり、腰の刀を抜いて首を掻き切ろうとしたが、宮は首を竦めて刃先に喰らいつき刀を奪いとろうとした。

淵邊は奪われまいと渾身の力を振り絞って引っ張り合っているうちに、鋒が一寸余り折れてしまった。

淵邊は刀を投げ捨て、脇差を抜いて宮の胸許を二度ばかり刺し、弱ったところを髪を掴んで首を掻き切った。

牢を出て明るいところで確かめると、まだ喰い千切った刀の鋒を口に咥えていてその眼は爛々と輝いていた。

## 三

その二日後に北條時行は鎌倉へ攻め入り、占拠した。

鎌倉を逃れた直義は兄高氏に救援の急使を送ると、領国三河の矢矧で新手を呼集して軍団の再編を図った。

高氏から報告を受けた後醍醐帝は時行追討を命じた。

高氏はこの機を逃さじと、出陣の条件として、

「征夷大將軍をお命じいただき、関東八箇国の管領権をお与え下さいますようお願い申し上げます」

それは依頼というより要求であった。

征夷大將軍は武士の棟梁の地位に欠くことのできない肩書であり、関東八箇国は頼朝が知行した〈関東御分国〉でどちらも源氏の再興に不可欠の条件であった。

後醍醐帝は、天皇親政の確立に征夷大將軍は手放せぬところから、北條時行を見事追討して東国を平定してからのことと一日延ばしにして征東將軍という東国地方平

定に限るなんとも曖昧な肩書を与えて有耶無耶にした。
不満顔の高氏に、帝はさらに諱の尊治の一字を与えて〈尊氏〉と名告らせることでその矛先を躱した。
直義救援を急く新尊氏は、憤懣遣る方ない思いのまま勅命を待たずに五百騎を率いて京を進発してしまった。
この双方の齟齬がやがて決定的な対立に発展してゆくことになる。
近江（滋賀県）をすぎたころ、尊氏の軍勢は京極道譽など諸将の参陣もあって四千余騎に増えていた。
さらに、三河の矢矧に到着して直義の動員した軍勢と合流したときは、その数三万騎に膨れ上がっていた。
鎌倉を目指す足利軍は、途中濱名湖付近、佐夜の中山、興津付近、箱根山中、相模川原、片瀬、七里ヶ濱、鎌倉七口などで北條残党軍と合戦したが、いずれも衆寡敵せずでことごとく連勝して八月十九日鎌倉に突入した。
たった一日の合戦で北條残党軍は脆くも敗れ去った。
このとき、北條時行を担いだ諏訪頼重、時繼以下四十三人は雪の下の勝長壽院で自害したのだが、時行を無事に落ち延びさせるために一緒に自害したと見せかけようとして全員顔の皮を剥いで誰彼の見分けがつかぬようにしてあったというのだが、真偽のほどは定かではない。
その勝長壽院はすでに廃寺になっていて跡形もないが、古地図でみると、杉本寺の下を通っている金澤街道を滑川沿いに鎌倉駅のほうへ戻った左側にある大御堂橋を渡り、文覺上人屋敷跡をすぎて釈迦堂ヶ谷と葛西ヶ谷のあいだを奥へすすんだあたりの大御堂ヶ谷にあった。
頼朝が父義朝の供養に建立したという源氏の氏寺で、その後實朝や政子も葬られたそうだが、いつごろ廃寺になったのかは不明で、現在は礎石があるだけである。
結局北條時行の鎌倉占領は建武二年（一三三五）七月二十五日から八月十九日の二十日余りだったのでこれを〈二十日先代の乱〉または〈中先代の乱〉といわれているが、それは北條執權時代と足利幕府の中間にあったというところからそういわれるようになったようである。

## 四

北條時行が戦場を離脱して逃亡したことなど知らぬ尊氏は、とにかく北條の残党を殲滅したことで意気揚々と鎌倉入りすると、諸将を集めてその労を犒い、あらためて後醍醐帝から征夷大將軍を拝命したことを告げた。
まだ正式には任命されたわけではないのだから自称なのであるが、出陣のおりに願い出たとき後醍醐帝は、
「北條時行を見事追討して東国を平定してからのこと」
そう先延ばしにして尊氏の要求を躱したのを捉えて、
「帝がそう約束された」
ことと言質を取って勝手に任命されたと解釈した。
また、征東將軍として関東八箇国の支配を与えられたのだから差配は勝手と承知して、さきの倒幕に協力した

論功行賞が公家や寺社に厚く不公平だったことから、このたびは時行追討に戦功のあった武士たちに恩賞として領地の椀飯振舞をしたので尊氏の人気は上昇した。

だが、そのなかに新田一族の拝領地があったのだ。

これが足利尊氏と新田義貞の紛争の火種になった。

尊氏が若宮大路の旧幕府跡地に館を築いたことから、高師直、上杉憲房らの諸将もこれを倣って周辺に居を構えたので、さながら鎌倉幕府復活の様相を呈した。

征夷大將軍気取りの尊氏は、斯波家長を奥州總大將に任ずると阿野廉子が産んだ第三皇子義良親王（のちの九十七代後村上帝）を奉じて多賀国府（多賀城市）にいる後醍醐帝側近の公家北畠親房の嫡男顯家を牽制させた。

こうした尊氏の所行を苦々しく思っていた義貞が堪忍袋の緒を切ったのは、後醍醐帝から拝領した上野守護職を尊氏が上杉憲房に与えてしまったことである。新田荘の所在を知らぬはずのない尊氏の挑発であった。

義貞の訴えに後醍醐帝は勅使中院具光を遣わして、

「将士の論功行賞は綸旨をもっておこなう。其方は早々に帰洛いたし逐一報告するよう」

命じた。

帝はこのとき、無断で北條残党討伐に向かった罪を不問にするばかりか、乱を平定した軍功を賞して尊氏を、

「従二位参議に昇任する」

ことを伝えさせた。

大胆で行動的な尊氏はすぐに上洛する気になった。

それを制止したのは弟直義で、軽率な行動を諌めた。

「このたびの恩賞がなく不満を抱いているに違いない義貞や公家たちの屯しているなかへ態々出向いて行くのは飛んで火に入る夏の虫も同然、愚かなことであります」

直義の考えは正鵠を得ていたのだが、鷹揚な尊氏は、

（勅命によって出陣した征討軍の凱旋将軍が北條の残党ならともかく、朝廷方に討たれるはずはあるまい）

そう高を括っていたのだが、直義に諄々と諭されて素直な尊氏はそこまでいうならと上洛を思い止まった。

新田義貞が帝に訴えたことを知った直義は、ただちに、

（関八州の支配者に叛く新田義貞こそ逆賊である）

そう後醍醐帝に奏上しておいて、恩賞を与えた諸将に、

「新田義貞討伐」

の檄を飛ばした。

それを知った義貞は、

（尊氏は帝に謀叛を企てて、諸国に檄を飛ばしている）

旨を奏上した。

義貞は、尊氏の敵対を帝への謀叛に擦り替えたのだ。

尊氏の軍勢集めは事実だから弁解の余地はなかった。

さらに尊氏側に不利なことが起こった。

大塔宮が殺害されるまでずっと側に仕えていた南御方という女房が帰洛して帝に一部始終を奏上したのだ。

足利尊氏は、

●勝手に征夷大將軍になりすましている。
●新田義貞に与えた領国を勝手に没収した。
●大塔宮を勝手に殺害した。
●帰洛の命に服さず鎌倉に居坐っている。

これだけ並べ立てられればもはや弁解の余地はない。
後醍醐帝も、尊氏か義貞か採沢に迷ったであろう。
おなじ源氏の血を引く名門であるから、どちらをとっても武家を束ねる棟梁に据えるにはふさわしかった。
だが、鎌倉に居坐って動かぬ尊氏の目的は幕府復活を狙っているやも知れず、親政には危険な存在であった。
遠謀深慮のすえ後醍醐帝は尊氏を捨て義貞を採った。
後醍醐帝は尊氏・直義を反逆者と断定し、義貞に第一子尊良親王を奉じて尊氏を追討するよう命じた。
この時点で尊氏は、朝敵になってしまったのである。

## 五

新田義貞率いる五千の軍団が鎌倉を目指して発向したのは建武二年（一三三五）十一月十九日であった。
早馬の報らせを受けた鎌倉では、後醍醐帝から『新田義貞討伐』の綸旨が届くのを待ち侘びて出陣準備をしていたので、直義をはじめ仁木、細川、高、上杉の重臣たちがただちに尊氏のまえに集まり、それぞれが、
「われら一族を滅ぼさんとして義貞を大将にした軍勢がすでに東海、東山道を下ってきております。敵に難所を越えられては勝目がありません。急ぎ矢矧、薩埵山のあたりにご出陣なされて防戦なされますように」
尊氏を急かせた。
尊氏はしばし無言であったがややあって口を開くと、
「われ武士の家に生まれ、源氏の流れを汲んではいるが、わが足利家は承久以後北條氏に仕えて家を汚し名をはずかしむる恨みをしのんできた。それがこのたび征夷大將軍になる望みを達し、廃れた家を興し従二位に昇進したのはわが手柄によるとはいえ、ひとえに君恩によるものだ。その恩を忘れるのは人たる者のさぜるところなり。いま帝がお怒りになっておられるのは大塔宮を亡き者にいたしたこと、無断で軍勢催促の御教書を下した二点による。だがこれはいずれも尊氏自身の仕業ではない。ことの仔細をお話し申し上げれば事実無根のこの噂は消えてお怒りも鎮まることであろう。其方たちは勝手にするがいい。われは帝に敵対いたさぬ。もし恭順いたしても帝のお赦しがなければ剃髪して墨染の衣を纏い不忠の行いのなかった証拠を子孫に残すべし」
不機嫌にそう言い捨てると、部屋の背後の襖をぴしゃりと閉めて中に籠もってしまった。
思いがけない尊氏の態度に直義らは唖然としたがそうするわけにもゆかず、ともかく直義が軍勢を率いて三河の矢矧まですすんだがここで対戦して敗れ、その後鷺坂（磐田市）や手越河原（静岡市）でも敗れてしまった。

鎌倉へ退却してきた直義は、すぐさま尊氏の館へ報告に行ったが門が固く閉ざされていて静まり返っていた。
「誰かある」
直義が門を叩きながらそう叫びつづけていると、やがて奥から須賀左衛門という武士が出てきて、
「将軍は矢矧の敗報を聞こし召されて建長寺にお入りなされました。出家いたすと仰せなされるのでお側役のかたがたがお留め申し上げておられるところでございます。すでに御元結はお切りになられましたが、いまだ法体にはなられておられませんそうです」
直義は駭き、すぐさま高、上杉、畠山らを呼集した。
「将軍がそのような気弱をなされては士気が阻喪するばかりだ」
困り果てて鳩首凝議をつづけたが名案は出なかった。
思案のすえに一計を案じた上杉重能が、
「たとえ出家して法体にならせ給い恭順の意を表わそうとも帝は決してお赦しにならないとでも聞こし召されれば、あるいはお考えなおされるやも知れませぬ。贋綸旨を二、三通書いてご覧に入れたらいかがでござろう」
敗軍の大将直義は兄を追い込んだ責任を感じて困り果てていたので、否応なく重能の思案に飛びついた。
「よかろう。とにかくそれでやってみようではないか」
みなみな直義に同意したので、重能は能筆の者に命じて他の綸旨の書体を真似て書かせた。その贋綸旨は、

足利宰相尊氏、左馬頭直義以下一類等、武威を誇り朝憲を軽んずるあひだ、征伐せらるるところなり。かの輩たとひ隠遁の身たりといへども、刑罰を寛すべからず、深くかの在所を尋ね、不日に誅戮せしむべし。戦功あるにおいては、抽賞せらるべし。されば綸旨かくの如し。これをつまびらかにするに状を以てす。

建武二年十一月二十三日　右中弁光守

武田一族中
小笠原一族中

とし、おなじ文章を名字だけ変えて十通余り書いた。
それを直義が急ぎ建長寺へ持参して尊氏と対面すると、
「当家勅勘のことは義貞が言上したことであるから義貞が討手として差し向けられたわけで、彼らはわが一門がたとい遁世降参しても誅殺すると決めていて帝もご同意なされたとのこと、わが一門は到底逃れ切れませぬ。先日矢矧、手越の合戦で討ち取った敵兵が身につけていた守袋に入っていた綸旨にそう書かれているのです。ご覧下さい。所詮勅勘を逃れられぬ当家でござればなにとぞ御出家を思い止まられて一族の滅亡をお救い下さい」
そう涙ながらに言い終えると、贋綸旨を差し出した。
綸旨を読んだ尊氏は、まさか直義らの謀りとは気づか

ず顔面蒼白になり、贋綸旨を持つ手許が震えた。
素直でお人好しの尊氏は、法体になって恭順すれば帝が赦してくれるものと安易に考えていたのだった。
容易ならざる事態であることを思い知った尊氏は、
「一門の浮沈に関わることなればやむなし。われもそなたらとともに戦い、義貞もろとも死を覚悟いたすぞ」
そう決意すると、袈裟を脱ぎ捨てて錦の鎧直垂に着替えて、新田義貞との決戦の臍を固めた。
これ以後尊氏は真骨頂を発揮する事になってゆく。
なおこのとき足利方の武士たちがみな髻を短くする一束切にしたのは追い詰められて決死の覚悟を表わしたわけではなく、元結を切ってしまっている尊氏のすがたを目立たぬようにしようとする配慮からであった。

# 第六話　陽はまた昇る

尊氏は義貞の朝廷軍と箱根で戦い勝利して京に攻め入ったが在京の朝廷軍に敗れた。朝敵の汚名を着せられたのが敗因であった。

落ち延びた九州で国人たちを平定した尊氏は軍勢を陸海二手に分けて京に攻め上った。

迎え撃つ新田・楠木軍は兵庫で食い止めるべく布陣したが分断されてしまい、楠木軍は湊川で包囲されて潰滅し正成は自刃した。

いっぽうの義貞も劣勢とみるや丹波路に後退し、さらに京を目指して敗走した。

## 一

尊氏が新田義貞と雌雄を決する英断を下したことによって直義の敗戦で沈滞していた雰囲気は一掃され、それまで足利か新田か去就に迷っていた関東の豪族たちは一斉に尊氏の許に馳せ参じたので、意気天を衝いた。

尊氏は、新田義貞の軍勢を箱根で阻止する策に出た。

義貞はおそらく軍勢を東海道と東山道に分けて西と北から鎌倉を包囲しようとしてくるにちがいないから、蘆ノ湖の南を通る箱根路に直義の軍勢を配置しておいて、みずから率いる本隊は蘆ノ湖の北を迂回する足柄道の竹之下（静岡県駿東郡小山町）に陣立てすることにした。

足柄道というのは奈良、平安時代の官道で足柄峠は駿河と相模の国境であるところから〝あずまの関門〟といわれ、竹之下から矢倉岳（八七〇メートル）の南麓を越えて矢倉澤から坂本（南足柄市関本）にいたる道で、ほかに御殿場から乙女峠、仙石原を経て明神ヶ岳（一一六九・一メートル）を登り坂本に下る道もあった。

新田義貞の遠征軍が伊豆國府に到着したとの報を受けた尊氏は、直義以下諸将とともに鎌倉を発向した。

尊氏の思惑どおり、新田軍は二手に分かれて義貞の主力軍が箱根路の湯坂道へ、弟脇屋義助が公家侍や北面の武士たちを集めた混成軍で竹之下へ向かったという。

湯坂道は箱根峠、元箱根、蘆ノ湯を経て鷹ノ巣山、浅間山、湯坂山の尾根伝いに湯本へ下る急坂の多い難儀な道であったが、伊豆と相模を結ぶ最短距離であった。

尊氏は北叟笑んだ。義貞の主力軍が竹之下へくるとなれば雌雄を決する激戦を覚悟しなければならないが、脇屋義助の混成軍相手なら一挙に打ち破ってただちに義貞

本隊の背後にまわり挟撃できると踏んだのだ。
そうとは気づかぬ脇屋義助は、足柄峠を越えて関東入りする道程をたのしみながら悠然と竹之下へ現れた。
そこへ満を持した尊氏の足利軍本隊が襲いかかった。
たちまち打ち破られた脇屋軍は佐野原（裾野市）に撤退して主力軍と箱根で合流しようと図った。
いっぽう湯坂道を上ってきた義貞の主力軍は、さすがに精鋭ぞろいで直義率いる足利軍と戦端をひらくと終始押し気味にすすめ、やがて優劣の差が歴然としてきた。
そのとき、竹之下の敗報がとどいたのである。
義貞は尊氏の本隊が義助軍を追って箱根峠へ現れれば挟撃される危険を感じて撤退の余儀なきにいたった。
こうして天下分け目といわれた足利尊氏と朝廷軍を率いる新田義貞の激闘は大中黒（丸に一本線）が敗れ、二つ引両（丸に二本線）の旗標が箱根に翩翻と翻った。
後醍醐帝は義貞を選んだことを後悔されたであろう。
このとき、新田義貞と呼応して西と北から鎌倉を包囲しようとした奥洲の北畠顯家は、斯波家長に攪乱されて出発が遅れたために間に合わなかったのである。
新田義貞は箱根から撤退しながら無念の臍を噬んだ。
尊氏率いる本隊は当然小田原から湯坂道をくるにちがいないから、尊良親王の御身安泰を考えて弟脇屋義助の混成軍を竹之下へ迂回させたのが失敗の因であった。
義貞は尊氏にうらをかかれて躱されたのである。

このままでは京へ帰れぬ義貞は、尾張國で足利軍を食い止めるべく奥洲からくる北畠顯家軍の到着を待った。
だが、勝利した尊氏に呼応して諸将が叛旗を翻した。
筑紫の大友貞宗、近江國の佐々木道譽、朝廷側だった赤松圓心も尊氏側に寝返る雪崩現象が起こった。
京近辺にも不穏な動きが出てきたので、後醍醐帝は、
「急ぎ帰洛して防衛に当たるよう」
義貞に勅使を奔らせておいて比叡山に難を避けた。
緒戦の勝利で勢いに乗った足利軍は新田軍を追って京へ迫り、年が改った元旦に近江國勢多で直義と高師泰軍が名和長年、結城親光軍を破り、七日には山城國宇治で畠山高國軍が楠木正成軍を、さらに尊氏本隊が山城國山崎で義貞本隊を破って十一日に京へ進入した。
尊氏は後醍醐帝に拝謁して、新田義貞との合戦は朝廷に謀叛したわけではなく私怨に因るものであることを理解してもらおうと思ったのであるが、尊氏が京へ入ったとき帝はすでに神器を奉じて近江國東坂本（大津市）へ行幸されてしまっていた。つまり避難されたのである。
このことは後醍醐帝が尊氏を敵視した現れであり、尊氏は心ならずも朝敵にさせられてしまったのである。
尊氏は己む無く持明院統の皇子を皇位に就けようと図ったが、全員比叡山へ避難していて果たせなかった。
そうこうしているうちに義良親王を奉じて結城、伊達、南部の奥洲勢を率いた北畠顯家軍が東坂本の行在所に到

着すると、足利軍在陣の大津三井寺（園城寺の通称）を標的にして攻略し、伽藍を焼払って気勢をあげた。
そしてその朝廷軍が雪崩を打って京へ攻め入ってきたので、足利軍とのあいだに壮烈な争奪戦が展開された。
尊氏本隊は正月二十七日に四條河原で義貞軍に敗れて丹波國篠村へ退いたが、この合戦で足利方は尊氏の伯父上杉憲房をはじめ二階堂道行、三浦貞連、曽我入道などの諸将、新田方は義貞の執事船田義昌などを亡くした。
尊氏は、鎌倉幕府北條執權家を捨てて後醍醐帝に荷担することを誓ったこの篠村八幡宮の社前でふたたび戦勝を祈願しながら、このたびの敗戦に思いを馳せた。
戦術の優劣ではなく朝敵となったのが敗因であった。
尊氏は、不本意な汚名の払拭をあれこれ思案した。
そして、思い至ったのは官軍になることであった。
官軍になるには皇族を奉戴しなければならない。
だが義貞と立場を替えるなど所詮絵空事にすぎない。
朝敵の汚名に拘る尊氏は、ついに一計を案じた。
（持明院殿〈光厳上皇〉の院宣をいただき、この戦いを持明院、大覺寺両統の闘争にすれば汚名は免れる）
たしかに後醍醐帝に廃された光厳上皇を擁立して対立させれば、この闘争は朝廷の内乱に擦り替えられる。
尊氏は北叟笑んで持明院統と親しい日野中納言縁故の稚児薬師丸（後の熊野山別當法橋道有）を呼び出して、
「都へもどり持明院殿の院宣をいただいてまいれ」
そう命ずると書状を託して日野資明の許に遣わした。
光厳上皇の院宣を信じて尊氏は態勢を整えると播磨國（兵庫県）へ進出したが、京から駆け付けてきた北畠・新田連合軍と打出濱（西宮市）や豊島河原で遭遇戦になり、いずれも敗れて攝津國湊川（神戸市）へ退いた。
ここで尊氏は大友貞宗の提言を受けて、いったん九州へ下り少貳、島津らを加えて再編成することにした。
直義は都落ちを反対したが、尊氏は翻意しなかった。
このときなぜか義貞は敗走の足利軍を追わなかった。
後醍醐帝から恩賞に下賜された天下一の美人と謳われた愛妃勾當内侍にのめり込んでいて、
「足利尊氏を追撃して息の根を止めよ」
そう急かす帝の度重なる命にも動こうとしなかった。
つまり勾當内侍から離れたくないという想いのほうが尊氏に決戦を挑む気魄よりも強かったということだ。
平家が西海落ちしたときは源氏軍がただちに追い討ちをかけたので立ち直る隙を与えず壊滅できたのだが、義貞は三月になってようやく腰を上げたものの追撃を阻止しようとする白籏城（兵庫県赤穂郡上郡町）の赤松圓心の抵抗に遭って五十日余りも停めさせられた。
このおくれが尊氏に立て直す機会を授けてしまった。
わざわざ尊氏に盛り返す余裕を与えてしまったのだ。
義貞ならずとも絶世の美人をあてがわれれば愛慾に溺れるのはあたりまえで、後醍醐帝は以前の倒幕の恩賞の

ときに尊氏のほうを厚遇したことの埋め合わせに此の上ない恩賞として自身寵愛の女性を与えたのだろう。

だが、ときが悪かった。

北畠顯家を奥洲の監視に返したことと、この義貞が尊氏を追撃しなかったことが後に禍根を残すことになる。

## 二

尊氏は九州へ向かう途中備前國三石（岡山県備前市三石）あたりで山陽各国の要所に与党の各将たちを配置することにして、後日反撃するときの備えを固めさせた。

そして、備後國鞆（広島県福山市鞆町）であとを追ってきた日野資明の弟三寶院賢俊から院宣を受け取った。

こうなればもはや尊氏は朝敵ではなくなったわけだ。

後醍醐帝にとって尊氏が朝敵なら、義貞も光厳上皇にとって朝敵であるから、汚名は相殺され双方対等になる。

つまり、これは天皇家の内部抗争なのである。

尊氏は院宣を振り翳すと同時に鎌倉幕府を滅亡させた後醍醐政権に召し上げられた武家たちの所領を返還するという『元弘没収地返付令』を散蒔いて檄を飛ばした。

そうしておいて尊氏は、新田軍の追撃もなく悠々と長門國赤間関（山口県下関市）から九州へ向かい、筑前國葦屋津の多々良濱（福岡市東区多々良）に着いた。

そこは玄界灘に面した博多湾に注ぐ多々良河口の浜で、鹿児島本線の箱崎、香椎間にあった海浜である。

鎌倉時代、蒙古襲来のときの古戦場として名高い。

その多々良濱に上陸したときの足利軍は、上杉、仁木、畠山、吉良、石塔の一族と高や武藏、相模の軍勢だけで、矢は射尽くし、馬や鎧は乗船のときに捨ててきていて、刀槍だけの僅か五百に満たぬ人数であった。

平家の先例にもまして尾羽打ち枯らした見窄らしい軍勢は再起不能の感があったが、尊氏は楽観視していた。

光厳上皇の院宣があるからには官軍であり、九州の豪族たちにもすでに檄を飛ばしたからほどなく馳せ参ずるであろうし、同行の大友貞宗とおなじ九州を代表する大豪族の少貳や島津などが与力することになっていた。

多々良濱に上陸してまもなく宗像神社（福岡県宗像市）大宮司の使者が迎えにきて館へ案内され休息した。

そこで尊氏はあらためて少貳貞經に使者を送り、頼みにしているとの助力を申し入れた。

貞經は人生意気に感じてすぐさま嫡男太郎頼尚に三百騎を添え、尊氏率いる足利軍団の迎えに向かった。

少貳が足利方に荷担したと伝え聞いた大覺寺統に属する肥後國菊池（熊本県菊池市）の菊池武敏が三千余騎を率いて出陣し、途中水城の渡し（福岡県太宰府市）で追いつかれ、殿にいた時籠豊前守ら百五十騎が討たれた。

少貳頼尚は兵力半減のまま足利軍に加わったが、勢いに乗じた菊池武敏に本拠有智山城（太宰府市内山）を襲われ、形勢不利とみた家臣たちのなかから謀叛人が出て

貞経が自害するという手痛い打撃を受けてしまった。
とって返した菊池勢は足利軍の駐屯する多々良濱めがけて迫ってきた。香椎宮（福岡市東区香椎）の本陣で四、五万とも窺われる菊池の大軍を目前にした尊氏は、
「この手勢をもってあの大軍に立ち向かうのは、蟻が大木を揺り動かし、蟷螂が突進する車を遮るようなものである。なまじっかな合戦をして名もない敵と討ち合うよりは、いっそこの場で腹を切ろう」
そう言って、切腹しようとした。
そばにいた弟直義が慌てて制止し、
「合戦の勝敗はかならずしも兵力の多寡では決まらぬ」
ことを中国の故事や源頼朝などいずれも少数で大軍に逆転勝利した例を引いて懇々と説得しておいて、
「われらには一騎当千の勇士が多く、優っております」
そう諫めて勝利を確信させ、自害を思い留らせた。
この菊池軍との対決は、九州を制覇できるか否かの分け目になる決戦と覚悟しなければならなかった。
初戦は尊氏を温存して直義が指揮を執ることにした。
直義が馬上で香椎宮の社殿前を通り過ぎようとしたとき、番の鴉が神木の杉の枝を咥えて兜の上へ落とした。
直義は下馬してその杉の枝をいただき、
「これこそ香椎宮が御守護下さる兆しにちがいない」
そう言って恭しく礼拝すると、その杉の枝をあらためて兜に差し、全軍にも同様にさせてそれを目印にした。

「よいか。香椎宮のご加護を戴く我等は向かうところ敵なしじゃ。当たるをさいわい薙ぎ倒し全滅させようぞ」
そう士気を鼓舞すると馬上の人となり、勇躍出陣した。
多々良濱で激突したこの合戦は、足利方が上杉憲藤、重行ほか青年武将たちを喪ったものの直義率いる軍団の決死の勢いに押された菊池軍が後退して形勢不利になると、松浦党や龍造寺党などが続々と足利方に寝返った。
菊池軍は膨れ上がった足利方を見て勢いを削がれ、戦意喪失するとやがて本拠の菊池へ引き揚げていった。
さらに足利方は一色範氏と仁木義長勢が多々良濱で阿蘇惟直を自害させ、秋月備前守をも太宰府で討ち取ってその勢いは留まるところを知らず、箱崎に本陣をおいた尊氏と太宰府に拠る直義の許へ豪族たちが集まってきて、九州勢の大半は足利方に与力する強大な軍団になった。
光厳上皇の院宣を受けて官軍に返り咲いた尊氏が、武家の棟梁となり『元弘没収地返付令』を発布して各地豪族の所領を安堵する約束をしたことが功を奏したのだ。
尊氏は京へ攻め上るに際して眼の届かぬ遠隔地九州の監視を重視して、同族の一色範氏と遠戚の仁木義長を残留させて九州武士団の統轄にあたらせることにした。
一色範氏はのちに室町幕府の九洲探題に任じられた。
尊氏は、かつての鎌倉幕府北條執權とおなじく、この九州支配に一門を起用して血縁による体制を布いた。

## 三

新田義貞が勾當内侍との別れを惜しんで三月末まで尊氏を逐う西国下向を延期しているあいだに、西国では『元弘没収地返付令』の効果が覿面に顕れて、丹波國では久下、長澤、荻野、波々伯部らが九州残留の仁木義長の兄頼章の高山寺城に立て籠もり、播磨國では赤松圓心が白籏城の備えを固めて新田軍を阻止しようとしていた。

また美作國（岡山県）では菅家、江見、弘戸などが奈義能山菩提寺に城を築き国中の所領を奪って領有した。

さらに備前國（岡山県）では田井、飽浦、内藤、頓宮、松田、福林寺などが石橋左衛門佑の許で甲斐河と三石に城を構えて陸路と海上双方を封鎖しようとしていたし、備中國（同県）では庄、眞壁、陶山、成合、新見、多地部らが勢山を遮断して鳥も通えぬほどの備えをした。

備後、安藝國（広島県）周防、長門國（山口県）はいうに及ばず、四国、九州までも悉く尊氏に味方せねば存続が危ぶまれるほどの形勢だったのでみな従い靡いた。

こうした各国での蜂起が京へ報じられたので、このうえ東国までもが敵方にまわってしまってはと不安になった後醍醐帝に鎮守府将軍を命ぜられた北畠顯家は義長親王を奉じて陸奥國多賀城（宮城県多賀城市）に赴いた。

建武三年、延元元年（一三三六）三月四日、新田義貞はようやく軍勢を率いて京を進発すると、六日に赤松圓心の支城坂本城（姫路市）を囲んで攻撃をかけた。

急報を受けた圓心は備前、播磨の軍勢を率いて白籏城を出ると、坂本へ押し寄せて新田軍と交戦した。

一歩も退かぬ圓心に新田勢は手古摺りもたついているあいだに、九州を平定した足利尊氏は四月三日に大船団をもって博多を出港し京攻めの東上の途についた。

二月二十日に長門國赤間関を出て筑前國博多湾内多々良濱へ到着してから四十日あまりのことであった。

赤間関から二手に分けて尊氏、高師直は海上を、少貳、大友の軍勢を率いた直義、高師泰は陸路をすすんだが、途中で沿道の豪族たちが続々と参加してきた。

尊氏の船団は五月一日安藝國嚴島（広島県廿日市市）に着き、五日に備後國鞆ノ津（同県福山市鞆町）に上陸すると周防、長門、安藝國の武士団が馳せ参じてきた。

十八日に直義率いる軍団が福山に到着して合流した。

足利軍の集結を知った新田義貞は、

「尊氏、直義が大軍を率いて東上してきたので要害の地でこれを防ぐべく兵庫まで退く」

旨の急使を立てて内裏に奏聞すると、兵を退いた。

新田義貞の報告に駭いた後醍醐帝は正成を呼び出し、

「急ぎ兵庫へ罷り下り義貞と合力して戦うよう」

仰せつけた。

正成は、足利軍と正攻法では勝ち目なしと判断して、

「尊氏が九州一円の兵力を率いて東上したとあっては、

定めてその数雲霞の如き大軍でござりましょう。合戦つづきで疲労困憊のわが方が小勢で新手の大軍と尋常に戦ったのでは敗北は必至でござりまする。ここはひとまず新田殿を都へ呼び戻し主上はふたたび比叡山にお移り下さい。正成も河内へ下って畿内の兵力を整え淀川尻を封鎖いたしましょう。このようにして新田殿と上洛した足利勢を挟み込み兵糧を費やさせれば、敵は疲れて戦力低下し、わが方は日を追って馳せ集まり多勢になりましょう。そのうえで新田殿は比叡山から正成は河内側から攻め寄せれば敵を一戦で滅ぼすことができまする。新田殿も多分そう考えておられるでしょうが、途中で一戦も交えずに退却しては腑甲斐ないと非難されるのを恥じて兵庫で防戦せんとしておられるように思われます。しかし合戦は中途はどうあれ最後の勝利が肝要でございます。よくよくお考えあって御決定下されますよう」

そう熱っぽく奏聞した。

正成は戦術にすぐれた武将であるから、敵情を探りその動向を知悉したうえで勝てる方策を練る。奇襲や遊撃戦法は正攻法では勝てないと判断したときに採るのだ。

大軍を撃退した赤坂城の防衛戦が広く知られている。

正成は後醍醐帝の許で倒幕戦をともにしたことから足利尊氏、新田義貞双方の采配の差をよく知っていた。

正成の奏上を聴取した公卿たちの総意は、

「いくさごとは武人の正成に任せるべきであろう」

に傾いたのだが、ひとり坊門清忠が異議を唱えた。

「正成のいうところももっともではありますが、勅命を受けて出陣した義貞がまだ一戦も交えないうちにわれらが都を棄て主上が二度までも比叡山に避難なされるというのでは、帝の尊厳もうしなわれ官軍の面目も失墜してしまいます。たとえ尊氏が筑紫勢を率いて東上してくるといっても、よもや昨年関東八箇国の軍勢を従えて攻め上ってきたとき以上のことはございますまい。そのおりの合戦にあっては初戦から敵が西国へ敗走するまで味方は小勢ながらつねに大敵を破っております。これは武略がすぐれているのではなくてひとえに主上の御運が天意に叶っているからです。されば敵を都へ引き入れず都の外で滅ぼすことも不可能なことではありません。正成は時を移さず兵庫へ下るべきであります」

そう奏上した坊門清忠の言い分に正成は肚を立てて、

(それでは勝てませぬ)

真底怒りが込み上げてきたが、帝や殿上人にいくさの駆け引きなど判ろうはずはないと諦めて、

「このうえは異議を申すに及ばず。御諚に従いまする」

そう断言して御所を下がると、さっそく五月十六日に千騎を率いて都を発向し、兵庫の義貞の許へ向かった。

正成は、たとえ義貞と連合しても正攻法では足利軍に勝てぬことを承知していた。

だから、京を出るときすでに死を覚悟していたのだ。

敗れて死ぬと判っている負けいくさに態々出てゆくのであるから、まさに死地に赴く死出の旅であった。

余談だが、太平洋戦争末期に飛行機で標的に体当たりする特別攻撃が繰り返されたが、そのなかで桜花特攻を指揮した神雷部隊飛行隊長野中五郎少佐が出撃時に作戦室から飛行場へ見送りにきた飛行長岩城邦廣少佐に、

「飛行長、湊川だよ」

そう淋しく笑って機上の人になったという話がある。

野中隊長は、楠木正成の心境を忖度したのであろう。

話を戻すが、正成はこれまで出陣のときはかならず十一歳の嫡男正行を連れていったが、このたびばかりは死出の旅に同行させるわけにはいかず桜井の宿（大阪府三島郡島本町 桜井）まできたとき傍へ呼んで、

「獅子は子を産んで三日後にその子を数千丈の岩壁から突き落とすが、子には獅子の天性があるから教えずとも宙返りして生き延びるという。そなたはもう十歳を過ぎたのだから父の言葉を耳に留め教えに違うことなきようにいたせ。このたびの合戦は天下分け目であるから、今生でそなたの顔を見るのは最後と思う。わしが死んだら天下はかならず尊氏のものとなるだろう。しかし、そなたはいっときの命を惜しんで多年の忠節を失い降人となるようなことがあってはならぬぞ。一族郎党が一人でも生き残っている限り金剛千早のあたりに立て籠もり最後まで戦い抜け。それが亡き父への第一の孝行であるぞ」

そう言い含めると、帝から賜った菊造りの太刀を授けて、千騎のなかから三百騎を預けると河内へ帰した。

この『桜井の訣別』は戦前の小学校唱歌にあった。

## 四

楠木勢は二十四日播磨國兵庫に入り、湊川の西方會下山（現在神戸市兵庫区にある公園）に本陣をおいた。

右手は六甲山地が障壁になっているが、左手の打出濱は遠浅でどこからでも上陸可能な警戒地点であった。

正成は、休息もそこそこに和田岬（同市兵庫区和田崎町）小松原の新田義貞本陣に出向き到着の挨拶をした。

正成から兵庫へ下ってきた経緯を聴いた義貞は、

「楠木殿のお考えはもっともなれど、去年箱根で敗れて帰洛したときは逃げ帰ったと陰口を敲かれました。いまた備前、播磨から撤退したまま反撃もせずに帰洛いたさば面目まる潰れゆえ、たとえ不利であろうともこの地で一戦交えて挽回いたしたく、心中お察し下され」

そうまでいわれて正成は、慰めるより仕方なく、

「そのような卑屈になられることはござらぬ。貴殿は元弘のはじめに北條高時の猛威を打ち砕かれたし、この春には逆賊尊氏を九州へ追い落とされた。主上のご運が強かったとはいうもののこれはひとえに貴殿の武徳によるものではありませぬか。そのような貴殿を誰が侮れましょうや。自信をもって采配をお執り下されば[1]よろしい」

死を決意している正成にはなんの拘りもなかった。
翌二十五日、両者のあいだで決戦の火蓋が切られた。
新田、楠木連合軍は義貞が本陣に一万余騎、弟脇屋義助が五千余騎で西宮付近の経島に、大館氏明が五千余騎で東北の燈爐堂の南の浜に、楠木正成が七百余騎で湊川の西會下山の麓にそれぞれ布陣していた。
このころの湊川の川筋は、會下山の東麓から現在の湊川神社の西を通って神戸港に流れ込んでいた。
明石東部の大藏谷沖に仮泊していた尊氏の船団が太鼓で〈乱声〉を打ち鳴らして三度鬨の声をあげると、それを合図に両軍一斉に鬨の声をあげた。
両軍の鬨の声は南は鳴門海峡、西は須磨の浦、東は神戸東部の生田の森あたりまで三百里四方に響き渡り、それを合図に須磨口まで攻め寄せていた一万の陸上部隊が大手、山の手、浜の手にわかれて東進し、直義本隊の先鋒隊と和田岬の新田義貞勢が衝突して白兵戦になった。
大藏谷沖に停泊している尊氏の軍船と義貞本陣の双方に錦の御旗が翻り、それは足利、新田の抗争というより光厳上皇と後醍醐帝の代理戦争の様相を呈していた。
直義軍についで細川定禪の四国勢水軍五百艘が新田軍の退路を絶つべく遙か東の生田川尻（JR三宮駅の東方）から上陸しようとしたので、義貞は上陸させまいと船を追って和田岬の主力軍を東へ移動させた。
このため、鵯越えから南下したところの會下山丘陵に布陣している楠木軍との連携がとれなくなり、新田、楠木両軍の距離が遠く離れていってしまった。
退路を絶たれると咄嗟に判断してとった義貞の回避行動は、分断しようと図る直義の思う壺だったのである。
尊氏の本隊は、義貞の本隊が移動したあとの和田岬に上陸して、正成本陣の會下山丘陵に向かった。
これよりはやく直義率いる陸上部隊のうち浜の手隊が湊川の東へ回り込み、正面を衝く大手隊と東西から、さらに山の手隊も會下山丘陵北方の鵯越えから攻め下った。
楠木正成の本陣には菊の花が流れに浮かぶ〈菊水の旗〉と〈非理法權天の旗〉が翩翻とひるがえっていた。
二万余の足利軍が七百余の楠木軍を四方から攻めた。
乱戦で直義の身にも危険が迫ったのを見た尊氏の、
「新手を入れかえせ」
の命に尊氏親衛隊の吉良、石堂、高、上杉、土岐、赤松の軍勢六千が斬り込んでいった。
尊氏の用兵は、直義にもっとも危険な合戦をさせておいて、救いの手を差し延べるのが常套手段だった。
こうすれば尊氏の救援によって勝利したことになる。
ともあれ、この乱戦は三刻（六時間）にも及んだ。
十六度出撃を繰り返した壮絶な死闘のすえ、ついに楠木軍は刀折れ矢尽きて僅か五十余人になってしまった。
いかに戦術に長け合戦の名手と謳われた正成と雖も、

新田軍と分断されたうえに少数の兵力で白兵戦に陥ってしまっては如何ともし難く、衆寡敵せずであった。
討ち死に覚悟の正成は、精魂尽き果てもはやこれまでと湊川東岸の廣厳寺山麓（現大倉山公園）の民家に入り、念仏を十遍唱えたあとでまず従者が自刃して果てた。
正成は今生の別れにあたり生死を共にした弟正季に、
「聞けば人は今わの際に臨んでの一念によって来世の生の善悪が決まるということだが、そなたはもし生まれ変わるとするならばこの世の九界のなかでなにをのぞむか。なにに生まれ変わりたいか」
と問うた。
すると正季は、打ち笑って、
「ななたび生まれ変わっても、やはりおなじ人間に生まれて、朝敵足利を滅ぼしたいと存じまする」
そう胸を張って答えた。
それを聴いた正成は、嬉しそうに微笑むと、
「罪業深き悪念なれども、実はわしもまたおなじ思いだ。それではわしも人間に転生いたして朝敵を滅ぼし、本懐を遂げることにいたそうぞ」
嬉しそうにそう約束すると、兄弟は静かに相対して刺し違え、その場にどうと斃れた。
このとき、正季が兄正成の問いに答えた、
「ななたび生まれ変わって朝敵を討つ」
の意識が大忠臣たるの証しとなり、この〈七生報国〉の誓いがさきの太平洋戦争中おおいに持て囃された。
正成の首は京の六條河原で獄門にかけられたが、尊氏はその晒し首を早々に手許へ引き取ると、
「惜しい武将を亡くしたものよ」
目頭を押さえて沁々そう呟き、直義を呼んで、
「正成とは公私ともども久しく親しんできた古くからの馴染みのことゆえ哀れを催す。遺された妻子もせめていまいちど死顔と対面いたしたく思っているであろう」
そう思い遣って、正成の首を河内へ送り届けさせた。

いっぽう、神戸東岸の生田の森へ退いていた新田義貞の軍勢は、三方から足利軍に攻め立てられていた。
義貞は正成とちがって討ち死に覚悟ではなかったので、劣勢とみるや逸早く丹波路を目指して落ちていった。
この敗報はすでに後醍醐帝の上聞に達していた。
正成・正季兄弟が自刃して二日後の五月二十七日、後醍醐帝は敗走してきた新田義貞の軍勢に護衛されて再度東坂本へ行幸された。足利軍の侵攻を避けたのである。
結局、後醍醐帝は一年のうちに二度も比叡山へ避難することになってしまったのだが、ならば楠木正成の上奏どおり足利軍を京に誘き入れていたらあるいは戦局はかわったかも知れない。すべては後の祭りであった。

# 第七話　覇権奪取

後醍醐帝に見限られた新田義貞は越前に後退して敦賀の金ケ崎城で再起を図った。
京を占拠した尊氏は後醍醐帝を幽閉すると光明帝に譲位させて両統迭立を復活させた。
後醍醐帝は神器を携えて吉野に脱出し、朝廷が分裂して南北朝時代に入った。
義貞は足利軍と交戦中に眉間を射貫かれて昏倒し、最早これまでと自害して果てた。
尊氏が北朝から征夷大将軍に任ぜられた翌年後醍醐帝が五十二歳で崩御された。

一

足利尊氏は、湊川で楠木正成を斃したものの、新田義貞を討ち漏らしたことが残念でならなかった。
（間髪を容れず京へ攻め上らねば悔いを千載にのこす）
そう決断した尊氏は、直ちに進撃を開始させた。
余勢を駆った軍団は疲労の色も見せず京へ攻め入った。
尊氏の命を受けた直義がすかさず西坂本攻撃に向かったが、比叡山と琵琶湖に挟まれた狭い地形なので大軍は容易に動きがとれず、押したり押されたりの混戦のなかで後醍醐帝の重臣千種忠顯が雲母坂で戦死した。
千種忠顯は後醍醐帝の隠岐配流に従い、脱出成功の手柄により重用されていたのだが、公家の身で武事を好み先頭に立って活躍をつづけていてついに命運尽きた。

直義の坂本攻めが埒の明かぬのに痺れを切らした尊氏は、ついに持明院統の光厳上皇を奉じて入京した。
光厳上皇は、後醍醐帝が比叡山の麓東坂本へ退去のとき持明院統の後伏見法皇と光厳上皇を人質にとって同行させたが、光厳上皇は途中北白川のあたりで急病と称して離脱し、法勝寺に入って休息したあと尊氏のいる東寺（京都市南区九條町）に逃れてきていた。
尊氏が坂本攻撃を繰り返せば、間隙を狙って新田義貞も京へ攻め込んできたが敗れて坂本へ引き返していた。
その京での激闘の最中に、隠岐島に配流されていた後醍醐帝を伯耆國船上山に迎えて倒幕の兵を挙げた豪族名和長年が、三條のあたりで敗死してしまった。
戦乱の治まらぬなか、尊氏は光厳上皇に弟君豊仁親王の即位を奏請し、神器なく践祚して光明帝となった。

決着がつかぬまま四箇月が経ったころ、尊氏はひそかに後醍醐帝の許に使者を送り、申し入れを伝えさせた。
「さきに近臣の讒言によって勅勘を蒙りましたおり、私は出家して無罪を認めていただきそのうえで死のうと思ったのでございますが、義貞、義助らが帝のお怒りを口実に日ごろの鬱憤を晴らそうとしましたのでやむを得ず兵を挙げ、かかる天下の大乱に及んだのでございます。しかし、これはまったく帝に対し奉って叛逆を企てたのではございません。ただ義貞の一類を滅ぼして今後の讒臣を懲らしめようと思っただけのことでございます。もし私の誠意をお認めいただけるのでしたら讒言を蒙ったことをお憐れみあってなにとぞ都にお帰り下さいますように。お供の公家や降参する者については罪の軽重を問わずすべて本官、本領に復し、天下の政を公家にお任せいたしましょう。なお、これらの申し入れについてお疑いを晴らすために別に一紙をご覧に入れます」
そう言上して、起請文を帝の側近浄土寺の忠圓僧正に差し出した。
後醍醐帝はこれを見て、
「起請文まで差し出すからにはよもや偽りはあるまい」
そう判断すると、重臣たちには相談せずに一存で、
「都へ帰る」
ことを尊氏の使者に直接即答した。
帰ってきた使者から後醍醐帝の勅答を聴いた尊氏は、
「帝は思慮深い御方だが案外簡単に欺くことができた」
そう言って北叟笑んだ。
尊氏はさっそく、帝側の然るべき大名たちに伝手を求めて密書を送り、味方になるよう誘い込んだ。
このようにして後醍醐帝帰京計画は密かに進行した。
尊氏に降参した者は今路や西坂本へ行って待機した。
そのなかには新田一族の江田行義、大館氏明もいた。
彼らは一方の大将であったから当然義貞と死生をともにすべき筈であるにも拘らず降参側にまわり、十月九日の明け方義貞に無断で帝の御座す山上へ登っていった。
その動きをまったく知らぬ義貞の許へ洞院實世から、
「只今主上が京へお帰りになるといって供する者たちをお召しになっておられまするが、ご存知でござるか」
そう問い合わせる使者がやってきた。
面談した義貞は、平然として、
「そんなはずはござらぬ。お聞き違いでござろう」
自信満々に答えて一笑に付した。
帝が無断で行動するはずがないという自負があった。
再三足利尊氏、直義兄弟に敗れてはいるが、楠木正成亡きあと帝が頼みにしているのは自分だけだという思い上がりが、義貞の判断を屢々誤らせていた。
義貞の傍らに控えていた側近の堀口貞満が、
(そういえば)
不審の廉ありと思案をめぐらし、義貞に、

「この明け方、江田、大館両名が用もないのに根本中堂へ行くといって山を登って行きましたのは怪しゅうございまする。それがしが様子を見てまいりましょう」

そう言うと郎党に着せる鎧を攫んで肩に懸け、馬を飛ばして後醍醐帝の許に馳せつけた。

山上近くで馬を降りてあたりを見渡すと、公家たちが出発準備に慌ただしく、すでに引き出された帝の輿のまえに女官や近臣たちが跪き、出発直前の様相であった。

貞満は形振り構わず鳳輦の輿の轅に取り縋ると、御簾の前に平伏して、

「都へお帰りになるとの噂を耳にいたしましたが、主人義貞は知らぬと申しますので、聞き違いかと思っておりましたが、この御様子ではやはりまことでござりましたな。義貞にどのような不義があってこれまでの忠節を見限られ、大逆無道の尊氏にお心を移されたのでござりまするか。義貞は不肖の身ながら綸旨を奉じて鎌倉幕府を滅ぼし、隠岐から帝をお救い申し上げました。その後尊氏が叛逆いたしましてからは死を賭して戦うこと数知れず、一族百三十二人、郎従八千余人を喪いました。さりながら、都での数度の戦いにわが軍が敗れましたのはわが主人が合戦下手なのではござりませぬ、おそれながら、帝の御徳に欠けるところがおありなのか、味方に馳せ参じる者が少なかったからではござりますまいか。ともあれ、当家長年の忠節を捨てて京へお帰り召されるのでしたら義貞はじめ一族五十余人の首を刎ね胸を割いてからにしていただきとうござりまする」

そう訴えた。怒りに震え涙ながらに道理を説く貞満の言葉に、後醍醐帝はたじろいで誤りを悔いる様子を見せ、供奉の人々もみなその言い分をもっともと思い、貞満の主人を思う忠義に感じて頭を垂れてしまった。

そこへ義貞、義顯父子と弟脇屋義助が三千余騎を引き連れて馳せつけ、心中の怒りを抑えて冷静を装い礼儀正しく居並んだので、後醍醐帝も顔を和げて義貞を宥め、

「貞満の怒りももっともだがそなたを見捨てるわけではない。天運いまだ至らず兵も疲れているゆえ尊氏といったん和睦して時を待とうといたしたまでじゃ。このことを内々知らせておきたかったのじゃがそなたが都へ戻るのはよくなかろうと考えあとで話そうと思ったのじゃ。そなたは譲位する恒良と尊良も奉じて同志のいる越前國へ下り、兵力を養って大軍をおこし再起を図ってくれ」

そう涙ながらに説得した。

涙に咽ぶ帝の言葉に、義貞は従うほかはなかった。

尊良親王が鎌倉幕府によって土佐（高知県）に流されたとき、十歳未満だった恒良親王は流罪を免れていた。

尊良の生母は側室藤原爲子だが、恒良の生母は後醍醐帝の寵を一身にあつめた才女の側室阿野廉子であった。

さっそく恒良親王に受禪の儀式がおこなわれ、翌十日に義貞は両親王を奉じて北陸路を目指し落ちていった。

これが後醍醐帝と新田義貞どの永久の別れであった。
つまり後醍醐帝は、ここにいたって足利尊氏に心を移し、忠勤を励んできた新田義貞を見限ったのである。
義貞とその一統が立ち去ったあと、山を下った後醍醐帝の一行が法勝寺の近くまできたとき、五百騎を率いて迎えに出ていた足利直義が三種の神器の引渡しを要請したので、予て用意しておいた贋物を手渡した。
恒良親王への譲位も義貞を宥めるための手段だった。
後醍醐帝は、新田義貞と足利直義を欺いたのだ。
難を逃れられて吻とした後醍醐帝だったが、つぎに待ち構えていたのは足利尊氏の非情な処置であった。
御所に迎えられるのではなく、隣接する御苑のなかの古い御殿花山院に押し込められてしまったのである。
四門を閉じ、警固の武士がつくという幽閉同然のはからいで、身の回りの世話も准后阿野廉子とその侍女二、三名に限られ、隠岐での流人生活と同様であった。
供奉の公家は官職を解かれ、武士のなかには斬罪に処された者もあって、まさに敗者の処刑であった。
後醍醐帝は、まんまと尊氏に謀られたのである。
恒良親王を奉じた義貞の軍勢は尊良親王とともに琵琶湖西岸を北上して海津から近道の西近江街道を経て敦賀（福井県）を目指そうとしたが、足利方の越前守護斯波高経の軍勢が塞いでいるのでやむなく北岸の塩津濱へ出て北國街道を行く迂回路を辿り、栃ノ木峠から木ノ目峠をまわってようやく越前國金ヶ崎城（敦賀市金ヶ崎町）に到着したが、途中山路の深雪に凍死者が続出した。
尊氏は幽閉した後醍醐帝に太上天皇の尊号を贈った。
ここで尊氏は後醍醐帝が光明帝に譲位したかたちをとることによって、両統迭立を復活させたのである。
こうしておいて尊氏は、光明帝の宣旨を受けて鎌倉ではなく京で幕府をひらくと、建武式目を定めた。
そのあと尊氏は後醍醐帝の皇子成良親王の立太子礼を執行した。大覺寺統後醍醐帝から皇位継承した持明院統光明帝のあとは大覺寺統成良親王の継承が筋であった。
だが後醍醐先帝は裏切った尊氏を信用せず、十二月二十一日に側近刑部大輔景繁の手引で密かに神器を携えると夜陰に紛れて花山院を脱出して吉野に逃れた。
ここに、世はまさに両統分裂して一天二君となり、朝廷も京と吉野の二箇所になったことから、両所の位置をとってのちに〈南北朝時代〉といわれることになる。

## 二

後醍醐帝が神器を携え密かに花山院を脱出して吉野へ逃れたとの報は、吹雪と寒気の道中を克服してようやく敦賀に到着し気比彌三郎大夫率いる三百騎に迎えられて金ヶ崎城に入った新田義貞の許にも届いたが、足利方の斯波高経、高師泰、今川頼貞、細川頼春らの軍勢に遠巻きされていて呼応するのは不可能な状態であった。

義貞は足利軍に包囲されるまえに兵力の分散を考えて嫡男義顯を北国勢二千余騎とともに越後國へ、弟義助を千余騎とともに杣山城（南条郡南越前町）へ配置した。

分散によって兵力は弱体化するが、そのかわり籠城軍と呼応して包囲軍を挟撃できる利点があった。

義助は越後國へ行く義顯と同行して杣山に向かった。

城に近い鯖並の宿（南条郡南越前町）で地元の豪族瓜生保、重、照兄弟が歓迎してくれたので心強く思ったが、ほどなく足利方に寝返られ追い出されてしまった。

義助と義顯はやむなく金ヶ崎へ引き返し、夜陰に紛れて包囲網を掻い潜り無事に城へ入ることができた。

包囲軍の弛緩を知った尊氏は烈火の如く怒り、大軍を繰り出して海陸双方から総攻撃をかけさせた。

金ヶ崎城は敦賀湾に突き出した岬に築かれていて、三方は海で背後は急峻な山という地形に恵まれていた。

攻め倦む足利軍に嫌気がさした瓜生兄弟が杣山城に帰ってしまったという報が届いて城兵たちに一縷の望みが出たものの、食糧が乏しく深刻な状態になっていた。

ついに部将たちの愛馬まで殺して飢えを凌ぐというところまできていて、あと十日も持ち堪えられるかという不安に追い込まれていたのである。

（このままでは自滅する）

義貞は、座して死を待つより密かに城を脱出して杣山に行き、瓜生兄弟の協力を得て軍勢を集め、背後から足利軍を攻撃して活路を開こうと考えた。

ことは急を要する。三月五日の夜半、義貞は弟義助と僅かな人数で海側から城を脱出して杣山に向かった。

だが、義貞が恃む瓜生兄弟はこのときすでに足利軍の高師泰勢に攻められ、敗れ去ってしまっていた。

「馬が見えないのは、食べてしまったに違いない」

そう察知した尊氏は、翌六日に総攻撃を命じた。

ここ十日ほど満足に食べていない城兵たちは、太刀も振るえず弓もろくに引けない有様だったから堪らない。

城に残っていた由良具滋、長濱顯寛の両将は、父と叔父の留守をまもる新田義顯のところへやってきて、

「敵はすでに一の木戸を破り二の木戸まで迫っておりますが、兵士は疲労困憊していて防げずもはや絶望でございます。急ぎ東宮（恒良親王）を小舟にお乗せしてどこぞの海辺なりとお逃がし申し上げましょう。残った方々はひとつ所に集まってご自害なさるべきと存じます。そのあいだわたくしたちが攻め口へ行って防戦いたします。見苦しいものはみな片付けて海へお棄て下さい」

そう言い終えると二人は立ち上がったが、飢えのため満足に歩くこともできない状態だった。そこで二の木戸の脇に射殺されている戦死者たちの股の肉を切りとらせて両将はじめ二十余人に与えてひと口ずつ食べさせた。それでどうやら戦えるといった有様であった。

もう一人の部将河野備後守も搦手から攻めてくる足利

軍を防いで半刻（一時間）ばかり戦ったが、ついに力尽きて部下の三十二人とともに切腹して果てた。
こうなると、もうどう踏ん張っても望みはなかった。
義顯は城に残っている尊良親王の許に行き、
「戦いは最早これまでござります。われらは名を惜しむ武家生まれゆえここで自害いたしますが、宮は敵陣に行かれてもよもや亡き者にされる虞はござりますまいゆえこのままここにおいでなされますように」
そう告げると、尊良親王は爽やかな笑顔をみせて、
「帝が都へお戻りになったとき、わたしを総大将にそなたたちをわが股肱の臣となるようにと定められた。なのにそなたたちがいなくてなんの総大将たり得よう。わたしもここで自害しあの世で怨みを晴らそうと思う。そもそも自害とはどのようにいたすものか。作法を教えよ」
思い掛けない親王の言葉に、義顯は涙を抑えて、
「自害とは、このようにいたすものでございます」
しずかに答えながら刀を抜いて逆手に持ち、左の脇腹に突き立てると右脇の肋骨二、三本にかけてぐいと掻き切り、その刀を抜くと親王の前に置いて息絶えた。
尊良親王がその刀を手にとろうとしたが柄に付着した血糊で滑って握れないので、衣の袖に巻きつけて白い肌を晒すと、胸の辺りに突き立てて義顯の枕辺に斃れた。
後醍醐帝の第一皇子はこのとき二十七歳であった。
そのころ由良具滋、長濱顯寛の両将も城門を開いて戦い、喉が渇けば己れの疵から流れ出る血を啜り、戦死者の肉を食べて力をつけるという凄惨な地獄絵であった。
その様子が兵士たちには未練がましく見えるらしく、
「大将は思い切りよく自害して果てるものですぞ」
見兼ねてそう迫ったが、由良も長濱も承知せず、
「おなじ死ぬなら、敵の大将と差し違えて死ぬのだ」
そう言い張って攻撃の手を止めず討ち死にして果てた。
まことに酸鼻をきわめた金ヶ崎の籠城戦であった。
このとき、小舟で城を脱出した恒良親王も足利軍に捕えられて都へ送られ、直義に毒殺されてしまった。
しかし、これで新田軍は潰滅したわけではなかった。
弟義助とともに瓜生兄弟斃れたあとの杣山城に身を潜めていた義貞は、足利軍に敗れて諸々に隠れていた将士を集めて立て直しを図りその数三千余騎にまでなった。
尊氏は越前守護の斯波高經、家兼兄弟に北陸勢を預けて越前國府武生（越前市）の府中城に向かわせた。
それから数箇月のあいだ小競り合いがつづいたが、無勢の新田軍の遊撃戦の繰り返しで決着がつかなかった。
そうこうするうちに新田軍に加勢する者が出てきた。
なかでも平泉寺（勝山市）の衆徒たちは三嶺（鯖江市）に城を構えて義貞に束ねる部将を求めてきたので、義貞は弟義助に数百騎をつけて向かわせた。
こうして勢力を盛り返してきた新田義貞は、北陸地方

の征服を目指して健闘をつづけながら延暦寺とも連絡をとって京へ進攻する機会を窺っていた。

これらのことは奥羽鎮撫に当たっている靈山城（福島県伊達市）の北畠顯家にも報らされたので、顯家は、

（後れてはならじ）

急拠兵を集めて進撃を開始し、白川の関（同県白河市）から一路西上して八月十一日に鎌倉に到着した。

鎌倉をあずかっていたのは尊氏の嫡男義詮であった。

十一歳の義詮は健気にも徹底抗戦を主張したが、

（衆寡敵せず）

を理由に部将たちは鎌倉を明け渡してしまった。

勢いに乗じた顯家は、鎌倉に留まることなく、正月二日に京を目指して進撃を開始した。

顯家は、北近江から越前へ行き新田義貞軍と合流して京へ攻め込もうと考えていたのだが、義貞に戦功を奪われはしないかという疑念が生じて単独で京へ向かった。

ところがそれが裏目に出て、美濃國に入った途端伊吹山麓の青野原（関ヶ原）で桃井直常らの軍勢と出会って敗北を喫し、京へ行けずに伊勢國を迂回して奈良へ入ったのだがここでも高師直の軍勢と戦って河内國に敗走、奉戴していた義良親王は帝の御座す吉野へ逃れた。

その後、北畠顯家は摂津國天王寺で細川頼氏軍を破ったものの阿倍野で敗れ、さらに堺浦石津で高師直軍と激突して潰滅し討ち死にした。僅か二十一歳であった。

## 三

北畠顯家の戦死を知らぬ新田義貞は、杣山城にあって北陸統一を目指し懸命に活躍していた。尊良親王を金ヶ崎城で見殺しにしたことは万死に値する呵責であった。

名誉挽回を図る義貞は、斯波高經の籠もる足羽城（福井市足羽）攻略にかかったが、なかなか手強かった。

義貞は先祖伝来の根拠地越後國から呼応した大軍が越中、加賀を抜け破竹の勢いで国境まできているとの報に勇躍出陣したのだが、足羽城は容易に陥ちなかった。

そんなところへ、吉野から後醍醐帝の勅書が届いた。

「八幡山の籠城軍が救援を求めてきている。北国平定を一時差し置いて、急遽都へ攻め上るように」

それは後醍醐帝直筆の緊急指令であった。

八幡山というのは石清水八幡宮のある山ということであろう。その山は男山といい標高一四二・五メートルの小高い丘の頂上にある八幡宮を利用して男山城とした。

北畠顯家が奈良般若坂で敗れたとき、摂津國へ向かう顯家とわかれて北上した弟顯信軍と、新田義貞の二男義興軍が布陣していたが、高師直軍に攻められていた。

義貞は、当面の敵斯波高經が気掛かりだったので、三千余騎を手許に残し、越後軍を加えた二万余騎を弟義助に預けていそぎ京へ先発させた。

義助率いる新田軍が敦賀まできたとき、高師直が男山城を火攻めしたという噂が飛び込んできた。

源氏の守護神である石清水八幡宮を、高師直が焼き討ちしようとは、信じられぬことであった。
これは短期決戦を挑む師直の先制攻撃だったのだが、主家の守護神を焼き払うことなど信じられぬ義助は、真偽を確かめねばならぬと進軍を停止させてしまった。
兄義貞が勾當内侍に心を奪われて西国へ敗走する尊氏への追撃がおくれて勝機を逸したのと事情は違え、状況を把握してからとした逡巡が戦機を逃してしまった。
義貞はやむなく義助軍を引き返させると、越前を平定してから京へ上ろうと考え、斯波高經討伐に集中した。
足羽城ひとつに手を焼いているのは、堅固だというだけではなくこの城を中心にして近くに点在する七つの城が連繋して陽動作戦をとっているからであった。
なかでも藤島城（福井市藤島町）が手強かった。
斯波高經が藤島荘を平泉寺へ寄進して衆徒を抱き込み、新田方から寝返らせて藤島城に立て籠もらせていた。
その僧兵五百余人は支城ながら手強く抵抗した。
義貞は、平泉寺の末寺燈明寺の門前に陣取って藤島城攻めを遠望していたが、撥ね返される様子をみて埒が明かぬと判断してか、鎧を着替えて馬に乗ると僅か五十余騎を率いただけで間道の畔を通って藤島城に向かった。
この僅かな動きが義貞の命運を決定づけてしまった。
そのとき、運悪く足利方の細川出羽守と鹿草彦太郎の率いる三百余騎が城攻めの新田軍を追い払うべく間道の畔を迂回してきたのと正面から出会ってしまったのだ。
細川方は徒歩で楯を持った兵が多かったので、義貞を見るなり深田の中に飛び込み楯を並べて身を防ぎながら猛然と矢を射かけてきた。ところが義貞のほうは射手が一人もおらず楯も持っていない。やむなく兵士が義貞の前に立ち塞がってわが身を犠牲にする有様であった。
義貞に従っていた中野藤内左衛門が頻りに目配せして、
「千鈞の弩は、鼷鼠のために機を発せずと申しますぞ」
大将たる者つまらない敵にかかずらうべきではない、ことを警告したが、義貞は聞き入れずに、
「兵士を喪って自分だけ免れるのは本意ではない」
そう言うなり敵中に駆け込もうと駿馬に一鞭当てた。
義貞の愛馬は幅一、二丈（三～六メートル）の堀も容易に跳躍できる駿馬であったが、すでに五本ほどの矢を受けて弱っていたので小溝ひとつ越えられず、屏風倒しに燈明寺畷の泥田のなかに転げ落ちてしまった。
義貞は左足が馬の下敷になってしまって起き上がろうと碗いているところへ白羽の矢が飛んできて眉間の真中を射抜かれた。急所を射られて眼も眩み朦朧となった。
いまはこれまでと覚悟した義貞は太刀を抜いて右手に持ち直すとみずから頸を掻き切って深田の泥の中に隠し、その上に俯伏して最期を遂げた。ときに建武五年・延元三年（一三三八）閏七月二日、三十八歳であった。

後日談だが、義貞がみずからの手で深田の中へ隠した頸は結局探し出されて都へ送られ、獄門にかけられた。

そのとき、土塀のかげで泣きくずれている女がいた。義貞が心を奪われ離れ難かったあの勾當内侍であった。

内侍は北陸在陣の義貞からの迎えの使者に伴れられて杣山城へ逢いに行ったが、義貞は足羽城攻めに向かったとのことだったので、あとを追って浅津（福井市）の橋まできたとき出会った部将から義貞の戦死を告げられた。

泣く泣く京へ帰った内侍は、御室の仁和寺（右京区）付近の荒屋にひっそり棲んでいたのだが、義貞の晒頸と対面した獄門の傍で出会った僧に導かれて道場へ行き髪をおろして出家すると、洛西嵯峨の奥の浄土宗の尼寺往生院（現在は祇王寺）で仏道修行に明け暮れたという。

ところがこれにはもうひとつ別の話がのこっている。

義貞の戦死を知って涙ながらに京へ引き返す途中、九月九日夜北陸へ出陣して行く義貞と別れた思い出の地今堅田で琵琶湖に入水自殺してあとを追ったというのだ。

琵琶湖大橋西詰付近の湖畔に内侍の墓があるという。

## 四

新田義貞を斃した足利尊氏は、ひと月後の八月十一日に北朝の光明帝から待望の征夷大将軍に任ぜられた。

三年まえ、北條高時の遺児時行が蜂起して鎌倉を占拠した中先代の乱のとき、征討を命ぜられた尊氏が護良親王のあと成良親王が任じられている征夷大将軍を熱望したが後醍醐帝に征東将軍ではぐらかされてしまった。

遡って、源頼朝も平氏を斃して政権奪取したとき征夷大将軍を切望したが、二條、六條、高倉、安徳、後鳥羽帝の五代に亘り三十年院政を布いて君臨してきた後白河法皇に抑えられて法皇の生涯ついに与えられなかった。

後白河法皇も後醍醐帝も天皇親政を志していたのだから、武家に政権を与えるはずはなかったのである。

だから、頼朝が征夷大将軍になったのは建久三年（一一九二）三月十三日に後白河法皇が六十六歳で歿してから四箇月後の七月十二日であり、尊氏はついに後醍醐帝からは与えられず、光明帝からであったのだ。

それはさておき――。

北畠顯家、新田義貞の股肱の臣を喪い大打撃を受けた後醍醐帝は、地方を固めて頽勢挽回を画策した。

顯家の弟顯信を鎮守府将軍に任じて義良親王を奉戴、顯信の父親房と結城宗廣を副えて陸奥國へ下す。

宗良親王を遠江國に下す。

懐良親王を四國に下して、のちに九洲を統轄させる。

方針を定めて、まず地方からの再生を目論んだ。

そして九月、義良、宗良親王、北畠親房、顯信、結城宗廣の一行は伊勢國大湊を船出して東国へ向かった。

ところが、遠洲灘で暴風雨に遭って四散してしまい、

義良親王、顯信、宗廣は伊勢國へもどされてしまったが、宗良親王は遠江國に着いて井伊氏の居城井伊谷城（浜松市北区引佐町井伊谷）に入り、北畠親房も常陸國に着いて阿波崎城（稲敷市阿波崎）に入った。

親房はその後足利軍に阿波崎城や支城の神宮寺城（稲敷市阿波）を攻められ、陸奥國白川城（白河市）の結城親朝に救援を頼んだがすぐさま応じてはくれなかった。

親朝は宗廣の子であるが日和見を決め込んでいた。

年が明けると吉野朝廷に動きが出た。

三月、義良親王が吉野に帰り、皇太子になった。

六月、後醍醐帝は伊豫國（愛媛県）から九洲を目指す懐良親王に綸旨を下し、九洲全域の経営を委ねた。

その二箇月後の八月九日、後醍醐帝は風邪を拗らせたかのような症状で床に就いたが、祈禱も薬石も効果がなく、死期が迫ったかに見えたので、側近の忠雲僧正が枕辺に寄って涙を抑えながら、

「神路山の花ふたたび開く春を待ち、石清水の流れ澄むべきときあらば、仏神、三宝の加護によってきっとご快癒なされることと思っておりましたが、ご容態がお変わりになったと典薬頭も申しております。もはやいまとなっては天子の位をお棄てになり、仏道に帰依なさるお覚悟をおきめ下さい。最期の一念によって来世において生まれるところも変わると経文にもございます。のちのちのことでお気がかりのことはすべてお言い遺しになり、そのうえで極楽に生まれ変わられることだけをお念じなされますように」

言上した。

話を聴いた後醍醐帝は息も絶え絶えに僧正に伝えた。

「妻子も珍宝も王位もあの世まではついてゆかぬとは如来の教えであり、朕もそう思っておる。だから秦の穆公のように家臣を殉死させたり、始皇帝のように財宝を墓に埋めようなどとは思っていない。だが生まれ変わり死に変わってゆくのちのちまでも朕の妄念となるのは朝敵を悉く滅ぼして四海を太平にしようという思いだ。朕がこの世を去ったあとは義良を天子の位につけ賢臣たちが相談してこれを補佐し、義貞、義助の忠功を賞してその子孫に不義の行いなければ股肱の臣として天下を平げよ。このことを思うがゆえに朕の骨は吉野山の苔の下に埋もれようとも魂魄は常に北方の都の空を睨んでいようと思う。もしこの命令に背けば君もよき後継ぎの君ではなく、臣もまた忠義の臣ではない」

これが後醍醐帝の遺言となった。

そして、後醍醐帝の譲位により十二歳の皇太子義良親王が受禪した翌日、すなわち暦應二年・延元四年（一三三九）八月十六日丑の刻（午前二時）に崩御された。

左手に法華経五の巻、右手に剣を握っていたという。

文保二年（一三一八）二月二十六日、花園帝の譲位により受禪して在位二十年。倒幕と王政復古に執念を燃や

して闘いつづけた帝であった。
遺体は、遺言どおり法体にせず、藏王堂の東北の林の奥に円丘を高く築いて、北向きに葬った。
「天子は南面す」
の仕来りから歴代の天皇は南向きに葬られていたから異常であったが、死してなお現世への執着を露にして、
「魂は常に北方の都の空を睨んでいる」
遺言どおりの埋葬であった。
後醍醐帝の遺言により受禪した義良親王が忌日明けの十月五日に即位して後村上帝となった。
吉野に籠もった人達は落ち延びようとしたところを吉水法印宗信に諌められて思い止まったものの、勢力衰退は明らかで独り北陸路の脇屋義助だけが奮闘していた。

この年の秋、足利軍の高師泰、師冬勢に攻められた北畠親房は、小田城（つくば市筑波）に退いて南朝が正統である由を述べた『神皇正統記』を執筆した。

# 第八話　兄弟相剋

室町幕府は将軍の執事に高師直、副将軍直義とともに鎌倉に配された嫡男義詮を補佐する関東執事に上杉憲顯と高師冬を据えた。

七年後に楠木正成の遺子正行が挙兵したが、高師直軍に攻められ四條畷で戦死した。

その師直と直義の確執が因で兄弟争いが起こり師直、師泰が討たれて和睦したが、尊氏が吉野朝村上帝から〈直義追討〉の綸旨を受けて直義を捕え入牢して病死させた。

関東執事上杉憲顯は越後国に蟄居となった。

## 一

鎌倉幕府の滅亡から後醍醐帝の崩御まで僅か六年、そのあいだに足利尊氏は光明帝を立ててみずからは征夷大将軍となり、京東洞院の自邸に幕府をひらいた。

弟直義が副将軍になったのだが、尊氏の執事高師直がそのまま将軍家の執事となって鎌倉幕府の執権北條得宗家の内管領同様将軍への上申や命令はすべて執事経由とする権力を握り、弟師泰を侍所別當に据えて武士団を統制させることによって恐いものなしとなり、勝手気儘な振る舞いが多くなっていって、それを快よく思わぬ直義とのあいだに溝ができていった。

不安定ながらもいちおう幕府の体裁は整ったのであるが、しかし、吉野朝の抵抗はまだ鎮まっていなかった。

鎮守府将軍の春日顯信が父北畠親房と海路鹿島灘に上陸して小田城（つくば市）に入ったとの報らせに師直の従弟高師冬が駒館（下妻市）を攻略したが、春日顯信に奪回されて師冬は古河城（古河市）まで退却した。

信濃國（長野県）に潜伏していた北條時行が大徳寺城で挙兵したが、小笠原貞宗がこれを攻略した。

また、遠江國井伊谷城を攻められて大平城（浜松市）に退いた宗良親王を仁木義長が攻めて安倍城（静岡市）に逐い、さらに越後國に追放した。

ひとり北陸路で抵抗をつづける新田義貞の弟脇屋義助を、斯波高經らの幕府軍が攻め立ててついに掃討した。

こうして吉野朝側の鎮圧がすすんで幕府の権威が高まってゆくと、要職のあいだに驕りが蔓延していった。

派手好みの風俗を好む婆娑羅大名の佐々木高氏（道譽）は、ある日鷹狩りの帰途東山の妙法院を通り掛かったと

きに境内の紅葉があまりに見事だったので供侍にひと枝折らせたところ、宿直の荒法師に見咎められて枝を取り上げられ殴打されて門外に放り出されてしまった。

腹に据え兼ねた高氏は、その夜手勢三百を引き連れて妙法院を焼き打ち重宝を奪う乱暴をはたらいた。

妙法院は比叡山延暦寺の一院であった。

怒った延暦寺は神輿を担ぎ出して幕府に強訴した。

延暦寺は延暦七年（七八八）に最澄が建立したとき唯一元号を寺号に使用することを許された格式ある寺であって、たとえ幕府であっても訴えを退けることはできず、直義は高氏父子を上總國（千葉県）へ流罪に処した。

だが、じつは高氏父子は配所ではなく伊吹山（米原市）の居城へ帰ったのであった。

そのことは尊氏自身承知していた。佐々木高氏が流罪を甘んじて受けたのは将軍尊氏の顔を立てるための演技にすぎなかったのである。

なかでももっとも悪行のひどいのは高師直であった。

金ヶ崎城、青野原、奈良、堺浦など諸戦の勝利に驕って奢侈を極め、女色に溺れる有様であった。

師直は、上洛してきた出雲守護鹽冶判官高貞に同行した絶世の美人の内室に一目惚れして執拗に迫ったので、困り果てた高貞は突然内室を伴れて帰国してしまった。

この高貞の行動を、恋の怨みで怒り心頭に発した師直は、私的感情を公的法度に擦り替えて、

「鹽冶高貞出奔」

と断定して追討に向かわせた。これを知った高貞は居城の大廻城（出雲市上塩冶町）で自害してしまった。

この話は歌舞伎の『假名手本忠臣藏』に出てくる。

この芝居は寛延元年（一七四八）八月に大坂竹本座で初演されたとあるから赤穂浪士吉良邸討入りの四十六年後であるが、幕府の干渉があって実名で上演できないため、『太平記』の世界に仮託して書かれた作品である。

したがって登場人物を室町時代に置き換えて淺野内匠頭長矩を鹽冶判官高貞に、吉良上野介義央を高師直に、大石内藏助を大星由良介にしたことは周知の事実である。

人は競争相手を斃して頂点に立ち権力の座を掴むと箍が緩んで横暴になり、傍若無人な振る舞いが多くなっていってやがては制裁を受け失脚してしまうものらしい。

驕る平家を撃破して都落ちさせた功により征夷大將軍に任じられた信濃國木曽の源義仲がそうであった。

高師直・師泰兄弟もやがてその轍を踏むことになる。

それはさておき――。

佐々木高氏事件のとき幕府に対して毅然とした態度をとった延暦寺は、朝廷への応対も我意を押し通した。

夢窓疎石（國師）の勧めで後醍醐帝の怨霊を鎮めるため、離宮のあった亀山院の仙洞（御所）だった嵯峨の亀山院の跡に一寺を建立して霊亀山暦應資聖寺としたが、

元号を寺号にしたことで延暦寺の強硬な反対に遭って、光嚴院はやむなく寺号だけを天龍寺と改めた。

そんな悶着ぐらいで洛中はいちおう治まっていたが、地方では相変わらず吉野朝方との抗争がつづいていた。

常陸國を掃討中の高師直の従弟師冬に北畠親房らを匿っていた小田城の小田治久が内通したため、親房は關宗祐を頼って關城（筑西市）に、春日顯時は宗良親王の第一皇子興良親王を奉じて大寶城（下妻市）に移った。

このころ幕府は、武藏守護高師冬と上野、相模守護上杉憲顯に成良親王を奉じた副将軍足利直義とともに鎌倉にいる尊氏の嫡男義詮を補佐する関東執事を命じた。

このころから上杉一族が台頭してくる。

高師冬が常陸國の吉野朝勢力撲滅に奔走しているところから、直義はもう一人の執事上杉憲顯に越後國で蜂起した新田一族の残党討伐を命じた。

憲顯は、白井城（渋川市）において上野國の経営を委せている家宰で守護代の長尾景忠とともに出陣した。

長尾氏は坂東平氏鎌倉権五郎景正の裔で、治承四年（一一八〇）源頼朝蹶起のとき同族大庭景親とともに戦って敗れ、三浦義澄預けとなって被官したが、その三浦氏が寶治元年（一二四七）六月執権北條時頼によって一族滅亡したとき長尾景茂も自害して所領を没収された。

その後長尾氏は歴史の表舞台から消えていたが、浪々の身であった景爲が上杉憲顯に拾われて執事になった。

景爲は嫡男景忠とともに新田の残党狩りに出陣した。

小田治久の寝返りで小田城を逐われ關城と大寶城にわかれてしまった北畠親房、春日顯時父子は、高師冬軍と小笠原貞宗軍に遠巻きされていて陸路で連絡がとれぬため、夜陰に舟で鬼怒川を往来して安否を確かめ合った。

孤立しながらも情報を交換し合って耐えた父子であったが、やがて舟も通えなくなり、小舟で一人二人の行き来になってしまい、なんとも心細い限りであった。

そんなところへ、吉野朝軍が一縷の希望を抱いていた新田義貞の弟脇屋義助が伊豫國（愛媛県）で病に罹り三十六年の生涯を閉じた、という報らせが届いて落胆させられたが、それでも両城は勇を鼓して守りつづけた。

小笠原軍を退けて關城の關宗祐軍と合流した大寶城の春日顯時は、結城城（結城市）の結城直朝を討ったので、白河城（白河市）の結城親朝は尊氏に通じた。

こうした足掻きが却って情況を悪化させてしまい、ついに關、大寶両城は陥落して北畠親房は吉野へ逃れた。

高師冬が常陸戦線を終結させて帰ってくると、越後國の新田残党を討伐した上杉憲顯も相次いで帰ってきた。

のちに、上杉憲顯は越後守護をも兼ねることになる。

## 二

尊氏、直義兄弟は夢窓疎石に勧められて元弘以来の戦死者の霊を弔う追善と国家安穏の祈禱場として全国六十

六箇国と二島に設置した寺を光厳院に奏請し、院宣によって寺号を安國寺、塔を利生塔と名付けた。

そのあとで光厳院は、天龍寺の供養に臨幸しようとしたが、延暦寺衆徒が反対して強訴に及んだので中止し、半月後に尊氏、直義らが臨席した翌日臨幸した。

話は遡るが、在位十四年で譲位のあと堀河、鳥羽、崇徳帝の三代に亘り四十三年間初の院政を布いた白河院は〈治天の君〉とよばれた専制君主であったが、その白河院にして意の儘にならぬものが三つあると嘆かせたのが、賀茂川の水と、双六の賽と、山法師なのだが、その山法師こそ比叡山延暦寺の衆徒であったのだ。

その延暦寺衆徒の強訴によって白河院の近臣や地方長官（守）などが流罪になっている。

つまり、延暦寺は藤原家による摂関政治のむかしから天下を睥睨する顕然たる勢力を保持していたのである。

幕府と延暦寺が揉めているあいだに、貞和三年、正平二年（一三四七）七月、二十二歳に成人した楠木正成の遺子正行が挙兵し、北畠親房、四條隆資らと連絡をとって河内國東條城（富田林市龍泉）に本営をおいた。

そして、正行はすぐさま行動を起こし、和泉國の和田氏らの軍とともに紀伊國に入ると隅田城を急襲した。

この報が四囲に伝わると、紀伊、熊野、和泉、攝津など近隣諸国の吉野朝方豪族たちが呼応して蹶起し、八尾城（八尾市）などを攻め陥とした。

幕府は慌てて河内、和泉守護の細川顯氏を差し向けたが、藤井寺付近で楠木軍に奇襲され敗れてしまった。

幕府はあらためて細川顯氏に山名時氏を副えて再出陣させたが、またも住吉や天王寺付近で敗れてしまった。

このとき、退却する幕府軍が渡邊橋で押し合い圧し合いになって川に落ち多くの溺死者が出たが、情ある武将の正行が救出を命じて引き上げさせると傷の手当をしてやり、小袖や物具まで与えて送り返してやった。

その恩情に感じ入った五百余名は以後楠木軍に加わって正行に尽くし、ともに戦死した者が多かったという。

たびかさなる敗報に慌てた尊氏、直義は、高師直を大将に弟師泰を副将にして東海、東山、両国の兵八万を動員して一挙に楠木勢を潰滅すべく、十二月十四日に師泰が先発隊として淀に出陣、翌日師直が八幡に着陣した。

この大軍の南下をきいた正行は、三千の兵ではとても勝ち目がないから父正成が用いた遊撃戦法よりほかにないと断固決意し、弟正時と一族郎党百四十三人を引き連れて二十七日に吉野に参上して軍議を申し入れた。

だが、正行の秘策は北畠親房や洞院實世に反対されて容れられなかった。父正成のときとおなじであった。

正行は、父正成同様討ち死にを覚悟して四條隆資を通じて後村上帝に今上の御暇乞いを願い出て許された。

強硬派の洞院實世に、帝のご意志は、

「なにを躊躇いたしておる。断固出撃せよ」

であると告げられていたのだが直々のお詞は違った。
後村上帝は正行に対して、
「正行。朕はそなたたちを股肱の臣と恃みおるぞ。こたびの合戦は慎重に行動して生命を全うするように」
そう仰せられたのだ。
正行は感涙に咽び、遙かに竜顔を拝すと再び平伏した。
そして、これが最後の参内だと心に決めて退出した。
正行は正時、和田兄弟をはじめ一族郎党百四十三人を前にして、
「今度の戦は一足を退かず一所にて討ち死にいたそう」
そう誓い合うと、打ち揃って後醍醐先帝の御廟塔尾陵（奈良県吉野郡吉野町吉野山）に詣でて暇乞いをし、近くにある先帝木像安置の如意輪堂に立ち寄り縁に上がって祈願したあと、壁板を過去帳がわりにして鏃で銘々の姓名を書き連ね、最後に正行が辞世の歌として、

返らじとかねて思へば梓弓
なき数にいる名をぞとどむる

と書きとどめた。
さらに、逆修のためぞといわれてそれぞれが鬢髪を切って仏殿に投げ入れると、その日のうちに高師直・師泰の幕府軍が布陣している攝津國（大阪府）へ向かった。
というのだが、後醍醐先帝の木像安置の御堂の壁板に連名や辞世の歌などの落書きや、鬢髪を投げ入れることなどできるはずはなく、『太平記』の創作であろう。
なお、辞世の歌のほうは扉に書かれたものが遺っているというのだが、はたして正行の直筆であろうか。
それはともかくとして――。
翌貞和四年、正平三年（一三四八）正月二日、吉野朝側は高師直・師泰兄弟の大軍を迎え撃つために四條隆資を総大将にして北河内の要衝飯盛山（大阪府大東市北條）と四條畷（大阪府四條畷市南野）を防衛線に考えた。
この日、幕府側は高師泰二万騎が淀を出発して正行軍より早く生駒、飯盛の両高地に着陣し、翌三日に高師直六万騎が八幡を出発して四條（四条畷市）に着陣した。
吉野参内で遅れをとってしまった正行は、生駒山の西麓往生院（東大阪市六万寺町）に布陣したが、衆寡敵せずで所詮かなわぬところから師直の首級だけを狙った。
だが、いざ戦端が開かれてみるとはじめから守勢に立たされてしまって思うにまかせず、それでも一瞬の隙を衝いて本陣まで肉迫できた好機に師直を討ち取ったのだがそれは師直ではなく身代わりになった上山六郎左衛門だったので、結局は討ち漏らしてしまった。
幕府軍は兵力において格段に優勢であり、しかも逸早く有利な高地に布陣して待機していたのであるから、遅れたために平地に布陣せざるを得なくなった正行軍ははじめから不利な戦いを強いられてしまったのである。
「大軍を破るには一気に雌雄を決する突撃戦しかない」
正行は互角に戦えると自負した秘策を北畠親房と洞院

實世に拒まれたのでやむなく無策の突撃を繰り返した。
馬は矢を受けて倒れてしまい、全員徒歩で一団となって突撃して行ったが、隙間なく並んだ射手の矢衾を受けてつぎつぎに斃れ、弟正時も眉間と喉笛を射られた。
正行も左右の膝口三箇所と右の頬先、左の眼尻に矢を受けた。
「もはやわがこと終われり。敵の手にかかるまいぞ」
そう叫ぶと弟正時を伴って近くの松原に入り、刺し違えて自刃した。このとき正行は、二十三歳であった。
最後まで残った家臣三十余名も全員切腹して果てた。
四條畷の楠木軍は僅か一日で玉砕してしまったのだ。
この正行の死も、父正成と同様戦術を受け入れられずに負け戦を承知で死に急いでしまった感は否めない。
この合戦で主力を失った吉野朝側は、余勢を駆る高師直に吉野行宮と藏王堂を焼き払われてしまい、後村上帝は吉野の奥賀名生（五條市西吉野町）に落ち延びた。
このとき、正行の末弟正儀は留守軍を率いて赤坂城に近い兄正行が挙兵した東條城にいた。この城は嶽山山頂にあったので嶽山城ともまた龍泉寺城ともいった。
十四日、高師泰軍が攻めてきた。
地の利を得ている正儀軍は、小勢であちこちに出没して遊撃戦を繰り返し、幕府軍を翻弄して疲れさせた。
狭隘な山地戦では大軍をもっての力づくでは埒が明かぬと見た師直は、師泰に東條城攻めを一時中止させた。
その後の楠木正儀については、直義と吉野朝の和議を斡旋したり、吉野朝と幕府の和議を計って失敗したり、幕府側に降って吉野朝の行宮河内國天野山金剛寺（大阪府河内長野市天野町）を攻めたり、再び吉野朝に帰参したりしているが、そのあとは杳として消息を絶ってしまっている。謎の多い行動を繰り返した人物である。

## 三

足利尊氏を天下人にした最大の功労者と自負している高師直は、直義の後塵を拝することを潔しとせず悶々としていたが、楠木正成の遺子正行・正時兄弟を斃したことで名声が高まりますます高慢と専横が募っていった。
吉野の行宮を焼き払ったことはあきらかに師直の暴虐であったが、その行為を咎められることはなかった。
副将軍直義は、官僚派の上杉重能や畠山直宗からたびたび武断派高一族の横暴を聴いていて心よく思っていなかったところへ、信頼する一条堀川の大休寺住職妙吉からの讒言もあって高兄弟打倒にかたむいていった。
貞和五年、正平四年（一三四九）四月、養子の直冬を長門探題（山口県）として備後國鞆（福山市鞆町）へ赴任させた。中国地方のおさえに先手を打ったのである。
直冬は尊氏の最初の子であったが、若いころ越前局という女性と一夜の契りで産まれた子だったため半信半疑で認知しなかったのを直義が尊氏を説得して渋々認めさ

せたもののなお疎外しつづけたので不憫に思った直義が自分に子のないところから養子にして救ったのである。
この年、直義と高兄弟の不和が表面化してきた。
直義は師直誅殺を企てたが事前に漏れてしまい、師直に先手を打たれて屋敷を囲まれる事態が起きてしまった。
尊氏は、騒擾を起こした張本人師直の執事職を罷免して、甥の師世（師泰の子）を任命した。
両成敗でも承服できぬのに一方的に処罰されたことで肚の虫がおさまらぬ師直は、怨みを晴らすべく直義襲撃を謀ったがこれまた事前に漏れてしまい、直義は三條坊門の自邸から東洞院の尊氏邸に避難してしまった。
このころの密議はほとんどが事前に漏れている。逸早く相手方に注進して手柄にする者が多かったのだ。
師直は直義を追って尊氏邸を包囲した。
尊氏は主人に矢を向ける師直に激怒したが、不意のことで手勢が揃わず、討って出ることができなかった。
師直のほうも尊氏に謀叛するつもりはなく、直義を懲らしめ側近の上杉重能、畠山直宗と禅僧妙吉の捕縛が目的だったので、双方動けず対峙したままであった。
業を煮やした尊氏は兵を集めて師直を斃そうと図ったが、直義に宥められて双方の仲介役をかって出た。
直義は、身を退くことで対立をおさめようとして、副将軍の地位を尊氏の嫡男義詮に譲ることとした。
だが、師直は三人の引き渡しをも要求してきた。
直義は、三人を流罪にして逃れさせようとした。
結局、直義・師直和睦の条件は、直義引退のほか、
○上杉重能、畠山直宗を越前へ流罪。
○師直がふたたび執事に返り咲く。
の三条件でけりがついた。
このとき、僧妙吉はすでに逐電してしまっていた。
越前國江守荘（福井市）へ流された上杉重能と畠山直宗だったが、師直の執念は物凄く、上杉重能は刺客によって誅殺され、畠山直宗は自害して果てた。
この騒動のあと尊氏は二男基氏を鎌倉公方に任じて下向させ、師直の従弟師冬を執事に命ずると鎌倉にいる嫡男義詮を京に呼び戻して直義のあとの副将軍に据えた。
無役となった直義は、引退して同族細川顯氏の屋敷に移り、剃髪して出家すると慧源と号した。
ここまで粛清した師直だったがまだ一人残っていた。
直義の養子になった尊氏の庶子直冬である。
直義を排斥したことで叛旗を翻すかも知れなかった。
師直は、備後近国の地頭たちに直冬討伐を命じた。
長門探題といっても小兵力しか持たぬ直冬は、ひとたまりもなく鞆を逐われて肥後国（熊本県）へ落ちた。
ここで直冬は少貳頼尚に支えられ、婿に迎えられて後ろ盾を得たことで、強大な勢力になっていく。
そして、ほどなく尊氏・師直打倒の兵を挙げた。

直冬の父尊氏と高師直に対する竹篦返しである。
その報が京に届くと、尊氏は師直に、
「誰を差し向けたらよいか」
相談した。師直は、
「ここは諸将への見せしめのためご自身のご出馬がよろしかろうと存じます。それがしも御供仕りまする」
師直は自分に向けられた矛先を逸らせて、尊氏・直冬父子の抗争に擦り替えようと謀ったのである。

三

観應元年、正平五年（一三五〇）十月二十八日、尊氏は高師直らの直冬追討軍を率いて京を出発していった。
このころ直義は、密かに細川顯氏の屋敷を出て大和國（奈良県）の越智伊賀守を頼って身を寄せていたが、師直の不在を知って京を奪取しようにもここは吉野朝の勢力範囲にあるので迂闊に動きがとれなかった。
直義は越智の警護で同族畠山國清の河内國石川城（大阪府南河内郡河南町）に入り、越智の仲介で近くの東條城にいる楠木正儀の斡旋を受けて吉野朝に降った。
このとき吉野朝側では直義の帰順に異議が沸騰した。
側近の北畠親房が、
「これを逆手にとって幕府の内部攪乱を狙えばよい」
そう建議して許された。なかなかの謀臣である。
親房は、さっそく直義に、後村上帝の、
〈尊氏討伐の綸旨〉
を与えた。
この報が京に届くと、果たして幕府内は大混乱に陥った。
直義の挙兵に応じたのは畠山國清、細川顯氏、石塔頼房、桃井直常らの直義党をはじめ、吉野朝側の和田、楠木の一族らが馳せ参じた。
遠く関東でも鎌倉の関東執事上杉憲顯が上野國（群馬県）へもどって居城の平井城（藤岡市）で兵を挙げ、三男能憲も常陸國（茨城県）で挙兵した。
もう一人の関東執事高師冬が尊氏の二男鎌倉公方足利基氏を奉じて上杉憲顯攻めに向かったが、甲斐國（山梨県）で須澤城（南アルプス市）の上杉憲將（憲顯嫡男）に行く手を阻まれ、乱戦のなかで公方の近臣に基氏を奪われてしまい、合戦にも敗れて自害してしまった。
直義は、石川城の畠山國清とともに攝津國天王寺（大阪市）にすすみ、ここに多くの直義党が集結した。
尊氏が出陣したあとの留守居をしていた嫡男義詮は、京へ進攻してくる直義軍を迎え撃つ術もないままに光厳院と光明帝を置き去りにして急報を受けて攝津國瀬河あたりまで引き返してきているはずの尊氏の許へ奔った。
明けて正月七日、直義軍は八幡に入った。石清水八幡宮のあることで八幡といった男山城のことである。
尊氏軍が京に入ったところを直義に呼応した越中守護

の桃井直常軍が比叡山麓の東坂本から攻め込んだ。
高師直・師泰軍が迎え撃って有利に戦ったが、翌日直義に応じた小笠原政長、山名時氏らの加勢で敗れ、尊氏・義詮らは丹波路をとって播磨國（兵庫県）へ逃れた。
この間に上杉能憲が関東の兵を率いて西上し、東北では吉良貞家が直義に応じ陸奥國岩切城（仙台市）の畠山高國・國氏父子を攻略して高國を討ち死にさせた。
尊氏は攝津國打出濱（神戸市）でも敗北を喫したので、
「わが命運も今宵限り、面々覚悟せよ」
そう言って自害を決意した。
高師直・師泰兄弟も尊氏に倣い鎧、直垂をとって最後の酒宴になったところへ饗庭命鶴丸が駆け付けてきて、
「和睦です。もう合戦はありません。早まり召されるな」
そう叫ぶと、昨夜密かに畠山國清の陣に忍び入って直義のほうも和睦を希んでいること、師直兄弟を誅殺とまでは考えていないことを聞きつけたと言うのである。
それを聴いた尊氏は直義の本営八幡に使者を送った。
こうして師直兄弟を出家させることで和議が整った。
師直は猶子にした従弟の師冬を頼みにしていたのだが、上杉憲顯討伐に出陣した途次甲斐國で憲顯の嫡男憲將に阻まれ自害したことを知って落胆していたところへ、このたびの敗戦和議の恥辱が重なり完全に意気阻喪してしまっていたので未練はさらさらなく、承諾すると弟師泰とともに髪を剃って出家し、道常、通勝となった。
菩提心ではなく、只管生きたい二人の様子に人々は、
「出家の功徳は大きいから後世の罪は免れるだろうが、今生の命は助かるまいよ」
そう言って嘲笑した。
二月二十六日、尊氏率いる軍団は春雨煙るなかを直義の待つ都へ向かってすすんでいった。
同道する師直・師泰兄弟は雨をさいわい蓮の葉を笠代わりにしてすっぽり冠り、法衣の袖で顔を隠して僧侶のなかに紛れ込み、それでもなお不安は拭い切れずに尊氏のそばを離れないようにぴったりと馬をつけて進んだ。
「お屋形様のそばを離れたら殺される」
そう一途に思い込み尊氏の後に確り従いてきた師直・師泰であったが、その甲斐もなく途中百騎、五十騎と待ち受けている上杉、畠山の軍勢に目敏く見つけられて尊氏との間に割込まれ、だんだん引き離されてしまった。
現在の兵庫県西宮市と尼崎市の境を流れる武庫川のあたりまでできたときには、尊氏と師直のあいだは川を隔て山を挟んで五十町ほども離れてしまっていた。
師直が天下の執事だったころにはどんな大名高家もその笑顔を見れば多額の禄を得て大身に出世したように喜び、すこしでも不機嫌な顔を見ると薪を背負って火の燃え盛る野原を行くような気がして恐れ戦いたものだった。
まして将軍と並んで馬を進めているときなど誰が間に

割って入り、師直の先に立つことができたであろう。
なのにいまは、無名の武士らに将軍との間を隔てられ、先を行く馬の蹄に溜り水を跳ねかけられて衣服も泥塗れになる始末にて、わが身の不運が胸に応え、おりからの春雨が惨めさに涙するように師直の袖を濡らした。
師直兄弟が武庫川を渡り、堤の上を過ぎようとしたとき、三浦八郎左衛門の従者二人が走り寄ってきて、
「そこの出家、顔を隠しているのは何者だ。笠をとれ」
そう声をかけると、師直たちの冠っている蓮の葉の笠を引き千切って捨てたので師直の顔が半分ほど見えた。
「おお、願ってもないさいわいじゃ」
馬上の三浦は喜び長刀で胴を真二つにと右肩先から左脇へ斬り下げた。師直があっと叫ぶところをすかさず二度まで斬りつけて馬から落とすと三浦も素早く飛び降りて首を掻き切り、長刀の先に刺して高々と差し上げた。
師泰は慌てて逃げるところを吉江小四郎に槍で突き刺され、刀を抜く間もなく吉江の従者に首を取られた。
このとき師直の手勢は抵抗せずに四散してしまった。
師直・師泰兄弟の呆気ない惨めな最期であった。
上杉能憲と畠山直泰は、見事父親の仇を討った。

## 四

尊氏は攝津から、直義は八幡から、そして尊氏の嫡男義詮は丹波からそれぞれ帰洛して一堂に会した。
高師直・師泰兄弟が討たれた翌日のことであった。
師直兄弟によって仲を裂かれていた尊氏・直義であったから、因が絶たれ和議が整ったからにはめでたしめでたしになるはずなのであるがそうはいかず、直義党の上杉、石塔、桃井らと尊氏党の仁木、細川、土岐、佐々木らとのあいだの蟠りが溶解せず咥み合いがつづいた。
そのうちにどうしたことか、尊氏党の諸将がまるで示し合わせたようにそれぞれの領国へ下りはじめた。仁木頼章が攝津、弟義長が伊勢、細川頼春が讃岐、佐々木高氏（道譽）が近江、赤松則祐が播磨の国々へである。
直義は、いかに兄弟宥和したとはいえ、尊氏があまりにも無防備な解隊をしてしまったことを訝しんだ。
はたして尊氏は、まもなく佐々木高氏討伐だといって近江國石山寺（大津市）へ出陣して行くと、つづいて嫡男義詮が赤松則祐を討伐に播磨國へ出陣していった。
帰国させた諸将をすぐに討つというのはおかしい。
「これはわれらを挟撃するための擬装ではないか」
そう悟った直義は、素早く京を脱出して大原路から若狭國に至り斯波高經の金が崎城（敦賀市）に入った。
報らせを受けて京へ戻った尊氏は、細川顯氏を金が崎城へ遣わして和議を申し入れたが、直義は信用せず、却って細川顯氏を掌中に取り込み寝返らせてしまった。
尊氏と直義は互いに和睦しようと考えて近江國興福寺で会談したが、一抹の不安が払拭できずに不調に終わっ

てしまい、このことが決定的な破局を迎えてしまう。
腹背に敵の不利を悟った尊氏は、臆面もなく吉野朝に和議を申し入れて降った。幕府の将軍が吉野朝を正統と認めたことで崇行帝と皇太弟の直仁親王は廃された。
こうしておいて尊氏は、吉野朝後村上帝から、
〈足利直義追討〉
の綸旨を受けると、大軍を率いて関東へ出陣した。
駿河國の薩埵峠、蒲原、伊豆國府、相模國の足柄峠と勝ち進んで鎌倉に入った尊氏は直義に降服を求めた。
いまはこれまでと和議に応じた直義だったが、牢屋のような廃屋へ閉じ込められて見張りをつけられる有様で、なんとも惨めで歎かわしい限りであった。
直義はそれから一箇月半後の觀應三年、正平七年（一三五二）二月二十六日に病死した。四十六歳であった。
死因は黄疸と発表されたが、実は毒殺だったという。
毒鳥の羽を酒に浸す鴆毒を盛られたのだと噂された。
奇しくもこの日は、一年まえに攝津國武庫川堤で斬殺された高師直・師泰兄弟の詳月命日であった。
関東執事上杉憲顯は所領没収越後國へ蟄居となった。

# 第九話　好機到来

出没を繰り返していた北條高時の遺子時行をついに捕えた尊氏は鎌倉龍ノ口で斬首した。鎌倉の基氏の補佐には畠山國清を据えた。

尊氏が悪性腫瘍に罹り五十四歳で逝去すると二代将軍義詮は國清失脚のあと父尊氏の兄弟相剋のとき弟直義側にいて越後へ蟄居させられた外戚の伯父上杉憲顯を関東管領に迎えて公方基氏の抑えに据えた。

憲顯が鎌倉山内に邸を構えたので兄弟らは犬懸、宅間、扇谷にわかれて蟠踞した。

## 一

足利尊氏が片腕とも恃む弟直義を毒殺したのは、わが身亡きあとの将軍義詮と鎌倉公方基氏の安泰を希っての親心からなのではあろうが、太古以来いつの世も、

（両頭並び立たず）

で権力争いの凄まじさは、頼朝・義經もそうであったようにたとえ兄弟と雖も例外ではなかったのである。

だから尊氏は、弟直義と庶子直冬を斃さなければせっかく築き上げた足利政権が不安でならなかったのだ。

この権力争いは政権内部においても留まるところを知らず、高師直が直義党の重臣上杉重能と畠山直宗を斃せば、直義が上杉能憲と畠山直泰に命じて高師直・師泰兄弟を斃し父の仇を討たせた。そしてその直義が兄尊氏に斃されてけりはついたものの弱体化は否めなかった。

事実、幕府方が兄弟争いをしているあいだに、吉野朝方は勢力を盛り返して活発な行動を開始していた。

新田義貞の二男義興と三男義宗らが征夷大將軍宗良親王を奉じ八百の手勢で鎌倉を攻めてきた。直義の怪死で混乱していた幕府方は体勢を立て直すため尊氏を庇って石濱へ退いたので、新田軍は難なく鎌倉へ入った。

戦力を整えた幕府軍は、武藏國人見原（府中市）、金井原（小金井市）で義興軍を破ったので、義興、北條時行らは鎌倉を捨てて三浦半島の先端まで退いた。

宗良親王を奉じた義宗らもおなじ武藏國の小手指原（所沢市）、高麗原（日高市）、笛吹峠（比企・入間郡境）などで敗れて越後國の上杉憲顯を頼って敗走した。

かくして尊氏は、ひと月足らずで鎌倉を回復した。

いっぽう京では、北畠親房の四男顯能が楠木正儀ら

と京へ攻め入ったので、義詮はいったん近江國へ退いた。
顯能は京に残された光嚴・光明・崇光三上皇と花園院の皇子直仁親王を八幡に迎え、そのあと東條へ移した。
まもなく、義詮の幕府軍が盛り返してきたので顯能は八幡に退いて宇治（宇治市）、山崎（京都府乙訓郡大山崎町）あたりで合戦になったが、八幡が陥落して四條隆資らが戦死したので後村上帝は賀名生へ戻っていった。
吉野朝側は、東條に匿った持明院統の上皇、親王も賀名生へ移したので、期せずして両統は一堂に会した。
このことによって都に帝がいないという事態になってしまったので、京を回復した義詮は持明院統の再興を図り光嚴院の第二皇子弥仁親王を擁立して親王宣下もないまま践祚させて四代後光嚴帝とした。
九州で少貳氏の庇護を受けていた尊氏の庶子直冬は、長門國豊田城で幕府軍に敗れ、吉野朝に帰順した。
明けて文和二年・正平八年（一三五三）五月二十日、出没を繰り返していた北條時行がついに追捕され、鎌倉龍ノ口（藤沢市片瀬）で斬首された。
建武二年（一三三五）七月、庇護されていた諏訪頼重に担がれて越中國に潜伏の同族名越時兼と連繋して諸国の与党を糾合蹶起してから十八年、二十四歳であった。
北條の残党を潰滅した尊氏は、直義の死後鎌倉に残った同族畠山國清を関東管領に据えて基氏を補佐させた。
同時に尊氏は、直義派を徹底排除してその勢力を一掃し、関東を束ねる組織としての鎌倉府を自立させた。
さらに尊氏は公方基氏を武藏國入間川（埼玉県狭山市）に在陣させて、越後國の上杉憲顯の許に潜んでいる新田義貞の遺児義興、義宗兄弟に備えさせた。
こうして、尊氏が着々と関東の地固めをしているあいだに、またまた京では吉野朝軍が動き出していた。
天下統一のため東奔西走することは已むなく、手薄の留守を狙われるのはこれまた致し方ないことであった。
京に迫った吉野朝軍との衝突を回避するため、義詮は後光嚴帝を延暦寺に遷座させておいて自身は近江國坂本に逃れ、さらに帝を奉じて美濃國小島に逃れた。
吉野朝軍に京を奪取された報らせを受けた尊氏は直ちに軍勢を率いて西上し、美濃國に入ったところで義詮軍と合流すると後光嚴帝を奉じてすぐに京へ攻め入った。
こんどは吉野朝軍が支え切れずに京を捨て、楠木正儀が河内國へ、山名時氏が但馬國（兵庫県北部）へ退いたので、尊氏・義詮父子は後光嚴帝を奉じて入京した。
このころ、宗良親王を奉じた新田義宗らも幕府軍に小國澤城（長岡市小国町）を陥とされて下越後へ退いた。
翌文和三年・正平九年（一三五四）三月、吉野朝方は光嚴、光明、崇光院を河内國金剛寺に移した。
翌月、後醍醐先帝以来吉野朝を支えてきた北畠親房が六十二歳で歿したので中心を喪った家臣団は動揺した。
山名時氏はすぐさま石見國（島根県西部）あたりを

流離っていた直冬を総大将に迎えて結束を固めた。
北畠親房の訃報を受けて沈滞していた下越後の新田義宗らは、尊氏の庶子直冬が吉野朝側に寝返ったことに勢いづいて、加治城（新発田市）などを果敢に攻めた。
さらに足利直冬を担いだ桃井直常らは京を攻めて、後光厳帝を奉じた尊氏を近江國（滋賀県）に逐った。
そして、桃井直常ら吉野朝軍が入京するとつづいて山名時氏らが後村上帝から尊氏・義詮討伐の宣旨を受けて総追捕使となった足利直冬を奉じて入京してきた。
こうして吉野朝軍が京を完全占拠したかにみえたのだが、幕府軍の勢威は決して衰退したのではなかった。
いったん攝津國（兵庫県東部・大阪府北部）へ退いていた義詮軍が神南（高槻市）で吉野朝軍を破った勢いで京へ攻め込み奪還すると後光厳帝を御所に迎えた。
いっぽう越後で逼塞していた上杉憲顯の嫡男憲將が挙兵して幕府方の風間長頼を破ると、信濃國高井郡（長野県北東部）に侵入して迎え撃つ幕府軍を破った。
翌年、幕府が奉戴している持明院統の光厳、光明、崇光院と花園院の皇子直仁親王が賀名生の奥の行在所から京に戻った。光厳院はすでに出家して法名勝光智となっていたが、還京後光明院もあとを追って出家した。
吉野朝の大覚寺統後村上帝のほうは京に還れぬまま河内國（大阪府東部）の金剛寺から觀心寺に移された。
その翌年、延文三年・正平十三年（一三五八）四月三十日尊氏は悪性腫瘍で世を去った。五十四歳であった。
いまだ一天二君の決着ならず、無念だったであろう。
遺体は衣笠山麓の等持院（京都市北区）に葬られた。
葬礼は天龍寺龍山和尚、南禅寺平田和尚以下の高僧がつとめ、後光厳帝から〈従一位左大臣〉を追贈された。
これで両統対立の主役北畠親房と足利尊氏が二人とも混乱の結末をつけぬまま世を去ってしまったのである。
八月十一日、下野國鑁阿寺（栃木県足利市）において尊氏百日忌の曼荼羅供法会が執りおこなわれた。
その二箇月後の十月十日、関東を転戦していた吉野朝方の新田義興が鎌倉へ進攻の途中、関東管領畠山國清の被官竹澤右京亮に謀られて武蔵國矢口渡で同船した江戸遠江守高良に舟底に孔をあけられて進退谷まり、自刃して果てた。二十八歳であった。
この話は明和七年（一七七〇）に平賀源内が福内鬼外の筆名で『神霊矢口渡』という戯曲に書いたことで有名になった。現在も歌舞伎でたびたび上演されている。
ところでこの多摩川の矢口渡しは東京に二箇所ある。
ひとつは稲城市矢野口で、ＪＲ南武線矢野口駅近くの多摩川原橋袂にあった。
もうひとつは大田区東矢口一丁目で、東急線矢口渡駅近くの多摩川河川敷にあって近くに新田義興の霊を祀った新田神社があり、社殿の後ろの円丘は義興の墓だといわれていて、大田区説のほうが有力になっている。

## 二

尊氏の百日忌供養をおえた四箇月後の十二月八日に、嫡男義詮が二十九歳で征夷大將軍になった。

一天二君をいただくという両統対立の乱世がつづいたまま、幕府は二代將軍の新しい時代を迎えた。

義詮は、自分が將軍の座に就いてはじめて鎌倉公方の弟基氏の存在が気になってきた。

父尊氏が將軍のときは、自分もそうであったようにおなじ子として基氏も素直に従えたであろう。

だが、將軍が父ではなく兄となった場合、父のときとおなじようになんの蟠(わだかま)りもなく従属できるであろうか。

義詮はそんなことに思いを巡らせているうちに、いつかそれが弟基氏に対する疑心暗鬼に陥っていった。

基氏への不信をうっかり側近に漏らしたことが、やがて尾鰭がついて鎌倉にまで伝わってしまった。

おどろいた基氏は兄の疑念を晴らすために大軍を率いて上洛し、幕府軍に協力して忠誠を尽くそうと考えた。

基氏の無念の思いに同情した管領畠山國清は、自ら軍勢を率いて上洛し將軍の心の曇りを晴らすことにした。

國清は、このとき強引に周辺諸国の武将たちを動員し、武藏、伊豆、駿河、三河、遠江など二十万の大軍団を率いて上洛し、將軍義詮に二心なきことを誓うと幕府軍の一翼を担い先鋒隊となっておおいに活躍した。

國清はまず金剛寺の行宮に大攻勢をかけて焼き払ったのをはじめ、紀伊國(きいのくに)（和歌山県）まで侵攻して吉野朝方の有田、湯浅、石垣（有田郡）の各城を陥とした。

そのころ吉野朝に〈將軍の宮〉と称ばれる人物がいた。赤松則村が吉野朝側に寝返ったとき奉じた護良親王(もりながしんのう)の皇子で、父が征夷大將軍だったのでそう称ばれていた。

その後則村が幕府側に降ったので皇子は囚われ幽閉されたが、隙をみて河内國に逃れ後村上帝から將軍宣下を受けたが征夷大將軍は実現せず吉野の奥に潜んでいた。

吉野朝方の不利が伝えられたとき皇子は兵を集めて出陣したが、途中で変心して賀名生を焼打ち幕府方に通じたが援軍なく、吉野朝軍に攻められて奈良へ逃れた。

このとき、細川清氏らの幕府軍は楠木正儀らの赤坂城を攻略したので、正儀は逃れて金剛山の奥へ潜んだ。

將軍足利義詮が凱旋してひとまず静謐をとり戻したかにみえたが、こんどは内部抗争が持ち上がった。

東国の大軍を率いて戦果をあげた関東管領畠山國清と伊勢守護仁木義長との対立が激化してきたのである。

こんどの吉野朝軍との戦闘を傍観的態度で眺めていた仁木義長を批難して、敵に気脈を通じていると断定した國清が同志を糾合して義長を討とうと立ち上がったのだ。

これを察知した義長は、本拠の伊豆國に退くと身の安全を図って吉野朝方に降ったので細川清氏も同調した。

この幕府方の動揺を衝いて吉野朝軍が京へ攻めてきたので、義詮はやむなく後光巖帝を奉じていったん近江国

に逃れたが、幕府軍がひと月足らずで京を奪還した。
幕府方の諸将は國清のために動乱が再発したと責め立てたので、面目を失った國清は京に居辛くなり、早々に鎌倉へ戻ろうとした途中で仁木勢に行く手を阻まれて苦戦し、散々の体たらくであった。
鎌倉へ帰還した畠山國清は公方基氏から遠征の労を犒われ、将軍家に恃みにされた功を賞されたことで、仁木義長との軋轢で騒動を起こしたことは不問に付された。
だが、近隣諸国の武将たちのあいだでは國清が強引に動員したことに対する反感が燻ぶりつづけていた。
一年近く経ったころ、吉野朝攻めで犠牲を強いたことへの慰労はまったくないままひとり有頂天になりつづけている國清への不満が昂じてついに爆発した。
基氏は諸将の訴えに困惑して、ついに、
(諸将に叛かれれば東国は乱れ、公方も安泰ではない)
そう決断すると、國清を見限り罷免して追放した。
國清は鎌倉を出奔し、伊豆國修善寺に籠もった。
基氏は、波多野高道らに國清兄弟の追討を命じた。
國清らは囲まれて動けず、食糧も尽きたので討ち死にを覚悟したが、そこへ基氏からの使者がやってきて、
(前非を悔いて降服すれば助命する)
旨を伝えた。
國清は弟義深を基氏のいる箱根に差し向けたが、
(降服すれば赦す)
は國清を騙すための企みと知り、もう一人の弟義熙と相模國(神奈川県)藤澤の時宗道場へ逃げ込んだ。
義深も箱根でそれを知り時宗道場へ駆け込んできた。
その後、國清兄弟は苦労を重ねて京まで逃げ延びたが幕府を頼るわけにもいかず、奈良のあたりを彷徨していたが、生き延びるすべを失いついに窮死したという。

## 二

公方基氏が関東管領畠山國清を罷免追放してから一年あまりが経ったが、まだ管領は空席のままであった。
二十三歳に成人した基氏は東国の抑えに自信を持っていて補佐してくれる管領を必要としていなかった。
だが将軍義詮のほうは弟基氏を野放しにしておくことが不安で、誰を据えたらいいかあれこれ思案していた。
思い付いたのは越後國に逼塞中の上杉憲顯であった。
義詮は基氏を確り抑えてもらうには他人より一族のなかのかなり年長の者がいいと考えていたので、憲顯なら父尊氏の母方の従兄にあたる伯父だから最適であった。
父尊氏が憲顯の所領を没収して越後國へ蟄居を命じたのは、弟直義が副将軍として鎌倉に入り東国の抑えを担当していたときにその補佐役に就いたことから、兄弟相剋が起こって直義派になってしまったからである。
叔父直義の死後は一時吉野朝側について反抗したが、それも行き掛かり上やむを得ないことと諒承できた。

義詮は以前叔父直義と鎌倉にいたとき、高師冬とともに執事として仕えてくれていたので人柄は信用できた。
（上杉憲顯なら基氏を監視し諫言してくれるであろう）
義詮はようやく恃む人を探し出すことができた。
義詮はさっそくそのことを書簡にして鎌倉へ送った。
基氏は幼少の頃、祖母清子に養育されたことがあって、そのとき祖母の甥憲顯に可愛がられた記憶があった。
義詮の意を体した基氏は、さっそく憲顯に書簡を送り、（将軍も希んでいることであり、関東管領就任を要請する）旨を伝えた。
憲顯は、直義を喪い逆賊の汚名を着せられる寒風に曝されて越後國に逐われたが、こんどは思いも掛けぬ暖風に押し戻されて脚光を浴びる舞台に立つことになった。
このとき義詮は憲顯に越後・上野守護を復活させた。
これを知った上野・越後守護の宇都宮氏綱と守護代芳賀禅可入道高名は守護交替に不満を抱き、いよいよ憲顯が鎌倉入りすると聴くとこれを阻止すべく兵を挙げた。
芳賀は上野國板鼻（安中市）に布陣して待ち伏せた。
この報らせを受けた公方基氏は、
「勝手に合戦を企てるとは奇怪至極。退治すべし」
そう熱り立つと、越後國を出立して上野國に入ってくる憲顯の軍勢を待たず、基氏みずから兵を率いて鎌倉を出陣した。
芳賀は宇都宮にいる嫡男伊賀守高貞と二男駿河守に八百騎を預けて武藏國に向かわせ、苦林野（埼玉県入間郡毛呂山町苦林）で阻止すべく着陣した。
公方基氏は、たかがこの一地方豪族の討伐に鎌倉府の威信をかけて東に源氏の中小武士集団白旗一揆五千余騎、西に河越氏を中心にした平一揆三千を配し、みずからは三千余騎を率いて中央に布陣して芳賀軍を包囲した。
この大動員は関東諸豪族に対する見せしめであった。
戦端がひらかれると衆寡敵せずで、芳賀軍は抗戦するいとまもなく踏み潰されて宇都宮へ敗走していった。
その苦林野の北に隣接する鳩山町から東松山市に入ったところの岩殿に基氏館と称する〈館址〉がのこっていて、基氏が在陣したことを示している。
こうして芳賀一族掃討のあと鎌倉入りした上杉憲顯は、畠山國清失却二年後の貞治二年・正平十八年（一三六三）三月二十四日に空席だった関東管領に就任した。
憲顯の関東管領復帰は二代将軍義詮から鎌倉公方基氏の政務補佐役として必要不可欠の人物と認められての就任であるから、誰一人として異を唱える者はなかった。
上杉憲顯の再任を契機にして以後は、この将軍家外戚の上杉一族が関東管領を世襲して鎌倉府の実権を握り、権力者として居坐る長い歴史がはじまる。

## 四

関東管領に補任された憲顯は嫡男憲將が病弱だったた

め越後守護を兄憲藤の嫡男朝房に譲って鎌倉に赴いた。
こうして鎌倉へ移った憲顯一族はその後三家に分かれて腰を据え、おのおのその地名をとって名告りにした。
憲顯の管領家は、鎌倉の北方にある臨濟宗圓学寺のあたりから南下して鶴岡八幡宮に近い臨濟宗建長寺あたりまでの山ノ内に居住したので〈山内上杉〉といわれた。
圓学寺は、鎌倉幕府八代執権北條時宗が襲来した蒙古軍を撃退したあと彼我の戦没者の霊を弔うために開創した寺であり、建長寺のほうは時宗の父五代執権北條時頼が創建した寺で、この地に鎌倉五山のうち一、二位の大刹があったことから山ノ内となったのであろうか。
鎌倉期俗体武士肖像彫刻として重要文化財に指定されている木造上杉重房像がある（現在は鎌倉国宝館に寄託されている）紫陽花寺で知られる明月院は、始祖重房五代の孫憲方の開基で、この下の明月院バス停からＪＲ横須賀線の踏切を渡ったあたりに山内上杉の屋敷があった。
憲顯の兄憲藤は、杉本寺下の滑川に架かる犬懸橋を渡ったさきの犬懸が谷に屋敷を構えたので〈犬懸上杉〉といわれた。橋の袂に〈上杉朝宗及氏憲邸址碑〉の標識があり、谷戸の奥にすすむと釈迦堂口切り通しに出る。
もう一人高師直に討たれた重能の養子能憲（憲顯三男）は、華の橋を渡ったさきの宅間寺（報國寺）のある宅間ヶ谷に住んだので〈宅間上杉〉といわれた。
ついでながら、その先の泉水橋バス停手前の虹の橋の向かいが御所ノ内といい、足利公房屋敷があった。
こうして関東管領上杉憲顯の一族は三家に分かれたが、じつはすこしあとになってもう一家入ってきた。
憲顯の父憲房の長兄重顯の系で、鎌倉幕府六代将軍に迎えられた宗尊親王に供奉して上杉重房が鎌倉入りしたとき嫡男重顯は伏見院藏人だったので京に残っていた。
その子丹後守護朝定は信濃國で高師直と戦い討死した。朝定のあとを継いだ従弟藤成の二男顯定が京を離れて一族の盤踞する鎌倉へ下向し、管領家の山ノ内に隣接する扇が谷に屋敷を構えたので〈扇谷上杉〉といわれた。
扇谷上杉家の家老太田資長（道灌）邸跡といわれる浄土宗英勝寺総門前のＪＲ横須賀線の踏切を渡った突き当たりに〈扇谷上杉管領屋敷迹〉の碑がある。
こうして上杉氏は、鎌倉入りして四家に分かれた。
さらに管領憲顯の子が武藏國深谷と越後國に入った。
武藏國榛澤郡深谷を領した憲英は廳鼻和上杉氏を名告り、越後守護となった憲榮は府中に一家を起こした。
深谷と越後を加えて六家に分かれた上杉一族は、団結して盤石の基盤を築き上げわが世の春を謳歌してゆく。

# 第十話　諫死と隠棲

上杉憲顯が高齢で病没した後任に犬懸朝房と宅間能憲が選ばれ〈両管領〉といわれた。

そのあとの山内憲春のとき公方氏満が野心を燃やして将軍の座を狙ったので留めたが聞き入れられず、諫死して悪夢を醒めさせた。

のちに管領になった犬懸朝宗は六十歳で二十一歳の新公方満兼を迎え孫のように扶育して引退後も見守りつづけたが、満兼が三十三歳で病歿すると葬儀のあと屋敷へは戻らず領国上總の胎藏寺に隠棲したまま世を去った。

## 一

関東管領になった上杉憲顯は、高師冬とともに当時東国の備えで鎌倉にいた副将軍足利直義に副えられた尊氏の嫡男義詮を補佐する関東執事に任ぜられてから二十二年が経っていて、もはや五十八歳になっていた。

そのあいだずっと越後國に蟄居させられていたのだが、憲顯に裏切りや謀叛を起こした罪悪感はなかった。

あのころ尊氏将軍には譜代の高師直一族が補佐し、弟の直義には外戚の上杉と同族の畠山が付いていた。

二人は性格がまったく違っていたのでそれぞれの特性を発揮して尊氏は侍所の指揮権と恩賞権を握って武士団を統率し、直義は司法、行政権を握って政務統轄した。

尊氏は武断派、直義は文治派であったから、不得手なことは相手に任せる典型的な二頭政治であった。

だが、司馬遷が著書『史記』のなかで、

「両雄は並び立たず」

と断言しているとおり、対峙したまま優劣がつかなかった楚の項羽と漢の劉邦でさえ結着がついているのだ。

当初は互いに協力し合って相手を立てるのだが、そのうち自我が出てきて対立するようになり、功績は奪い合い失敗は押し付け合って両者のあいだに蟠りが生ずる。

こうなるともう是非を糺して決着をつけるしかない。

尊氏・直義兄弟の場合は、尊氏が鷹揚な人だったから悶着は起きないかに思われたのだが、伏兵がいた。

高師直である。

師直は、副将軍直義の存在が気に入らなかった。

「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」

の譬えどおり直義に付いている上杉重能と畠山直宗までも睨まれ、虎視眈々と葬る機会を狙われていた。
直義と師直のあいだが険悪になると師直の刺客に重能と直宗が討たれ、重能の養子能憲に師直・師泰兄弟が報復されて相討ちとなったが尊氏・直義の溝は深まるばかりでついに敵対してしまい、直義が鎌倉で毒殺されてしまったことから主を喪った上杉・畠山は追放されたのであるから、飽くまでも内輪揉めで他意はなかったのだ。
憲顯が関東管領に就任した翌年嫡男憲將が病死した。
さらに、そのまた翌年の四月二十六日に初代鎌倉公方足利基氏が急死した。まだ二十八歳の若さであった。
五月二十九日、幕府の使節佐々木道譽がやってきて、
「将軍は、嫡男金王丸を後継者とするよう仰せられた」
旨を伝えた。
その二代将軍義詮も九月下旬ごろから体調を崩して臥すことが多くなってきたので、政務を十歳の嫡男義滿に譲りもっとも信頼する一門の細川頼之を管領に付けた。
義詮には名医が集められて懸命の治療に当たったのだがいっこうに恢復せず、十二月七日ついに世を去った。
遺骸は父尊氏の眠る洛西衣笠山麓の等持院（京都市北区）に移され荼毘に付された。三十八歳であった。
これで初代将軍尊氏の嫡男義詮と二男基氏兄弟はともにおなじ年に世を去ってしまい、幕府と鎌倉府は三代義滿、二代氏滿の従兄弟同士の幼君に代替わりした。

## 二

翌貞治七年・正平二十三年（一三六八）正月、関東管領上杉憲顯は新公方足利氏滿の名代として上洛した。
そして、二月八日に新将軍義滿に謁して、
「御家督と近々御元服の儀を賀し奉る」
旨を言上した。
そのあと管領細川頼之と会談したおりに、憲顯は、
「東国も静謐を保っておりますゆえご心配なく」
そう胸を張って見せた。
だが、ちょうどそのころ武藏國では、憲顯上洛の留守を狙って平一揆の叛乱が起こっていた。
平一揆というのは、坂東平氏出身の河越氏（川越市）を中心にした比企の高坂氏（東松山市）らの一族に村山党の山口氏、下野國の宇都宮氏（宇都宮市）、相模國の三浦氏（横須賀市）らが加担し、吉野朝方の新田義宗（義貞三男）、脇屋義治（義助嫡男）らも挙兵に呼応して蜂起したのであるが、ことの起こりは河越氏と葛山備中次郎との所領争いからはじまったことであった。
急報を受けた憲顯は、関東は静謐を保っていると太鼓判を捺した手前もあって引っ込みがつかなかったが、
（幼い公方では抑え切れまい）
ことからやむなく細川頼之に事の次第を打ち明けた。
すると頼之は、意外にも、

「じつは、こちらも不穏の火種が燻ぶっております」
そう漏らして眉を顰めたのだ。
というのは、吉野朝の後村上帝が三月十一日に攝津國住吉（大阪市住吉区）の行宮で崩御された。
後醍醐、後村上帝とつづいた吉野朝の三代には第一皇子寛成親王が践祚された。九十八代長慶帝である。
幕府に対して強硬な態度をとりつづけていたその親王が即位されたのだから、侮っていては大動乱にもなりかねないということで幕府の緊張が頂点に達していた。
憲顯は細川頼之と互いの安泰を誓い合って四月上旬に急ぎ京を出立すると、東山道を通って上野國平井に入り、平一揆の動向を見定めておいて鎌倉に帰着した。
動乱拡大を懸念した憲顯は早期鎮圧を目指して鎮撫軍を甥の犬懸朝房に預け、公方氏満を奉じて出陣させた。
朝房は進軍の途中簗田縫之助に比企郡岩殿山の一揆軍掃討に向かわせて六月十一日にこれを破った。
つづいて河越城に籠もっている河越氏などの主力軍に総攻撃をかけて、十七日にこれを陥とした。
犬懸朝房を河越へ向かわせたあと、憲顯は三男宅間能憲に越後にいる新田の残党攻めを命じて出陣させた。
この合戦で七月十七日に新田義宗は敗死したが、従弟の脇屋義治は戦場を脱出して出羽國へ逃亡した。
これとは別に憲顯は五男憲春とともに本隊を率いて平一揆を唆した元凶の宇都宮氏綱攻めに向かい、下野國足利で河越城を陥とした犬懸朝房軍と合流した。
ただちに出陣した両軍は支城をつぎつぎに陥としていって宇都宮城を攻略し、宇都宮氏綱を降服させた。
そのあいだ憲顯は、ずっと足利の陣中で臥せっていたが、九月十九日に病歿した。六十三歳の高齢であった。
正月に上洛しているあいだに平一揆が蜂起して急ぎ鎌倉へ戻り、すぐさま出陣した無理が祟ったのであろう。
動乱の時代に生きて波乱の人生をおくり、鎌倉府の関東管領に就任してからはよく東国を治め、上杉氏磐石の礎を築いた憲顯は、一族によって伊豆國の國清寺（伊豆の国市奈古谷）に丁重に埋葬された。法号は桂光道昌。
この報が幕府に届くと、管領細川頼之は十歳の少年公方を支えて鎌倉府の安泰を図ってきた功績を讃えてその死を悼み、後任に平一揆鎮定に尽力した犬懸朝房と憲顯の三男宅間能憲の二人を据えた。
この朝房と能憲のことを〈鎌倉の両管領〉といった。
この年の暮れ、十一歳の義滿が征夷大将軍になった。

## 三

朝房と能憲の〈二人管領〉時代はめずらしく鎌倉は静謐を保っていたが、幕府の膝許が騒がしくなってきた。
足利政権が三代つづいて安定期に入り、その幕府が支えている京の朝廷が栄えていって吉野朝は萎んでしまうのではないかと懸念を抱いた楠木正儀が、いずこからか

ひょっこり現われて将軍義満に帰順を申し出たのだ。
正儀は以前両朝を和睦させようと熱心に交渉をすすめてきたこともあったが、二代将軍義詮と後村上帝の相次ぐ死去で中断してしまったことから吉野朝内部で内通と誤解され、身の危険を感じて雲隠れしてしまっていたのであった。まことに神出鬼没の不可解な人物である。
正儀の変節を知った吉野朝内の討幕強硬派たちは、
「楠木正儀赦すまじ」
そう息巻くと、めくじらを立てて探索に狂奔した。
将軍義満は、赤松光頼らに援兵を命じて護衛させた。
正儀はあらためて入京すると、義満に庇護を求めた。
それを契機にして吉野朝方の動きは依然活発になり、ことに一族のなかの和田氏らは体面を汚されたことに熱(いき)り立って、匿う幕府に積極的に攻撃を仕掛けてきた。
幕府はあらためて諸将に正儀助勢の出兵を命じた。
諸将は正儀のことを総力をあげてまで庇護するに価する人物ではないと判断していたので、そうまでして庇おうとする管領細川頼之に不信感を抱いて従わなかった。
怒った頼之は管領を辞して出家すると言い出した。
おどろいた義満は直接諸将に命じて頼之の顔を立てたので、頼之もまた義満の慰留に応じてことなきを得た。
だが、このことが火種になって燻りつづけていった。
頼之は少年将軍を思いのままに操っていると誤解されて顰蹙を買い、それが昂じて互いに反目し合った。

こうして幕府は内憂外患交々の不安定期がつづいたが、鎌倉府のほうは平穏のうちに管領が交替していった。
上杉憲顯が足利の陣中で歿して犬懸朝房と宅間能憲が管領になり、〈鎌倉の両管領〉といわれたことはまえに述べたが、そのうちの一人犬懸朝房が二年後に病を得て辞任し、一人管領になった宅間能憲も十年つとめて辞任すると、翌年四十六歳で病歿した。
この能憲のあとは憲顯の五男山内憲春(のりはる)が任じられた。
ところが憲春が管領になった翌年大騒動が起こった。
十二年まえ、初代鎌倉公方基氏の急逝で後を継いだ嫡男の少年氏満は、二十一歳の青年公方に成人していた。
氏満は乳母日傘(おんばひがさ)で育てられたために我儘で我が強く、重臣や側近たちが屢々(しばしば)手を焼く扱い難い公方であった。
その氏満は、ちかごろ野望を抱いて心が揺れていた。
氏満は、おなじ従兄で一歳年長だけの義満が将軍で、自分が鎌倉公方であることに不満を抱きはじめていた。
鎌倉公方すなわち東国の将軍といっても幕府の正式組織では関東管領であって将軍の配下であり、同族の細川、斯波、畠山が交代で勤める管領と同格なのであった。
たしかに尊氏が末子基氏を東国の抑えに鎌倉へ派遣したときは関東管領であり、上杉氏はその執事であった。
基氏は、父が将軍であるあいだは不満がなかったのだが、尊氏が逝去して兄義詮が将軍になると自分が配下にいることが不満になり、組織上の立場を無視して、

（われは東国の将軍である）

ことを主張すると、東国を治める征夷大将軍すなわち鎌倉公方を僭称し、執事の上杉氏を関東管領に据えた。

基氏は実兄でも不満だったのだから、それが従兄ではなおのこと憤懣遣る方なく思っても不思議ではない。

氏満が欲求不満で悶々としているところへ京から密書が届いた。幕府の評定衆土岐頼康からであった。

先代将軍義詮が重病に倒れて十歳の嫡男義満に将軍職を譲ったとき、その傅役と政務の補佐を一任されて管領に据えられた細川頼之は、義満が少年将軍と侮られぬよう心配りして幕府重臣や守護たちに圧力をかけて心服を図り、京の大火で室町御所が焼亡するとそれを機会に庭園に四季おりおりの花を植えたことで〈花の御所〉と称ばれる華やかな室町新邸を造ったり、公家に引けを取らぬよう権大納言兼右大将に格上げしてもらって権威づけに奔走するなどして、懸命に義満を盛り立ててきた。

それらのことが幕府重臣たちのあいだで将軍を恣に操る管領細川頼之の専横ととられて、前管領斯波義将や評定衆土岐頼康らをはじめ幕府重臣たちの顰蹙を買った。

頼之を専横管領と極め付けたのは斯波義将であった。

義将は頼之に含むところがあった。

九年まえ、九州探題の後任を巡ってのことである。

義将は澁川義行を推したが、頼之が義満将軍の傅役と管領の権力で今川貞世（了俊）を任命してしまった。

細川、斯波、今川、澁川はいずれも足利将軍家の一門であるから、同族間の勢力争いだったのだが、斯波義将は面目を失ったことで以後頼之に遺恨を抱いていた。

また、おなじころ土岐頼康もまた南禅寺問題で頼之と不和になって、美濃國に帰ってしまっていた。

そんなことから二人は頼之打倒の機会を狙っていた。

斯波義将は頼之を失脚させて溜飲を下げればそれで事足りたのだが、土岐頼康の場合はより尖鋭的であった。

頼之が勝手気儘に育ててしまったために、贅を尽くして遊興に耽り、およそ武家の棟梁の自覚に欠ける義満を廃して鎌倉公方氏満を奉じ、頼之を追放して管領の座を奪いとり、幕府を掌握しようという野心を起こした。

そして、氏満に密使を送ってきたのである。

氏満は、かねがね内政干渉する頼之を嫌っていたので、（頼之を廃するだけでなく、自分を将軍にしてくれる）

頼康の甘言に乗せられて、すっかりその気になった。

頼康の動向を知った頼之は、諸国の守護大名たちに、〈謀叛人土岐頼康追討令〉を発した。

その布令文は氏満の許にも届いた。

氏満は、土岐頼康に同心するための出兵なのに、幕府軍を装うことのできる幸運を密かに北叟笑んだ。

氏満は、直ちに関東の諸将に檄を飛ばして鎌倉に集結させると、管領憲春の兄憲方を総大将に命じた。

そして、軍団出陣の目前になって憲春を呼び寄せ、
「憲方には後刻伝えるが、鎌倉は幕府にではなく土岐頼康に加担する」
旨を伝えた。
寝耳に水の話に吃驚仰天し、顔面蒼白になった憲春は、
「お屋形様、それはなりませぬ。たとえ細川管領に非があろうとも討伐令の出ている土岐頼康に同調することは将軍家に叛くことになりまする」
そう理非を糺して懸命に制止したが、諭しても氏満は翻意せず、必死の諫言にも反発するばかりであった。
手を焼いた憲春は木曽義仲の例を出して、
「たとえ京を征して天下をおとりになろうとも遠征の軍勢を京に留めおくことはなりますまい。旭将軍の例もありまする」
そう再三再四翻意を迫ったが、氏満は土岐の甘言に嵌まってしまっていて冷静さを喪いただ譫言のように、
「われも足利の直系、従弟と雖も義満には劣らぬ」
を繰り返すだけで憲春の説得を諾かず、しまいには、
「問答無用。一両日中に進発せよ」
そう叫ぶと席を蹴り、足音荒く奥へ去ってしまった。
万策尽きた憲春の心に、ぽっかり穴があいた。
虚しさを引き摺って屋敷へ戻った憲春は苦悶した。
(管領は幕府から任命されたもので、鎌倉公方の補佐役であると同時に目付役でもある。公方を説得できぬとあってはもはや役職はつとまらぬ)
そう自問自答して決意を固めると、内室をよんだ。
なにごとならんと心配顔の内室に憲春は、
「にわかのことにて不審であろうが、思い立ったことがあるゆえそなたは今宵尼になってもらいたいのじゃ」
そうしずかに告げた。
「えっ。尼になれと仰せにござりまするか」
突然の要求に内室はしばし唖然として憲春の顔を見詰めていたが、やがて深く頷くと、
「鎌倉一の賢者ときこえの高いおかたの仰せなれば、よもやおたわむれではござりますまい。仔細あってのことでござりましょう。仰せのとおり尼になりまする」
そう素直に従うと、その夜のうちに髪を下ろした。
内室が尼姿になったのを見届けた憲春は、
「無体な所望をいたしすまなんだが、やがて思い合わせることがあろう」
そう労りの言葉をかけておいて、持仏堂に籠もった。
そして、血書の思いを込めて、
「ご謀叛叶うまじ」
の『諫言状』を遺して、永和五年、天授五年(一三七九)三月七日自害して果てた。
憲方はこの憲春の諫死を知っていたが、氏満の中止命令が出ないまま予定通り三月十日に軍団を率いて進発し、伊豆國三島まできたところで滞留して様子を窺った。

氏満は憲春の死に驚愕してようやく悪夢から醒めると軽挙妄動だったことを悔んだがあとの祭りであった。

そして、幕府重臣や諸豪族たちの動揺を抑えるため直ちに軍勢を呼び戻すと、上杉憲方を関東管領に据えた。

こうして憲方は思い掛けなく弟憲春のあとを継いだ。

兄のあとを弟が継ぐならわかるが、兄が弟のあとを継ぐのは順序が逆だから、憲方は憲春の弟ではないかとの説があるが、『藤原姓上杉氏』の系図を調べてみると確かに憲方のほうが兄になっているから間違いない。

それでは憲春が嫡出子で憲方は庶出子なのではないかとも思ってみたのだが、系図の添え書は同腹であった。

万策尽きたのでこのことは定かでないとしておく。

いっぽう京では――。

土岐頼康と京極高秀の共同謀議が露見して怒り心頭に発した将軍義満はみずから征伐の軍勢集めにかかったが、斯波義將が二人を庇って赦免を申し入れると同時に非は細川頼之にあると建言して頼之の追放を迫り、重臣たちも義將を支持したので義満はやむなく二人を赦した。

腹の虫がおさまらぬ土岐と京極は諸將に細川頼之の非を呼び掛け、二人を支持する近国の諸將が団結して花の御所を囲み頼之の排斥を迫ったので、義満はやむなく頼之の管領職を罷免して京からの退去を命じた。

罷免された頼之は出家すると屋敷に火をかけ、一族郎党を引き連れて讃岐（香川県）の領国へ帰っていった。

前に触れたが、初代鎌倉公方足利基氏が関東管領畠山國清を罷免追放したように、いかに将軍や公方と雖も諸將が団結しての訴えは抑えることができなかったのだ。

細川頼之のあとは斯波義將が再び管領に返り咲いた。

関東管領に就任した上杉憲方は、氏満に幕府の混乱に乗じて速やかに義満将軍に謝罪するように勧めた。

意気消沈していた氏満は、憲方の勧めに従って瑞泉寺の古天和尚を使僧にして京へ送り義満に謝罪した。

義満は、斯波義將と土岐頼康の執り成しでやむなく氏満を赦すと、上杉憲方の関東管領職就任を承認した。

こうして憲方、憲春兄弟が公方氏満の危機を救った。

## 四

思わぬ事態が起こって弟憲春を喪ったものの図らずも関東管領職が転がり込んできた上杉憲方は、慣れぬ政務に慌ただしい歳月を送ってどうやら年の瀬を越した。

新しい年を迎えて新緑も過ぎようとするころ、北関東で火の手が上がった。下野國（栃木県）南部の半国守護小山義政が吉野朝に応じて挙兵し、北部の半国守護宇都宮基綱を攻めた。所領の競界争いが原因だったという。

両軍は宇都宮領の河内郡裳原（宇都宮市茂原町）で激突し、基綱兄弟が討たれて小山方の勝利に終わった。

公方氏満は、所領の拡大を狙って濫りに挙兵し吉野朝

側に寝返った小山義政に激怒して関八州の諸将に討伐の檄を飛ばしておいて、管領憲方に出陣を命じた。
憲方は従弟の上總守護犬懸朝宗と木戸法季の軍勢を先陣に命じ、白旗一揆の協力を得て下野國へ向かった。
このとき、氏満自身も武藏國大里郡村岡（熊谷市村岡）まで出向いて布陣し、戦況を窺った。
犬懸・木戸の両軍は大聖寺で小山軍を破り、本拠の祇園城（小山市）を囲んだので小山義政は降服した。
氏満は、武藏府中（府中市）の高安寺で義政の使者を待ったがついに現れず、義政の降服は偽りであった。
騙された氏満は直ちに鷲城（小山市）を攻略したので、戦意喪失した小山義政は頭髪を剃って降服してきた。
憲方は義政の所領を没収してけりをつけたが、義政が再三叛いたので糟屋城を攻略し祇園城を火攻めにした。
義政は嫡男若犬丸と城を脱出して上都賀郡粟野の山中にある長野城（鹿沼市）に籠もったが、犬懸朝宗・木戸法季軍に攻撃されて義政はついに自害して果てた。
このとき嫡子の若犬丸は城を脱出して陸奥國まで逃れ、磐城田村郡の田村荘司則義、清包父子に頼った。
伝聞によれば、田村氏は坂上田村麻呂が蝦夷征伐の帰路ここに立ち寄ったとき残していった子の裔だという。
この関東動乱のあいだ京はなにごともなく打ち過ぎていて、将軍義滿は洛西に別荘北山殿を造営した。のちに夢窓國師を開山として鹿苑寺という禅寺にあらためた。現在は金閣寺という別称のほうが有名になっている。
このころ管領上杉憲方は四方山に囲まれた鎌倉山ノ内に館を建てたので、〈山内殿〉と称ばれるようになる。
憲方は、父憲顯が関東管領就任のため越後國から鎌倉入りするとき、嫡男憲將が病弱だったため兄犬懸憲藤の嫡男朝房に譲ったのが口惜しく残念だったので、小山攻めで武名を挙げた朝房の弟朝宗に相談をもちかけた。
「越後は父が長いあいだ新田の残党狩りに傾注してようやく奪い取った由緒ある国であれば、父の武名を子々孫々にいたるまで伝えつづけてゆきたいと思っている」
そう告げると、一拍おいて、
「そこでどうであろう。山内と犬懸で関東管領を交替で勤めることにして越後守護を返してはくれまいか」
朝宗は、憲方の突然の申し入れに唖然としたが、犬懸家は鎌倉から近い温暖の地上總國守護であるので遠隔の寒冷地に未練はなく、関東管領職との交換であれば家格が上がって得策ではないかとの考えにいたった。
「越後國はもともと憲顯伯父上から預かった守護職ゆえお返しするのに異存はござらぬ。かわりに関東管領職を交替で勤めようとの仰せであれば否やはござりませぬ」
そうきっぱりと約束した。
憲方は朝宗の明快な返答を受けて胸の痞えが下りた。
「忝ない。憲孝のあとの管領は朝宗殿とお約束いたす」
憲方は上機嫌で朝宗の手をとり、上申を約束した。

（善は急げ）

憲方は長兄憲將の養子に入れておいた末弟憲榮に越後守護職を与えて府中へ送り、越後上杉家を興させた。

憲方は、引退してから健康を害して、二年後の應永元年（一三九四）十月二十四日に六十歳で病歿した。

すると、管領憲孝も父憲方の喪に服したばかりの十一月三日に病気を理由にして辞任してしまった。

この憲孝が関東管領に就任して三箇月後の明徳三年・元中九年（一三九二）十月に京で大変革が起こった。

世にいう〈南北朝の合一〉である。

大覺寺統の吉野朝は、後醍醐帝の皇子で九州の経営を統轄していた懐良親王や伊勢國の謀臣北畠親房の末子顯能が歿してからは、すっかり零落してしまっていた。

時機到来とみた西国の大内義弘が解決の緒を掴み、京側は吉田兼熙、吉野側は吉田宗房らが具体的に詰めた。

そして、講和は、

一、大覺寺統後亀山帝から譲國の儀をもって神器を持明院統後小松帝に渡す。

一、今後の皇位は両統交互とする。

一、諸国の國衙領は大覺寺統、長講堂領は持明院統の支配とする。

の三條件で妥結した。

後亀山帝の帰京は行幸の儀礼を用いたが、供奉するのは僅かに廷臣十七名と名和党六名、楠本党七名、和泉國の住人和田某、大和國宇陀郡の住人秋山、井谷ら十六名の武士の合計三十三名と十名の郎党にすぎなかった。

後亀山帝は十月二十八日吉野行宮を出発、奈良経由で閏十月二日に京到着、所縁の洛西嵯峨大覺寺に入った。

三日後に義滿の命により雨中を神器だけが大覺寺から土御門東洞院の後小松帝皇居に移されただけで、約定の譲國の儀式も両帝の対面もおこなわれなかった。

吉野朝側が一貫して主張しつづけてきた、

（足利方が降服してこれを赦す）

も曖昧のまま実現しておらず、合体といっても吉野朝側が降服した気配の濃い講和で終わってしまった。

しかし、これでともかくも五十七年間つづいた両統分裂の幕は閉じられたのである。

96後醍醐、97後村上、98長慶、99後亀山とつづいた大覺寺統の吉野朝、1光嚴、2光明、3崇行、4後光嚴、5後圓融、6後小松とつづいた持明院統の京朝とつづいた天皇両立の〈一天二君〉は解消されて、〈一天一君〉すなわち100後小松帝ただ一君ということになったのだ。

## 五

憲孝の辞任により憲方との約束どおり越後守護を返した朝宗が管領になり、山内・犬懸家の交代制になった。

朝宗は、まえにも述べたが復習すると、十五年まえに下野國（栃木県）の小山義政が吉野朝側に寝返って隣接

する幕府方の宇都宮基綱を斃したことではじまった小山攻めではつねに先手の大将として活躍してきた。
偽りの降服で一時逃れを繰り返していた小山義政を三年がかりで徹底的に追い詰めて三度目でついに自害させはしたものの、当主の嫡男若犬丸は取り逃してしまった。
それから五年経って若犬丸が常陸國（茨城県）の小田孝朝に匿われていることが判明すると再度出陣し、孝朝が難台山の男体城（笠間市）に立て籠もったところを一年がかりで攻め陥として小田直高を討ち取ったが、孝朝と若犬丸はまたも取り逃してしまった。
さらに八年後、こんどは若犬丸が陸奥國（福島県）の田村清包の許にいるとの情報を得て公方氏満自身が出陣することになり、朝宗も先手をうけたまわって遠征し白河城（白河市）へ到着したところで田村も若犬丸も退散して行方知れずの報が届いたのでやむなく帰還した。
翌年正月、陸奥國會津まで逃げ延びた小山若犬丸はもはや身の置きどころがなく、ついに自害して果てた。
小山義政が吉野朝に寝返ってから十七年手古摺ったが、その吉野朝が統一されたからすでに五年経っていた。
朝宗は、この小山征伐にはつねに先鋒を承って武名を揚げたので、管領となるに相応しい箔をつけた。
小山の乱を平定した公方氏満は翌年病に倒れた。
気弱になった氏満は、朝宗に公方家の安泰を託した。
氏満は死期を悟っていたのか、それから旬日を経ずして應永五年（一三九八）十一月四日に身罷った。享年四十歳、法名道全永安寺殿と称し瑞泉寺域内に葬られた。
三代公方になった滿兼はこのとき二十一歳であった。
管領朝宗は六十歳、祖父と孫ほどの年齢差がある。
だが、二人は親密な間柄であった。
朝宗は先代公方氏滿から幼児の滿兼を預けられ育てて きた。つまり朝宗は滿兼を守り立てる扶育係であった。
滿兼と朝宗は公的立場では公方と管領であっても、私的、つまり情においては親子同然だったのである。
だから、朝宗は滿兼をわが子か孫のように慈しんだ。
朝宗は、ただ只管に鎌倉府と公方の安泰を希った。
朝宗が気掛かりだったのは将軍家との関係であった。
まえにも述べたが、初代公方基氏は父尊氏から関東管領を命ぜられて鎌倉に赴任したのだが、二代義詮の代になると配下であることに不満を抱いて、
（兄は西国の将軍であり、わしは東国の将軍である）
ことを自負して、勝手に、
〈鎌倉公方〉
を僭称したが、義詮も幕閣も取り合わずに異も唱えなかったので、いつか定着してしまい今日に至っている。
二代公方氏滿も、従兄弟同士でありながら義滿が将軍で栄耀栄華の限りを尽くしていることが不満で将軍の座に誘う土岐頼康の甘言に乗ってしまったことがあった。
祖父基氏、父氏滿の血を引く滿兼もまたおなじ叛意を

抱きはせぬかと心配で野心を起こさせぬよう腐心した。
満兼が公方になって最初に直面したのは陸奥・出羽両国の統治問題であった。
建武二年（一三三五）足利尊氏は征東将軍として鎌倉入りすると、斯波家兼を陸奥國探題に据えた。
だが、幕府の体勢が整うと管領府が設置され畠山國氏と吉良貞家が赴任してきて探題斯波家兼は解任された。
その後、義満の代になって二代公方氏満がおなじ従兄弟でありながら栄耀栄華の限りを尽くしている将軍を妬み、その落差に不満を抱いているとの情報が頻繁に届いたので義満は叛乱の芽を摘むべく氏満への懐柔策として陸奥・出羽二国の管領府を廃して鎌倉府に与えた。
これにより鎌倉府は、関東八箇国に奥羽二箇国を加え、東日本の十箇国を所管することになったのである。
氏満はこの二国の統治に黒川御所（宮城県黒川郡大和町）を開設し、幕府の奥州探題だった斯波家兼の曽孫大崎（斯波）満持を起用した。
しかし、四代つづいた大崎氏はもはや土着していて在地領主の伊達、田村氏らと親交を結び彼らに好意的だったので、鎌倉府にとっては油断のならぬ存在であった。
それが満兼の代になって表面化してきたので、鎌倉府の安泰を憂えた管領朝宗は馬謖を斬る決断をした。
大崎満持の黒川御所を廃し、新たに南陸奥安積（郡山市安積町笹川）に篠川御所、岩瀬森（須賀川市稲）に稲村御所を開設して、公方満兼の次弟満直を篠川に末弟満貞を稲村に下向させ、陸奥國の支配強化を鮮明にした。
これでもし陸奥の有力豪族たちが謀叛しても、篠川・稲村の両御所が鎮圧防衛する二段構えが完成した。
管領朝宗の付け入る隙を与えぬ苦慮の策であった。

## 六

それから半年後に、最大の難事が降り掛かってきた。
それは足利公方家の存亡に係わる大事であった。
しかも、幕府の沙汰次第という歯痒い裁きであった。
事件は鎌倉府と関わりのないところで起こっていた。
九州探題今川了俊（貞世）が突然解任されて帰洛を命ぜられたのが抑々のはじまりであった。
不可解で納得ゆかぬ了俊が幕府から命ぜられたのは、〈駿河守護〉
だったが、守護は甥の泰範なので名目に過ぎず、捨扶持の居候という変則な立場で居心地が悪かった。
そこで了俊は駿河府中を出て相模國藤澤に移住した。
了俊は無聊の慰めに鎌倉を遊覧しているうちに鎌倉府に出入りするようになり、氏満と親交を深めていった。
氏満は幕府内部から漏れた情報として、了俊の解任は将軍義満が明との交易独占を企んでのことと教えた。
義満の我慾の犠牲になった了俊は怒り心頭に発した。
将軍家に不満を抱いている満兼は了俊に同情した。

そのころ九州でまたも菊池武朝らが挙兵していて了俊の後任探題澁川滿頼から幕府に救援を求めてきていた。
義滿は、西国の雄大内義弘に救援討伐を命じた。
義弘は九州平定後も京に戻らず、朝鮮百濟王の後裔を活用して朝鮮や中国との交易を独占しはじめていた。
義滿は、義弘の粛清を謀って執拗に帰洛を命じた。
義滿の厳命で義弘は重い腰を上げて和泉國堺（大阪府堺市）まできたが、そこからは動こうとしなかった。
義弘から滿兼に密使が届いたのはこのときだった。
義滿を怨む了俊を仲介して謀叛を誘ってきたのだ。
内容は、関八州、陸奥、出羽十箇國の鎌倉公方滿兼と、周防（山口県東部）、長門（山口県西部）、石見（島根県）、豊前（福岡県）、和泉（大阪府）、紀伊（和歌山県）六箇国の守護大内義弘が提携して東と西から幕府を挟撃して倒そうというものだった。
滿兼は、倒幕の好機到来と義弘の誘いに乗った。
先代氏滿が土岐頼康に唆されたのとおなじであった。
滿兼の動きは次期管領の山内憲定から越後守護の兄房方に告げられ、七頭の評定衆で幕府に出仕していた房方から義滿将軍に報告されたが、義滿は陸奥、出羽の諸将を『御教書』で抑えていたので慌てることなく憲定に滿兼の行動を諫めるよう内書で指示したにすぎなかった。
だが滿兼は憲定の諫止を諾かず、稲村、篠川巡行と称して陸奥、出羽の諸将動員に鎌倉を出発してしまった。

いっぽう堺に滞留して動かぬ大内義弘に対して義滿は、僧絶海中津を派遣して上洛を督促させたが、義弘はこれまで幕府のために尽くしてきた数々の功績を挙げて、
「にも拘わらず、和泉、紀伊守護職を召し上げて討伐なさるとの噂が頻りゆえ、態々渦中に入る上洛などいたさず、この地に留まって一戦交える所存でござる」
そう開き直ると、
「われはいま、鎌倉殿と申し合わせてご謀叛つかまつる」
鎌倉公方滿兼を奉じて義滿に叛く、と言い放った。
聞き捨てならぬ中津は取って返して義滿に言上した。
意中を明かした義弘は、さっそく軍議をひらいた。
堺籠城に決して城塞を築き井楼や矢倉を構えて五千の兵を籠もらせると、水軍をもって海上を封鎖した。
こうして、のちにいう〈應永の乱〉ははじまった。
だが、呼び掛けた不平分子の宮田時清、土岐詮直、京極秀滿らは応ぜず、僅か一箇月で決着してしまった。
堺城が陥落すると大内義弘はただ一騎で幕府軍に突入して壮烈な戦死を遂げ、弟弘茂は降服して赦された。
このとき管領朝宗は、滿兼の奥羽諸将動員の風説は誤解で、単なる巡行であることの釈明に奔走した。
そして、滿兼を態々祖先発祥の地下野國足利荘へ回遊させて館跡の鑁阿寺に詣でたあと三箇月も滞留させた。
こうしたことで謀叛に応じなかったことを立証した。

義滿は滿兼を唆した了俊を山内憲定に討伐させた。
甥泰範の謝罪で赦された了俊は、袋井に閑居した。
管領朝宗は、鎌倉府の取潰しと滿兼の処断は避けられぬと思われた危機一髪の難局を全身全霊で防御に当たり辛うじて切り抜けた安堵で、力が抜けてしまっていた。
しかし、鎌倉府の安泰はながくつづかず、翌年にはまたまた陸奥國で伊達政宗が叛乱を起こした。
朝宗の嫡男氏憲（禅秀）が討伐の将を命ぜられた。
氏憲は七千を率いて鎌倉を出陣し、伊達軍と攻防を繰り返して三箇月後にようやく赤館城（福島県伊達郡桑折町）を攻め立てて伊達軍を破り、政宗を投降させた。
東国では殺伐とした闘争があとを絶たなかったが、大内義弘を斃して天下を平定した三代将軍義滿の膝許では室町文化の花が開いてこの年、義滿将軍の庇護を受けていた能役者觀世流の世阿彌元清が『風姿花傳』を著した。
應永十二年（一四〇五）八月二十九日、十年管領を勤めた犬懸朝宗が六十七歳で引退して山内憲定が継いだ。

## 七

朝宗は引退後も出仕して公方滿兼を見守りつづけた。
後任の山内憲定は、兄房方が幕府の評定衆なので鎌倉府と公方を庇う立場にありながらむしろ幕府から派遣された目付にひとしく、先般の大内義弘からの誘いのときのように逐一兄に注進するから油断がならなかった。
もし二度と公方滿兼を不利に追い込むような告げ口をすることがあれば、朝宗は管領憲定と雖も赦さず刺し違える覚悟で眼を光らせ緊張の日々を過ごしていた。
朝宗は、幼時から手許で養育してきた滿兼が愛おしくてならず、生命に代えても護り抜く覚悟であった。
そんな朝宗の危惧も杞憂に過ぎていった四年後の應永十六年（一四〇九）七月二十二日、前年の三代将軍義滿につづき鎌倉公方滿兼が三十二歳で病歿してしまった。
朝宗は滿兼の葬儀のあと屋敷へは戻らず僧衣のまま悲しみを抱いて領国上總國（千葉県中央部）へ向かった。
七十一歳の老軀を引き摺っての長旅であったがようやく長生郡長柄村に辿り着くと、長柄山胎藏寺に入った。
胎藏寺は長柄山の山間部にある古刹で、現在の行政区画では長柄町長柄山に当たる。JR外房線茂原駅からバスに乗り追分で降りて三十分ほど歩いたところにある。
寺伝によれば臨濟宗の寺ではじめ鳴瀧寺、その後眼藏寺とあらためたが、寛元年中（十三世紀）に千葉秀胤が祖父の冥福を祈って七堂伽藍を建て胎藏界の曼荼羅に擬えて胎藏寺とあらためたのだという。
現在は荒廃してしまっているが、犬懸朝宗はこの寺に五年間隠棲して應永二十一年（一四一四）八月二十五日に人知れずひっそりと世を去った。七十六歳であった。

# 第十一話　禪秀蹶起

上杉四家は宅間家の衰頽で三家になった。管領山内憲方は父憲顯が管領就任のとき嫡子憲將が病弱だったため兄憲藤の嫡子犬懸朝房に越後守護を譲ったことが口惜しく、朝房の弟朝宗に越後守護と管領交替制の交換を提案して同意を得たので憲方のあとを犬懸朝宗山内憲定、犬懸禪秀(氏憲)と継承してきた。

ところが次の山内憲基が管領奪還を画策して公方持氏を取り込み、禪秀を謀叛人に仕立てて幕府の救援を求め犬懸家を滅亡させた。

## 一

應永二十二年（一四一五）、犬懸禪秀（上杉氏憲）は関東管領に就任してから四年目の夏を迎えた。

山内憲定のあとを受けて管領の座に就いたとき、父朝宗はまだ上總國長生郡の長柄山胎藏寺に隠棲していた。

先々代公方氏滿から扶育を命ぜられて手塩に掛けて育て上げた滿兼が、氏滿の死後二十一歳で四代公方になったとき朝宗はすでに先代公方の関東管領をつとめていたので、傅役からひきつづき新公方の補佐役になった。

こういう関係は、それぞれが職分さえ弁えていればたがいに理解し合っているから理想的な上下関係になる。

事実四代公方足利滿兼と関東管領上杉朝宗の組み合わせは齟齬がなく、幕府の重臣たちも羨む間柄になった。

愛おしみつづけてきた滿兼が三十二歳で先立ってしまったときの朝宗の落胆ぶりは筆舌に尽くし難く、嫡男禪秀と雖もその悄愴を慰める術がなかった。

だから禪秀は、父朝宗が滿兼の葬儀のあと犬懸ヶ谷の屋敷へ戻らず胎藏寺に向かったのを黙って見送った。

隠棲してから五年後に七十六歳で世を去った朝宗の年忌にあたり、禪秀は終の栖となった胎藏寺に詣でた。

その道中で禪秀は、前公方と父との思い出に耽った。

禪秀は父と先代公方滿兼との関係を羨望して、もし滿兼が健在だったならば自分も父の遺志を継いで親子二代で補佐したであろうにと思いいたってその死を悔やんだ。

というのは、現公方持氏と比較してのことであった。

持氏は、まだ成人に達しない十二歳の公方である。

ときの管領は父朝宗のあとの山内憲定であったが、二年後に憲定が病に倒れて引退したので当番制で犬懸家に

まわり禪秀が十四歳の傲慢な公方と組むことになった。
持氏は権力志向で自己顕示欲が強く、我意を押しとおして諫言を嫌い、些細なことにも口を挟む嫌われ者で、愛すべきところのまったくない出来損ないの少年だったから、禪秀とははじめからしっくりいかなかった。
なにしろ、ただ世襲ということだけで実力も人望もない少年が、関八州と陸奥、出羽、それに甲斐と伊豆を含む十二箇国の大守をひけらかすのだから始末が悪い。
禪秀は父朝宗供養のこの旅が暫時の息抜きであった。鎌倉へもどればまた持氏と毎日顔をつき合わせていなければならないと思うと、なんとも気が重かった。
禪秀の一行は上總、下總、武藏を経て相模に入った。
ここまで天候に恵まれてきたのに、鎌倉と思しいあたりを黒い雲が覆っていた。雨になるかも知れなかった。

## 二

翌朝、禪秀の帰邸を待ち兼ねていた常陸國小幡城の越幡六郎がさっそく犬懸ヶ谷の屋敷を訪ねてきた。
越幡六郎は、常陸國笠間男体城の小田氏の支族で、犬懸家の家人であると同時に公方持氏に仕えていた。
六郎は禪秀と対面するとさっそく用件を切り出した。
「政所評定の裁決で所領を没収されてしまいました」
六郎は、茨城郡小幡の地を領有していた。
「なに、儂の留守に政所評定がひらかれたとな」
「呼び出されてさよう申し渡されました」
「して、裁決の理由はなんと」
「それが、われらの所業を公方さまがお怒りとか」
「なにを爲出かしたのじゃ」
「なにも身に覚えがなく、見当もつきませぬ」
「公方の気紛れだと申すか」
「山内のお屋形さまが公方さまのご裁断と申されました」
「なに、憲基どのがか」
「さようでござります」
禪秀は六郎の話が納得いかなかった。
(本人が覚えなしというのだから言い掛かりであろう。なにか企んでいるにちがいない。鼻を明かしてやろう)
そう考えた禪秀は、
「管領の召集なしに政所評定など開けるはずがない。それも緊急事態ならともかく吟味もせずに曖昧のままで裁決するなどもってのほかじゃ。儂が撤回させてやる」
禪秀が引き受けたので、六郎は愁眉をひらいた。
六郎を帰したあとで禪秀は、
(儂の留守を狙って六郎を陥れ、大袈裟に政所評定まで開いて処分するとは、なにか魂胆があるにちがいない)
そう思って眉を顰めると、腕を組んで虚空を睨んだ。
(公方の気紛れはいつものことだが、こんどのことは度が過ぎている。しかも越幡六郎を生け贄にするとはなんの企みか。誰か背後で公方を唆しているにちがいない)

そこまで思い至ったとき、先刻六郎が公方の傍らに山内憲基がいたといっていたのを思い出して膝を打った。
（憲基が謀ったな）
禪秀はそうにちがいないと頷いた。
憲基は、祖父憲方が関東管領職を犬懸家と交互に務めることにしてしまったことが残念でならず、常々周辺に愚痴っているときいているから、犬懸家の失脚を謀り、甘言を弄して公方に取り入っているにちがいない。
事実勝手気儘な少年公方持氏にしてみれば、禪秀よりも媚び諂う憲基のほうが与し易いに相違なかった。
（明日出仕して公方と憲基の鼻を明かしてやろう）
そう決意した禪秀の口許から微笑が漏れた。

## 三

翌日、公方邸におかれた政庁に出仕した禪秀は公方持氏と面会した。越幡六郎のときがそうであったようにこの場にも山内憲基が然り気無く同席していた。
禪秀はさっそく越幡六郎の処罰について糺したが、持氏は返答をしなかった。禪秀が執拗に詰め寄ると、追い詰められて逃げ場をうしなった持氏は開き直って、
「予の仕置に間違いはない」
「間違いなければその理由を確とお聴かせ下さりませ」
「諄いぞ禪秀。公方を詰問いたすか」
「政所評定は管領が開き管領自身が裁決するものでございますれば、なにゆえ管領の留守になされました」
「うるさい。予は東国の将軍じゃぞ。棟梁の持氏が家人の是非を裁いてなにが悪い。言い分あらば申してみよ」
「それでは秩序が保てませぬ」
「予は公平な裁きをいたしておる」
「越幡六郎の申し開きも聴かずに裁決なされたのはなにゆえでございまするか」
「予の眼に狂いがないからじゃ」
「ではどうあっても越幡六郎をお赦し下さりませぬか」
「棟梁である予の裁決に異を唱えるは逆臣じゃぞ」
持氏は憲基の手前居丈高な振る舞いをつづけたが、禪秀は逆臣とまでいわれてついに堪忍袋の緒が切れた。
「公方さまの道に外れた政事をお諫めもせず唯々諾々と盲従して管領職にありましても無益でございまするゆえ、それがしは進退を考えさせていただきまする」
「勝手にいたせ」
持氏が捨て台詞を残して去って行き、禪秀が席を立ったとき、傍らで含み嘲笑う憲基の顔が視野に入った。
犬懸ヶ谷の屋敷へ戻った禪秀は、持氏の暴言に、
「管領職辞任」
を仄めかす大鉈を振るって切り返してやりはしたものの、それでもなお腹の虫が治まらぬので、さらに追い討ちをかけて深刻な事態にまで陥れてやろうと目論み正式に、

『関東管領職辞任届』を認めて、鎌倉府に提出した。

これで困惑した持氏は宥めにかかり、越幡六郎の所領没収を撤回するにちがいないと、禪秀は多寡を括った。

だが、数日を過ぎてもなんの沙汰もなかった。

心配した越幡六郎が毎日訪ねてきたが、禪秀は、

「かならず撤回させるから、安心して待っておれ」

そう慰めて帰した。

きっと持氏は困惑して山内憲基あたりを宥め役に立てて寄越すであろうから、二人の鼻柱を挫き完膚無きまで打ちのめしてやろうと心積りして待ち構えていた。

禪秀は只管待ちつづけた。

だが、思惑は外れて意外な結末を迎えてしまった。

公方持氏は、なにかと口煩い禪秀が自分のほうから辞任届を出してきたのを物怪の幸いに、得たりやおうと受理すると、山内憲基を管領に就任させたのである。

報らせを受けた禪秀は、血の気が退いて眼が眩んだ。

「よくも儂を謀ったな」

地団駄踏んで口惜しがったが、後の祭りであった。

山内憲基は犬懸家が管領職に割り込んでいるのが面白くなく、山内家の独占に戻そうと野心を抱いていたので、一刻も早く管領になりたくて公方持氏に取り入った。

持氏のほうも叔父のような年頃で口喧しい禪秀よりも、六歳年長だけの媚び諂ってくる憲基のほうが御し易かったので、禪秀打倒への両者の思いは一致したのだ。

憲基が企て公方持氏が協力した罠に禪秀がまんまと引っ掛かってしまったのである。なんとも迂闊であった。

## 四

犬懸禪宗が関東管領職を罷免されたことで鎌倉府は騒然となり、噂はたちまち関東一円に広まっていった。

浄明寺犬懸ヶ谷の禪秀邸には嫡男憲方をはじめ憲秋、憲春の子息たちと、実弟氏顯、異母弟千坂高春らの親族が集まっているところへ、舅の甲斐守護武田信満、上野の岩松満純、下野の那須資之、下總の千葉兼胤らの女婿たちが相前後して続々と駆け付けてきた。

そして、嫡男憲方から詳細な事情説明を受けると、その卑劣な遣り口に熱り立った岩松満純が、

「抗議しても撤回せぬなら、国人たちを集めて力尽くで奪い返しましょうぞ」

そう性急に武力行使を迫った。

公方を抱き込んでいる山内憲基を斃してしまえば、庇護者を失った公方は禪秀に靡くにちがいなかった。

那須資之や千葉兼胤は岩松満純の発議に同調したが、武田信満が異論を唱えた。

「われらは同族争いのつもりでも、山内どのが公方さまを担げば私闘ではなく鎌倉府への謀叛となり、幕府に討伐されることになる」

「では、よい知恵はござりませぬか」
千葉兼胤が信満に責付いた。
「公方と管領を斃すには幕府の指示か、納得される大義名分がなくてはならぬ。さもなければ非難は免れぬ」
信満の思慮深い説得に禪秀は頷いた。
「儂は憲基を赦せぬだけで、これまで父祖が統轄してきた関東をこの手で乱す気など毛頭ない」
「しかし父上、このまま引き下がるのは無念でござる」
憲方は禪秀に詰め寄ると、
「われらにも意地がござる」
憲春が兄に追従した。
禪秀は応ぜず、しばらく腕を組んだまま瞑目した。
禪秀の決断を待つ人々に、緊張感がみなぎった。
禪秀とてもみなと思いはおなじで、蹶起を留まったままにしておいたのでは腹の虫が治まらなかった。
やがて禪秀は、意を決すると口をひらいた。
「与党たちに檄を飛ばして鎌倉に集結させ、威嚇いたせば憲基は怯み、公方も非を悔いるであろう」
「そのあたりまでがよろしゅうござろう」
信満が大きく頷いた。
それから半刻余りのあいだ禪秀屋敷は騒然となった。
国人たちへの使者が選ばれ、早馬が仕立てられて、屈強な者たちが次々に慌ただしく飛び出していった。
禪秀屋敷の異変に愕いた持氏と憲基は、

（すわ合戦）
そう早合点すると、
（遅れてはならじ）
すぐさま与党集めに取り掛かった。

その年の夏――。
禪秀、持氏、憲基からそれぞれ檄文を受けとった国人たちは合戦の準備を整えて続々と鎌倉に集まってきた。
ある一群は浄明寺村犬懸ヶ谷の禪秀屋敷に集結し、他の一群はおなじ浄明寺村御所内の公方屋敷へ向かい、またある一群は大町佐介ヶ谷の憲基屋敷に入った。
鎌倉は静寂を破られて一触即発の危機を迎えた。
禪秀は前に述べたように勢威を誇示するための与党集めであるから武力行使する心算はさらさらなかったが、憲基のほうはこの機会に持氏と謀り禪秀を謀叛人と極め付けていっきに葬ってしまうことにした。
だが、禪秀方の数には遠く及ばなかった。
憲基は、立ち後れたことを悔やんで舌打ちした。
（この戦力差ではとうてい勝ち目はない）
憲基は、逸る持氏を抑えて他日を期すよう説得した。
持氏は地団駄踏んで口惜しがったが、憲基が動かなくてはどうしようもなく、渋々承諾せざるを得なかった。
持氏は、憲基の献言に従って禪秀に和解を求めた。
禪秀方の急進派たちは持氏の申し入れを承服せず、

「この好機を逃さず粛清してしまおうではござらぬか」
そう息巻いたが、武田信満に同心した禪秀は冷静で、
「無位無官で公方に楯突けば謀叛人の謗りは免れぬ」
「しかし父上、このままでは引っ込みがつきませぬ」
嫡男憲方が急進派に同調して不満を繰り返した。
「ことを急げば同志の方々に汚名を着せることになる」
「さりとて父上――」
「諄いぞ憲方。管領に復してのちに公方と憲基を将軍家に叛心ありとて粛清いたせば大義名分が立つ」
そう諭して、持氏の和解申し入れを受け入れた。
和解が成立すると双方ともただちに与党の国人たちを帰国させたので、鎌倉は辛うじて戦火を免れた。

## 五

このころ、京の将軍家でも跡目騒動が燻っていた。
騒動の原因をつくったのは三代将軍義満であった。
義満の二人の男子はどちらも庶子で、長男義持の生母は側室藤原慶子、二男義嗣は愛妾春日局であった。
義持は、生後間もなく夭逝のあと子のない正室日野業子の許に引き取られ、嫡子扱いされて育てられた。
それから八年後に二男義嗣が生まれた。
この年義満は征夷大将軍を辞して太政大臣になった。
そのため九歳の義持が元服して四代将軍に就任した。
義満は嫡男以外をみな門跡に入れたから、義嗣も当然出家させられるはずであったが、義満の寵愛を一身に集めている生母春日局の懇願で梶井門跡入りは取り止めになり、義満の手許において育てられることになった。
義嗣が十五歳になった應永十五年（一四〇八）三月八日、義満は北山第に後小松帝の行幸を仰いだ。
義満はこのあと流行病に罹り、五月六日に五十一歳で死去してしまったから、この日が最後の盛儀であった。
この日義満は将軍義持に市中警備を命じておいて、法服に身を固めると義嗣を従えて四足門に出迎えた。
そして、祝宴にも義持でなく義嗣を陪席させ、関白よりも上席に坐らせると諸卿列座の前で天盃を賜わらせた。
従一位大納言右近衛大将である将軍の兄を差し置いて従五位下の義嗣に与えられたこの厚遇は義満が密かに、
（近々義嗣を元服させて将軍にする）
考えがあっての布石だったのかも知れない。
こうして、父義満の溺愛の許で育った義嗣が、
（ひょっとして父は、自分を将軍にするつもりなのか）
そう思い込んでしまったのも無理からぬことであった。
ところが明くる四月二十五日に十五歳の義嗣が親王に準じて禁中で元服した直後の二十七日に義満が病に倒れ、翌月六日に五十一歳で急逝してしまったのである。
（義嗣将軍）
の噂を払拭すべく、管領斯波義教とその父義將が素早

く動いて義持を不動の将軍に担ぎ上げてしまった。
義嗣は、この斯波父子の動きに憤懣遣る方なかった。
父義滿の支えで脚光を一身に浴び得意の絶頂にあった義嗣は、突然奈落の底へ突き落とされた思いであった。
義嗣は管領斯波義教に疎外されたことで義持を恨んだ。
それが昂じてやがて義持打倒を企てるようになった。
父義滿が身罷って六年後の應永二十一年（一四一四）九月、吉野朝方北畠親房の曽孫伊勢國司北畠滿雅が後小松帝の第一皇子實仁親王の即位に反対して挙兵した。
両朝合一のときの三條件のひとつ、
『今後の皇位は両統迭立とする』
を幕府が反故にしたのが原因であった。
義嗣はこれに同調して兄義持を廃そうと企んだ。
だが安定期に入っている幕府につけ入る隙はなく、ごく少数の反幕勢力を煽動してはみたものの彼らは慎重で容易に立ち上がろうとしなかったので失敗に終わった。
蹶起した北畠滿雅は、一色義範、京極持光、土岐持益らの幕府追討軍に伊勢國の居城阿坂城（三重県松阪市）を攻略されてしまったので、吉野朝九十七代後村上帝の第五皇子説成親王が仲介に入って両者を和睦させた。
このとき義嗣はなんらの咎めもなく不問に付された。
その義嗣が鎌倉府の騒動をきくと、また血が騒いだ。
密議した東国通の側近僧侶は、禪秀よりも義嗣とおなじ境遇にあって野心満々の又従兄弟足利滿隆のほうを唆して禪秀を抱き込ませるほうが得策との提案だったので、さっそく禪僧を密使に仕立てて鎌倉へ送り、滿隆に、
――同盟謀叛。
を教唆煽動した。
義嗣の計画は、
（義嗣が将軍を滿隆が鎌倉公方を弑して取って代わる）
という甘い誘いであった。
滿隆は二代公方氏滿の三男で、長兄滿兼が三代公方、次兄滿直が篠川御所、そして弟滿貞が稲村御所になっているのになぜか滿隆だけが権力の座に就けずにいた。
さらに滿隆は、甥持氏の四代公方就任当時から、
（公方の座を狙って謀叛を企てている）
黒い噂を立てられて鎌倉府から疎外されてしまった。
身に覚えがなく憤懣遣る方ない滿隆は、公方持氏の弟持仲を養子に迎えて二心なきことを示すと、勝長壽院（大御堂）の境内に北條政子が夭折した愛娘大姫を悼んで建立した新御堂に隠棲して蟄居生活を送っていた。
だから義嗣の誘いに応じようにも手勢がいなかった。
滿隆は好機を逃す無念を悔やんでいるうちに禪秀のことに気付き、なんとかして与させようと思いいたった。
滿隆は夜分密かに禪秀を新御堂の屋敷に呼び寄せた。
そのころ禪秀は、持氏がいっこうに禪秀の管領職復帰と越幡六郎の処分撤回をしないことに焦立っていた。

満隆から示された、
『大納言義嗣卿の密書』
を読んだ禪秀は、ことの重大さに愕き、
「これは無謀な計画です」
そう一笑に付しながら満隆に『密書』を返した。
だが、満隆は真剣だった。
父氏満以来疎外されつづけている公方家と、謀叛を仄めかす噂を流した管領憲定の山内家を深く怨んでいた。
だから公方持氏と山内憲基打倒は報復であった。
禪秀のほうも満隆からなにかと説得されているうちに心が揺れて、しだいに満隆の誘いに傾いていった。
(横暴な公方持氏と管領職独占を企てる山内憲基を斃すことは世直しになるし、満隆を奉ずれば叛乱は禪秀の謀叛ではなく公方家の内部抗争と看做されることになる)
そう結論づけた禪秀は、満隆との蹶起を決断した。
満隆は、思わず禪秀の両掌を握り締めて涙ぐんだ。

## 六

満隆との密議を終えた禪秀は病と称して屋敷に引き籠もると、慎重に蹶起の準備にとりかかった。
そして、公方足利持氏と管領上杉憲基を討てとの将軍の内書が届いたとする満隆の回状に副状を書いた。
二箇月後、禪秀の呼び掛けに応じた近隣の国人たちが三々五々鎌倉周辺に集まってきて決行のときを待った。
禪秀屋敷に集まった親族や郎党たちの武具は米俵に詰めて食料とみせかけ、馬に負わせて運びこませた。
應永二十三年(一四一六)十月二日、この日鎌倉御所では祝事があり、招待客のなかには満隆、持仲もいた。
宴酣の戌刻(午後八時)ごろ、二人はそっと酒宴を抜け出して鶴岡八幡宮裏の西御門にある保壽院へ急いだ。
そこには、禪秀と一族郎党、鎌倉在国の一団がいた。
このあたりは源頼朝、大江廣元、北條義時などの墓がある裏山に近く、軍団集結を気づかれる虞はなかった。
満隆と持仲から公方邸の様子を聴いた禪秀は、
「公方は確かにおられるな」
そう念を押した。
「一座は酔い痴れ、兄者は潰れて寝所へ移されました」
持仲が判然りそう答えた。
「よし。いまが好機じゃ。屋部と岡谷は予ての手筈どおり別働隊を塔の辻へ誘導して堀を切り、鹿垣を結び、走矢倉をあげ、持楯を突き立ててそれぞれに家紋の幕を張り、一揆の旗を掲げて山内の軍勢に備えよ。急げッ」
そう下知して邀撃隊の移動を確かめると、禪秀は、
「よいか。御所は囲むだけで攻め入ってはならぬぞ」
馬上で諄々と念を押しておいて、
「いざ出陣じゃ。ものどもつづけッ」
大音声で命ずると、雄々しく采配を打ち振った。
面目躍如のときを迎えた禪秀は、得意満面であった。

禪秀率いる本隊は雪ノ下へ駆け降りると、杉本寺下の六浦路を走り抜けていっきに鎌倉御所へ殺到した。
このとき、御所内で逸早く時ならぬ馬蹄の音が近付いてくるのをききつけた木戸將監滿範は、咄嗟に、
（犬懸入道の謀叛）
を察知して、ただちに持氏の寝所へ駆け込むと、
「上様。謀叛でござりまする」
前後不覚に寝入っている持氏に大声で怒鳴り伝えた。
「なにごとじゃ」
突然起こされて夢現の持氏は、不機嫌に質した。
「謀叛軍が押し寄せて参りまする」
「なに、謀叛軍じゃと。誰の謀叛なのじゃ」
「犬懸殿と思われまする」
「禪秀じゃと……」
持氏は咄嗟には信じられなかった。
というのは、今朝がた禪秀の嫡男憲方から、
「父の病は重くなるばかりでもはや本復の希みはありませぬゆえ、ふたたびのご奉公は叶わぬでありましょう」
そう聴いたばかりであったから、
――禪秀謀叛。
の報らせが俄かには信じられなかったのだ。
「まことか。まことに禪秀の謀叛なのか」
「ほかに誰がござりましょうや。相違ござりませぬ」
木戸滿範は、確信をもって答えた。
叛旗を翻せる者は禪秀をおいてほかにはいなかった。
持氏は近づく馬蹄の響きで我に返り、恐怖に戦いた。
「一刻も早く管領様のお屋敷へお立ち退き下さい」
急かされた持氏は、身仕度もせずに寝乱れ姿のまま警固の武士たちに護られてすぐ裏の十二所の山に入り、尾根伝いに間道を抜けて久木の岩殿寺へ出てしまった。
夜道で方角を誤り三浦へ向かってしまっていたのだ。
禪秀の追手がないのをさいわいにひと息入れて供奉の人数を点検したら五百余騎いたというのだが、不意の夜討ちに遭い慌ただしい逃走でのこの人数は多過ぎる。
どうも軍記物語の合戦動員人数は桁違いに多く眉唾物だ。「大軍」とか「そこそこ」と読み替えるといい。
持氏の一行は方角を定めて小坪に下り、飯島（和賀江島）の岬をまわって由比ヶ濱に出ると渚を避けて松林に見え隠れしながら佐介ヶ谷の憲基邸を目指して急いだ。
持氏に逃げられて威嚇の機会を逸した禪秀はすぐに、
（公方を憲基の屋敷へ逃げ込ませてはならぬ）
そう判断して踵を返し、塔の辻（小町の寶戒寺あたり）の別働隊と合流して佐介ヶ谷の憲基邸へ向かった。
この日は吉日らしく憲基邸でも酒宴が開かれていた。
そこへ扇谷氏定の二男持朝が三十騎ほどを率いて駆け込み、憲基に急を報らせて屋敷を固めるよう注進した。
憲基は、思わず持朝の肩を掴んで、
「なにッ、この夜更けに禪秀が謀叛したとはまことか」

半信半疑だったが、まもなく持氏の一行が逃げ込んでくるに及んで事態を知るとただちに応戦を下知した。
憲基のほうはさきの対立以来警備を怠りなかったので、公方屋敷とはちがって素早く臨戦態勢が整った。
禪秀は、持氏が憲基の屋敷へ逃げ込んだので弓引くことが躊躇われ、佐介ヶ谷を包囲して一夜を明かした。
翌三日は悪日なので双方仕掛けずに終日を過ごした。
そのあいだに両軍へ助勢する近隣の国人たちが続々と集まってきて、鎌倉は人馬で膨れ上がった。
甲斐の武田信満も老骨に鞭打って長駆着陣したが、禪秀が蹶起したことについては一言も触れなかった。

## 七

禪秀は、
(公方持氏には弓矢を向けずに、山内憲基だけを斃すにはどうしたらいいか。よい工夫はないものか)
あれこれ策を巡らしてみたのだが、公方軍と管領軍が合流してしまったのではどうしようもなかった。
(なんとかならぬものか)
そう思い悩んではならぬことへの苛立ちを繰り返しているうちに、いつか夜は白々と明けはじめてしまった。
昨日の悪日休戦で痺れを切らしていた両軍は、未明早々に戦端を開いた。
もうどう策を弄しても手遅れであった。
禪秀は、勝っても謀叛の謗りを免れぬならば、持氏をも討って憂さを晴らそうと臍を固め、采配を振った。
激戦は扇ヶ谷の気生坂(化粧坂)方面に移っていた。
断崖と幽谷を分ける急勾配の気生坂を押し上げて葛原ヶ岡を制圧すれば逆落としに佐介ヶ谷を攻略できる、と判断した岩松満純と澁川左馬助が先鋒になって、入れ替わり立ち替わりして攻め上げていった。
六日に山内家に与する扇谷家の上杉氏定が急遽気生坂に向かい防戦しているうちに、霜台(台)を守っていた上田上野介と疋田右京進が討ち死にしてしまった。
それを契機に岩松軍はいっきに気生坂を突破して押し登り、六本松辺りで上杉氏定に深傷を負わせた。
――気生坂の形勢危うし。
の報に憲基は、馬廻りの梶原但馬守、海上筑後守、同信濃守、椎津出羽守、飯田小次郎以下三十騎を防戦に向かわせたが、梶原と椎津は討ち死にし、海上、飯田らは深傷を負って無量寺口の陣へ逃げ帰ってきた。
勢いに乗った岩松、澁川両軍は、敗兵を追って佐介ヶ谷に雪崩込み、國清寺(佐助)に火をかけた。
炎は忽ち燃え拡がって憲基の屋敷にも及んだので、邸内は大混乱に陥り、守備兵たちは俄かに戦意喪失した。
持氏と憲基は裏山へ逃れて大佛坂切通し、極楽寺坂切通しを抜け、稲村ヶ崎、七里ヶ濱を伝い、腰越、肩瀬(片瀬)の汀を経て黄昏どきには小田原まで逃げ延びた

が、そのあいだに警固の兵は悉く討ち取られ、途中扇谷氏定も深傷に耐えられず藤澤道場（遊行寺）で自刃した。

しかしその小田原も不穏で禅秀方の土肥、土屋の手勢に宿を放火されたので、箱根へ逃れて一夜を明かした。

持氏は、混乱の中で憲基を見失ってしまったが、さいわいにも翌七日の午の刻ごろに箱根別當の證實と出会ったので、その案内で駿河の大森城（裾野市）に入った。

だが、ここもまた禅秀方の甲斐に近く落ち着かぬので、結局藤澤で自刃した扇谷氏定の女婿で駿河守護の今川上總介範政を頼り、瀬名屋敷（静岡市）に落ち着いた。

いっぽう、持氏と逸れた憲基は、伊豆の國清寺（伊豆の国市奈古谷）に案内されたが禅秀の追手に怯えて落ち着かず、北へ奔って伯父の越後守護上杉房方を頼った。

討ち漏らした悔いは残るが、持氏と憲基を追放したことで、禅秀の蹶起はいちおう成功した。

鎌倉府は、満隆が公方に坐り、禅秀が管領に返り咲く手筈を整えていたが、義嗣のほうはどうなったのか、蹶起の報らせはまだ届いていなかった。

幕府に異変がないとすれば、果たして将軍義持が鎌倉府の新体制を承認するかどうか、禅秀は不安だった。

その頃、今川範政が禅秀の謀叛を京へ注進していた。

## 八

今川の急使は十三日の夕刻に京へ到着したのだが、生僧将軍義持と管領細川満元は高辻烏丸の因幡堂へ参籠していて不在だったので在京の守護大名が招集された。

だが、彼らは東国の複雑な政治情勢に疎く、事態収拾の対策が立てられないまま徒らに拱手傍観していた。

鎌倉の争乱を知った将軍義持は激怒して、ただちに駿河守護今川範政と越後守護上杉房方に足利満隆、持仲、上杉禅秀追討の御教書を下すと同時に、山名時熙にも幕府を挙げて持氏を救援するよう下知した。

そのころ関東では、禅秀軍が持氏、憲基方の鎮圧に躍起になっていたが、しかし燻りは容易に消せなかった。

いかに持氏が高慢横暴であろうとも、公方を排斥した禅秀を非難する保守派の国人たちが意外に多かった。

禅秀方がそれら国人たちの掃討に手古摺っているあいだに、江戸、豊島、二階堂、宍戸の国人たちと南一揆が入間川（埼玉県狭山市）で禅秀打倒の旗を掲げた。

禅秀はすぐさま嫡男憲方、三男憲秋に出陣を命じたが、憲秋は病を理由に渋ったので満隆の養子持仲が加わり二十一日に小机島（横浜市港北区）まで兵をすすめた。

両軍は二十三日に世谷原（横浜市瀬谷区瀬谷）で衝突して終日の合戦になったが、憲方軍は敗れて鎌倉へ逃げ帰り、持仲軍も苦戦のすえ二十五日に敗走してきた。

この敗報が関東一円に伝わると、それまで態度を曖昧にしていた国人たちが一斉に禅秀打倒に立ち上がった。

なかでも上野（群馬県）では、蹶起のときに先鋒をつ

とめ気生坂での大功を鼻にかけて高慢な振る舞いの多い岩松満純を、苦々しく思う新田一族の里見、鳥山、額田、大島、大館、堀口、それに世良田、桃井らの国人たちは、かつて持氏の祖父二代公方氏満が将軍家と不仲になったとき、自分の所領を分け与えて与党にと頼られた恩義を感じて持氏に荷担することに決した。

そして、出家していた新田義貞の孫六郎を還俗させて総大将にいただくと、館林のあたりに打って出て上野の大半を従えたので、由良、横瀬の一族や長尾らの国人たちも同調して十二月十八日に岩松軍と合戦になり、家老の金井新左衛門を討ち取った。

怒った岩松満純は、大軍を率いて新田総軍と二十二日に合戦を挑んだが、逆に追い散らされてしまった。

蹶起に成功して、いちどは鎌倉府を掌握した禪秀だったが、その後の形勢は次第に不利に転じていった。

## 九

年が明けた。

元日早々、満隆と禪秀は本隊を率いて世谷原に出陣し、南一揆や江戸、豊島軍と合戦してこれを破った。

これが禪秀にとって最後の勝利であった。

将軍義持の御教書を受けた越後守護上杉房方が憲基を伴い信濃守護小笠原政康軍とともに碓氷峠を越えて関東に入ってきており、駿河守護今川範政軍もまた箱根で禪秀軍を破って小田原のあたりまで迫っていた。

北から上杉・小笠原連合軍、西から公方持氏を奉じた今川軍、そして東から佐竹、江戸、豊島の混成軍に攻められては四面楚歌で、まさに袋の鼠になってしまった。

こうなると、浮き足立って与党の結束が乱れ、離叛する国人たちが出て収拾がつかなくなり総崩れになった。

禪秀は、世谷原の陣を撤収して鎌倉へ戻り陣容の立て直しを図ったが、ときすでに遅く、幕府軍が迫ってきていて三浦に後退せざるを得なくなってしまった。

だが禪秀は鎌倉に拘っていた。管領を務めた鎌倉府を捨て切れず、ここを先途と戦っての終焉の地に希んだ。

禪秀は一族郎党を引き連れて六男の鶴岡若宮別當寶性院快尊法印の神宮寺雪ノ下御坊に立て籠もった。

そして、全員を一堂に集めると訣別の辞を述べた。

「今日まで儂を信じて従いてきてくれた其方たちにあらためて礼を申す。武運拙く敗れはしたが儂の蹶起は決して謀叛ではない。公方さまの狂気とそれに媚び諂う山内憲基を糺して正義の筋目を通すためであったのだが、ことが受け容れられず幕府の責めを負うことになってしまいまことに無念であった。いまとなってはそれだけが心残りじゃ。其方たちは春秋に富む身なれば一刻も早くこの場を落ちよ。けっして死に急いではならんぞ。よいな」

そう言い遺すと嗚咽する郎党たちを残して憲方、憲春、快尊、禪瑾の子等を伴って御坊の中へ入り、一族の男女

四十二人は滿隆、持仲とともに枕を並べて自刃した。
郎党たち五十五人も、一人残らず禪秀に殉じた。
舅の武田信滿は世谷原を離脱したが、追い詰められて二月六日に天目山栖雲寺（甲州市大和町）で自刃した。
また同盟謀叛を誘ってきた将軍義持の弟義嗣は、結局挙兵に失敗して高雄山神護寺（京都市右京区）へ逃れ髻を切って出家し、遁世を装ったが捕えられて相國寺に監禁され、翌年一月四日に山内憲基が二十七歳で病歿したおなじ月の二十四日に誅殺された。二十五歳であった。

# 第十二話　ふたつの大乱

五代将軍義量が病死したので公方持氏は前将軍義持に猶子を願い出たが拒否された。

後継将軍は義持の弟四人の籤引で決まった。

新将軍義教は従属せぬ公方持氏の討伐を管領憲實に命じた。やむなく持氏を攻めて自害させた憲實は法体となって西方行脚に出た。

その後、下總の結城氏朝が持氏の遺子を擁して挙兵したが鎮定され、結城父子は戦死、三人の遺子は京に送られる途中垂井で二人が斬首され少年の永壽王丸は放逐された。

## 一

上杉禪秀が蹶起に敗れて一族郎党とともに鎌倉の神宮寺雪ノ下御坊に立て籠もって自害したとき、嫡男憲方、五男憲春、六男快尊、七男禪瑾の四人は父禪秀に殉じたが、ほかの三人の子らは行動を共にしていなかった。

二男持房は叔父氏朝の養子になっていてこのとき京にいたし、四男教朝は常陸の大掾滿幹の養子になって養父の許におり、三男憲秋は病床にあって父の異母弟千坂高春の屋敷に引き籠もっていてともに難を逃れた。

憲秋は内乱が鎮まったあと叔父の千坂高春に伴われて鎌倉を去り、兄持房のいる京の叔父氏朝を頼った。

将軍義持はこの三人を受け入れて幕府に出仕させた。

犬懸家を斃して管領職を山内家の独占にした憲基だったが、翌年一月四日に二十七歳で病歿してしまった。

憲基には嗣子がなく、弟義憲はすでに常陸の佐竹義盛の養子になっていたので、越後上杉を継いだ伯父房方の二男憲實を養子にして関東管領に据えたことから以後は同族の越後守護家が関東管領家になってゆく。

この争乱で持氏は山内と犬懸の両管領家を喪った。

新管領の憲實はこのとき僅か十歳の少年だったから公方の補佐などつとまるはずはなく、鎌倉府は二十二歳の持氏の専制となり、公方の独裁態勢に入ってしまった。

なにかにつけて口煩く、苦言や忠告で諫める眼の上の瘤の禪秀と、媚び諂ってうるさく付き纏う憲基の新旧管領を相次いで喪いさっぱりした持氏は、誰憚ることなく勝手気儘に振る舞い、ますます横暴が募っていった。

公方持氏は野心家でひそかに将軍の座を狙っていた。

将軍義持は三十九歳で十七歳の嫡子義量に将軍職を譲

ったが、病弱だった義量は二年後に病死してしまった。
義持はほかに子がなかったので、公方持氏は義持が烏帽子親で持の一字を戴いていることから建長寺の僧を派遣して自分を猶子にしてほしいと請うたが、義持は持氏の野心を見抜いて使者との対面を拒み追い帰した。
義持は義量のあとの将軍は弟たちのうちから選ぶほかないとは思っていたが、畠山、斯波、細川の管領家や山名、一色、赤松、京極の侍所所司家それぞれの思惑を慮ると、誰を指名しても差し障りがあるので躊躇われた。
ときの管領畠山満家が義持に執拗に迫ったが、いくら督促しても埒が明かないので、満家は義持の信任厚い幕府の最高顧問三寶院満濟に真意を聞き質すよう依頼したが、それでもなお義持は指名しなかった。
満濟は困り果てて、
「籤引きで決めてはどうか」
宿老たちに提案して、義持の承認を得た。
そこで満濟は梶井義承、青蓮院義圓、大覺寺義昭、相國寺永隆四人の弟の籤をつくり、それを山名時凞に封をさせて畠山満家に石清水八幡宮の神前で引かせておいた。
そして、三年間将軍空位のまま大御所として過ごした義持が應永三十五年（一四二八）一月十八日に四十三歳で逝去すると、翌日諸大名が一同に会した室町殿で畠山満家が開封して四男青蓮院義圓が当籤した。

義圓は還俗して義教と改め六代将軍の座に就いた。
これが前代未聞の籤引将軍といわれる所以である。
公方持氏は、自分が候補のなかに入れてもらえなかったことに強い不満を抱き、実力で乗っ取ろうと京への出兵を企てたが、管領上杉憲實に制止された。
腹の虫がおさまらぬ持氏は、下野の那須一族の内紛につけこんで禪秀の婿で嫡流家の那須資之を攻めた。
資之は禪秀の乱後は幕府の御扶持衆になっていた。
那須郡に隣接する陸奥國白河郡の結城氏朝は資之と親交を深めていたため捲き込まれて攻め立てられた。
将軍義教は公方持氏の暴挙を赦せず稲村御所足利満貞、蘆名、伊達らの東北諸将をはじめ越後、信濃、駿河守護らにも那須、結城の救援を命ずると、自身も出陣して持氏を斃そうとしたが宿老たちにとどめられた。
このころから将軍義教と公方持氏との対立がはじまり、二年後の永享四年（一四三二）に決定的になった。
この年九月、将軍義教が富士遊覧と称して駿河國に下向することになったとき、
（将軍みずから出陣して鎌倉の公方持氏を討つ）
噂が流れたので、管領上杉憲實が幕府に対して、
「雑説あり、中止されたい」
旨を申し入れたが聞き入れられなかった。
義教は駿河へ下り、今川の駿府館に入ると、
「将軍が下向したからには公方は伺候するであろうから

討て。もし無視いたさば叛心ありと断じて処刑せよ」
そう命ずると、準備万端を整えさせていまや遅しと待ったのだが、持氏は病と称してついに現れなかった。
義教は、持氏の無礼極まる行為に怒り心頭に発した。
こうして将軍と公方のあいだは一触即発の危機を迎えたのだが、幕府では管領などの重臣たちが、鎌倉では管領上杉憲實が懸命に宥めてことなきを得ていた。
しかし、重臣といえどもいつまで主君を抑えられるものではなく、険悪状態はしだいに表面化していった。
おりもおり、甲斐守護武田信長が鎌倉府と紛争を起こし、追われた信長は隣国駿河の守護今川範忠を頼った。
持氏が信長を差し出すよう強引に要求してきたので、範忠は幕府に注進して持氏の理不尽を訴えた。
幕府は上杉憲實に持氏の非を咎めるよう命じた。
憲實は持氏を窘めて、その無謀を諫めた。
このとき持氏は渋々承知したのだが、翌年信濃の国人村上頼清が守護小笠原政康との境界争いで持氏に援けを求めてきたので小笠原攻めの軍を起こそうとした。
憲實は、またもや持氏の軽挙妄動に呆れ果てながら、「信濃國は幕府の御分国、小笠原政康は幕府の御家人ゆえ小笠原を討つことは即ち幕府への不義でござります」
そう諄々と説いて懸命に諫止した。
だが憲實の大仰な物言いが持氏の癇に障って討伐されるとの噂が流れたので、憲實は素早く藤澤道場（遊行寺）に逃れ上杉の与党たちが鎌倉に馳せ参じてきた。
そのなりゆきに愕いた持氏は他意なきことを憲實に伝えて折れたのでことはいちおう収まったかにみえた。
しかしその燻りがふたたび燃え上がったのは翌永享十年（一四三八）の持氏嫡男賢王丸元服のときであった。
公方の名は将軍の一字を戴くのが慣例になっていた。
初代公方基氏は成人後の就任であるから例外として、祖父氏満と父満兼はともに三代将軍義満の満をいただき、四代の持氏は四代将軍義持の持をいただいていた。
ところが持氏は管領上杉憲實のすすめる現将軍の下の一字をいただく慣例を諾かずに、将軍家代々の名告りである義をとって十三歳の賢王丸を義久と名告らせた。
公方家は将軍家と対等であると主張したのである。
このとき執拗に慣例を迫った憲實は暗殺される風説が立ったので、身の危険を感じた憲實は賢王丸の元服式に出席せず領国上野に帰って平井（藤岡市）に築城した。
持氏は自身将軍義教を蔑ろにしておきながら、自分の意向に従わず元服式にも出席しないで勝手に帰国した憲實を赦せず、征討軍を率いて武蔵の高安寺に出陣した。
憲實は禪秀の二の舞を恐れて幕府に救援を求めた。
将軍義教はなにかにつけて幕府に楯突き横暴な振る舞いの多い持氏をかねてから苦々しく思っていたので、この機に乗じて抹殺してしまおうと思い立ち、持氏討伐の綸旨をいただくと諸国の守護大名に動員令を発した。

こうして公方と管領の対立は将軍義教と公方持氏の戦いに発展していった。世にいう〈永享の乱〉である。

将軍義教はみずから持氏征伐に向かおうとしたが管領細川持之らに諫止され、代わりに京にいて難を逃れた禪秀の二男上杉持房に二万五千を預けて出陣させた。

持房にとっては父の仇を討つ好機到来であった。

いっぽう持氏のほうは、管領上杉憲實に助勢する国人のほうが多かったので劣勢のうえに幕府の大軍に加わわれてははじめから勝敗の帰趨は明らかであった。

東海道を下ってきた上杉持房と駿府で合流した今川範忠の軍勢は箱根、早川尻、大磯らで持氏方を一蹴した。

寝返った三浦時高が鎌倉へ攻め入って放火した。

このころ、平井へ逃れていた管領上杉憲實は領国越後や上野の兵を率いて武藏國分倍河原（府中市分梅町界隈）まで進んだが、そこに陣を取ったまま動かなかった。

「上杉管領軍出陣」

の報をきくと、持氏派だった諸将が馳せ参じてきた。

持氏は見限られたのである。

周辺に手勢が寡くなった持氏は海老名（海老名市）から鎌倉へ敗走の途中葛原（藤沢市）のあたりで管領家の家宰長尾忠政と出会ってしまい、忠政に護衛されて鎌倉に戻ると山ノ内の浄智寺に入り、さらに稱名寺（横浜市金沢区）に移って剃髪し、神妙に出家した。

幕府の管領細川持之は上杉憲實に書状で、

「公方持氏を早く自害させるよう」

命じてきた。

憲實は出家した持氏を隠居までにとどめたいと考えていたので、将軍義教に使僧を送って持氏の助命を嘆願したのだが、義教は使僧に面会を許さず追い帰した。

年が明けても憲實は持氏誅伐を躊躇っていた。

業を煮やした将軍義教からついに憲實に、

「わが命に従わねば謀叛人と看做して処罰する」

旨を通告してきた。

持氏を庇えば憲實自身も同罪になってしまう。

追い詰められた憲實はやむなく意を決して扇谷家の上杉持朝と千葉胤直に命じて永安寺（鎌倉市）を攻めさせ、謹慎中の公方持氏と篠川御所足利満直を自害させた。

このとき憲實は、報國寺（鎌倉市浄明寺）に蟄居していた持氏の嫡男義久を十四歳の少年だからといって助命嘆願していたがこれも許されず、やむなく自害させた。

世の無情を果無んだ憲實は、自責の念に駆られて弟の越後守護上條上杉清方に管領職を譲ると、出家して伊豆の國清寺（伊豆の国市奈古谷）に隠棲してしまった。

その後の憲實は法体で西方浄土を目指して諸国を行脚し、〈應仁の乱〉勃発前年の文正元年（一四六六）三月六日周防國（山口県東部）で五十七歳の生涯を閉じた。

九歳で関東管領になった憲實は、将軍の座を狙う公方持氏を諫めたり宥めたりして幕府と対抗し衝突を繰り返

す強気の持氏と将軍家との調停につとめ、鎌倉府の安泰に腐心しつづけたが、結果は意に反して公方持氏を斃す破目に陥ってしまうという不本意な生涯であった。

この〈永享の乱〉によって四代八十年つづいた鎌倉府は事実上消滅してしまった。最後の公方持氏は治世三十年、幕府に反抗しつづけた四十二歳の生涯だった。

だがこのとき、義久の弟安王丸、春王丸は下野國に、永壽王丸は信濃國に逃れたので持氏の血統は残った。

## 二

このころ、下總國結城郡（茨城県結城市）の結城氏という豪族は、下野國（栃木県）の小山氏、常陸國（茨城県）の佐竹氏と並び称される関東有力の国人であった。

蛇足だが、結城市は栃木県小山市と茨城県水戸市を結ぶＪＲ水戸線の沿線にあって、結城紬で有名である。

結城氏は平將門の乱を平定した藤原秀郷の末裔小山朝光が、源頼朝の挙兵に参加して活躍した功により結城郡を与えられて地名を名告りにしたのが起こりである。

朝光の嫡孫廣綱が南北朝争乱のとき足利方だったこともあって、末裔氏朝は禪秀の乱でも公方持氏を支持したので敗れて結城城に逃げ帰り、公方家再興を図った。

そして一年後に氏朝は逃散した公方派の国人たちに檄を飛ばして集めると、下野國日光山に匿っておいた春王丸、安王丸を迎えて棟梁にいただき兵を挙げた。

これを知った信濃國佐久郡の大井持光は、匿っていた永壽王丸に二人の護衛をつけて密かに結城城へ送った。

三兄弟が父持氏の弔い合戦に担がれたのである。

上杉清方は兄憲實の公方弑逆の怨みを蒙ることになったのだ。前任者の責任をとらされる迷惑な話である。

だが、愚痴ったところで相手は管領を倒して公方を復活させようというのだから、受けて立つより仕方がない。

清方は近隣の国人に檄を飛ばして集め、廳鼻和の上杉憲信を大将に白井の上野守護代長尾景仲を援将に命じて出陣させると、幕府に結城氏朝らの謀叛を急報した。

上杉憲信軍が苦林（埼玉県入間郡毛呂山町）に長尾景仲軍が入間川（狭山市）に布陣しているところへ、清方が管領軍を率いて合流すると結城を目指して進軍した。

管領軍と上杉与党の軍勢が結城城を包囲しているところへ幕府の大軍が到着した。将軍義教から結城攻めの総大将を命ぜられたのは禪秀の二男持房であった。

持房は幕府に仕えていた叔父氏朝の養子になっていて乱のとき鎌倉にいなかったため生き残ったのである。

父を斃した公方持氏の遺子攻めを命ぜられたことは、幕府軍を借りて父の仇を討たせてもらえることであった。

いま総大将持房には父禪秀の霊が乗り移っていた。

年が改まった永享十三年（一四四一）の元日に火蓋が切られたこの結城合戦は、いかに堅城と雖も救援のない籠城戦で勝てるはずがなく四箇月あまり持ち堪えたもの

のついに陥落してしまい結城氏朝・持朝父子は戦死、公方持氏の遺子春王丸、安王丸、永壽王丸は捕えられた。
三人は京へ送られる途中美濃國垂井（岐阜県不破郡垂井町）の金蓮寺で春王丸と安王丸は斬首されたが、末子の永壽王丸はまだ六歳の幼児だったので成人するまで守護土岐持益預けとなって一命をとりとめた。
その翌月将軍義教が赤松満祐、教康父子に誘殺される事件が起こり、のちに〈嘉吉の乱〉と称ばれるこの政変によって永壽王丸は中途半端のまま放置されてしまった。
幕府は将軍の急死に慌てふためき動揺しているところへ細川、畠山両管領家の対立が因で土一揆が起こったりしてててんやわんやであった。
ようやく足許が鎮まった一年半後の嘉吉二年（一四四二）十一月七日、九歳の嫡男義勝が元服して七代将軍になったのだが半年後に赤痢に罹り死去してしまった。
幕府は慌てて八歳の弟義成（後の義政）を家督相続させて八代将軍にしたのだが、三代将軍義満のあと四代義持が九歳、五代義量が十七歳、籤引きで決まった六代義教の三十六歳は例外として、七代義勝が九歳、そして八代義成と幼将軍がつづき不安定期であった。
いっぽう鎌倉府のほうも公方持氏が斃れてからずっと公方空位のまま管領政治がつづいたが、その間管領清方は兄憲實が斃した持氏の遺子たちを自分の手で葬ってしまったことへの自責の念にかられて苦悩しつづけていた。
それが昂じてか、文安五年（一四四八）上洛しての帰途春王丸、安王丸が処刑された美濃國垂井のあたりまできたとき突然おもいあまって自害してしまった。
清方には三人の子がいたが管領は山内宗家が勤める不文律になっていたので、憲實の嫡男憲忠が就任した。
だが憲忠はまだ十七歳の若輩だったので公方空位の不安定な鎌倉府を取り仕切るのは無理と判断され、清方の二男で越後守護の房定が政務を代行することになった。
房定は、公方空位のまま鎌倉幕府の北條執権政治のような上杉管領独裁政治になるのは避けるべきだと考えて関東の国人たちと図り美濃守護土岐持益預りになったまま放置されている前公方持氏の遺子永壽王丸の公方就任を再三幕府に要請したが、なかなか承認を得られなかった。
幕府にしてみれば代々将軍家に楯突く公方家が忌々しく、空白期をさいわい鎌倉府を潰そうと考えていた。
だが、房定の当を得た説得に折れてついに承認した。
十四歳の永壽王丸は管領憲忠と房定に伴なわれて上洛すると、元服して将軍義成に拝謁し、その一字を賜って公方成氏となり、鎌倉入りした。
この時点で房定は政務代行を山内家の家宰長尾景仲と扇谷家の家宰太田資清に任せて越後へ帰っていった。

長尾景仲と太田資清は、
「東国不雙の案者」
すなわち、東国に並ぶ者ない智恵者といわれていた。

## 三

五代公方になった成氏が鎌倉府に入ると、永享の乱で公方派だったため疎外されていた国人や、公方の下の管領のそのまた家宰の長尾や太田が政務を預かっていることに不満を抱いている国人たちが成氏の周辺に集まり、管領を排除しようとする不穏な様相を呈しはじめた。

公方就任に尽力した恩を忘れて管領を遠ざけ、公方直裁を図ろうとする成氏の裏切りに腹を立てた長尾と太田は、機先を制して五百騎で御所を襲撃した。

江の島に後退した公方軍が盛り返してくると上杉軍は扇谷上杉の守護国相模の糟屋荘（伊勢原市）に後退、管領憲忠は七澤要害（厚木市）に移るなどして一進一退の攻防を繰り返し、容易に結着がつかなかった。

動乱に発展することを憂えた幕府が調停に入って抗争は落着したかに見えたのだが、火種は燻ぶりつづけた。

そして四年後の享徳三年（一四五四）十二月二十七日、公方と管領が全面的に対決する事件が起こった。

仕掛けたのは公方派だった。

結城成朝、武田信長、里見義實、印東式部らが成氏と謀議して管領憲忠を西御門邸へ呼び出した。

憲忠は警戒怠りなく二十名の供を連れて屋敷を出た。

ところが、西御門邸へ到着するや否や結城成朝の手勢三百が襲いかかってきた。予期せぬ多勢に防ぎようがなく、たちまちのうちに全員討ち取られてしまった。

管領上杉憲忠はこのときまだ二十三歳の青年だった。

騙し討ちされて上杉の当主を喪った管領派は直ちに臨戦態勢に入った。公方派と管領派の全面衝突である。

管領派は憲忠の後を継いだ弟の房顯を奉じた家宰の長尾景仲らが高安寺（府中市）に布陣した公方軍と分倍河原（府中市）で戦ったが不意を衝かれて敗れ、禪秀の三男犬懸上杉憲秋（顯）と扇谷上杉顯房が負傷して高幡寺（高幡山金剛寺）に入り自害した。

公方軍を倒せぬ管領軍は上杉の所領がある常陸國へ後退し、小栗城（筑西市）に集結して軍容を整えると、公方成氏の謀叛を幕府に訴えて救援を要請した。

幕府は越後守護上杉房定、駿河守護今川範忠らに成氏討伐を命じ、房定が上野平井城に入ったころには駿府（静岡市）を発した範忠軍はすでに鎌倉へ乱入して公方軍を掃討すると、御所をはじめ谷七郷の神社仏閣を悉く焼き払ってしまったので鎌倉は見る影もなくなった。

亡所と化した鎌倉へは戻れぬ公方成氏は武藏府中の高安寺から村岡（熊谷市）を経て下總國葛飾郡古河（茨城県古河市）へ逃れた。そこは鎌倉府の御料所であった。

公方派は下河邊荘の古河城を成氏の御座所にした。

成氏が鎌倉に君臨したのは、僅か五年であった。
この年今川範忠が歿すると、成氏はすかさず下總、武藏へ進出しては管領軍と小競り合いを繰り返した。
公方成氏と管領上杉との抗争は、利根川を挟んで北関東の国人勢と南関東の国人勢との対立でもあった。
山内上杉は領国上野にいずれも利根川に近い白井城（渋川市）と平井城（藤岡市）があったので、廳鼻和上杉憲信に深谷城（深谷市）を築かせて守備を固めた。
扇谷上杉は領国のうち相模に本拠をおいていたので北方の防衛に武藏の固めを急がせ、当主持朝に河越城（川越市）、家宰太田資清（道眞）に岩付城（岩槻市）、その子資長（道灌）に江戸城（東京都）を築城させた。
こうして管領家の上杉一族が上野、武藏、相模を支配したので、成氏はついに鎌倉への帰府は叶わなかった。
管領を斃して直裁を謀り動乱を起こした成氏は、幕府にとってもっとも危険な存在であった。
このころ名を義政とあらためていた将軍義成は、元服させて一字まで与えた成氏が鎌倉府を勝手に独裁しようとしたことは、そのさき幕府から分離独立して倒幕を狙うにちがいないと憶測して、叛乱の芽は早いうちに摘みとるに如くは無いからいまのうちに糾弾してしまおうと決断すると、成氏を公方職剥奪追放の処分にした。
そして、すぐさま香嚴院の禅僧で二十四歳の弟を還俗させると、一字を与えて政知と命名して鎌倉公方にした。
政知は幕臣に護衛されて関東へ下向したものの、鎌倉は前に述べたとおり戦乱で焦土と化してしまっていて入ることができなかったので、伊豆の堀越（伊豆の国市韮山）に留っていたがついにそのまま居座ってしまった。
成氏は公方を剥奪されてもそのまま自称していたので、利根川を境にして下總古河に成氏、伊豆堀越に政知と東西に二人の公方ができてしまった。
といっても南北朝のような帝を奉戴しての大規模な争乱ではないから、地域も規模も小さく限定されていた。
以後、関東の抗争は鎌倉を離れたところでつづいてゆく。

# 第十三話　扇谷家宰　太田資長（道灌）

永壽王丸は管領憲忠に迎えられて公方成氏となったが遺恨を抱いて憲忠を騙し討ちしたので公方派と管領派の対立になり、幕府の助勢を得た管領派が成氏を古河へ駆逐した。

扇谷上杉の家宰太田道灌は、河越、岩槻、江戸城を拠点にして関東を征圧し、大いに武名を挙げたので山内顕定に乗っ取られると囁かれた主君扇谷定正は疑心暗鬼になり、それが昂じてついに相模の糟谷館に呼び出すと道灌を騙し討ちにしてしまった。

## 一

利根川を挟んで自称古河公方足利成氏と対峙する上杉管領方の一翼を担い河越・岩槻・江戸の三城を築いて防衛戦を固めた扇谷家は、じつは上杉氏嫡流家であった。

始祖上杉重房が鎌倉幕府六代将軍になる後嵯峨帝の皇子宗尊親王に供奉して鎌倉へ下向するとき、嫡男頼重は同行したが嫡孫重顕は伏見院の藏人だったので残った。

そのため、鎌倉に腰を据えた頼重の三男憲房の系が宅間・犬懸・山内の三家に分かれて管領家になったのだ。

重顕の嫡男朝定は建武四年（一三三七）足利尊氏の命により丹後（京都府）守護になったのだが、子に恵まれなかったので従弟藤成の二男顕定を養子にした。

その顕定がのちに関東へ下向して河越城主になったのだが顕定にも子がなく、養子に迎えた兄頼顕の子氏定が鎌倉入りして扇谷に居館を構えたことから扇谷家といわれるようになったのである。

ついでながら家宰の太田氏についても述べておこう。

太田氏の祖は、治承四年（一一八〇）以仁王を奉じて挙兵したが事前に発覚して平家の追討を受け宇治平等院で自害した源三位頼政であるから、清和源氏の系である。

四代の孫隆綱は頼政の曽孫と知った土御門帝から丹波國船井郡五箇荘（京都府南丹市日吉町）を与えられた。

隆綱の孫の資國が桑田郡太田郷（亀岡市薭田野町太田）に移ったとき、太田の地名をとって名告りにした。

そのころ資國は伏見院の藏人上杉重顕に仕えていたことから二代後の顕定が鎌倉へ下向するとき供奉した。

資長の父資清（道眞）は應永十八年（一四一一）の生

まれで、十九歳のとき上洛して籤引将軍義教に仕え與野（さいたま市）と笹目（埼玉県戸田市）を拝領した、家督を継ぐと五歳下の扇谷持朝の家宰をつとめた。

公方成氏と管領山内憲實が対立した〈永享の乱〉では、持朝・資清主従は同族山内方について協力した。

山内家の家宰が長尾景仲（昌賢）に替わったころ、扇谷家も持朝の子顯房が家督を継いで当主になった。

その顯房は成氏との戦いに敗れ多摩郡夜瀬（三鷹市）で自害してしまった。まだ二十一歳の若武者であった。

資清はこのとき四十五歳であったが、家督を嫡男資長に譲って出家すると河越屋敷を出て入西郡越生の自得軒に隠棲した。そこは長昌山龍隠寺の境内でいまは資清・資長父子の墓と伝えられる寶篋印塔の墓碑塔がある。

当主になった資長はこのとき二十四歳であった。

資長は、永享四年（一四三二）資清の嫡男として鎌倉扇谷の館（現在英勝寺になっている）で生まれた。

この年、伊勢新九郎長氏（早雲）も生まれている。

資長は九歳のとき学窓に預けられると、たちまち頭角を現して鎌倉五山で比類なき学童と称えられた。

十一歳で帰宅した資長が十五歳で元服したおりに、父資清がその並みはずれた才能を空恐ろしく感じて、

「たとえば障子は真っ直ぐに立っていてこそ役に立つが、曲っていれば倒れてしまって使いものにならない」

そう例をあげて諭した。

すると資長は、すかさず屏風のほうを指差して、

「しかしこれは真っ直ぐに立っていたのでは倒れてしまい、曲っていればこそはじめて役に立ちまする」

そう反論して父を唖然とさせた。

資清は息子に遣り込められて舌を巻いた。

しかし、このまま捨ておいては父親の沽券に関わる。

（わが子ながら生意気な。ひとつとっちめてやろう）

そう考えた資清は、資長の留守に書斉へ入ると、

『驕者不久』（驕れる者久しからず）

そう紙に書いて、資長の机の前の壁に貼っておいた。

それをみた資長が礼にきたので、資清は溜飲を下げたのだが、後日また書斉を覗いてみたところ先日貼った、

『驕者不久』が、

『不驕又不久』（驕らざればまた久しからず）

に訂正されていた。

資長はこのころからなにごとにも反論して強引に自己主張を押し通す可愛げのない少年になっていた。

この遣り取りをみると資長の才智はすでに父を超えているようにとれるが資清とても凡人ではない。まえにも紹介したとおり山内上杉の家宰長尾景仲とともに、

『東国不雙の案者』

すなわち東国に並ぶ者ない智恵者だと称されている。

また、当時のことを書いた『永享記』のなかでも、

『関東の諸将資清に靡き従うこと吹く風に草木の動くごとし』

そう絶讃しているほど文武に優れた部将だったのだ。

資長の英邁ゆえに他を見下す態度になってしまう性癖がこのさきしばしば禍の因になってゆくことになる。

そんな資長でも万能というわけにはいかなかった。

あるとき鷹狩りに行って俄か雨に遭い、近くの農家で雨具の蓑を借りようとしたところ、応待に出た若い女がなにも言わずに山吹の花一枝を折って差し出した。

資長は、

「儂は蓑を借りに寄ったので、花を求めたのではない」

そう大声で告げたのだが、女は反応を示さなかった。

資長はやむなく、濡れたまま馬を駆って帰邸した。

後日、生憎不在の父資清を訪ねてきた歌人を応対したとき、資長は腹立ち紛れにそのときの不満を漏らした。

すると歌人は『後拾遺和歌集』のなかに兼明親王の、

七重八重花は咲けども山吹の
実のひとつだになきぞ悲しき

があり、

「女はそのなかの〝実の〟を〝蓑〟に擬えて貧しくて蓑もないことを山吹の花で暗示したのでござりましょう」

そうおしえてくれた。

資長は和歌の素養の欠如を恥じて以後歌道に励んだ。

そして、習い覚えた古人の和歌を実践に活用した。

このあたりが資長の非凡なところである。

いずれものちの話であるがここに纏めて紹介しよう。

あるとき、罪を犯した七人の家臣が誅罰を逃れんとしてある屋敷に立て籠もり、討たせまいと抵抗した。

資長は一計をめぐらして一人の遣い手を選び出すと、

「まず使者を出して口上を述べさせるから、そのあと一人で討ち入り成敗してまいれ」

そう命じた。

そして常日頃から蛮声を張り上げる者を選び出すと、

「よくきけ。七人のうち一人だけお赦しになる者がおる。その者を決して討ち取ってはならぬぞ。よいな」

そう屋敷内にも響きわたる大声で叫べと言い含めた。

口上のあと討手が屋敷に踏み込むと七人はそれぞれ赦されるのは自分ではないかとの念いが生じて切っ先が鈍ったため、なんなく討て果たすことができたという。

このとき資長は、古歌に、

世の中に独り止まるものならば
もし我かはと身をや頼まん

つまり、もし世の中にただ独り残るとすればその幸運を掴む者はひょっとして自分なのではあるまいか、と詠んだのがあったことを思い出したのだ。

資長はその後の出陣にあたっても多く参考にしている。

もっとも有名なのが文明八年（一四七六）六月の長尾

景春の乱のとき、景春方についた矢野兵庫助の武藏國小机城（横浜市港北区小机町）を攻めたときの話である。
小机城址は小机駅を出て八王子方面に向かうＪＲ横浜線が第三京浜道路を潜る隧道の右上の丘陵にある。
このとき小机城には武藏國の豪族豊島泰經の援軍がいて大軍であることを知った太田軍の将兵たちは、
（衆寡敵せず）
で気後れしてしまって士気が沈滞していた。
資長は、
（兵士の多少にかかわらず勢いに乗せることが肝要だ）
そう考えて和歌を詠んだ。
小机はまず手習いのはじめにて
いろはにほへと散り散りになる
小机を寺子屋の小机にかけて、小机なんてすぐ散り散りにしてやると唱和しながら進軍させて士気を鼓舞し、ついに大勝を博したというのだ。まさに、
『断じて行えば鬼神もこれを避く』
であった。
また、ある夜軍勢を返して利根川を渡ろうとしたが真っ暗闇で浅瀬を探り当てられず諸卒が渡り倦ねていた。
資長は、
底ひなき淵やは騒ぐ山川の
浅き瀬にこそあだ波は立て
（深い淵は満々と水を湛えているから波立ち騒ぐことはないが、山川の浅い瀬にこそ波が立つものだ）
と詠んでいる古歌を思い出して、
「この川に深きところなし。波音の荒いところを渡れ」
そう下知して、無事に全軍を渡河させた。
つぎは主君上杉定正に従って下總國國府（市川市国府台）近くの城攻めのときの話であるが、山越えを避けて海端を行くことにして潮の干満を探らせたが判らず判断に迷ったとき、資長が海端を指示して無事に渡った。
合戦に勝利したあとで定正に、
「あのときなにゆえ遠干潟であることが判ったのじゃ」
そう問われた資長が、
遠くなり近くなるみの濱千鳥
鳴く音に潮の満ち干をぞ知る
との古歌を披露して、
「闇夜ではありましたが、千鳥の鳴き声が遠くにきこえましたので、潮の干を知ったしだいでござりまする」
資長の説明を聴いた定正は、その蘊蓄に感じ入った。
もうひとつ紹介しよう。
武藏松山城（埼玉県比企郡吉見町）攻めのときである。
夜襲の先陣を引き受けた資長が、小屋に入ると篝火でなく蚊遣りを焚く火で明かりをとり具足を身に着けた。
家臣が不審に思って篝火をすすめると、資長は、
うらやまし賤がやくてふ蚊遣りは
棟よりたたぬけぶりなりけり

「この歌が煙の高く上らぬことをおしえてくれている」
そう諭したという。
資長は、余暇をみては詠草にも耽った。
いずれも上洛して帝に拝謁したときのことである。
後花園上皇から武蔵野の広野についてのご下問に、
露おかぬかたもありけり夕立の
空より廣き武蔵野の原
さらにその風景について問われると、
わが庵は松原つづき海近く
富士の高嶺を軒端にぞ見る
と詠んだ。
再上洛のおりに後土御門帝から隅田川の都鳥についてご下問があったときには、
年ふれどわがまだ知らぬ都鳥
すみだ河原に宿はあれども
と詠んだ。
幕府の管領細川勝元から、
「短慮功を成せず」
の意味を質されたときには、
急がずばぬれざらましを旅人の
あとより晴るる野路の村雨
そう詠んで返した。
資長は、かねがね、
「歌は風流をもて遊ぶものではなく、常に人の道をこそ教えるものである」
そう深読みすることをすすめている。才人はなにごとにも深く探求するこころが凡人と異るところであろう。
父資清は文武にすぐれた部将で、宗祇、心敬らの連歌師を河越屋敷や越生の隠居所自得軒に招いて歌会を催しているから、資長のそれは明らかに遺伝であろう。

## 二

家督を継ぎ江戸城を築いて本拠にした資長は、扇谷家の家宰として順風満帆押しも押されもされぬ存在になっていったが、このころから山内管領家が下總古河に逐った前公方足利成氏との抗争が激化していった。
長祿三年（一四五九）管領山内房顯は武藏と上野の国境五十子（本庄市）に砦を築いて前線基地にした。
そして、武藏國太田莊（太田市）で成氏軍と戦ったが敗れ、翌日援軍の越後守護上杉房定軍も海老瀬（群馬県邑楽郡板倉町）や羽繼原（館林市羽附町）で破れた。
成氏はいつ兵法を学んだのか、手強い武将であった。
そんななかで山内家宰長尾景仲が七十六歳で歿した。
太田資清と並び称された智恵者が世を去ったのだ。
あとを嗣いだ嫡男景信は成氏の動きを警戒してすぐさま主君房顯を奉じ五十子砦に出陣すると、陣屋を強化し周辺に多くの小屋を建てて関東の諸将を迎え入れた。

それを知った成氏は動かず、様子を窺っていた。
睨み合いに痺れを切らしたのは成氏のほうだった。
五十子を攻めて勝敗を決すべく利根川対岸の太田荘に出陣すると迂回して騎西城（加須市騎西）に入った。
資長は成氏の下野侵攻を赦さず果敢に攻撃して追い立てたので、成氏軍は堪らず菖蒲城（久喜市）に退いた。
寛正七年（一四六六）二月十二日、騎西城を出た成氏軍が五十子に向かいまた利根川を挟んで対峙したが、この日山内房顯が陣中で病歿したので家宰長尾景信は一旦軍を退いて鎌倉山内に帰り、扇谷軍だけが残った。
年号が文正に改まった翌閏二月四日、資長率いる扇谷軍は騎西城攻撃に向かい南多賀谷（加須市）や北根原（鴻巣市）あたりで小競り合ったが決着はつかなかった。
前にも触れたが、管領を辞して剃髪し西方浄土を目指して長門國（山口県）まで行き龍門寺留雲軒に閑居していた山内憲實が、二男房顯が歿して二箇月後の三月六日に周防國（山口県東部）で歿した。五十七歳であった。
ついでながら憲實は文人としても優れていて、将軍家発祥の地足利にあった学問所を再興させている。
もともとこの地にあった小規模のものは小野篁かもしくは足利義兼の創建といわれているので検証してみた。
小野篁の場合は承和六年（八三九）に創建したといわれているが、その経歴を調べてみるとこの年は遣唐大使藤原常嗣の副使に任命されながらその直情径行が禍して病と称して乗船を拒んだので前年隠岐國（島根県隠岐郡隠岐の島町）に配流されており、召還されたのは七年であるから東国の足利荘に行けるはずがない。
だが実在していたことは間違いなく、漢詩人であり歌人でもあったそうで『百人一首』で知られているといわれて手持の札を操ってみたら〈参議篁〉の名があった。
その篁の詠んだ和歌は、

わたの原八十島かけてこぎ出でぬと
ひとにはつげよあまのつりぶね

である。
ことほど左様に、小野篁の創建説についてはどうにも如何わしいが、足利義兼のほうには頷けるふしがある。
この地に住んだ源義家の四男義國が庶子義重に隣りの新田荘（太田市）を与えて新田氏を名告らせたので、手許においた嫡子義康が足利氏を名告った。
源頼朝の挙兵に馳せ参じて平家追討、奥羽藤原氏征討に活躍した義康の三男義兼が、平家方で渡瀬川北岸一帯を領して兩崖山上に山城を築き麓に居館（足利市本城）を構えて威勢を張っていた藤原姓足利氏滅亡のあとを受けて、それまで渡瀬川南岸の梁田御厨一帯だった所領を拡大して足利荘全域を領有した。
義兼は鎌倉幕府有力御家人として名望高く、身の丈が九尺もあったという偉丈夫の猛将だったが、人格高邁、学問に親しみ、信心深く、絵画をよくしたという。

文治二年（一一八六）五月に出家して入道となり、法華坊鑁阿上人と号してから十年後の建久七年（一一九六）に屋敷を寺にすると入道名をとって鑁阿寺とした。

義兼はここを小規模な学問所にしたのかも知れない。

義兼は建久十年（一一九九）一月十三日に源頼朝が五十三歳で歿した年の三月八日に四十六歳で歿した。

現在の堂塔は嫡男義氏の建立である。

くだって應永二十六年（一四一九）八月に関東管領に就任した伊豆、上野守護の上杉憲實は、将軍家から足利荘の管理を委ねられたとき、かねてから儒学への憧憬を抱いていたのでこの将軍家の名告りの発祥地を学問の府にしようと考えて実行に移した。

憲實は、さっそく鑁阿寺にあった小さな学問所を足利荘政所の國府野（足利市伊勢町・伊勢南町）の広域地に再興してもっぱら漢学、儒学の学校であることを述べた学規三箇條をつくり、学則六箇條を定め、中国の宋時代（十世紀～十三世紀）の書『尚書正義（書經）』、『文選』、『五經註疎』などの書籍を寄贈、庠主に快元を招いて教学の府、貴重書の秘庫として充実させたので、諸国で相次ぎ争乱が起こり学問の道が衰頽してしまっていたおりからこの足利學校だけが唯一の学校になってしまったので遠く西国や北国からも多くの学徒が集い、世を挙げて乱世に見事復興させた上杉憲實の功績を褒め讃えた。

その後享徳四年（一四五五）ごろに足利荘は一時足利成氏の勢力下になったがほどなく山内房顯が挽回した。

文正元年（一四六六）十一月十五日、足利荘代官に任じられた長尾景人（景久）は、足利學校を上杉憲實の再興からおよそ三十年後の應仁元年（一四六七）に政所の国府野から現在地（昌平町）に移設した。

足利學校は新政府の意向で明治五年（一八七二）太陽暦が採用された年に廃校になって翌年東小學校が新設されたのだが、上杉憲實の再興以来四百年あまりつづき廃校のときの庠主は二十三代であった。

十六世紀にキリスト教宣教師が、

「板東の大学は諸大学中最も有名なり。多数の僧侶その教法を学ばんとて絶えずかしこに至る」

そうヨーロッパに通信したと伝えられているから、足利學校の名は世界にまで広まったのである。

山内上杉の家宰長尾氏は、白井（渋川市白井）、越後（上越市春日）、總社（前橋市総社町）、足利（足利市）に分かれて越後、上野両國の守護代をつとめた。

資長は、父資清から足利學校のことをきいていたので、かねがね文人として訪ねたいと心に掛けていたのだが、成氏方との抗争に明け暮れて機会が得られなかった。

## 三

幕府は山内房顯が三十二歳で病死したあとを嗣いだ十

三歳の顯定を関東管領にした。
山内宗家は公方持氏と謀って犬懸家の氏憲（禅秀）を斃した憲基に子がなく、越後守護家を継いだ叔父房方の二男憲實を養子にしたのにはじまりその嫡男憲忠、二男房顯のあとさらに憲實の甥房定の二男顯定がつづいて、関東管領は山内宗家から越後守護家に移ってしまった。
翌年三月應仁と改元された五月に、将軍家や管領畠山、斯波両家の相続問題を切っ掛けにして細川勝元と山名宗全が対立し、幕府内を二分する大乱が起こった。
その年の九月六日に扇谷持朝が河越城で歿した。五十二歳であった。
持朝の嫡男顯房はすでに分倍河原で破れ夜瀬（三鷹市）で自害していたので、十六歳の孫政眞が後を嗣いだ。
幕府は膝許で起こった争乱で足利成氏を征伐する余裕がなく、両上杉氏もまたともに当主を喪い意気消沈していたので、関東の争乱はしばらく静寂を保った。
その平穏のなかで資長の父資清などは河越の屋敷に宗祇、心敬らを招いて優雅にも連歌会を催している。
二年休戦のあと動いたのは成氏のほうであった、
成氏は手強い五十子はさておき、伊豆の堀越公方足利政知を斃せば五十子も自然潰滅すると考えた。
そして小山、結城、千葉らの諸将に伊豆三島への出兵を命じ、岩槻、河越、江戸を避けて下總から相模を迂回して三島に至り韮山城（伊豆の国市）の政知を攻めたのだが、上杉氏憲の孫憲定の軍に防戦されて敗退した。
将軍義政の御内書で成氏方の小山、岩松らの諸将が寝返ってきたので上杉方は大挙して五十子を進発し、下總國古河城を総攻めして陥としたので成氏は結城氏廣に護られて下總の千葉孝胤を頼って落ちていった。
だが、安房の里見、上總の武田、下總の原らが成氏方についたことで勢いを得た成氏が古河城奪回を計り、これを結城氏廣らが支援したので奪回されてしまった。
元の木阿弥になった上杉軍は五十子の陣を固めた。
その陣中で成氏攻めの主力軍を率いていた中心人物山内上杉の家宰長尾景信が六十一歳で病歿した。
その半年後には扇谷政眞が深傷を負って死亡した。
二十二歳の政眞には嗣子がなかったので叔父の定正が継ぎ、扇谷家は定正と太田資長の体制になった。
だが山内家のほうはすんなりいかず悶着が起こった。
家宰の長尾景信が歿したあと、主君顯定は嫡男の景春ではなく景信の弟忠景を家宰にしたのである。
当然自分が家宰と思い込んでいた景春は唖然として、
「嫡男相続は武門の定め。家宰はわれが継ぐべきなり」
そう顯定に再三抗議したのだが、容れられなかった。
憤懣遣る方ない景春は、おなじ立場にあってすんなり継承した資長なら理解されると思って泣きついた。
取り縋られた資長は同情して調停を引き受けると、
「景春の言い分もっとも」

を主張して顯定に進言したが容れられず、
「乱の因になる」
ことを憂えるとまで迫ったが、定正に、
「差し出がましい」
そう突っ張られて、退けられ、
「内政干渉である」
とまで決め付けられて取り付く術がなくなり景春に、
「時機到来を待つように」
宥めたが景春は納得せず、主君顯定に叛意を抱いた。
そして景春は、虎視眈々と機会を窺った。
文明八年（一四七六）六月、その好機が到来した。
遠江の国内騒動で国人たちがたびたび駿河に侵入するのを守護今川義忠が征伐しての帰路、成敗した横地四郎兵衛の残党に塩見坂で討たれて非業の死を遂げたことから家中を二分しての相続争いが起こった。堀越公方政知が調停に乗り出し執事上杉政憲を派遣するについて資長も同行を命じられたのでしばらく江戸を留守にした。
景春はすぐさま上野の白井を出て武蔵の鉢形城（埼玉県大里郡寄居町）に拠ると、主君顯定に叛旗を翻した。
そして素早く資長不在の五十子を攻め立てたので、山内、扇谷軍は抗し切れず、顯定・定正は上野國那波荘の河内城（前橋市）と那波城（伊勢崎市）に撤退した。
いそぎ帰国した資長は直ちに軍容を整えて守護國相模で景春方に加担した溝呂木城（厚木市）と小磯城（中郡大磯町）を攻略すると、とって返してまず武蔵國の豪族豊島泰經の支城練馬城（練馬区豊島園内）、江古田城（中野区）、平塚城（北区）を陥としておいてから当主泰經磐踞の居城石神井城（練馬区）をじっくり攻め立てた。
豊島氏は板東平氏の流れ秩父氏の支族で、初め平塚城を本城にしていたのだが石神井川沿いを滝野川、板橋、練馬、石神井と勢力を伸ばしてきて江戸、岩槻、河越を結ぶ資長の勢力圏と接触するまでになってきていた。
その豊島泰經が景春に与して守護家に叛いたのだ。
（豊島を斃せば景春は大打撃を受けることになろう）
そう考えた資長は石神井城を完膚無きまで攻撃した。
石神井城は北側の石神井池（もとは西の三宝寺池とひとつであった）と南側を流れる石神井川とに挟まれた東西に細長い台地上の要害につくられた大きな平山城で、現在の氷川神社、嚴島神社、眞言宗三寶寺、そして豊島氏代々の菩提寺で泰經とその一族の墓という三基の五輪塔がある曹洞宗道場寺はいずれも城跡にある。
ここに追い詰められて懸命に戦った泰經だったが資長の太田軍には抗し難く、ついに刀折れ矢尽きて敗北を認めた泰經は黄金づくりの鞍をつけた愛馬に乗って石神井池に入水したという。女照日姫も亦三つの家宝を抱いて泰經同様の乗馬姿で父のあとを追って池の西側に入水したのでここを別に三宝寺池というようになったという。
いまでもよく晴れた日には底に沈んだ黄金の鞍が陽に

映えて見えるという伝説があり、池の北側の高台には二人を弔ったという殿塚、姫塚が並んで築かれている。

資長は息衝く暇もなく取って返して上野へ向かい山内顯定と扇谷定正を五十子に迎え入れて景春と対陣した。

そして梅澤（本庄市児玉町金屋）にいる景春と本拠の鉢形城とのあいだに兵を入れて分断すると見せかけて誘き出し、さそいに乗って出てきた景春と用土原（深谷市岡部）で対戦して打ち破り鉢形城へ敗走させた、

資長に鹵が立たぬ景春は古河の成氏に同盟を求めた。

成氏は物怪の幸いに完爾と笑い、勿体振って受け入れると、みずから上野に出陣して救援の体を装った。

景春は成氏軍に近い塩売原（前橋市）に進出して資長と対峙したが、睨み合いのままで終わってしまった。

この年十年つづいた〈應仁の乱〉が終結したので幕府の眼を気にした成氏は両上杉の顯定、定正と講和した。

資長は後楯がなくなった景春を攻めて本拠にしていた鉢形城から追い出し、そのあとに山内顯定が入った。

このあと資長は下總の千葉孝胤攻めに余力を注いだ。

いっぽう景春は、秩父に移ったあと資長の留守を狙って越生の父資清を急襲したが敗退してしまった。

下總から戻った資長は景春方の長井城（熊谷市妻沼）や日野城（秩父市荒川日野）を攻略してほぼ平定した。

資長の活躍は、

「向こうところ敵なし」

でこの景春との三十数度の合戦に敗れたことがなく、

「不敗の名将太田資長」

の評判が高まり、その名声は遠く京にまで鳴り響いた。

成氏と景春が下總古河に引き籠もり関東の抗争が一往終息すると、成氏は幕府との講和を計って景春を関東管領代理として京へ派遣し管領細川政元に斡旋を託した。

文明十四年（一四八二）十一月二十七日、前将軍足利義政は前公方足利成氏に伊豆國を堀越公方足利政知に譲ることを条件にして講和することを承諾したが、成氏の希む長尾景春を管領に据えることは認められなかった。

この講和を〈都鄙の合体〉といい関東は三十年ぶりに平和をとりもどして平穏無事になったので、資長は江戸城に万里集九を招いて歌会を催したりしてたのしんだ。

## 四

だが、山内顯定の心境は穏やかではなかった。太田資長の活躍で前公方成氏の反乱を鎮圧して下總古河へ追放したとはいえ主君に叛いて成氏に荷担した長尾景春は山内家の家宰の家格で扇谷家の資長と同格であった。

つまり関東管領家の顯定は、同族とはいえ禪秀の乱当時は山内家の家人にすぎなかった扇谷家が資長の活躍で山内家宰の長尾を抑えて宗家と肩を並べるところまで勢力を伸ばしてきたのが気懸かりで、もし立場を逆転され

ては宗家の沽券に係る由々しき問題であった。
顯定は扇谷定正に、
「資長は江戸城を固めてわが宗家を斃そうとしている」
そう吹き込んだ。
（資長が宗家を斃してくれればわが家は万々歳である）
定正は寧ろ資長に期待をかけて北叟笑んでいた。
だが資長の人望がますます高まってきて家中の期待が過熱してくると、主君定正に疑心暗鬼が生じてきた。
「資長が江戸、岩槻、河越の城を堅固に改修しているのは成氏と景春を利根川の向こうへ追い遣り古河に封じ込めておくためではなく、実は山内、扇谷両家を斃して関東をわがものにしようと企んでいるのではなかろうか」
そう耳打ちする山内顯定の忠告を信ずるようになった。
二人は謀議して江戸城の資長を相模國糟谷（伊勢原市上粕屋）の扇谷館に呼び出して暗殺しようと謀った。
糟谷の館跡は現在産業能率大学になっている。
受付の承諾を得て入った構内は広く、ようやく裏へまわったところの堀割跡につくられたテニスコートを見下ろす四阿を見つけて休息し、伊勢原駅で買った弁当を食べていたら見回りの警備員に咎められたことがあった。
文明十八年（一四八六）七月二十六日、資長は糟谷の館で討たれて非業の死を遂げた。五十五歳であった。
上野館林藩士岡谷繁實が安政元年（一八五四）から十五年かけて明治二年（一八六九）に脱稿したという『名將言行録』のなかの太田資長を述べた最後のところに、〈上杉定正、資長を殺す〉と小見出しがあって、
『初め定正、封地狭小なるを以て、常に顯定に属す。資長、政を執るに及びて、内、國政を修め、外、軍旅を總べ、民を撫し物を愛し、將士畏服し兵威日に強し。顯定、資長を忌み之を除かんと欲し、人をして間を爲さしむ。定正之を信じ、資長を糟谷に召して之を殺す。資長、死に臨み和歌を詠ず。其歌に曰く、「昨日まで、まくめうしわを、入れ置きし、へむなし袋、今破りけむ。」聞者之を哀む。是より扇谷の兵鋒大に衰へり』
和歌のほうは不意討ちに遭っているのにそんな余裕があったか疑わしいのでさて措いて、ここには槍で突かれた資長がいまわの際に「当方滅亡」と叫んで息絶えたという記述がないので、その話の出処がどこかを探したら『太田資武狀』のなかに書かれていることがわかった。
『太田氏系譜』によると、資武は資長の甥資家の曽孫で、兄政景と越前國福井藩主結城秀康に仕えたという。
『太田資武狀』が書かれたのは寛永十六年（一六三九）というから資長の死後百五十年あまり経っており、代々語り継がれてきたのをまとめて世に出したのであろう。
そこには、
『資長は風呂の小口へ出たところを定正の重臣曽我兵庫に斬り殺された。そのとき「當方滅亡」と叫んで死ん

だ』

そう書かれているという。

扇谷定正が三年後の延徳元年（一四八九）に家臣曽我祐重に宛てた書状のなかでも、資長誅罰の経緯を、

『……江戸、河越の両城はいかにも堅固だ。山内上杉の不儀が續けば果たしてべからずの時の由申し付けたところ承引がなく、その上謀乱を思い立ったので誅罰して鉢形城の顕定に注進しておいた』

そう淡々と記している。

また、突拍子もない噴飯物の話も遺っている。

山内顕定が扇谷定正に密書を送って、

『両家が相争うのは太田、長尾の二人がいるからだ。今後和睦の證明として両人の首を斬り互いに交換しようではないか』

そう誘った。定正はこれを真面に受けて資長を殺してしまったが、顕定のほうは景春を殺さなかったという。

資長暗殺にいたる過程については諸説あるが、同族でありながらかなり水をあけられていて従属せざるを得なかった山内家に追いつき追い越すことを焦った扇谷定正が、期待をかけて頼りにしてきた資長がその力量を発揮して名将と謳われ国人たちの人望を一身にあつめて評判が高まってくると主従逆転の恐れを抱くようになり、いつか寝首を掻かれるのではないかと被害妄想に陥っていったことが資長にとって不幸のはじまりであった。

そして、小心な定正が猜疑心を抱いたことでついに悲劇を起こし、土台を支えつづけてくれた掛け替えのない家宰をみずからの手で葬ってしまったのだ。

資長のずば抜けた才智が仇となり、致命傷になった。

下世話にいう、

「出る杭は打たれる」

は、有能者への羨望は軈て憎悪に替わり、果ては妨害を受けて失脚する破目に陥ることを訓えてくれている。

# 第十四話　山内顯定と扇谷定正の対決

太田道灌の謀叛は顯定の謀略と知った定正は顯正を斃すべく成氏、景春と手を結んだ。

定正を迎え撃つ顯定は、相模實蒔原、武蔵須賀谷原、同高見原で三度戦ったがいずれも敗北を喫し、翌年須賀谷原での四度目の対決もまた敗れて歯が立たなかった。

それから五年後の高見原の対決で定正が落馬死したことから顯定は漸く勝利したが、山内宗家はみずからの手で犬懸、扇谷家と抗争して倒し団結の支えを喪ってしまった。

一

太田資長（道灌）の嫡男資康は父を騙し討ちした主君扇谷定正を赦せず仇討ちを考えたが、やれば主殺しになってしまうし、さりとて他に名案もなく思案に暮れた。

まもなく定正は、父を殺害した下手人の曽我兵庫を河越城代に、その嫡男祐重を江戸城代に据えた。恩賞のつもりなのであろうが、そのことをきいたとき資康はもはや太田一族は扇谷家に居場所のないことを覚った。

（かくなるうえは已む無し。山内家を頼ろう）

資康はそう決意を固めた。それは山内顯定の家人になっていれば先々もし扇谷家との抗争が起こったときには主命に隠れて敵討ちできるから物怪の幸いであった。

資康が山内家の家宰長尾忠景に内通してその手引で一族を纏めて寝返りに成功すると、主君定正の暴挙に不信の念を抱く太田派の家臣たちも資康につづいて山内家へ奔ったので、扇谷家の家臣団は動揺してしまった。

家宰太田資長を抹殺したことで一部の家臣たちに見限られてしまった定正は、弱体化を思い知らされた。

いっぽう山内家に転がり込んだ資康らは白眼視されていたが、しだいに溶け込んで融和しやがて胸襟を開いてくれるようになったころ、驚嘆する話を耳にした。

太田資長が主君定正に謀殺されたのは、擡頭著しい扇谷家の勢力を削ぐために山内顯定が根も葉もない資長の謀叛を捏ち上げて定正を唆したからだというのだ。

つまり、定正は顯定の術中に嵌まったということだ。

はじめは一顧だにしなかった資康たちも、諸事情を勘案してゆくにつれてその噂話が真実味を帯びていった。

（然もありなん）

そう信ずるようになった資康たちはひそかに山内家を脱出してふたたび扇谷家にもどると、定正に告げた。

日が経つにつれて資長の成敗を悔いるようになっていた定正は資康たちの帰参を許すと、策を弄して頼り甲斐ある股肱の臣を喪わせた顯定を憎み怒り心頭に発した。

資長亡き扇谷家は山内顯定に屈しふたたび家人に成り下がることを憂えた定正は、思案のすえ形振り構わずこれまで敵対してきた足利成氏、長尾景春と手を結んだ。

成氏、景春にすれば管領の山内上杉だけが敵であって扇谷上杉には怨みがないからどうでもよかったが、それにしても管領陣営から離叛したのはさいわいであった。

定正が自分を裏切って成氏・景春側に奔ったことを知った顯定は機先を制して扇谷家の本拠地糟谷を乗っ取ろうと計り、一千余の軍勢を率いて鉢形城を出陣した。

ちょうど定正も河越城から糟谷へ戻るところだった。

両軍は長享二年（一四八八）二月五日相模國實蒔原（伊勢原市西富岡から日向薬師を左奥に見て厚木市七澤にかけての付近）で遭遇戦となったが、地の利を得ている扇谷軍が僅か二百余騎で一千余騎の山内軍を破った。

## 二

それから四箇月後の六月八日、こんどは扇谷定正が養子にした兄朝昌の嫡男朝良を伴い七百騎を率いて鉢形城攻めに向かってきたので、山内顯定も養子にした再従弟の憲房を伴い二千余騎をもって出陣し、両軍は中程の須賀谷原（埼玉県比企郡嵐山町菅谷）で出会い対陣した。

（衆寡敵せず）

で、はじめは山内軍が断然優勢で扇谷軍を押し捲っていたが、長尾景春軍が到着して参戦すると形勢はたちまち逆転してこんどは扇谷軍が山内軍を押し捲った。

山内軍はまたも敗北を喫して鉢形城に逃げ帰った。

槻川と合流した都幾川の流域に広がるこの須賀谷原周辺には数多くの史蹟が点在していて取材に事欠かない。

年代順に列記してみると、

大藏館跡は源頼朝の父義朝の弟義賢の居館だった。その義賢の二男が木曽義仲で産湯として使用された湧水〈産湯井〉がある。この地にある五輪塔が義賢の墓といわれ、近くの班溪寺には義仲夫人山吹姫の墓がある。

槻川と都幾川の合流点の段丘上にある菅谷館跡は畠山重忠の居館だった。頼朝の死後権力闘争に巻き込まれ北條勝政の謀略によって武藏國二俣川（横浜市旭区）へ誘き出されて敗死するまで二十年ここを拠点にしていた。

鳩山町との境にある笛吹峠は宗良親王を奉じた新田義興・義宗兄弟が関東最後の防衛線にしたところである。

近くの物見山丘陵の尾根にある岩殿山正法寺（岩殿観音）の境内には足利尊氏の末子基氏の墨跡がある。

平澤の白山神社は太田資康が陣中見舞いにきた万里集九と歌会を催したところという。そういえば畠山重忠の菅谷館跡も山内軍に加わった資康が砦にしたともいう。

史蹟めぐりを終えて都幾川へ戻り、芝生の土手に寝転んで柔らかい陽射しを浴びていると疲労が癒やされる。

## 三

連敗を喫した顯定は、関東管領としてもまた上杉宗家の棟梁としても面目丸潰れで、このままでは与党国人たちの手前も引っ込みがつかず、威信回復を焦った。

そして半年後の十一月十五日、扇谷軍動くの報を受けた顯定は三度目の対決で結着をつけるべく越後守護家の弟房能（ふさよし）に援軍を求め三千余騎を率いて鉢形城を出陣した。

河越城の定正のほうから出てきたので顯定は受け身に立って出陣がおくれたため、前回の須賀谷原より手前の高見原（比企郡小川町）まで進んだところで遭遇した。

扇谷軍は足利政氏と長尾景春の援軍を得た二千余騎。合わせて五千の大軍が雌雄を決すべく激突したのだが、数に優る山内軍のほうが敗れてしまい鉢形城へ退いた。

三度敗北を喫した山内顯定は半年後の翌年夏にまた須賀谷原まで出陣して扇谷定正と戦ったのだが、顯定の希いも虚しく足利政氏に支援された定正にまたもや敗れてしまい、山内軍はどうしても扇谷軍に勝てなかった。

この両家の対立抗争で長尾景春の動きが気になった。

景春は長尾家の嫡男であるから、世襲の時代父のあとの家宰職は当然自分であるはずなのに、父の死後主君顯定は叔父忠景を登用したので再三異議を申し立てたのだが撥ねつけられてしまったことから謀叛したのである。

ならば怨み骨髄に徹しているはずで、鉢形城に近い須賀谷原、高見原で三度も勝利しておきながらなぜ一気呵成に鉢形城を攻め陥とそうとしなかったのであろうか。

それは、景春自身が難攻不落に築いた城なので、容易には陥とせないことをよく知っていたからなのだ。

そこで、どんな場所にあるのか現地調査してみた。

池袋駅から東武東上線の特急に乗って終点の小川町駅まで行き、そこで乗り換えて寄居（よりい）駅で下車する。

寄居駅にはほかにJR八高線、秩父鉄道も乗り入れていて、まさに埼玉県北部の交通の要衝の感がある。

駅前の大通りを真っ直ぐ南下して、荒川に架かる正喜橋を渡ると右手断崖の上が目指す鉢形城跡である。

地形は南と西を山で囲まれ、背後は荒川の絶壁、東は深澤川の峡谷を堀とした天然の要害に囲まれた平山城で、総面積約十五ヘクタール（約十五万平方メートル）というから大きな城である。

また、ここは秩父口と上州口とを固める要衝の地でもあったから、鉢形城の役目はまさに重大であったのだ。

両上杉家の対決は四度の合戦で足利成氏・政氏と長尾

景春の支援を得た扇谷定正がいずれも山内顕定に勝利したのだが決定的とまではいたらず、定正は攻め倦ねてしまい、顕定のほうはすっかり戦意を喪失してしまった。

この年幕府でも政変が起こり、近江守護六角高頼を征伐中の将軍義尚が三月二十六日に鈎の里（滋賀県栗東市）の陣中で急死した。まだ二十五歳の青年であった。

このときはまだ前将軍義政が健在だったので、義尚に子がなくても父義政の政務復活で支障はおきなかった。

ところが翌年正月七日にその義政が五十六歳で歿したことから、後継者問題がややこしくなってしまった。

義政と正室日野富子とのあいだには子がなかったので、義政は早手回しに弟の浄土寺門跡義尋を還俗させて義視と名告らせ養子にしたのだが、その後富子が懐妊して嫡男義尚を産んだことから義視の立場が怪しくなった。

富子は当然義尚を後継者に推して山名宗全を後ろ盾にし、義視は義政の誓約違反を怒って細川勝元を頼ったことからこの継嗣争いが〈應仁の乱〉の遠因になった。

幕府の宿老たちは義尚に子がないから義政が養子にしていた義視を後継者にすることに異存はなかったが、もはや五十二歳と晩年に近いので義視の子の義材（義稙）を征夷大将軍にして義視を准三后にすることにした。

その義視は翌年正月七日兄義政の一周忌に病歿し、つづいて四月三日に弟の堀越公方政知もまた病歿した。

この政知の死を契機にして公方家に騒動が起こった。

堀越公方政知は前々将軍義政の弟であることはすでに述べたが、政知の室は嫡男茶々丸を遺してすでに身罷り、継室満子とのあいだに清晃、潤という二人の男子がいた。茶々丸にとっては継母と異母弟たちである。

こういう家族関係は複雑で政知の心は病身だった正室より継室になった藤原北家武者小路資宗の女満子に傾いていたから、子らの処遇もまた満子の思いに添っていた。

清晃は八歳のとき伯父義政のすすめで父とおなじ京北山の天龍寺香嚴院に入室させられ喝食になったが、これは満子が義政に阿ねその後ろ盾を得て次期将軍の座を狙う思惑があってのことであった。

臨済宗天龍寺は初代将軍尊氏が後醍醐帝の冥福を祈って夢窓國師を開山として創建した由緒ある寺である。

また幼い潤童子には父のあとの堀越公方を希んだ。

つまり満子は、貪欲にも将軍と公方の生母として君臨しようとする独り占めを狙っていたのである。

こうした満子の野望があらわになってくると、茶々丸は疎外されたことで僻み心を抱くようになっていった。

自暴自棄になった茶々丸は、憂さを晴らすために酒に溺れ、泥酔して乱暴するので、手を焼いた満子は身の危険を感じて政知に訴え茶々丸を座敷牢に閉じ込めた。

だから茶々丸は、その後父政知が脳出血で倒れて半身不随になってしまったことをまったく知らなかった。

八代将軍だった兄義政の一周忌の当日に兄義視に先立たれてすっかり気弱になってしまった政知は、それから三箇月後の四月三日に不遇だった義視のあとを追うようにして世を去っていった。享年五十七歳であった。

髪を下ろして圓満院となった滿子は、亡夫政知の七七日忌法要をすませるとさっそく幕府の管領細川政元の養子になった九條澄之の生母である妹を頼って昨年十代将軍になったばかりの義視の子義稙のあとの将軍に清晃を、公方には潤を就かせるよう執拗に運動をはじめた。

酒乱が昂じて狂人同様の振る舞いが多く手に負えぬ乱暴者の烙印を押されて座敷牢に閉じ込められ世間と隔絶させられている茶々丸にも同情して気脈を通じてくる少数の家臣たちがいて、それらの注進で継母の動きは逐一耳に入っていたので地団駄踏んで口惜しがっていた。

父政知が歿して三箇月後の七月一日、家臣の手引きで座敷牢を破った茶々丸はすぐさま継母圓滿院と異母弟潤童子を斬殺して怨みを晴らすと公方御所を占拠した。

このとき、この騒動を逸早く知ったのは修善寺にきていた隣国駿河の興國寺城主早雲庵宗瑞であった。

興國寺城は愛鷹山麓（沼津市根古屋）にあり伊豆に近いこともあって早雲はときどき湯治にきていた。

政知が急病で倒れたとき駿河守護今川氏親が元服の烏帽子親だった政知の病床を見舞ったが、そのとき勝手知った早雲が韮山北條の公方御所まで案内していった。

早雲は直ちに公方家の騒動を駿府の氏親に報らせて茶々丸制圧の許しを得ると、興國寺城から軍勢を率いて伊豆の韮山へ雪崩込み、御所を夜襲して火をかけた。

不意を衝かれた茶々丸は防ぐ術を知らず、僅かな供に護られて辛うじて御所から脱出はしたものの逃げ場をうしない、源頼朝の奥州藤原氏征服を祈願して舅の北條時政が建立したという近くの願成就院に入って自害した。

この早雲の公方家討伐が世にいう下剋上の第一号であり、東国における戦国乱世の幕明けにもなった。

## 四

堀越公方が八代将軍義政の弟政知一代で滅亡してしまってから二年後に、こんどは幕府内で政変が起こった。

延徳三年（一四九一）八月、十代将軍義稙は前将軍義尚の遺志を継いで六角高頼を攻めて近江國南の甲賀（甲賀市）へ追い遣ったものの捕捉できず、鎮定に失敗して京極高清とそれぞれ半國守護にすることで結着をつけた。

将軍義稙は後ろ盾の父義視を喪ったあとその存在感を示そうと焦って、近江國の処理を曖昧にしたままこんどは河内國の畠山基家征討に向かった。

六角も畠山もともに同族同士の勢力争いであった。

その留守に細川政元が大和の国人たちと結託して堀越

公方政知の遺子清晃を立てると、将軍義稙方の政敵畠山政長の屋敷をはじめ諸寺院に火を放って叛旗を翻した。

政元は素早く畠山の陣所正覺寺を包囲して前守護畠山政長を自害させたが、嫡男尚順は逃がしてしまった。

将軍義稙は守護家に叛かれては詮方なく、足利家伝来の鎧と太刀を携え就任僅か三年で政元の軍門に降った。

政元は清晃を還俗させると義稙を天龍寺に幽閉した。

ところが義稙は畠山の家臣らの手引きで京を脱出すると越中國へ逃れて畠山政長の部将神保長誠を頼り、そこへ能登守護畠山義統、加賀守護富樫政親、若狭守護武田元信、越前守護朝倉貞景らが逐次集まって挙兵した。

義稙は越前一乗谷（福井市）の朝倉館に移り、翌年敦賀経由で近江比叡山麓の坂本（大津市）に布陣した。

細川政元は義稙の挙兵に応じた延暦寺を攻めて根本中堂、大講堂を焼き払うと、細川政春、守護六角高頼らに坂本を攻めさせて義稙を河内（大阪府）に敗走させた。

安住の地をなくした義稙は〈流浪将軍〉といわれた。

細川政元は九代将軍義尚逝去のあと大御所義政の後ろ盾を得て堀越公方政知の遺子清晃を十代将軍にと画策したが、義視の子義稙の母が日野富子の妹なのでいったんは富子に潰された。だが、義稙が将軍になったあと義視が親政しようとして富子とのあいだに齟齬をきたした。

富子は一転して清晃支持にまわり、義政逝去で孤立した政元に同調した。義視も政元に接近しようとしたが果たせぬまま兄義政の一周忌に病歿してしまった。

その後義稙は追放され清晃（義澄）が将軍になったから、茶々丸に斬殺された圓滿院の野望は叶えられた。

この細川政元の非合法手段は勢力を誇った畠山政長打倒を謀ったもので、守護同士の主導権争いであった。

この政変で管領が将軍をいとも簡単に廃立したことは、つまり将軍と管領の地位が逆転したことの現れであって、これが幕府膝元での戦国のはじまりになった。

幕府の管領は足利将軍家の一門畠山、斯波、細川三家の交替制であったが、應仁二年（一四六八）を最後に斯波家が消えて畠山、細川家だけになり、義澄を傀儡将軍にした細川政元が管領を十二年も独占することになる。

## 五

だいぶ横道に逸れてしまった。話を関東に戻そう。

上杉一族の内訌山内顕定と扇谷定正の抗争はこれまで四度あったがいずれも定正が勝利していたので、顕定は管領家の面目を喪い地団駄踏んで口惜しがっていた。

扇谷勢は定正が前公方足利成氏の嫡男政氏、それに長尾景春とも提携したので強力な軍団になっていたのだ。

顕定が最後に定正に敗れてからもう五年経っていた。

そのあいだに古河の成氏の老齢化とともに嫡男政氏の威勢も衰退し、長尾景春も尻窄まりになってきていた。

逆に顯定は定正打倒を発条に戦力増強につとめた。
自信を恢復した顯定は定正が河越城から出陣する気配のないことを察知すると、誘き出しと戦力試しに扇谷方の武藏、相模領へ攻め込み遠く相模國の玉縄城（鎌倉市城廻）を陥としたが、どうしたことか小田原城（小田原市城山）の大森勢は打って出てくる気配がなかった。
このとき城主の扇谷家重臣大森氏頼は重病の床にあって動けず、ほどなくして身罷り藤頼があとを嗣いだ。
小田原城は、源頼朝旗揚げのとき石橋山合戦で頼朝の危機を救った土肥郷（湯河原町）の豪族土肥次郎實平の嫡男遠平が戦功により早川荘の總預所となって小早川を名告り、荘内小早川村（小田原市水之尾）に築城した、
鎌倉時代はこの土肥・小早川党が拠っていたが、室町初期に公方と管領が対立した〈上杉禪秀の乱〉のとき駿河國鮎澤荘（御殿場市・裾野市）の豪族大森頼春が公方足利持氏に与力して小田原・箱根で禪秀軍を破り、平定に功績を立てたことから管領禪秀方に与した土肥・小早川党が追放されたあとの小田原城に入った。
大森氏は五代八十年つづいたが、この頼春の子氏頼の代が全盛期で扇谷家の重鎮として南相模を治めていた。
大森氏頼が歿して一箇月後にこんどは三浦半島先端にある新井城（三浦市三崎町）で御家騒動が起こった。
当主三浦時高が養子入りした定正の兄高救の子義同（道寸）に攻められて自害してしまったのである。

時高にしてみれば、主家扇谷持朝の二男高救を養子に迎えて三浦家の安泰を図ったものの、晩年になって実子高教が生まれてみると上杉の血を引く高救の子義同に三浦家をとられるのが惜しくなり、わが子に家督を譲ろうとする態度が露骨になって義同の反発を買っていた。
義同の正室は大森氏頼の女であり、女を太田資長（道灌）の嫡男資康に嫁がせていたので、両家の助力で身の安泰を図れたが、定正は二人の重鎮を喪ってしまった。
これを知った顯定はますます意を強くして定正に起死回生の決戦を挑むべく軍容を整えて機会を窺った。
明應三年（一四九四）十月、顯定は鉢形城を出陣した。
定正は頼みの足利政氏や長尾景春に早馬を仕立てる余裕もないまま、慌ただしく河越城を進発した。
両軍は三度目に対決した高見原で出会い、布陣した。
今回は連敗している山内軍のほうが気負っていた。
はじめ押されていた扇谷軍が盛り返そうとしたとき突然異変が起こった。定正が落馬したのだ。
馬廻りの者たちが急拵えの簡易輿に乗せて後退すると、それを見た扇谷の将兵たちは一斉に逃散していった。
定正は敗走の途中で息を引き取った。骨折で命取りになることはないから、落馬したときの衝撃で蜘蛛膜下出血か心筋梗塞のような異常事態が起きたのであろう。
定正はこのとき五十一歳。呆気ない最期であった。
顯定は、五度目の対決でようやく定正に勝ったのだ。

しかも定正は戦死ではなかったが急死してしまった。
顯定は定正との抗争だったのだから当人が斃れれば結着がついたのだが、扇谷家のほうはすまされなかった。
定正には子がなかったので急拠兄朝昌の嫡男朝良が立てられ、扇谷宗家を継いだ定正のあとを継いだ。つまり先々代政眞（まさざね）に子がなかったので叔父の定正が継いだのだが、そのまたあとを甥の朝良が継いだのである。
この上杉両家の内部抗争がつづいているあいだに伊豆を乗っ取った早雲が虎視眈々と関東奪取を狙っていた。
この年、顯定の父で越後守護の上杉房定が病歿したので弟の房能があとを継いで守護になった。
また、まえに述べた堀越公方足利政知の遺子清晃が還俗して名を義澄とあらため、十一代将軍になっている。

# 第十五話　山内顯定の最期

顯定が扇谷家との抗争をつづけているあいだに伊豆の早雲が関東に触手を伸ばしてきた。まず小田原を攻めて相模西部を掠め奪った。顯定に攻められている扇谷朝良は駿河の今川氏親と伊豆の早雲に来援を求めた。

早雲は武田攻めに失敗したことから上杉が武田と結ばぬよう早手回しに和を求めていた。越後守護代長尾為景が守護上杉房能を討ったので顯定が弟の仇討ちに為景を攻めたが逆に逐われて長森原で返り討ちされてしまった。

## 一

扇谷上杉の家宰太田資長（道灌）謀殺に端を発した山内顯定と扇谷定正との内部抗争は決着に七年かかった。

はじめの二年で山内顯定が四戦して四敗してしまったのは、扇谷定正が前公方で古河へ追い遣られた足利成氏と、主君山内顯定に遺恨を抱いて敵対した家宰家の嫡男長尾景春を抱き込んで戦力増強したためであった。

顯定は山内軍の戦力増強を図ると同時に、定正に加担している成氏と景春軍の戦力衰退をじっと窺った。

そして、隠忍自重すること五年――。

時機到来とみた顯定は明應三年（一四九四）十月、軍容を整えると機先を制して勇躍鉢形城を出陣したのだ。

その報らせに慌てた定正は足利成氏、長尾景春に出兵要請の余裕もなく、慌てて単独軍で河越城を進発した。

この五度目の雌雄を決する対決は定正の落馬事故死で飽気なく終わり、山内軍の思い掛けない勝利となったのだが、顯定はなにはともあれ管領家の面目を施した。

顯定は定正との個人抗争だったのだからこれで鳧がついたことになるのだが、扇谷家のほうは当主を喪い河越城へ退いたままの状態では引っ込みがつかなかった。

そこで定正の養子になっていた甥の朝良を棟梁に戴いて再起を期すべく着々と軍容を整えていった。

油断なく扇谷の動向を探っていた山内顯定は、おくれてはならじといつでも迎え撃てる戦闘準備を急がせた。

こうして、管領の山内上杉が扇谷家との同族争いに現を抜かして領国経営を疎かにしている隙を狙って伊豆國を略取した早雲宗瑞がこんどは関東奪取に動き出した。

まず標的にされたのは、小田原の大森藤頼であった。

藤頼は氏頼の二男であったが、嫡男實頼が早世していたのであとを嗣いだのだが、扇谷家の重鎮として小田原城を拠点に西相模地方に威を振るってきた祖父頼春、父氏頼には似ても似つかぬお人好しの御曹子であった。

若輩で軟弱な藤頼の許では士気統制が弛緩しているに違いないと見て取った早雲は、乗っ取りに動いた。

早雲はまず小田原衆といわれている西相模の松田ら在地国人たちを巧みに手懐けることからはじめた。

そして、国人たちを通して藤頼に近づいていった。

藤頼は主君定正が父と東相模の三浦時高を喪った穴埋めに隣国の早雲に協力を求めているときいていた。

事実山内軍との五度目の対決のとき早雲は出陣したが、定正の事故死で合戦にいたらず軍を退いたという。

名を遺した名将はみな中国の戦国時代に魏の范睢が唱えた外交政策『遠交近攻策』を採った。

すなわち、遠国とは親交を結んでおいて近隣諸国を攻め奪り領国を拡大してゆくのが得策だということだ。

藤頼はこの教訓を生かさず、隣国と友好を保っていれば安泰なのだと思い込んで早雲に媚を売っていた。

ある日、その早雲からとつぜん使者がやってきた。

藤頼は、なにごとかと狼狽えて恐る恐る対面した。

使者の口上は、

「このところわが主が伊豆の山で鹿狩りを催しておりますので他の山の鹿がみなご領国の箱根山へ逃げ出してしまいました。そこでわれらの勢子をご領国へ入れさせていただきそちらから伊豆へ追い戻したいと思うのですが如何でござりましょう。まことに恐れ多いことではござりまするが枉げてお許しをいただきますれば有難くお伺い致して参るよう申しつかって参上いたしました」

その言上は丁重な申し入れであった。

なにごとかと不安だった藤頼は、使者の話を聴いてなんだそんなことだったのかと密かに胸を撫で下ろした。

安堵で緊張が解れるとお人好しの性癖が頭を擡げた。

そして、なんの疑念も抱かず、

「左様なことなればいと易し」

そう微笑むと、その場で許可を与えてしまった。

あとで重臣たちから擬議が出たが取り合わなかった。

重臣たちは万一に備えて防備を固めようと図ったが、生憎山内家との抗争に動員されていて手薄だった。

はたして早雲は動いた。

足軽を勢子に仕立て、腕利きの若侍数百人を犬飼に見立てて竹槍を持たせると夜討ちの準備にとりかかった。

明應四年（一四九五）九月、それらの人数を熱海の日金山（十国峠）越えで相模國に侵入させると源頼朝が旗揚げした石橋や箱根山麓の湯本あたりに潜ませた。

日暮れを待って千頭の牛の角に松明を付けると、勢子がのちに秀吉の小田原攻めのときの一夜城で知られることになる石垣山や箱根山へ追い上がらせた。

いっぽうの若侍集団は石橋や米神（ＪＲ東海道線早川駅と根府川駅のあいだ）のあたりから法螺貝を吹き立て鬨の声を挙げて城下の板橋へ雪崩込み町家を焼き払った。

大森氏時代の小田原城は現在の市街地からみて小田原厚木道路の外側山寄りの水之尾（箱根登山鉄道風祭駅の北方）にあったから板橋、風祭は城下町といっていい。

その城下町を焼き払われたのだから穏やかではない。

早雲の軍勢に急襲されて城下町まで攻め込まれた大森方は慌てふためいて小田原城は大混乱に陥った。

石垣山や箱根山に群がる無数の松明の灯りを見た城兵たちは、その牛の角に付けた灯りを何十万の大軍と見誤って恐怖に脅え、戦わずして戦意喪失してしまった。

藤頼は僅かの供に護られて城を脱出すると、三浦一族の岡崎城（平塚市と伊勢原市の岡崎）へ落ちていった。

こうして、関東管領家が同族争いに鎬を削り戦力を消耗している間隙を狙われて、隣国伊豆の早雲宗瑞に扇谷家の領国相模國の西部一郭を掠め奪られてしまった。

## 二

ついに扇谷定正を斃して勢いを得た山内顕定は、扇谷家が小田原を早雲に奪われて動揺している機に乗じて前公方足利成氏の嫡男政氏を奉じて武蔵國に出陣すると扇谷朝良を討ち、相模國にも派兵して長尾景春を破った。

その翌年にあたる明應六年（一四九七）九月三十日に幕府の命を受けた関東管領上杉房顕に鎌倉公方の座を追放されていた足利成氏が六十四歳で歿した。

その四年後の文亀元年（一五〇一）には山内顕定が家宰に取り立てた長尾忠景が閏六月二十九日に歿した。

そしてさらに三年後、永正と改元された年（一五〇四）の九月に、河越城の扇谷朝良が動いた。

上戸（川越市）に布陣していた山内顕定が河越城を攻め倦んで江戸城攻めに切り換え白子（和光市）に移動しているとの報らせを受けた扇谷朝良は、駿河守護今川氏親と伊豆韮山の早雲宗瑞に早馬を送って援軍を求めた。

早雲とは小田原を奪われて敵対したはずなのになぜ救援を求めたのか不可解な向きもあろうが、前年早雲は、甲斐國（山梨県）を攻めたが阻止され失敗していた。

そこで早雲は、上杉と武田が結ばぬよう朝良に和を求めてきたのだった。朝良とても、山内と早雲の腹背に敵を受けるのを避けることで両者は一致したのである。

だが早雲は和睦はしたが小田原は返さなかった。若輩の朝良は交渉で狡猾な早雲に翻弄されたにちがいない。

扇谷朝良からの依頼を受けた早雲はさっそく軍勢を率いて桝形城（川崎市多摩区生田）に出陣してきた。

桝形城は小澤城（同区菅）を本拠にしていた平氏の分流秩父系の小山田有重の嫡男稲毛重成が寺尾城（同区菅）、作延城（高津区上作延）とともに出城にしていた。

ついでながら稲毛重成の室は北條時政の女で源頼朝の室北條政子の妹であるから関東の有力豪族に違いない。

いっぽうの今川氏親も一日遅れて桝形城に着陣した。

これを知った山内顕定は古河の足利政氏に出陣を求め、甲斐の武田信虎（信玄の父）に援軍を依頼させた。

そして九月二十七日、山内顕定軍と扇谷朝良、今川氏親、早雲宗瑞の連合軍は武蔵國立河原（東京都立川市柴崎町付近）で激突し、ここに大遭遇戦が展開された。

山内軍は単独軍で奮闘したが勝利を得られず、両軍合わせて千八百を数える死者を出して痛み分けになった。

鉢形城に退いた山内顕定は弟の越後守護上杉房能に援軍を求め、兄の窮状を知った房能はすぐさま守護代長尾能景（謙信の祖父）に命じて救援に向かわせた。

越後勢が到着すると顕定は直ちに出陣して十二月一日に武蔵國椚田砦（八王子市椚田町）を攻略すると、二十六日には相模國實田砦（平塚市真田）をも陥とした。

そして翌永正二年（一五〇五）三月扇谷朝良の息の根を止めるべく勇躍鉢形城を出撃して河越城に向かった。

河越城を包囲された扇谷朝良は、昨年からの相次ぐ敗戦ですっかり戦意を喪失していたので、家宰の曽我ら重臣たちの勧めもあって河越城を明け渡し、江戸城に隠遁することを条件にして顕定に和睦を請うて許された。

こうして文明十八年（一四八六）以来二十年つづいた山内・扇谷両上杉家の抗争は終止符を打ったが、得るものなくして失うものの多かったこの無益な唯み合いをつづけているあいだに伊豆の早雲宗瑞に関東侵攻の機会を与えてしまい、こんどは早雲との抗争に発展してゆく。

## 三

扇谷朝良と和睦のあと山内顕定は古河の足利政氏の弟を養子に迎えて顕實と名告らせ、さらに政氏の二男義明を鎌倉鶴岡八幡宮別當に据えて公方家との絆を固めた。

だが、政氏に異議を唱えた嫡男高基が下總國関宿城（野田市関宿町）に拠って父子の対立を鮮明にした。

戸惑った顕定は出家して可諄と号し説得につとめた。

顕定の懸命な努力の甲斐あって、ついに高基が折れて父政氏に詫び状を届けることでようやく一件落着した。

そのころ、顕定の実家の越後國も緊張状態にあった。

隣国の越中（富山県）に一向一揆が、その南に接する美濃（岐阜県）には土一揆が蜂起し、それが燎原の火のように拡がっていって加賀・能登（石川県）を含めた一向宗徒が越前（福井県）に侵入していった。

越前守護朝倉貞景はこれを撃退すると、一向宗の本拠吉崎（福井県あわら市吉崎）を破壊した。

一向宗とは、親鸞が開祖した浄土眞宗のことである。

加賀國の一向宗徒は、應仁の乱で東軍細川方についた守護富樫政親が一部の家臣に担がれて西軍山名側についた弟幸千代丸に逐われたとき協力して回復に努力した。

そのことがあってから我が物顔に振る舞い手に負えなくなってしまったので、政親は近江六角高頼攻めのとき鉤安養寺の陣で将軍足利義尚に討伐の協力を要請した。

政親は拠点として高尾城（金澤市高尾）を築城した。

それを知った一向宗は檄を飛ばして二十万人を召集すると、翌長享二年（一四八八）五月高尾城を包囲した。

一万の軍勢で籠城をつづけた政親は七日に討って出て敗れ、九日の激戦にも敗れてついに自刃して果てた。

援軍は本願寺門徒衆に阻止されて間に合わなかった。

この政親の死によって富樫氏は滅亡し加賀國は守護大名がいなくなったので、本願寺八世恵燈大師（蓮如）の子本泉寺蓮吾、松岡寺蓮綱、本教寺蓮誓が支配する一向一揆と、農民の一味同心する土一揆の共和国になった。

永正三年（一五〇六）九月、その加賀の一向一揆が主君の守護畠山尚順に叛いて内応してきた守護代神保慶宗の手引で越中へ侵入してきたので、窮地に立たされた畠山尚順が越後守護上杉房能に助勢を求めてきた。

だが、越後國内においても土豪たちが上越（頸城・魚沼地方）、中越（三島・古志・刈羽・蒲原地方）、下越（阿賀野川の北地方）それぞれの地域でたがいに領地の拡大を謀って争乱を起こしていたし、その頂点に立つ守護代長尾一族のあいだでも栖吉城（長岡市栖吉町）の古志長尾房景、坂戸城（南魚沼市六日町）の上田長尾房長などが春日山城（上越市中屋敷）の府内長尾能景の守護代の地位を虎視眈々と狙って暗躍をつづけていた。

守護上杉房能はその長尾一族の対立を巧みに利用して操り、長尾能景の行動を牽制して権力の衰退を謀った。

一昨年十月武藏國立河原で扇谷朝良に敗れた兄山内顯定の救援に遠征させたのもその現れのひとつであった。

畠山尚順の依頼を受けた房能は、躊躇うことなく長尾能景に救援を命じて、急ぎ越中國へ出陣させた。

一向一揆の拠点は瑞泉寺（南砺市井波）で、そこに井波城を築城して一向宗三七〇寺を支配していた。

越中國へ進軍した長尾軍は常願寺川と神通川を渉って富山平野から砺波平野へ入ると、庄川を渡河した先にある井波城を攻めて敗走する一向宗徒を追撃して加賀との国境近くの蓮沼口（小矢部市蓮沼）まで追い詰めたのだが、一向宗徒を救援する神保慶宗勢に背後を衝かれて苦戦に陥り、能景は十九日に般若野で敗死してしまった。

悲報を受けた嫡男爲景は、強大な本願寺勢力の一向宗討伐に上杉軍団のなかから長尾勢だけを選んで差し向けた主君房能の判断の甘さが父能景を死地に追い遣ることになったのだと怨んでいたが、いろいろな噂話のなかで、（お屋形さまが守護代長尾能景さまの権力を恐れて、その威勢を殺ぐために敵わぬことを承知で出陣させた）のだという尤もらしい話が爲景の耳に入ってきた。

（お屋形が父を抹殺しようと謀ったにちがいない）

そう思い込んだ途端、爲景は怒り心頭に発した。

そのことを契機にして守護房能の治政に不満を抱いている多くの国人たちが爲景に同情して集まってきた。

守護代長尾をはじめ有力国人たちの不満というのは、それまで与えられていた特権を剥奪されたことだった。

その特権というのは室町幕府が全国各地に一国乃至数箇国を領する守護大名をおくについてこれまでの国人たちの利権との紛糾を避けるため一部の有力国人たちに守護大名の領内検察や課税を拒否できる制度を設けた。

越後國は長尾守護代が頸城、魚沼、刈羽、三島、古志、蒲原、岩船七郡の代官としてその特権を持っていた。

房能が守護になったとき、その特権を剥奪したのだ。

守護代の特権がなくなれば有力国人たちへのお零れもなくなるわけで、房能への不満が燻りつづけていた。

それが能景戦死の疑念を契機にして表面化した。

爲景は一年がかりで与党の国人たちと構想を練ると、守護家の重臣たちがそれぞれの知行地へ帰って府中を留守にしている隙を狙って蹶起し、房能の従弟定實を守護に奉じてみずから守護代となって房能を幽閉監禁した。

身の危険を感じた房能は辛うじて脱出すると、僅かの供に護られて松之山（十日町市）から秋山郷（長野県下水内郡栄村）を経て三国峠（南魚沼郡湯沢町）越えで関東に入り、鉢形城の兄顯定を頼ろうとした。

だが、松之山郷の天水越で爲景の手勢に追いつかれて自害したので、爲景は無念を晴らして溜飲を下げた。

## 四

爲景は国内の動揺を鎮めると、幕府に手蔓を得て管領細川高國に取り入り越後守護上杉定實、守護代長尾爲景を正式承認させたので非合法的手段は成功した。

このとき山内顯定は公方家父子の調停に心血を注ぎ、古河の政氏と関宿の高基のあいだを行き来して取り持ちに懸命だったので、越後鎮圧が後手に回ってしまった。

山内顯定は関東管領家の養子で越後守護家の出身であったから、こんどのことは実家で起こった騒動であり、しかも実弟房能が討たれているので無念このうえなく、逆臣長尾爲景鎮圧に心が逸ったが、扇谷領を侵蝕してきている早雲の動きが気になって迂闊には動けなかった。

翌年、その早雲が駿河守護今川氏親の命を受けて三河國（愛知県）の諸城攻撃に邁進して関東には見向きもしない情況を見て取った顯定は、ようやく立ち上がった。

永正六年（一五〇九）七月、顯定は養子憲房とともに武藏・上野両国の兵を率い三國峠越えで越後へ入った。

坂戸城主長尾房長、栖吉城主長尾房景らの長尾一族が府中への案内に立ち、顯定の実家で爲景が守護に据えた定實の父上條上杉房實や薄生城（小千谷市）の平子氏ら中越の部将たちがみな顯定の許に馳せ参じた。

顯定は関東管領であり越後守護家の出身であるから越後國人として弓矢を向けるわけにはいかなかったのだ。

爲景には長尾の支族や高梨政盛をはじめとする井上氏、小笠原氏などの北信濃衆が支援してくれたが衆寡敵せず、爲景は春日山城を捨てて隣国越中へ落ちていった。

爲景は顯定の追撃を躱すため、支援してくれた国人衆と信濃衆を帰国させて、僅かの人数で佐渡へ渡った。

顯定は爲景を国外追放でよしとして執拗な探索はせずに、その年は実家の上條城（柏崎市黒瀧）で越年した。

だが、爲景はそんな顯定の動きを探っていたのだ。

そして、年が明けて永正七年（一五一〇）を迎えた。

越後國は、雪深く冬の季節が長い。

雪解けを待って顯定は、帰国していた爲景派の長尾支族や国人たちを片っ端から捕えて極刑に処しはじめたので、それらの国人たちを支持する農民たちが立ち上がって土一揆を起こし、関東管領の越後掃討に抵抗した。

高梨政盛からの報らせを受けてそれらの状況を知った爲景は、政盛の手引きで佐渡を脱出すると蒲原津（新潟市）へ上陸して密かに軍容を整え反撃の機会を窺った。

そのころ、顯定の許に鉢形城から急報が届いていた。

伊豆の早雲宗瑞がまたも動き出しているというのだ。

顯定は、養子の憲房に扇谷朝良と連携をとるよう命じて遠征した大半の軍勢を預け、急ぎ鉢形城へ戻らせた。

椎屋（柏崎市椎谷）まで迫っていた爲景の軍勢は顯定が上條城を出発したのを確かめるとあとを追った。

はやる爲景軍は、六月二十日に上田荘の長森原（南魚沼市六日町）でついに顯定軍に追いついた。

ひとあし先に軍勢の大半を帰国させていて、ほかには長尾一族の助勢軍もいない手薄の管領軍だけではいかんせん抗し難く、一方的に敗れて顯定は返り討ちに遭ってしまった。五十七年の生涯であった。

越後守護上杉房能と関東管領上杉顯定の兄弟を斃した長尾爲景は二度も下剋上を遣って退けた大罪人であるが、それにとどまらずこのあとみずから越後守護に据えた女婿の上杉定實をも追放して守護の座を奪い取った。

このときはさすがに上杉守護家の重臣や家臣たち、爲景に不満を抱く国人たちが一斉に蜂起したが、爲景は国人たちを制圧すると守護家の重臣たちには知行地安堵を約して反抗を抑え、名実ともに国主の座を得た。

この長尾爲景のように幕府体制下にあって三度も下剋上を繰り返した人物は寡聞にして知らない。

しかし、爲景のような秩序を乱す悪党が現れたことは、やがて室町幕府の守護・地頭制度が崩壊して、それぞれが自分自身の所領確保と利害得失のために行動するようになり、その結果実力者が頂点に立ついわゆる弱肉強食の戦国時代に入ってゆく前兆でもあったのである。

# 第十六話　落日の譜

顯定は古河の足利政氏の弟顯實を養子にしていたので実子憲房との後継争いになったが、憲房を支える家臣たちが多かったので顯實は古河へ逃げ帰ってしまいけりがついた。

だがその憲房は五十九歳のとき上野平井城で病歿した。嫡子憲政はまだ十九歳であった。

扇谷朝定が北條氏綱に拠点の河越城を奪われて武蔵の一隅に追い遣られてしまったことにより、山内憲政もまた上野平井城を中心とする関東の最北隅だけになってしまった。

一

関東管領上杉顯定が長尾爲景に討たれたことはすぐには鉢形城に届かなかった。一行が全滅してしまったので関東も越後も状況把握が随分遅れてしまったのである。

ひとあしさきに帰国の途に就いていた養子憲房は、山内上杉の上野守護本拠地平井城（藤岡市西平井）に入って伊豆の早雲宗瑞の動きを探っていたところへ養父の悲報を受けたのだが、地団駄踏んでも後の祭りであった。

悲報は公方家からの養子顯實の鉢形城にも届いた。

顯實は、直ちに古河の兄足利政氏に詳細を報告した。

政氏は公方でもないのに顯實を関東管領に据えた。

そのことを知った憲房は、自分こそ上杉家の血筋を引く養嗣子であると主張したが、政氏は顯定との盟約だと突っ撥ねて一歩も譲らず、ついに押し通してしまった。

憤懣遣る方ない憲房は実力で奪い取ろうと企んだ。

この対立は、関東管領家の分裂にほかならなかった。

これが嫡出子同士なら長男すなわち嫡男相続ですんなりいくし、嫡出子と庶出子となら嫡子相続で異議はないのだが、養子同士となると誰もが納得する〈長幼の序〉というわけにもいかず判断が難しいから、行き着くところは実力行使で結着をつけることになってしまう。

実子に恵まれず家名存続のためやむなく養子を迎えるのなら一般的には一人のはずなのに、顯定の場合は養父山内房顯の甥憲房を迎えておきながらやむを得ない事情があって元鎌倉公方足利成氏の二男顯實をも迎えたからには顯定自身が憲房と顯實のいずれを継嗣にするか決めなければ収まりがつかないのにその本人が急死してしまったのだからほかに決着のつけようはずはなかった。

とにかく関東管領職を横取りされてしまった憲房は、実力で取り返すべく着々と準備をととのえていった。

そんなおりもおり扇谷朝良の臣上田政盛が伊豆國の早雲宗瑞に通じて寝返り、武藏國權現山城（横浜市神奈川区幸ヶ谷）に立て籠もって山内、扇谷両家に叛いた。

ここを早雲に奪われて稲毛城や丸子城を陥とされれば、東相模を抑えている三浦義同の居城岡崎城や三浦半島の新井城（三浦市小網代）が孤立する虞があった。

扇谷朝良は山内憲房に救援を求めてきた。

憲房は顯實に抽んでる好機到来と勇んで快諾した。

このとき扇谷朝良は、この山内憲房の協力によって權現山城を陥として上田政盛を敗走させることができた。

この上田政盛が調略されたことによって、小田原城を陥として西相模を略取した早雲宗瑞が東相模から武藏一帯をも制覇しようとしている魂胆が明白になってきた。

これまで山内と扇谷の両家は同族でありながらながいあいだ反目し合ってきたが、ここへきて早雲宗瑞という両家にとって共同の敵が出現したことによって、遺恨を水に流して結束せざるを得ない情況になった。

早雲は両家の協力態勢の模様眺めを考えてか、翌年扇谷朝良に和睦を申し入れてきたので、朝良は承諾した。

まず和睦という手段を講じて相手を油断させておいて、機を窺い突如侵攻を謀るのは早雲の常套手段である。

はたして早雲は翌年三浦義同の相模國岡崎城を攻めた。

不意を衝かれた義同は住吉城（逗子市小坪）に後退し、さらに三浦を目指して敗走、新井城に立て籠もった。

太田道灌の嫡男資康は三浦義同の女婿だったので舅の危機を救おうと扇谷の軍勢を率いて駆け付けたが、利あらずして敗死してしまい、新井城は孤立無援となった。

山内軍が動けなかったのは、元公方家の足利政氏・高基父子の対立に巻込まれ、管領顯實は父政氏を憲房は嫡男高基を支持して内紛に発展してしまっていたのだ。

この養子同士の咥み合いは山内家の血筋憲房を支える家臣たちが多く、顯實は憲房の奉行で足利莊代官の長尾景長に鉢形城を逐われ養家を捨てて古河の父政氏の許へ逃げ帰ってしまったので憲房が管領の座を取り戻した。

そんな事情で山内軍は三浦義同を救援できなかった。

援軍を頼めぬ籠城戦ほど惨めな戦いはない。兵粮が尽きれば万事休すである。新井城は風前の灯であった。

もはやこれまでと覚悟した義同は、嫡男義意とともに全軍を率いて打って出ると白兵戦を挑んで一矢報いた。

そして義同は、義意とともにみごと自刃して果てた。

うつものもうたるるものもかわらけよ
くだけて後はもとの土くれ

三浦義同（道寸）の辞世である。

相模國を奪取した早雲宗瑞は、次に武藏國を狙った。

永正十五年（一五一八）四月二十一日、扇谷朝良が

歿して弟朝寧の嫡男朝興が養子入りしてあとを嗣いだ。
その翌年八月十五日に風雲児早雲宗瑞が伊豆國韮山城（伊豆の国市韮山）で八十八歳の生涯を閉じた。
三十三歳の嫡男氏綱があとを嗣ぎ、鎌倉幕府執権北條氏が発祥の地に因んだことに慣い、北條氏を名告った。
関東の地をめぐってたがいに鎬を削り合った三人が去り、上杉氏は山内家が憲房、扇谷家が朝興、それに早雲家は北條氏に名告りを変えて氏綱とそれぞれに代替わりはしたが、当主が入れ替わっても時の流れは変わらず、そのままの情勢でさきをいそいですすんでいく。

## 二

さきに変化を起こしたのは古河の元公方家であった。
長いあいだ反目し合っていた政氏・高基父子がようやく和解すると、こんどは高基が弟の義明と対立した。
義明はまえにも述べたように山内顯定に鎌倉鶴岡八幡宮別當にさせられていたのだが、僧籍を嫌って還俗し古河へ帰ったものの兄高基が北條に接近して嫡男晴氏の室に氏綱の女を希んでいることに反駁して不和になった。
義明は古河を去ると上總國畔蒜荘椅原郷の眞里谷城（木更津市真里谷）主武田信勝に迎えられて庇護を受けた。
そして、信勝に奉じられて下總國小弓城（千葉市中央区南生実町）の千葉氏分流原行朝を攻略して住居とし、そこを小弓御所としてみずから小弓公方と称した。
武藏國を窺う北條氏綱は父早雲同様智謀に長けていた。
曽祖父持氏を自害に追い込み、祖父成氏を鎌倉府から追い出した上杉一族に遺恨をもつ古河の足利高基の嫡男晴氏を懐柔すると、扇谷家の重臣太田資長（道灌）の孫で江戸城代の康高にも女を嫁がせて陣営に引き入れた。
要所を抑えた氏綱は大軍を率いて武藏國へ侵入した。
大永四年（一五二四）正月、急報を受けた扇谷朝興は、山内憲房とは齟齬を来していて頼めぬので自軍だけで江戸城を出ると西へ向かい、迎え撃つ態勢をとった。
両軍は十三日に高縄原（港区高輪）で激突した。
はじめのうちは両軍一進一退の揉み合いがつづいて優劣がつかなかったが、やがて扇谷軍が押されて受け身に立つとずるずる後退してついに敗走を余儀なくされた。
江戸城へ逃げ帰った朝興だったが氏綱の追撃の手は弛まず、そこへもってきて重鎮の太田資高・資康父子の謀叛があって支え切れず、ついに河越城へ逃げ延びた。
切羽詰まり、背に腹はかえられぬと思い立った朝興は、形振り構わず山内憲房に救援を要請した。
憲房も両家共同の敵北條氏綱を目前にして唾み合っている場合でないことは承知しているので、朝興に呼応すると直ちに平井城を出陣して鉢形城に入った。
そして、北條方に寝返った国人たちの討伐に南下して

毛呂城（埼玉県入間郡毛呂山町）主毛呂顯季を攻めた。
この報に氏綱も江戸城を出て救援に向かい毛呂城を挟んで両者対陣したが、上杉方の足利長尾憲長や天神山城（埼玉県秩父郡長瀞町）主藤田康邦の仲裁で和睦した。
その条件は毛呂城を上杉方に明け渡し城主毛呂顯季とその家臣たちは北條方へ引き渡すというものであった。
しかし氏綱は僅か四箇月後の大永五年（一五二五）二月六日に突如として朝興の将太田資頼の岩槻城（さいたま市岩槻区太田）を攻め、澁江三郎の内応で占拠した。
乱世の約束事などその場限りの便法にすぎなかった。
和睦や盟約は弱者のほうはそれに縋るが、強者は成り行きで一方的に破棄して憚らない不安定なものである。
それから二箇月後の四月十六日、山内憲房が上野國高山莊平井城で病歿した。五十九歳の生涯であった。
遺された嫡男憲政はこのとき十九歳になっていた。
山内家の重臣たちは北条氏綱との抗争の最中に憲房を喪い若い当主憲政と扇谷朝興だけでは心許なく思い、先代憲房の例に倣って前公方家の与力を恃み足利高基の二男晴直を養子に迎えて名を憲廣と改めさせた。
関東管領といっても昔日の権威はなく、すでに形骸化されていたが、公方とともに名誉だけは遺っていた。
山内家の重臣たちは当主が公方家の血筋になったのをさいわい、顯定を返り討ちされた怨讐を超えて越後の長尾爲景と和解させると北條との対決に引き入れた。
爲景の盟約によって勢いを得た扇谷朝興は、反撃に転じて氏綱に寝返った澁川氏の蕨城（蕨市）を攻略した。
このころ、北条氏綱は武田信虎に駿河國東部や相模國北西部を侵略され、さらに小弓御所足利義明を奉じた安房國稲村城（館山市）の里見實堯にも侵犯されていた。
里見は水軍を保有していたので、鏡ヶ浦（館山湾）から浦賀水道を北上して金澤（横浜市）に上陸すると鎌倉を攻めてきた。この合戦で鶴岡八幡宮が炎上した。
里見氏は清和源氏新田義重の二男義俊が上野國碓氷郡里見莊に住んで莊名を名告りにしたのが始祖という。
その末裔にあたる家基は結城合戦のとき嫡男義實とともに鎌倉公方足利持氏の遺児春王丸・安王丸兄弟を奉じて結城城に立て籠もった結城氏朝・持朝父子を支持してともに籠城したが、武運拙く落城となったとき、家基は義實を逃がしておいてみずからは打って出て果てた。
結城城を脱出した義實は少数の家子郎等とともに相模國三浦半島まで逃げ延びて新井城の三浦時高を頼った。
と『里見九代記』などには述べられているのだが―。
鎌倉公方足利持氏と関東管領上杉憲實が対立したさきの〈永享の乱〉のとき、鎌倉府留守役だった三浦時高は千葉胤直らと上杉憲實に応じて公方持氏を攻撃しているのだから、この〈結城合戦〉においても関東管領側であるはずなのになぜ里見に頼られたのか理解に苦しむ。
里見義實が扇谷上杉家の重鎮三浦時高を頼ったという

のはおかしな話なのだが、義實が形振りかまわず、
「溺れる者は藁をも掴む」
だったのか、それとも時高が、
「窮鳥懐に入れば猟師も殺さず」
で寛大な処置をしてやったのかはさだかでないが、ともかく時高は義實を匿って様子を窺い、密かに相模灘を挟んで相対している房総半島先端の安房國白濱（南房総市白浜町）を選んでそこへ逃がしてやったのである。
のちに時高の養子義同（道寸）が早雲宗瑞に新井城を攻められて嫡男義意と自刃して果てたとき、時高の幼ない実子高教が安房國へ逃れて里見氏の庇護を受けた。
高教は平郡正木郷（館山市正木）で養育され、成人すると正木時綱の名告りを与えられて里見義通に仕えた。
こうして無事に三浦氏の血筋を存続することができたのは、このとき三浦時高が飛んで火に入る夏の虫の里見義實を捕えて斬罪せずに、安房國へ逃がしてやった情けが三浦氏の血統を繋げる因になったのだから、まさに、
「情けは人の爲ならず」
であったのだ。

## 三

里見實堯が北条氏綱を鎌倉に攻めてから三年ほどは上杉・北條との激突はなく、小競り合い程度の繰り返しだったが、享禄三年（一五三〇）六月に北條側が動いた。
氏綱が十六歳になった嫡男氏康を初陣させて扇谷方の小澤城（稲城市矢野口町）を攻めて破り、さらに氏綱の女婿吉良頼康の世田谷城（世田谷区豪徳寺）を固めた。
小澤城救援に向かった扇谷朝興は小澤原で北條軍を迎え撃ったが破れ、単独軍ではかてなくなっていった。
翌年七月十八日武藏國久喜の臨濟宗永安山甘棠院を隠居所にしていた古河の足利政氏が六十六歳で歿した。
山内憲政は好機到来と上野國寺尾城（高崎市乗附町）の義兄関東管領上杉憲廣を逐って山内家を嗣いだ。
旧姓足利晴直に戻った憲廣は、古河へは戻れず上總國の里見實堯を頼ったが、その後については定かでない。
長いあいだの合戦で消耗し尽くした扇谷軍はもはやゲリラ戦しかできず、相模國に侵攻しても大磯や平塚あたりを放火する程度で北條側に打撃は与えられなかった。
足利政氏が歿して四年後の天文四年（一五三五）六月八日に父のあとを追うようにして里見に庇護されている晴直の父高基が五十一歳で歿し、嫡男晴氏が嗣いだ。
衰えたとはいえ公方家の存在を誇示していた父政氏を喪った晴氏は弱体化した上杉を見限り氏綱と和睦した。
その四箇月後、北條氏綱は扇谷上杉の牙城河越城を攻撃してきたが、このときは必死の防戦でよく堪えた。
翌天文五年、両上杉氏が頼みにしている越後國の長尾爲景が春日山城（上越市中屋敷）で病歿してしまった。
そのまた翌六年（一五三七）四月二十七日北條に勝て

ぬ無念を遺して上杉朝興が五十歳で病歿した。あとは嫡男朝定が嗣いだがこのときまだ十三歳の少年であった。

朝定は父朝興の遺志を継いで三箇月後には勇躍出陣したが、少年を棟梁に戴く扇谷軍将兵の士気は揚がらず、武藏國三木（狭山市東三ツ木）で北條軍と戦ったが一蹴されて初陣を飾れず、居城に戻る余裕もないままついに河越城を捨てて松山城（比企郡吉見町）に逃げ込んだ。

城将難波田弾正父子は松山城を出て河越への血路を開こうとして戦ったが、敗れて逃げ帰ってきてしまった。

扇谷朝定が北條氏綱に拠点の河越城を奪われて武藏國の一隅へ追い遣られてしまったことによって、山内憲政の所領もまた拠点の平井城を中心とする上野國だけに押し込められる状態になってしまった。　山内・扇谷両上杉との抗争に一段落ついたとみた氏綱は、ここで南関東の下總（千葉県）に眼を向けはじめた。

まず下總國葛西城（東京都葛飾区青戸）を攻め陥とし、ついで元荒川右岸の台地上にある平城で扇谷家重臣太田資時（道灌の弟の系統）が城代の岩槻城を攻撃しておいて、踵を返すと下總國へ向かった。初陣から八年経つ嫡男氏康も同行していた。

「北條軍来攻」

の報に小弓御所足利義明は里見義堯とともに上總・下總の軍勢を動員して江戸川の東岸國府台に布陣した。

國府台は古代下總國の國府がおかれたところで現在は和洋女子大などがあり、近くの里見公園内にはこのときの足利・里見軍の陣地とみられる土居壕の跡がある。

この激突はどちらが野心を抱いて動いたかは定かでないが、足利義明は甥の晴氏を斃して鎌倉を占拠し公方家の嫡流として関東に号令したい思いに燃えて武藏國侵攻を謀っていたし、北條氏綱は房総制覇を狙っていたから双方の決戦はいずれ起こる不可避の動きであった。

このとき北條氏綱は江戸城で休息し軍容を整えた。

そして、十月五日に國府台に到着すると北方に布陣して双方戦闘態勢に入り、七日に戦端が開かれた。

戦闘は一進一退が繰り返されたがいつか北條軍が攻勢に転じて足利義明をいただく里見軍は守勢にまわった。

その混戦の最中に馬上で陣頭に立って采配していた義明が北條軍の三崎城代横井神助の強弓に胸を射抜かれて落馬したところを松田彌次郎に首を討たれてしまった。

これによって戦意喪失した足利・里見連合軍は総崩れになって敗走したので、北條軍の大勝利で幕を閉じた。

小弓城にいた義明の嫡男義純と二男頼純それに女は、逃げ帰った少数の家臣たちに伴なわれて安房國へ落ち延びた。

この系がのちに秀吉によって喜連川（さくら市喜連川）三千五百石を与えられ、喜連川氏を称した。

## 四

古河の足利晴氏は僅か四年のあいだに祖父政氏と父高基を喪い恃む上杉も衰退し、敵視されていたとはいえ叔父義明も里見義堯とともに北條氏綱と対決して敗死してしまったので、もはや庇護してくれるところは北條をおいてほかになく、落着かぬ状態に陥ってしまっていた。

晴氏が氏綱を頼り、氏綱も公方家を奉戴すれば関東制覇に大義名分が立つと考えていたので利害が一致した。

そこで氏綱は、晴氏が擦り寄ってきたのをさいわい女を嫁がせて足利公方家を北條一門に取り込んだ。

こうして北條氏綱は山内・扇谷上杉氏の所領関東を侵蝕しつづけているのとときをおなじくして、甲斐國の猛将武田信虎もまた信濃國佐久郡を攻略しはじめていた。

天文十年（一五四一）五月、信虎は諏訪頼重らと海野幸綱を攻めたので、幸綱は山内憲政を頼ってきた。

その一箇月後、信虎は嫡男晴信（信玄）に追放されて駿河國の女婿今川義元を頼って落ち延び隠棲した。

山内憲政はこの武田父子内紛の隙に乗じて信濃國長窪に出陣し、諏訪頼重と交渉して和睦を取り付けた。

この年七月十九日に北條氏綱が小田原城で病歿した。五十五歳の生涯であった。あとを嗣いだ三代氏康はすでに二十七歳の頼もしい青年武将に成育していた。

「北條氏綱病歿する」

の報らせが上杉陣営に齎されると、扇谷朝定は北條方の動揺の虚を衝くべく勇躍出陣して河越城を攻めたが、城将北條綱成の固い守りに跳ね返されて涙を呑んだ。

翌天文十一年（一五四二）三月、信濃守護小笠原長時は諏訪頼重と北信濃四郡を領有する埴科郡坂城（坂城町）の葛尾城主村上義清を誘って武田晴信攻めに向かったが、甲斐國との境に近い瀬澤（長野県諏訪郡富士見町瀬沢）に布陣していた武田軍に迎撃され敗退してしまった。

その意趣返しに晴信は、諏訪家の内紛に乗じて分家の諏訪頼繼や諏訪下社の金刺大祝を手懐けて諏訪へ侵攻し、頼重の本拠上原城（茅野市上原）を陥とし桑原城（諏訪市四賀桑原）へ追い詰めて、七月五日に降服させた。

晴信は和睦と偽り頼重を同行して帰国すると東光寺へ幽閉したので、頼重は謀られたと覚り自害して果てた。

諏訪惣領家を滅亡させた晴信は、さらに分家の頼繼をも斃して信濃國諏訪郡を奪い取ったので、守護小笠原長時の命を受けた村上義清が武田攻めに向かったが信濃國大門峠（長野県小県郡長和町）で撃退されてしまった。

こうして武田晴信は北信濃奪取を狙い、北條氏康は隣国駿河の今川義元と対峙するという構図になり、また越後國では猛将長尾爲景の死後継嗣晴景を武将の器量に非ずと断じた一部諸将の反抗に弟景虎（のちの謙信）を利用したことで遂に景虎の人気が高まり、兄弟への支持が分裂するという東国の乱世に突入して行くことになる。

# 第十七話　河越無惨

山内憲政は扇谷朝定が北條氏綱に陥とされた河越城の奪還を図り古河の足利晴氏を奉戴した連合軍で河越城を包囲して糧道を絶った。

城将北條綱成は小田原の氏康に救援を依頼した。氏康は今川義元との紛争を武田信玄の調停で和睦し八千の援軍で河越に向かった。

上杉方は数を恃んでのんびり落城を待っているところへ氏康の奇襲を受けて慌てふためき、混戦のなかで扇谷朝定は戦死し、憲政は辛うじて戦場を離脱すると平井へ逃げ帰った。

## 一

扇谷上杉朝定は築城以来七代つづいた本拠の河越城を捨てて松山城に退いてしまったことで嫡流家の関東管領山内上杉憲政に対して面目が立たず切歯扼腕していた。

武蔵、相模守護の扇谷家は、相模は小田原、岡崎、武蔵は江戸、河越、岩槻の各城をそれぞれ防衛の拠点にしていたのだが、西から侵略してきた新興勢力の伊勢新九郎長氏（早雲庵宗瑞）に駆逐されて相模は小田原、岡崎城をともに陥とされ、武蔵は北條を名告りにした早雲の嫡男氏綱に江戸、岩槻城を陥とされてしまった。

岩槻城のほうは六年後に城将太田資頼（すけより）が奪回していて、いまは嫡男資時（すけとき）があとを継いで死守しているが、江戸と河越の両城を喪ってしまったいまとなってはもはや機能を果たすことができず、孤立してしまっていた。

岩槻と松山では連繋が難しく、両城の中間に位置する河越城はなんとしても奪還しなくてはならなかった。

いっぽう山内憲政にとっても、扇谷朝定が氏康に河越城を奪取されてしまったことは痛恨の極みであった。

山内憲政は上野守護で平井城を居城にしていた。

平井城は上野國緑野郡（こうずけのくにみどのぐん）平井にあった。現在の藤岡市西平井であるから武蔵國（埼玉県）と境を接している。

北條氏康が相模國に次いで武蔵國を席捲すれば、つぎには上野國をも狙ってくるにちがいなかった。

憲政もまた河越城を奪還することは急務であったのだ。

ここで両家の思惑は一致し氏康は共同の敵になった。

そこで憲政は、常陸國（ひたちのくに）一の宮の武神鹿島（かしま）神宮（茨城県鹿島市）に『北條氏康打倒の願文』を奉納すると、扇谷朝定に河越城奪還についての協議を呼び掛けた。

憲政と朝定が両家重臣たちの知恵を持ち寄ってあれこれ検討したうえの結論は、

「古河の公方晴氏を抱き込んで北條氏康を追討する」

大義名分を立てることであった。

憲政が晴氏を奉戴する説得策を練っているところへ、とつぜん駿河守護今川義元からの使者がやってきた。

使者は義元からの書状を持参していて、それには、

「上杉と今川で協力して北條氏康を斃す」

具体策が書かれていた。

今川氏は足利将軍家の連枝で、駿河國と遠江國（いずれも静岡県）の守護であったが、義元の祖父義忠が小笠の塩買坂（菊川市）で一揆の夜襲を受けて非業の死を遂げたことから起こった継嗣問題が縺れて家中を二分する御家騒動に発展したとき、偶々駿府館にいた客将伊勢新九郎長氏が双方を抑えて治めたことからその功績を高く買われて、当主になった義忠の嫡男氏親から、

「愛鷹山麓富士郡の下方にある依田、橋原、柳原、吉原の各荘など十二郡と、興國寺城（沼津市根小屋）」

を与えられた。

その後、早雲宗瑞と号した新九郎が堀越公方の伊豆を乗っ取って独立したとき、今川領だった富士川の東地区をいつか曖昧のまま早雲領にされてしまっていた。

守護になった義元は、駿河一國を回復したいと希って北條氏康を富士、駿東地方から追い出そうと謀った。

そこで現在氏康に攻め立てられて苦戦している上杉憲政に同盟を求めて、挟撃策を提案してきたのであった。

義元はすでに武田信虎の女を娶っているので晴信（信玄）は義弟にあたり、武田とは固い絆で結ばれていた。

憲政とても、氏康が義元の侵攻に呼応して駿河へ向かえば河越城の防備が疎かになるその間隙を衝いて大軍を擁して攻めかかれば、容易に奪還できると踏んだ。

憲政は、この願ってもない

（好機到来）

に有頂天になって義元の策に乗り、使者に

（快諾）

の返書を与えて駿河へ帰した。

憲政はすぐさま松山城の扇谷朝定に使者を送って事の次第を詳細に伝えさせると、さっそくの出陣を促した。

義元は上杉と同盟成るとさっそく軍を催して駿府城（静岡市）を出陣し善得寺城（富士市今泉）に布陣した。

そして北條方の長久保城（駿東郡長泉町）を囲んだ。

このとき武田晴信も義元支援のため本栖湖から南下して駿河國に入り、大石寺（富士宮市上條）に布陣した。

急報を受けた氏康はいそぎ援軍を送ったが黄瀬川の今井狐橋のところで今川軍に阻止されてしまい、二進も三進もいかず睨み合いのまま膠着状態に陥ってしまった。

## 二

（今川軍動く）

の報に憲政はすぐさま古河の足利晴氏に使者を送り、

「このたび今川義元殿と連合して北條攻めをいたしますので是非ともご出馬を賜りたく、ともに起って氏康をご成敗下されば鎌倉へお迎えしてお仕えいたしまする」

旨を書状で伝えたのだが晴氏は、鎌倉公方だった曽祖父成氏が永享年間に管領の上杉に逐われて古河へ逼塞させられたことに拘って憲政を信用せず、

「予にとって上杉が旧臣なら、北條もまた義理の筋に当たるゆえ、いずれへの加担もならぬ」

そう固執して撥ね返されてしまった。

晴氏はまえにも述べたが北條氏綱の女を娶っていたから、氏康とは義兄弟の間柄であった。

氏綱は、ほかにも足利将軍家分流の名門で武藏國荏原郡世田谷城（世田谷区豪徳寺）主の吉良頼康や、扇谷上杉家の重臣で江戸城将でありながら謀叛を起こして当時の当主朝興を河越城へ放逐した太田資高にも女を嫁がせて一族に抱き込んでいた。

晴氏奉戴が成らずに腐心していた憲政だったが、上杉が今川と同盟したとの噂をききつけた国人衆が、

「今川との連携でなら北條を斃せる」

ものと確信して恩賞目当てに続々と集まってきた。

憲政は義元が氏康を駿河に引き付けているあいだに河越城を奪還しようと目論んでいたので焦り、晴氏とのことは同時進行することにして、ともかく大軍を率いて平井城を出陣すると、途中松山城で朝定の扇谷軍と合流して膨れ上がった六万五千の軍勢で河越に到着した。

憲政は小田原との連絡を遮断するには河越城を遠巻きにするのがよいと考えて、JR川越駅から南へ一里ほど行って関越自動車道を潜る少し手前の砂久保（川越市砂久保）に山内軍の本陣をおくと、西へ一里行った東武東上線霞ヶ関駅北側の日枝神社と河越館跡史跡公園（県史跡）がある上戸（川越市上戸）に朝定の扇谷軍を、さらに北へ一里ほど行った入間川と荒川に挟まれた表（比企郡川島町表）に扇谷方岩槻城将の太田資正軍を配置した。

上杉軍に河越城を包囲されたという報らせを受けた氏康は、このうえ上杉方に古河公方晴氏を取り込まれては不利と考えて使者を立てると『言上書』を届けさせた。

「管領が当家を滅ぼそうと企ててたち上がり公方様にもご出陣を願っているとのことですが、公方様が当家をご成敗なされる理由はございませぬ。此度の合戦でわれらが勝とうと上杉が勝とうともいずれも公方様のお指図を受けている臣下でござりまする。いっぽうへの肩入れは筋が通りませぬ。公方様は管領がどのような甘言を弄そうとも決してご出馬なされてはなりませぬ」

氏康の書状を読んだ晴氏は、さきに憲政からの誘いを

断ったように、こんどの騒動ではどちらへ加担するつもりもなかったので、そのことをしかと使者に伝えた。
憲政は布陣をおえると古河への再度の使者を厳選した。なんとしても晴氏を籠絡しなければならなかった。
ふたたび拒絶されればもはや取り付く島がなくなってしまうので、叡智を傾注して当たらねばならなかった。
憲政は慎重に厳選した結果、扇谷朝定が身を寄せている松山城将の難波田弾正忠行を選んだ。難波田は弁舌爽やかで智略にも長けた部将だと朝定が太鼓判を捺した。
憲政は難波田弾正に因果を含めて綿密な打ち合わせをすませると、小野因幡守を副えて古河へ送り出した。
この説得に失敗すれば生きて帰らぬ悲壮な決意を固めた弾正は、背水に立つ思いで晴氏との拝謁に臨んだ。
「このたび漏れ承るところによりますれば、公方様には氏康の申し入れをお聴き届けになり管領へのお力添えを猶予なされたとうかがいましたが、まことなれば恐れながらお心得ちがいにござりまする。抑々公方家と管領家とは遠く尊氏将軍のときよりこのかた代々君臣としての関係を保ち、主君に忠節を尽くし臣下に恩恵を与える交わりは水と魚の如く終に中絶することがござりませんでした。しかし、残念ながら長春院殿（四代公方持氏）の御代に公方様と管領のあいだが思わしくなくなり関東の乱れとなりました。以来今日まで延々と乱れがつづいているこの関東をいったいどなたが平穏無事にまとめられるのでありましょうか。このたび偶々君臣が合体して管領が関東を平定し公方様のご治世をお迎えするためにすでに兵を挙げたのでござりまするから、その管領にご加勢なされてご出馬なされるのが当然でござりましょう」
そう述べて諄々と道理を説いた。
だが、晴氏は、
「そのほうの申し状はもっともじゃが、しかし、氏康とは義理の縁に繋がるゆえ軽々には起てぬのじゃ」
そう言ってなおも氏康との姻戚関係を楯にすると、
「氏康とは、義理の縁に繋がるゆえにのう」
なんどもなんども低声で繰り返した。
その晴氏の喘ぎにも似た呟きを聴いた弾正は、
（公方様は迷っておられる）
そう感じ取ると、ここはいっきに畳み込んで籠絡しようと焦り、昂奮してますます饒舌になっていき、
「公方様が氏康を縁者であるため不憫にお思いになられるのはごもっともでござりまするが、北條が早雲から氏康にいたる三代で掠め奪った伊豆、相模、武蔵の国々はいずれもみな公方様のご領国でござりまする。このようにつぎつぎと押領してみずからの威勢が増すままにこのたび管領と事を構えましたのは、虎の威を借る狐の如く公方様のご威光を笠に着て山内、扇谷の両上杉を屠らんとする意図に相違ございませぬ。いま公方様のご威光で管領家を滅ぼすことができれば氏康はつぎには公方様に

弓矢を向けて関東を手中に収めんと企てていることは明白でございまする。公方様が縁者に拘って逡巡なされたばかりに取り返しのつかぬことになりましては一大事にございまする。ここは篤とご思案のうえご分別を変えられてただちに管領にご加勢なされて氏康をご成敗なされるのがご賢明と思われまする」

そう熱っぽく説いた。

晴氏にしても、たとえ義兄弟の間柄とはいえ、ちかごろの氏康の言動については難波田弾正が言うように懸念がないわけではなかった。その微かな不信感が難波田の話を聴いているうちにみるみる膨らんでいった。

氏康が上杉を斃した場合、そのあと果たして管領の地位に甘んじて臣従するかどうかは難波田の言うとおり確かに疑わしかった。

（利根川の向こうの争乱ではあったが、対岸の火事とみて高みの見物をきめこむわけにはいかぬかも知れない）

晴氏のこころは、しだいに足利家重代の旧臣上杉と氏康とを比較して、上杉支持に傾いていった。

「弾正。そのほうの忠義のこころ予は羨ましく思うぞ。思いみれば上杉とはこれまで代々君臣水魚の交わりをつづけてまいった。絶とうとて切れるものでないことはよく承知いたしておる。あいわかった。予は迷わず氏康との縁を絶って憲政に加担いたすことにいたそう」

弾正は一瞬わが耳を疑って思わず晴氏を仰ぎ見た。こんなにはやく籠絡できるとは思いも寄らなかったのだ。

「それでは上杉にご助勢下さりまするか。さっそくのご賢明なるご決断恐れ入りましてござりまする」

そう確と念を押しておいて深々と頭を垂れると、大役を果たした安堵で全身からいちどに力が抜けていった。

そして晴氏は、弾正の督促に応じて十月二十七日に二万の軍勢を率いて河越へ参陣することを約してくれた。

憲政は河越へ到着した晴氏を丁重に迎えると、古河公方軍を東方一里の入間川に近い現在川越運動公園がある下老袋（川越市下老袋）に配置して四方を固め、河越城から一里離して十重二十重に囲み長期戦に入った。

## 三

このとき氏康から河越城を預っていたのは北條綱成であった。北條を名告っているが北條の一族ではない。

じつは今川氏親の属将で遠江國高天神城（掛川市下土方）主だった福島上總介正成の嫡男であった。

高天神城は菊川の西方小笠山塊の東南に位置していて、

「高天神城を制する者は遠江國を制する」

といわれた重要拠点にある難攻不落の堅城であった。

だから今川の歴代当主はもっとも信頼のおける譜代重臣のなかから猛将の誉れ高い者を選んで城将に据えた。

福島正成は父基正と二代つづいて城将をつとめた。

その正成が主君氏親に武田信虎攻めを命ぜられた。
正成は永正十七年（一五二〇）十一月二十三日に軍勢を率いて甲斐國へ攻め入ったが、島上條（甲斐市）で武田軍に敗れていったん退き、高天神城へ引き揚げた。
正成は氏親に駿府館へ呼びつけられると敗戦を詰られ、なにがなんでも武田信虎を斃せと厳しく命ぜられた。
面目丸潰れの正成は名誉挽回を図って衆を頼むことにし、氏親にその動員を許されて翌大永元年十月に一万五千の大軍を率いて富士川筋を北上、甲斐國へ侵入した。
正成の軍勢は西部から躑躅ヶ崎（甲府市古府中町）を目指して進軍し、荒川を挟んで西方約二里の龍地台（甲斐市龍地）に布陣すると威容を誇示して威嚇した。
このとき武田信虎は身重の夫人を裏山の要害城へ避難させたが、険しい山が登れず中腹の積翠寺に入った。
十月十六日、一千余の武田騎馬隊が荒川下流の飯田河原（甲府市飯田）に陣を布いて迎え撃つ態勢に出た。
正成は包囲しようとして鶴翼の陣形で押し出した。
武田騎馬隊は中央突破すると後方から襲ってきたので、今川軍は浮き足立ち伏兵に崩されて龍地台に退いた。
双方睨み合いがつづいた十一月三日に信虎の嫡男が誕生し太郎と命名された。のちの晴信（信玄）である。
この嫡男の誕生で寡兵の武田軍は大いに勢いづいた。
十一月二十三日、正成は躑躅ヶ崎館を挟撃しようと計り二隊に分けて進軍させたところを信虎に正成の本隊を攻撃され、武田の部将萩原常陸介の策に嵌められて荒川上流の上條河原へ追い詰められ、終日激戦がつづいた。
その夜更けに背後へ回った武田の別働隊に急襲されて、正成は不覚にも原能登守に討ち取られてしまった。
のちに大軍で西上した今川義元が、途中尾張で少数の織田軍に急襲されて討ち取られたのもこれと似ている。
義元も正成も衆を恃んでの油断からであろう。
いかに、
〈衆寡敵せず〉
とはいっても、
〈油断は大敵〉
で、驕り昂っていたのでは数の強みが発揮されない。
このとき福島正成には七歳と一歳の男児がいた。
父の敗死で高天神城にはいられなくなり、傅役に伴われて隣国小田原城の北條氏綱を頼り庇護された。
嫡男は成人して福島左衛門を名告ったが、天性武道への志が深く、毎月十五日には潔斎して武神八幡大菩薩の社へ詣で、武人の鑑たらんことを祈願しつづけた。
亡父正成の血を享けて屈強な若者に成人した左衛門は、部将の器に恵まれて合戦のときにはいつも朽葉色に染めた四角い練絹の旗の四隅に〈八幡〉と墨書した指物を掲げて戦場に臨み、軍団の先頭に立って、
「勝ったぞ、勝ったぞ」
そう大声で諸卒に呼び掛けて励ましつづけたので、兵

士たちはこの旗を〈地黄八幡〉と称んで畏敬した。
左衛門は戦場で勇猛果敢に活躍したので、その数々の戦功を認めた氏綱から女婿に選ばれて北條の姓を賜り、氏綱の一字を与えられて北條左衛門大夫綱成となった。
そして玉縄城（鎌倉市城廻）を与えられて城主に据えられたが、その後扇谷上杉を攻めて武蔵國の拠点にしていた河越城を陥としたことにより城将に抜擢された。
綱成に北條姓が与えられたということは氏綱の養子になったわけで、氏康とは義兄弟の間柄になったのだ。
ついでながら、綱成といっしょに小田原へきたときはまだ嬰児だった弟のその後についても触れておこう。
美少年に育って氏康の寵童になっていたが、成人して福島辨千代を名告ってからは小姓をつとめている。
それはさておき――。
古河公方晴氏、山内憲政、扇谷朝定の連合軍八万五千に遠巻きされた河越城を、綱成は例によって〈地黄八幡〉の幟旗を立てて結束した三千の守兵で籠城していた。

## 四

いっぽう長久保城の救援に向かった北條軍のほうは黄瀬川の今井狐橋で今川軍に阻止されたまま突破できず、両軍対峙して睨み合いがつづいていたのだが、ここへきて憲政の知らないところでこんなことがおこっていた。
膠着状態から動きをみせたのは武田軍であった。
このころ武田晴信は、北信濃侵攻を謀って葛尾城（埴科郡坂城町）主の村上義清と佐久地方で攻防戦がはじまっていたので、今川への加勢兵力を撤収する必要に迫られたことから、晴信は今川と北條との講和を計った。
義元は和睦に消極的だったが、氏康のほうはこのまま駿河と武蔵に固執して戦力を二分したままでは、
〈二兎を追う者は一兎をも得ず〉
の譬えにもあるように、
〈虻蜂取らず〉
になってしまっては元も子もなくなると考えた。
富士川以東の駿河国は元々祖父早雲が今川の一部将だったころ預った領土であるから返還に未練はなかった。
氏康は駿河領を今川家に戻すことを提案した武田晴信の講和条件に応ずることにして承諾の使者を送った。
駿河一国が今川領になるなら義元に異存はなかった。
このことが、のちに武田晴信、今川義元、北條氏康の三者による甲駿相三国同盟に発展していくことになる。
義元と和睦したものの氏康には一抹の不安があった。
氏康が河越城救援に向かったあとの手薄になったところを義元に狙われはしないかという危惧である。
そこで氏康は念のため箱根峠に五百と三浦に三百の兵を配置しておいて、河越へ向かう準備にとりかかった。
だが、河越城を囲んでいる八万五千の軍勢に匹敵する

だけの人数などとても揃えることはできなかった。
愚図愚図していては河越城の兵粮(ひょうろう)が乏しくなり、援軍もこないと判断した綱成が業を煮やして討って出られては玉砕の憂き目になることが心配だったが、さりとて、綱成に救援を知らせる手段(てだて)はなく苛立っていた。
氏康の心中を察した綱成の弟の福島辨千代が、
「それがしが河越城の兄へ伝令にまいりましょう」
そう申し出た。
「したが辨千代、単騎で雲霞の如き大軍の囲みを潜り抜けて首尾よく城へ入ることなどとても叶うまい」
「座して待つより行動を起こさねば叶うか否かはわかりませぬ。手を拱いているよりは上策と心得まする」
「じゃが辨千代。万に一つも成功は期し難いぞよ」
「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ、と申しまする」
「うむ。そこまで覚悟いたすとは辨千代殊勝であるぞ」
氏康は、辨千代の覚悟に眼を潤ませて誉め称えた。
この辨千代の雄健な思いが天に通じたのか、包囲軍は城まで一里も間隔をおいて遠巻きにしているので、城に近づく者があっても見咎められることはなかった。
大手門まで馬を進めてきた辨千代を物見の城兵が上杉方と見誤って銃口を向けたが、その場にいた足軽隊長の本村半藏が偶々面識があったので無事に城内に入れた。
そのころ氏康は、八千を率いて小田原を発向した。
山内憲政の本陣砂久保まで一里と迫った西武新宿線新狭山駅近くの三ツ木原（狭山市）に布陣した氏康は、さっそく上杉方の陣形を探索させてみて、河越城から一里離れたあたりをぐるりと取巻いているその大軍にあらためて舌を巻いた。
「油断させねばとてもこの陣形は崩せない」
氏康はまず使者を送って哀願する計略に出て、古河公方へは諏訪左馬助を選んで泣きつかせた。
古河陣営へ出向き、晴氏に拝謁した諏訪左馬助は、
「河越城はすでに兵粮も乏しく、将兵たちは力つきて戦意を喪っておりまする。公方様のお慈悲をもちまして城兵たちの生命をお助けいただきご退陣下されば、即刻城を明け渡し氏康末長くお膝元にお仕えして忠節を尽くすことをお約束いたしまする」
膝を屈し平身低頭して涙ながらに訴えたのだが、晴氏は取り合わず、追い返された諏訪の報告によると、
「そのような泣き言など聴き入れずとも、城はこの手で捻り潰してみせるわ」
そう豪語して憚らなかったという。
（これで公方軍はわれらを軽んじて侮(あなど)るに違いない）
氏康は笑みを浮かべた。
いっぽう山内上杉のほうには直接憲政にではなく、部将小田政治(おだまさはる)の代官菅谷隠岐守(すげのやおきのかみ)を選んで相応の使者を送り、
「救援軍を率いてきたもののこれだけの大軍に包囲され

ていてはもはや為す術がない。そこで貴殿にすべてをお任せいたすゆえ綱成はじめ籠城の将兵たちを助けて下され。お聴き届け下さればかならず河越城を貴殿に明け渡し管領殿と和睦して小田原へ引き返すことにいたす」

そう訴えさせた。

菅谷は即答しなかったが、憲政に報告したあとで部将たちにも披露するであろうから侮るに違いなかった。

## 五

山内憲政は案の定氏康の謀略に乗ってしまった。

河越城は攻めずとも兵粮の尽きるのを待っていれば勝手に陥ちるだろうからこのまま囲んでいればいいとして、新手の氏康軍のほうを潰してしまおうと思い立った。

「三ツ木原の北條軍をいっきに追い払え」

憲政の居丈高な命を受けた部将たちは、数を恃みに鼻唄交じりでいっきに氏康討伐に押し出していった。

だが、三ツ木原の北條軍はすでに退いたあとだった。

気抜けした山内軍が砂久保へ引揚げてくると、また北條軍が三ツ木原へ出てきたという報らせがやってきた。

山内軍が押すと北條軍が退き、山内軍が退くと北條軍が出てくることの繰り返しが飽くことなくつづいた。

山内軍は氏康の陽動作戦に嵌まってしまったのだ。

業を煮やした憲政は、

「氏康はわれらに恐れをなし、尻尾を巻いて遁げおるのじゃ。なんたる臆病者よ。聞くと見るとは大違いじゃ。この有様では相手にするのも莫迦らしい。捨ておけ」

そう痛罵を浴びせて嘲弄した。

この憲政の思いは氏康の術中に嵌まったことである。

憲政は八万五千の大軍が自慢で誇示してはいたが、しかしその内部事情は烏合の衆なので長陣になると混成軍の弱点を曝け出して結束が弛んでしまう心配があった。

だから憲政は、氏康に弄ばれているうちに決着をつけてしまおうと思うようになっていって、晴氏と朝定に同時攻撃をかけて殲滅してしまおうと誘いかけたのだが、

「北條軍は予の威光を恐れて攻め倦んでおるのじゃ」

晴氏は氏康を見縊っていて憲政の進言を受け容れず、

「うち捨てておけば氏康も敵わぬことを恥じて小田原へ退散するであろう。慌てて城攻めをすることもないわ」

そう言うと莞爾と嗤った。

憲政はやむを得ず、

「されば城兵が飢えに苦しみ自暴自棄になって討って出ましたならば公方様の軍勢で全滅させていただくことにお願いを致して、わが軍勢は総力を挙げて氏康の救援軍を追い落とし小田原まで攻め込むことにいたしまする」

そう決断して、砂久保の本陣に戻り部将たちに告げたが、彼等は憲政の戦法を積極的に支持する者がなく、

「それほど急がずとも三ツ木原は構わず放っておかれれ

ばそのうちに諦めて退散いたすでござろう。城のほうもこのまま囲んでさえいれば軈て城兵は飢えて枯れ木の倒れる如く死滅してしまいまする。ここの決着をつけてから悠くり小田原を攻めればよいではござりませぬか」

氏康の動きにまったく気を許し、暢んびり構えて戦意を喪失し、すっかり緊張が緩んでしまったのだ。

これらの動向は探索した笠原越前守らによって逐一報告を受けていたので氏康は敵情を確実に把握していた。

だから氏康に勝利する機会を握られてしまった。

そして、ついに氏康に乾坤一擲の勝負をかけられた。

その日、天文十五年（一五四六）四月二十日、氏康は砂久保に在陣する山内の大軍を攻撃するには夜間急襲の攪乱戦法よりほかに勝ち目はないと考えたに違いない。

武具をはずして寛ぎ、酒を飲んで緊張を弛め、すっかり戦意喪失して前後不覚に寝入っているところを襲おうというのは、のちの赤穂浪士の吉良邸夜討ち事件もそうだったから、いつの世も奇襲戦法はおなじ方法なのだ。

氏康が八千の軍勢を率いて三ツ木原から砂久保の山内陣営に近づいたのは子の刻（午前零時）近くであった。

北條軍の鬨の声で深い眠りを破られた山内軍は慌てふためき、暗闇のなかで上を下への大騒ぎになった。

丸腰のまま逃げ出す者や、出遭い頭に斬りかかって同士討ちをする者などで修羅場と化し、大混乱になった。

態勢を立て直すことができぬまま倉賀野三河守、本庄藤三郎、難波田隼人正、本間近江守、小野因幡守など名ある部将たち三十四人は憲政を無事に落とそうと懸命になって踏み留まり踏み留まりして防戦したが、守勢の脆さで防ぎ切れず一人斃れ二人斃れしてしだいに数が減り、終いには僅か十人余りに護られただけで憲政は辛うじて河越を脱出すると上野國平井城へ落ちていった。

北條綱成は〈地黄八幡〉の幟旗を掲げて討って出ると、

「勝ったぞ、勝ったぞ」

と叫んで城兵を励まし下老袋の公方軍を攻め立てたので、足利晴氏は一戦も交えずに古河へ敗走していった。

とって返した綱成軍は氏康軍と合流して松山口へ敗走する扇谷軍を北方の新河岸川へ追い詰め乱戦となった。

この戦いで扇谷朝定が討ち死にし、松山城将難波田彈正は東明寺（川越市志多町）の古井戸に落ちて死んだ。

河越城奪還ならず扇谷上杉は滅亡し、山内憲政も平井城に逼塞したので重臣の瀧山城（八王子市丹木町）主大石源左衛門定久、鉢形城主藤田左衛門佐邦房は氏康の軍門に降り、武藏國もついに北條の手に帰してしまった。

# 第十八話　管領憲政関東落ち

北條氏康に平井を攻められた憲政は越後の長尾景虎（謙信）を頼るしかなく、景虎の父為景が守護房能と管領顯定を弑しているので不安だったが確約を得て半信半疑で落ち延びていった。案ずるより産むが易く景虎は誠意をもって憲政を迎え入れ庇護してくれた。

いっぽう嫡子龍若丸は常陸の佐竹義昭を頼るよう命ぜられた妻鹿田新介に裏切られて北條氏康に差し出され斬首されたが、新介もまた不忠者と罵られて晒し首にされた。

## 一

山内憲政にとって河越城奪還の失敗は大打撃だった。

北条氏康の小田原勢に惨敗したことによって唯一頼みにした古河公方足利晴氏に離叛されてしまい、同族扇谷家も当主朝定が戦死し、四家に分かれて鎌倉に君臨した同族もついに宗家の山内家だけになってしまった。

その山内家もいまや関東管領とは名ばかりで、関東北隅の上野國（群馬県）へ追い遣られて衰頽した。

憲政が逼塞している平井城は、永享十年（一四三八）のむかし公方足利持氏との争いを避けようとする関東管領上杉憲實のために上野守護代長尾の一族總社（前橋市）の長尾忠房が下を鮎川が流れる断崖上の要害を利用して築いた居館で、永正七年（一五一〇）越後國長森原で謙信の父越後守護代長尾爲景に討たれた関東管領上杉顯定によって應仁元年（一四六七）大掛かりに改修されて以後は、実質的に関東管領府になっていたところである。

そして、居館の西南十町（約一キロ）ほどのところにある小高い丘陵の山頂に要害堅固な金山城（藤岡市下日野金井）を築いて北條軍への備えを固めた。

いま訪ねる平井の里は穏やかな田園風景のなかにあるが、当時は京と鎌倉を結ぶ東山道が碓氷峠（現入山峠）から上野國に入ってきていて、國府（前橋市元総社町）から寄居（埼玉県大里郡寄居町）を経て武藏國府（東京都府中市）に至る街道の要衝であり、利根川水運の倉賀野（高崎市倉賀野町）にも近く賑わいをみせていた。

街道の要衝に位置しているということは領内見回りには都合いいが、他国から攻め込まれ易い弱点があった。

事実、憲政が河越を撤退したことで寄居の重臣藤田邦房も鉢形城を明け渡していたので、そこに北條軍が集結すれば神流川を楯にするよりほかなく緊張がつづいた。

迎え撃つには兵力の増強が急務であった。

憲政の寵臣上原兵庫介と菅野大膳亮は、河越の敗戦で近隣の豪族たちに侮られた屈辱を挽回せねばと焦った。

寵臣とは主君が気に入っている家臣のことをいう。

主君に気に入られるには、なにごとも御無理御尤もと受け入れて決して不快な思いをさせないことである。

つまり媚び諂う佞臣となんらかわりはないのだ。

だが家中の嫌われ者も、主君には「愛い奴」なのだ。

その上原と菅野は憲政の機嫌取りに腐心していた。

そこへ偶々信濃國佐久郡志賀城（佐久市志賀）主の笠原清繁から武田晴信に攻められ救援を求めてきた。

すでに大井貞清の内山城（佐久市内山）は陥ちていた。

上原と菅野は、憲政を名誉挽回の好機と煽動した。

二人に唆された憲政は、汚名挽回と救援を快諾した。

それを伝え聞いた箕輪城（高崎市箕郷町西明屋）主長野信濃守業正が血相を変えて駆けつけてきて、

「武田攻めをなされるは道理の通らぬ企てにござりまする。昨年の河越での大敗はときの運ではなくつまりは軍法のお心得薄きがゆえによるもの。然れば当家の宿敵は氏康一人に定めてこれを退治する謀を巡らすのが急務でござりまするに、それをさておきなにゆえ意趣遺恨なき武田を攻めようと思し召されまするか。毛を吹いて疵を求むるようななされようは業正同意いたし兼ねまする」

そう諌めたが、失権回復を焦る憲政は菅野や上原の甘言に乗せられて氏康に破れた無念を晴らす好機と勇み立っているところへ水を差されたことが面白くなく、せっかくの業正の諌言を素直に聴き入れようとはしなかった。

河越の惨敗から一年あまり経った天文十六年（一五四七）八月、憲政から救援を命ぜられた金井秀景は三千の兵を率いて碓氷峠を越えると浅間山南麓の信濃國佐久郡小田井原（佐久市小田井）へ進出した。

だが、版図拡大を謀って勇躍壮途に就いた武田軍と、それを阻止しようとする上杉軍とではじめから意気込みの差が歴然としていて、波に乗る板垣信方を先鋒とする甘利虎康、横田高松、多田満頼ら武田軍の猛攻に遭って上杉軍は撃退させるどころか支え切れず、たちまち碓氷峠へ追い遣られて平井へ敗走してきてしまった。

その後、笠原清繁も武田軍に志賀城を陥とされた。

攻め掛かるのと受け身に立つのとではおのずから勢いが違うし、昇る朝日と沈む夕日もまた然りである。

河越につづくこの爲体で上杉憲政の威信は地に墜ち、武蔵や上野の諸将は次第に管領家から離叛していった。

二

その年の暮れに氏康は武藏國の完全掌握を図り病死した太田資時のあとを継いだ弟資正（三樂齋）の岩槻城を囲んだが、資正は江戸、河越、松山の諸城を喪い孤立化しているにもかかわらず孤軍奮闘して一箇月の籠城戦に耐え抜き、ついに氏康を諦めさせて和睦に持ち込んだ。

岩槻城は放っておいても差し支えないと踏んだ氏康は、河越戦で攻略した松山城のほうを修築して拠点にすることとし、着々と憲政の領国上野侵攻の準備を固めた。

そして河越戦から五年後の天文二十年（一五五一）三月十日、氏康は北條綱成父子らを先手とする三万余の軍勢を率いて小田原を進発し、上杉憲政追討に向かった。

北條軍動くの報に接した憲政は慌てふためき、太田美濃守資正、長野信濃守業正、曽我兵庫介祐俊、金井小源太秀景らの重臣に命じて安中、小幡、白倉、沼田、廐橋、新田、赤井、佐野、長尾、桐生、澁河、大胡、山上、後閑、長根、和田、大熊等上野國の諸将を動員すると武藏、上野國境の神流川に布陣して迎撃の準備を固めた。

さきに布陣して攻め寄せてくる敵軍を待つということは、先手を打てる余裕があるので有利には違いない。

神流川はまえにも触れたが武藏と上野の国境を流れている川で、具体的には上里町（埼玉県児玉郡）と藤岡市（群馬県）の境を流れ下って利根川に注いでいるのだ。

ＪＲ高崎線に乗ると東京都と埼玉県の境を流れる荒川を渡ったあとは川らしい川はなく、神保原駅を過ぎて新町駅にいたるあいだの県境に神流川は流れているのだ。

平井城のある西平井の東に位置する神流川に出て河原を降り利根川との合流点まで歩いてみたが、三万の北條軍を相手に合戦したというほど広い河原はなかった。

どうも鎌倉・室町時代の戦記物は軍勢の数が誇張されていて信用できない。大軍と読み替えておくのがいい。

それはさておき――。

やがて到着した北條軍と神流川を挟んで対峙した。戦端が開かれたのは三月十日の未明であった。

殲滅を焦る北條軍の仕掛けで火蓋が切られた。

緒戦は地の利を得ている上州勢の上杉軍が有利に展開したので、手古摺った北條軍は後退を余儀なくされた。

これをみた氏康がみずから陣頭に立って、

「汚なし。引くな、退くな」

そう叫んで士気を鼓舞すると、百戦錬磨の氏康の怒号をきいてその激励に奮い立った北條軍は劣勢を盛り返して上杉軍を攻め立てたので、形勢はたちまち逆転した。

受け身に回った上杉軍は、陣容を立て直す遑もなく総崩れになり、平井に退くと金山城を固めて籠城した。

北條軍は手分けして諸城の攻撃にとりかかったが容易に陥ちなかったので、攻め倦ねた氏康はついに攻城を諦めて兵を纏めると小田原へ引き揚げていったのである。

このとき氏康は、死者や手負いの者が多く出ているう

えに遠征で疲労の濃い将兵たちをこれ以上敵地に長陣させては不利と判断して他日を期したのであるが、管領家の菅野大膳亮や上原兵庫助などは北條軍はわれらを攻め倦んで撤退したのだと思い込んで氏康を見縊っていた。

だから菅野と上原は、

「ただちに松山城をせめて武藏國を取り返しましょう」

そう進言して憲政を煽動した。

だが、防衛戦に協力した諸将はみな北條軍の強さに手古摺ったので、菅野や上原に同調する者はいなかった。

その年の秋――。

側近の曽我兵庫介祐俊が白井城（渋川市白井）主長尾一聲齋からの急使を受けて、主君憲政に報らせた。

一聲齋とは左京亮景盛が薙髪法体しての号で、代々上野守護山内上杉家の守護代をつとめる家格であった。

憲政は曽我祐俊からの報告を聴くと、すがさず、

「なに、また北條か武田が攻めてくるというのか」

そう性急にきき返した。

「しかとは存じませぬが、ご重臣がたも集めよとのご指示でござりますれば、大事の出来と思われまする」

長尾氏の白井城は高崎市の先渋川市の北にあって、利根川との合流点に近い吾妻川に面した断崖上にあった。

話は逸れるが――。

むかし取材したときはまだ渋川市に合併されるまえで北群馬郡子持村といった。国道17号線となった沼田街道を北上して渋川の市内を抜け吾妻川を渡ってすぐの信号を右折して村へ入り、田畑の広がる畦道を進んだ奥にこんもりした森があって、そのなかが白井城跡であった。

そこには〈白井城跡〉と〈標高二〇六・三メートル〉と書いた二つの白い標識がぽつんと立っていて、土塁に使ったらしい大きな岩が二つ三つあるだけであった。

夏だったので森のなかを歩きまわって藪蚊に刺されたことのほうが印象づよく、いまだに覚えている。

白井についてはそんな程度の記憶だったので、こんどあらためて訪ねてみてあまりの様変わりにおどろいた。

国道17号線脇に背の高い石造りの〈常夜灯〉が立っていて、その土台の腰に大きく〈白井宿〉と彫ってあり、江戸時代の白井宿土蔵造りの家並みが復元されていた。

白井城の城下町として繁栄したこの白井宿にこんど大きな〈こもち道の駅〉ができていて、そこで休憩した。

天麩羅蕎麦で昼食をすませてから白井城跡へ上ったがきれいに整備されていて、〈白井城跡〉の標識は〈白井城趾〉に変わり、標高を示す標識はなかったが本丸の周囲をめぐらした高土居、苔生した石垣や〈枡形門〉などの位置表示をした石杭、堀跡などがはっきりしていて、長尾氏時代の白井城を彷彿させてくれた。

横道へ逸れて長くなった。話をもとにもどそう。

憲政が重臣たちを集めてから待つこと久しく、苛立つころになってようやく白井から長尾一聲齋が到着した。

大広間へ入ってきた一聲齋は二人の供を伴れていた。
本間近江と猪股左近といい、一聲齋が小田原へ潜入させておいた間者だということであった。
二人が報告したところによると、ちかごろ氏康は再度平井攻めを目論んで諸将に出陣の触れをしたという。
それをきくと、一座に動揺がひろがっていった。
菅野と上原は、
「氏康が攻めてくるとあってはもはや一刻の猶予もなりませぬ。ただちに早馬を仕立てて檄を飛ばしましょう」
そう進言して憲政の同意を得ると飛び出していった。
だが、大半の諸将は再三の督促にも応じなかった。
彼等はみなさきの神流川の合戦での北條軍の強さを沁々感じていて、抵抗しても勝てぬと踏んでいた。
管領に加担して敗れれば、氏康は所領はおろか生命までも奪うであろうから、元も子もなくなってしまう。
万にひとつ勝ったところで、恩賞に与れるわけではないから喪ったものは丸損で、どっちにしても益がないなら触らぬ神に祟りなしと傍観するに越したことはなく、ここは知らぬ顔の半兵衛を決め込むに如くはない。
そう考えて管領の檄に応じなかったのである。
笛吹けど踊らぬ諸将の心底を知った菅野と上原は、管領家は氏康に斃され滅亡するであろうと判断した。
上野國の諸将が与力してくれなければ、あとは管領家直属の白井城主長尾一聲齋や、岩槻城主太田資正、箕輪城主長野業正、忍城主成田長泰らだけで防戦するほかはなかったが、岩槻城と忍城は寧ろ北條方の河越城や松山城に近かったし、白井城と箕輪城は防衛するには距離的に難があった。
ならば近隣守護に頼るよりほかなかったが、甲斐の武田晴信とは敵対関係にあったし、駿河の今川義元は先年氏康と和睦しているから頼むわけにいかず、となるとあとは常陸の佐竹か越後の長尾しかいなかった。
だが、佐竹は以前当主の義盛が嗣子なくして病死したとき、当時の関東管領山内憲定が遺言だといって二男義憲を強引に養子入りさせたことから以来山入らの同族の怨みを買ってきているので頼れる相手ではなかった。
一聲齋は、同族越後長尾の景虎を推薦したのだが、
「景虎は御家の敵の血筋にあたる者ゆえ、そんなところを頼むのは飛んで火にいる夏の虫同然である」
ことが懸念されて重臣、側近たちは猛反対であった。
まえに触れたが、景虎の父守護代長尾爲景は守護上杉房能とその兄関東管領上杉顯定を討った謀叛人である。
(是非にも上杉の家名は存続させなければならない)
一聲齋は一同を納得させる手段をあれこれ思案した。
そして、いきついたのが平子孫太郎房長であった。
平子家は参議篁の名で百人一首にもある歌人小野篁から出た武藏七党のひとつ横山党の一族で、平子を名告った廣長は源頼朝の御家人になって横濱市の磯子(磯子

区)、本牧町、石川町（中区）あたりを支配していた。
いつごろ越後へ入ったのかは定かでないが、南北朝以後上杉氏が越後、上野、伊豆守護になって以来の旧臣で、代々北魚沼郡の薭生城（小千谷市）主になっていた。
（平子なら山内家の旧臣だから信用できるであろう）
そう確信した一聲齋は急ぎ越後へ出向き、平子房長と面談して長尾景虎についての情報を依頼した。
待つこと久しく、平子からの使者がやってきた。
房長からの書状によると、
「長尾景虎は父爲景の非を悔いていて謀叛を赦さず、近隣諸将のあいだでは義侠の人と評判の情に厚い人物」であるという。
いいことずくめで俄かには信じ難く、なお手蔓を求めて諸方をも探ってみたが、房長の報告に違いなかった。
そこで一聲齋は、ふたたび平子房長を介して長尾景虎の意向を伺ってもらったが、すぐには返事がなかった。
「急がねば間に合わぬ」
一聲齋は気を揉みながら待ちつづけた。
長尾景虎に拒絶されたら万事休すであった。
そんな不安が家中に広まると、家臣たちは動揺しはじめて一人二人と逃走する者が出はじめた。
佞臣菅野と上原も身の危険を感じて弱気になり、ついに主家を捨て夜陰に紛れて密かに逃亡してしまった。

## 三

平子房長からの返事を待ち侘びて、憲政はじめ重臣や側近たちが焦立っているところへようやく使者がきた。
使者は、房長からの書状のほかに長尾景虎から房長に宛てた書状も持参していた。房長の心遣いであった。
景虎の書状には、
「お迎えいたしてしかとお護り申し上げる」
旨が書いてあった。
一聲齋は肩の荷を下ろしてほっとした。
だが朗報ではあっても叛服常無しの世であれば長尾にも平子にも全幅の信頼を寄せるわけにはいかなかった。
そうかといって氏康に勝ち目のない戦いを強いられるよりは越後への逃避行のほうが一縷の望みがあった。
一聲齋は、あれこれ思案したすえに、
（人事は尽くした。あとは天命を待つ）
より仕方ないと決断した。
だから憲政には一抹の不安は噯気にも出さなかった。
大広間で評議が開かれ長尾景虎の意向が伝えられた。
一聲齋からの報告を受けた憲政の、
「予はまだ長尾景虎を見知らぬが、そのほうたちが確かな者と推薦いたすのならばそういたそう。上杉の家名を護ってくれるというのであれば誰であっても構わぬ」
の一言で即座に越後春日山への逃避行が決まった。

このとき憲政の嫡男龍若丸はまだ元服まえの十三歳で、乳母の子妻鹿田新介が傅役をつとめていた。
龍若丸が成人して管領になれば傅役は側近に取り立てられるはずで、そうなれば人も羨む出世ができると新介はその日のくるのを楽しみにこれまで励んできていた。
それがこの体たらくになってしまっては残念で口惜しく、かくなるうえは氏康との衝突を避けて後日を期すよい手段はないものかと思案しているところへ、越後國の長尾景虎が庇護してくれるとの吉報で愁眉をひらいた。
だが憲政の逃避行が知れれば、寝返りを企む国人に狙われるだろうから、あくまでも受けて立つ構えを見せておいて憲政は目立たぬ人数で脱出することになった。
もし少人数で越後國へ入り平子房長や長尾景虎に裏切られれば、それはそれで仕方ないと諦めることにした。
人選は憲政と老臣たちのあいだで密かに進められた。
妻鹿田新介は龍若丸の傅役として一行に加わり、越後へ行くものとばかり思い込んでいた。
ところが憲政に呼び出されて申し渡されたのは、
「新介は奥と龍若丸を常陸太田城の佐竹義昭に届けよ」
であった。
新介は唖然として、わが耳を疑い、
「お方様と龍若丸様を常陸の佐竹へでござりまするか」
そう念を押してみた。
「そうじや。しかと頼んだぞ」
憲政のそれは、妻子の無事を新介に託す願いの籠もったものではなく、抑揚のない冷ややかな口調であった。
(身命を賭して仕えてきた者になんというなされよう)
佐竹が招かれざる客を受け入れてくれるはずはなく、
(お方様、龍若丸様と一緒にこの儂も捨てられたのだ)
そう思うと無慈悲な仕打ちに怒りが込み上げてきた。
(たとえ主君であろうとも、裏切った者は敵である)
新介は心に深い傷を負ったが、その悶々とした悩みを他所にして越後への逃避行は着々とすすんでいった。
憲政が平井城を脱出するときの供は目立たぬように側近だけの小人数にして白井城へ行き、そこで長尾一聲齋の家臣五十名を加えて越後へ向かうことに決した。
出立に先立って一聲齋が新介に、
「われらが春日山へ到着いたしたならば、長尾景虎様にお方様と龍若丸様をお迎えしていただくゆえ辛抱せい」
そう声をかけてくれた。
「われらはそれまで、無事でおられましょうや」
新介は不貞腐れた。一聲齋の希望を持たせる発言も新介にはその場限りの慰め言葉にしかきこえなかった。
明けて天文二十一年(一五五二)正月―。
主だった家臣たちが大広間に集められた。
席上三田五郎左衛門が説明に立った。
三田は扇谷家の家老であったが、主家滅亡後は山内家

に仕えている沈着冷静で智謀に長けた人格者であった。
三田五郎左衛門の言い回しは反論の余地を与えぬ一方的通告で、淀みなく滔々と捲し立てて座を沈黙させた。
「北條との決戦に際し万一を慮りお屋形様はそれがしと曽我、二階堂、石堂、野邑、小野らが供して白井へお移りいただく。またお方様と龍若丸様は傳役妻鹿田新介が弟長三郎と叔父久里采女正、與左衛門親子とで常陸の佐竹へお届けすることに相成った。われらお役目を終えてすぐ戻るゆえ一同結束してこの平井を死守いたそうぞ」
憲政が越後國へ逃亡して長尾景虎に庇護されようとしていることを知っているのは新介だけであったが、それはつまり、憲政は家名存続のために冷酷にも長年仕えてくれている家臣たちを見殺しにしようとしているのだが、そうとは知らずに命懸けでなお忠節を尽くそうとしている家臣たちが新介には哀れでならなかった。

## 四

その夜、氏康来攻に脅える憲政は旅仕度を急がせ側近たちに供されて慌ただしく雪のなかを白井へ出立した。
白井城へ到着した憲政一行はそこで一泊すると、すでに待機していた一聲齋率いる五十人の家臣団に護られて翌朝出立し、三国峠にいたって無事上野國を脱出した。
三国峠は清水峠とともに越後山脈をこえて越後と関東を結ぶ重要地点で、上野、信濃、越後三国の境の峠ということで名づけられたのであろうが、ほかに上野赤城大明神、信濃諏訪大明神、越後彌彦大明神の三国一の宮を祀る三社權現が鞍部におかれていることからともいう。
その三国峠を越えると、いよいよ越後國である。
地形は日本海に面して南北に長く、全長六十里（約二四〇キロ）にもおよぶ広域なので、北に向かって上越後（頸城、魚沼地方）、中越後（刈羽、三島、古志、蒲原）、下越後（北蒲原、岩船）に区分されている。
三国峠から入る越後國は人体でいえば脇腹にあたる。
そこは上越後の魚沼地方で名立たる豪雪地帯である。
現在は苗場、赤倉、土樽、湯澤、石打などが軒を連ねていて、さながらスキー場銀座の様相を呈している。
越後國には城資永という豪族が蟠踞していて平氏に与していたが、源氏が興って木曽義仲に斃された。
その義仲が頼朝に斃され平氏も滅亡して鎌倉幕府が成立すると、秩父平氏、三浦・和田氏、佐々木源氏などの御家人たちが地頭職となって入り関東御分國となった。
その後、執権北條泰時の弟朝時の名越家が支配していたが、倒幕した新田義貞の三男義宗の支配に替わった。
ところが、南北朝の争乱になって南朝方の新田義貞と北朝方の足利尊氏の抗争になり、尊氏の命を受けた上杉憲顯が軍勢を率いて攻め入り新田勢を掃討した。
憲顯はその功により尊氏から上田荘（南魚沼郡）を賜

り、関東に通ずる三国峠越えと清水峠越えの分岐点であり魚野川水運の出発点でもある水陸交通の要衝六日町の東方坂戸山に山城を築いて、執事長尾忠景を据えた。
室町幕府が守護制度を布くと、憲顕は越後國と上野國の守護になったので執事の長尾景忠は弟景恒に越後守護代を委せて自身は上野守護代となって白井城へ移った。
越後國にはそんな関わりがあって、これから行く魚沼地方の六日町の里は山内上杉の守護國であると同時に領国でもあり、坂戸城主長尾政景は祖先憲顕が据えた守護代の末裔なので、実家へ帰るような親しみがあった。
憲政の乗馬を通す雪掻きを繰り返しながら三国街道をすすんで、その日の夕刻ようやく六日町に辿り着いた。
坂戸城にはここから春日山城まで憲政を案内する平子房長と家臣団三十名ほどがすでに待機していた。
長尾一聲齋は、同族長尾政景と平子房長にくれぐれも後事を託しておいて、翌朝早く白井へ帰っていった。
安全圏に入った憲政は、緊張が解けてどっと疲れが出たので、しばらく坂戸城に逗留することにした。
そのあいだに平子房長が春日山城に出向いて直接長尾景虎に会い、再度憲政の庇護の確約を取り付けてきた。
（快く迎えてくれるのなら早く春日山へ行きたい）
そう思うと憲政は矢も楯もたまらず出立を急がせた。
政景が景虎と同族なのになぜ平子房長が憲政を送り届けるのか不審に思われる向きもあろうが、一聲齋は平井まで迫っている北條方が密偵を放って探索を入れているだろうし、坂戸の政景は国境の防備を疎かにできぬからそれぞれ不在にしたり手薄にはできなかったのである。
ともあれ憲政一行は雪深いなかを隣接妻有荘（中魚沼郡）十日町を横切って頸城地方に入り、松之山から直峰（上越市安塚区）を経て春日山（上越市）に安着した。
出迎えた二十三歳の青年武将景虎は一行を手厚く迎え入れると、旅装を解いた憲政とあらためて対面した。
憲政が北條氏康に逐われて涙を呑んだ経緯を語ったあとで、上杉家重代の太刀〈天國〉と系図を差し出して、
「当家に代々伝わるこの太刀と系図、それに関東管領職をそなたに譲るからどうか上杉の家名を守って下され」
そう嘆願した。
景虎は恐縮して、
「われらは守護家に仕える家臣でござりますれば臣下が主家を継ぐなど恐れ多いことにて滅相もござりませぬ」
景虎は乱世にあっても下剋上の風潮に眉を顰める保守的な人で、二度までも主君を殺害した爲景の子であることに恐縮して肩身の狭い思いをしていたので、心情的にも受け入れることなどできるはずはなかったのである。
「上杉の家名をお継ぎできる立場ではござりませぬがご安堵召され、景虎いのちに代えても管領様をお匿い申し上げ、北條氏康と対決いたしご領国関東を恢復いたしますればなにとぞご安穏にお過ごし下されますように」

憲政には景虎の申し状がなんとも心地よくひびいた。
生死の境を彷徨い歩いてきた憲政は、ようやくにして安住の地を得ることができて思わず口許が綻んだ。

## 五

いっぽう妻鹿田新介のほうは、龍若丸と供四人のほかは奥方はじめ女伴れなので仕度に手間どってしまった。
ようやく出立したのは数日後で、降りつづいている雪が大分積もっていて、はじめから歩行は難儀であった。
高崎近くまできたときにはもう夜が明けてきた。
(このぶんでは女伴れで常陸まで行くのは迚も無理だ)
そう判断した新介は、叔父の九里采女正に、
「このぶんではとても常陸へは叶いませぬゆえ龍若丸様はわたくしがお送りいたすことにして、お方様は箕輪の長野様にお匿い願うことにいたしてはいかがでしょう」
「うむ。もっともじゃが、おぬし一人では心許なかろうゆえ、長三郎か與右衛門を同行させてはどうじゃ」
「子供伴れでならばどこかの牢人者と見られましょう」
「それもそうじゃが、大切な御方ゆえ大丈夫かのう」
「そうと決まれば、お互いに急ぎ参りましょうぞ」
箕輪城のある箕郷町は高崎市に隣接していた。
生憎の吹雪だが距離からみて暮れるまでには着ける。
新介は龍若丸を励ましながら常陸太田を目指した。

だが乳母日傘で育った龍若丸は脆弱で歩行が覚束無く、すこし歩くと立ち止まり蹲ってしまうのだった。
新介は苛立ったが、そのたびに主君憲政に打ち砕かれた将来を取り戻すためになんとしても龍若丸を常陸の佐竹義昭に庇護させ、その助勢で氏康を斃して関東を回復し管領に返り咲かせなければならない、と思い直した。
だが常陸太田まで行くには下野國と常陸國を横断して鹿島灘まで出なければならず、かなりの道程であった。
ひ弱な十三歳の少年を励ましつづけ、ときには背負ってやることを繰り返しながら歩きつづけているうちに、新介はいつか将来の夢を無惨に砕いたうえにこんな苦難を課した憲政にあらためて怒りが込み上げてきた。
憲政への不信が昂じてくると、さらに見知らぬ佐竹義昭に対してもまた同様の思いが頭を擡げた。
(果たして佐竹義昭は、龍若丸に同情して素直に受け入れ、仇敵北条氏康征伐に協力してくれるだろうか)
そんな疑念が沸々と湧いてきて、それがやがて、
(ひょっとして義昭は敵対してもいない相手を嗾けて伸るか反るかの賭けに出るより、龍若丸を氏康に差し出して親交を図ろうとするのではないだろうか)
そこまで考えが及ぶとそれがみるみる膨らんでいって、そうなるに違いないと思い込むようになっていった。
そして、新介は、
(たとえお屋形といえども裏切ったからには敵だ。其方

が其方なら此方も此方、眼にもの見せてくれよう）
憲政への無念遺る方ない思いに火がつくと即座に、
（佐竹に横取りされて利用されるくらいなら、儂が龍若丸を直接氏康に差し出してお屋形に仕返ししてやろう）
そう決断した。
それからの新介の行動は早かった。
踵を返すと、一目散に小田原へ急いだ。
途中で北條方に捕らえられてしまっては元も子もなくなるので、目立たぬように用心して裏道を拾い歩いた。
食事は畑仕事に出かけて留守の農家を狙って忍び込み、残り物を漁って飢えを凌いだ。龍若丸も北條方の監視の眼を掻い潜って常陸へ行くのだと承知しているので、真逆北條へ突き出されるとは知らずに飢えに耐えていた。
だから小田原へ着いたときには精も根も尽き果てた。
さいわい北條へ寝返った旧臣たちがいて、二人の身許を証明してくれたので、ようやく丁重な扱いになった。
新介と龍若丸は別々の座敷牢に押し込められた。
それから数日後、龍若丸は氏康の許に呼び出された。
「そなたは上杉憲政殿の嫡男龍若丸に相違ないか」
名指しされた龍若丸は居住まいを正し小声で答えた。
「まだ少年の身で不憫じゃが、そなたが上杉の御曹司とわかったうえは北條の棟梁として赦すわけには参らぬ」
そう言われて龍若丸は、氏康の顔を凝と見詰めた。
「乱世の慣いなれば、生命は貰い受けねばならぬ」
氏康の冷ややかな言葉に龍若丸は呆然となった。
氏康の命を受けた笠原越前守は、龍若丸の身柄をその日のうちに伊豆の修善寺に護送すると、ただちに番侍の神尾治部右衛門に命じて龍若丸の首を刎ねさせた。
神尾治部右衛門は龍若丸を処刑したことを苦に病んで、その後程なくして気が狂れ、死んでしまったという。
その様子を伝え聴いた新介は、
（近々恩賞の沙汰があるに違いない）
そう密かに北叟笑んで、その日を心待ちにした。
だから新介は、呼び出しには心を躍らせて出頭した。
氏康は、そんな新介の心底を見透かしたかのように、
「妻鹿田新介とやら、遠路はるばるこの氏康に上杉憲政の御曹子を差し出しに参ったのはそのほうであるか」
「はっ。左様にござりまする」
新介は平伏したままで、氏康のつぎの言葉を待った。
「そのほうは上杉の家臣であり龍若丸の傳役であろう」
「はっ。それに相違ございませぬ」
「ならば妻鹿田新介、そのほうは不忠不義の人非人じゃぞ。上杉家恩顧の身なればなんとしても御曹子を匿い、時節を待って再興を図るべきであるにも拘らず、己が身を永らえんがために年端も行かぬ龍若丸を犠牲にいたすとは、人の道に背く所業、氏康断じて赦せぬ。謀叛人は見せしめのため打ち首にいたす」

氏康は語気鋭く、険しい顔貌で新介を睨みつけた。
新介は、氏康の面前で高手小手に縛り上げられた。
そして、見せしめに小田原の大路を引き回された。
観念した新介は、引かれ者の小唄で、
「武運拙く夢破れて刑場の露と消えるが、裏切ったお屋形への報復が叶い、上杉家と心中できて満足じゃ」
そう嘯いた。
新介は山王川河口の東側一色村の松原（小田原市東町）へ連行されて斬罪に処せられ、晒し首にされた。
松の木に止まっていた一羽の鴉が、新介の首を見て、
「かあ」
と一声甲高く啼いた。という。

この年八月、氏康はふたたび平井城を攻めた。
棟梁不在で戦力低下している平井城は、持ち堪えられずに僅か一日で落城してしまった。
氏康は副将格の叔父長綱（幻庵）に精鋭三千の兵を預けて守備を託すと、悠々小田原へ引き揚げた。

# 第十九話　越後の春

憲政は景虎に御館と称ばれる管領館を建て貰って安穏な日々をすごした。

だが景虎は多忙だった。武田信玄に逐われた信濃衆が次々に頼ってきていたのだ。

景虎は信玄と川中島で交戦を繰り返した。

憲政がなんどすすめても辞退していた景虎がついに家名を継承してくれた。

そして将軍足利義昭からの命を受けて信長打倒の上洛大遠征を決意した謙信（景虎）は麾下の諸将に『動員令』を発した。

## 一

北條氏康に関東を逐われて三國峠を越え豪雪の越後國（新潟県）を横断して無事春日山城（上越市中屋敷）に到着した上杉憲政は、城主長尾景虎に迎え入れられて安堵したのかそのまま数日のあいだ床に臥してしまった。

このとき二十三歳の青年武将長尾景虎は律儀な人で、父爲景が越後守護代の身で守護上杉房能と関東管領上杉顕定の兄弟を討った下剋上の行爲を思い悩み恐縮しつづけていたので、現関東管領の上杉憲政が庇護を求めてきたことは名誉挽回の好機到来であった。

だが、景虎は手放しでよろこんではいられなかった。

当時の越後國は関東管領の本家筋に当たる上杉氏山内家の守護國ではあったが、まだ統一されていなかった。

上、中越地区には守護家の旧臣をはじめ、景虎の府内のほか上田、栖吉、三條の長尾三家がいたし、揚川（現阿賀野川）の北の下越には源頼朝が奥州の藤原秀衡を頼って亡命するであろう弟義經を捕縛すべく地頭職として配置した鎌倉御家人たちの子孫が蟠踞していて、室町期に入って守護制度が布かれても服従しなかった。

そんな状況のなかにあって景虎はまさに越後國内の統一に大童の最中だったのだが、憲政の受け入れをだいいちに考えて春日山城下の府内に管領館建設を優先した。

その館の敷地は内部が約二百メートル四方もある広大なもので、周囲は土塁と堀をめぐらして有事に備えた。

御館と称ばれるこの館跡は現在直江津駅の西方約一キロのＪＲ信越本線と北陸本線を上越大通りが跨ぐ御館橋の西方上越市五智一丁目の住宅地になっていて、その一

部が御館公園として陸橋とともにその名を遺している。
そして、その年八月景虎は義兄長尾政景の上田荘坂戸城（南魚沼市六日町）に本陣をおくと、平子孫太郎、庄田總右衛門、吉江木工助（もくすけ）らの部将に軍勢を預けて初めて三國峠越えで関東に出兵し沼田城（沼田市）に入った。
だがこのとき越後軍は沼田城から動かず、北條氏康も小田原から出兵しなかったので合戦にいたらず、豪雪に帰路を断たれるのを懸念して十月に引き揚げさせた。
景虎にしてみれば、たとえ合戦にいたらずとも氏康に対しては関東管領擁立の示威運動（デモンストレーション）になったし、憲政には北條征討に動いたことで面目が立ったことになる。
十二月には武田信玄に逐われた信濃守護小笠原長時が景虎を頼ってきて近隣が騒がしくなってきた。
管領についで守護も駆逐されたということは、幕府体制が崩壊して乱世になってゆくことを暗示していた。
そんななかにあって御館の新居に落ち着いた憲政は、荒れ模様になってゆく世間とは没交渉でのんびりとはじめての雪国越後の春を迎えようとしていた。

## 二

憲政が御館で一年を過ごした天文二十二年（一五五三）二月十日、景虎の兄晴景が四十五歳で病死した。
親子ほど年齢の差があるのは、景虎の生母は同族栖吉（長岡市）長尾顯吉（あきよし）の女（むすめ）で父爲景の後妻だったからだ。
晴景は父爲景の病死により二十八歳で家督を継いだ。
だが家臣団の対立を抑えていた爲景病歿の噂が広まると、守護家の旧臣、同族、揚北衆などの不穏な動きが出てきたので、爲景の葬儀は出陣と見紛う物々しい武装集団の参列になり、菩提寺林泉寺に預けられて仏道修行に励んでいた景虎も甲冑に身を固めて父の柩を護った。
その後も病弱な晴景を心服せず、対立が表面化した。
景虎が林泉寺に入って七年経った天文十二年（一五四三）、揚北衆をはじめとする反守護代勢力の鎮圧に疲れて自信喪失した晴景は結束を強めるために十四歳になった景虎を強引に還俗（げんぞく）させて春日山城へ連れ戻すと、急ぎ元服させて幼名虎千代を平三景虎にあらためさせた。
元服すれば次は初陣である。晴景は景虎を中越へ派遣して地域の抑えと揚北衆の睨みに据えることにした。
景虎は腹心と将兵を率いて反勢力の群がる三條城（三条市上須頃）へ入り、城主山吉豊守（やまよしとよもり）の補佐を受けた。
だが翌年には栃尾（とちお）城（長岡市大野）へ移って、城主本庄實乃（じょうじねより）の補佐を受けた。栃尾城のほうが母の実家栖吉長尾氏の本拠栖吉城（長岡市栖吉町）により近く、緊密な連絡をとるのに便利だったからである。
その年、沈黙を守っていた近隣の反勢力国人たちが弱冠十五歳の景虎を侮って諸方から攻撃を仕掛けてきた。
景虎は、本庄實乃のほか三條の山吉豊守、栖吉の長尾

顯吉らの協力を得て攻め寄せる国人たちを次々に撃退し見事初陣を飾った。景虎の華々しい登場であった。

景虎が還俗して三年目の天文十四年（一五四五）十月、上杉守護家の老臣黒田和泉守秀忠が次兄左平次景康を殺害して黒瀧城（西蒲原郡弥彦村）に立て籠もった。

兄晴景危機の報らせを受けた景虎は急ぎ春日山城に馳せ参ずると、命を受けて黒瀧城攻撃に向かった。

恐れをなした黒田秀忠は僧侶になって他国へ去り兄景康の菩提を弔うことを誓って助命嘆願してきたので、景虎はその神妙な態度を憐んで赦し栃尾城へ引き揚げた。

ところが二年後に黒瀧城へ戻ってふたたび反抗した。

再度の謀叛に怒った守護上杉定實は、旧臣と雖も容赦せず景虎に完膚無きまでに討伐することを命じた。

信頼を裏切られた景虎は烈火の如く怒り、憤怒を込めて徹底的に猛反撃を加えて落城させると、黒田一族を悉く捕えて切腹させ、禍根を絶った。

この黒滝城攻めで景虎の武名は大いに上がり、盛り立てた諸将もその活躍ぶりに将器の片鱗を見て感服した。

なかでも上條上杉家の旧臣宇佐美定滿は景虎を国主に仰ぐに相応しい器量と見抜いて、

（栴檀は双葉より芳し）

とぞっこん惚れ込み、軟弱な晴景を見限って栃尾城の景虎を擁立しようと考えた。

その企てに多くの国人たちが同調したので、同族上田長尾の房長、政景父子は春日山城の晴景に注進した。

怒った晴景が景虎を謀叛人と極めつけて栃尾城攻撃の陣触れをしたので、事情を知った景虎は愕ろいて釈明の使者を送ったが、晴景は赦そうとしなかった。

長尾兄弟による一触即発の危機を憂慮した守護上杉定實は、仲裁に入って晴景を説得し、景虎を養子にして隠退することを渋々ながら承服させ、家名存続を図った。

天文十七年（一五四八）十二月三十日、上杉定實の斡旋で晴景は四十歳で隠居したので、景虎は栃尾城を出て春日山城に入り、十九歳で家督を継いだ。

しかし、誰もがみな景虎を認めたわけではなかった。

晴景のあとの守護代を狙って協力してきた上田荘坂戸城主の長尾政景が景虎の統制に服従しなかった。

上田長尾は政景の父房長が景虎の父爲景と同族争いを起こしていたし、政景自身もまた晴景と景虎が対立したとき晴景を援けて敵対していたので痼りが残っていた。

景虎が晴景の跡を継ぎ守護代になって二年後の天文十九年（一五五〇）二月二十六日に上杉定實が病死した。

定實には嗣子がなかったので越後守護家は断絶した。

このとき定實は景虎を守護にする遺言を残したというのだが、真偽はともかくとしてたとえ遺言がなくとも守護家が自然消滅すれば守護代が頂点に立つことになる。

このころ室町幕府の守護制度はすでに有名無実になってきていて、事実上越後国主になった景虎は国内統一を

図り、坂戸城の長尾政景討伐に出馬しようとした。
それを知った政景は、中越地方の与党国人を集めても利あらずと覚り、誓書を差し出して恭順の意を示した。
政景が同盟してくれれば頼もしい片腕になると判断した景虎はすぐさま申し入れを承諾した。これで父爲景が上田長尾の房長と和睦したときその嫡男政景に嫁がせた姉（後の仙洞院）の身も安泰になるはずであった。
山内憲政が春日山城へ入った一年まえのことである。

## 三

兄晴景が病歿して二箇月後の四月、越後にようやく春の兆しが訪れはじめたころ府内が騒がしくなってきた。
憲政が、なにごとと訝って近臣にたずねると、
「村上義清様、高梨政頼様、井上清政様、須田満親様、島津矩久様がた北信濃のお歴々がつぎつぎに景虎様を頼ってお出でになったのでござりまする」
憲政は事情をきいて顔色が変わり恐怖で寒気立った。
「北條氏康が攻めてまいったのか」
憲政の声は震えていた。
「いいえ、ご案じ召されるな。北信濃へ攻め入ってきておりますのは甲斐の武田信玄とのことでござりまする」
それを聴いた憲政は、ほっと胸を撫で下ろした。
だが、頼られた景虎のほうは心中穏やかではない。
武田信玄の北信濃略取で緩衝地帯がなくなり境を接した両者の対決は避けられぬ緊張状態になったのである。
八月中旬、景虎は北信濃諸将の失地回復と越後國防衛に立ち上がった。
景虎は憲政に侵略者武田信玄討伐を伝えると、
「留守は義兄政景殿に委せておきますればご懸念なく」
そう不安を抱かぬよう配慮しておいてから出陣した。
信濃國へ進出した越後軍は、甲斐軍を求めて南下をつづけ、布施（長野市篠ノ井）まで下ったところでようやく甲斐軍を発見して戦端が開かれたが、はじめから越後軍が押し気味にすすめられ、九月一日布施南方の八幡（千曲市）でついに甲斐軍を破って占拠されていた新砥城（千曲市）を奪還すると、さらに兵をすすめて筑摩郡に入り、青柳、会田、麻績を攻めて占拠した。
このとき、武田信玄の本隊はなぜか塩田城（上田市前山）に滞陣したまま動かず、甲斐軍の抵抗は布施と麻績での小競り合いだけであった。
守勢のままで決戦を挑もうとしない信玄は、景虎の采配と越後軍団の戦力を凝と観察しているようであった。
それに気付いた景虎は、すぐさま深追いを中止させると、九月二十日に兵を纒めて春日山城へ引き揚げた。このとき景虎二十四歳、信玄は三十三歳であった。
この世に言う〈川中島の合戦〉は十二年間に五度行われたが、結局決着はつかずに終わってしまっている。

景虎は帰国するとすぐにこんどは予ての計画どおり精兵二千を率いて上洛の途に就いた。昨年四月朝廷から、〈従五位下に叙せられ彈上少弼に任じられた〉ことへの御礼言上と、併せて、幕府に越後國主を認知させ関東管領支援の名分を得る目的のためであった。

上洛した景虎は、参内して後奈良帝から天盃と剣を賜わるとともに、

「平景虎、任国（越後）並びに隣国（上野、信濃、越中）の敵心を差し狭む輩を罰し、威名を子孫に伝えよ」

との綸旨（勅命）を受けた。

同時に将軍足利義輝からも、

「越後國主」

を追認されて所期の目的を達し、勇躍帰国した。

ところが、翌年末に北條城（柏崎市）主北條高廣が武田信玄に通じて謀叛した。

景虎は、老獪な信玄の手練手管に配下の諸将が籠絡されて行くことを懸念して、見せしめのため高廣を徹底的に攻撃したので高廣は堪らず、ひと月余りの籠城で降服したので景虎は改心した者を責めず、赦してやった。

そして四月、川中島に出陣して信玄と対陣した。

ところが八箇月の長陣になったので、諦めた信玄が義兄の今川義元に調停を依頼して痛み分けになった。

北條高廣を攻めて改心させたあと、つづいて川中島に長期出陣したため疲労困憊した景虎が帰国すると、こんどは後を絶たない国衆たちの内訌調停に悩ませられた。

内訌には譜代と外様家臣団との根深い対立があった。

前にも述べたように、越後國は上杉守護家が断絶したため長尾守護代家が国主になったこともあって、国衆は長尾家の譜代と上杉守護家の旧臣とが混ざり合い、さらに鎌倉御家人の子孫である揚北衆がいたので、これらが水と油の如く融和しないまま唾み合いをつづけていた。

合併は計数で割り切れない人事がいちばん難しい。

帰国早々に起こった事件は、上野家茂と下平修理、中條藤資と黒川清美の所領争いで、これが縺れに縺れて両派の領袖長尾家譜代の本庄實乃と上杉家旧臣大熊朝秀との対立抗争にまで発展していってしまった。

景虎は統合したことによる両家家臣団の確執を憂い、双方を宥めるのに苦慮してあれこれ思い悩んだ。

翌弘治二年（一五五六）三月、景虎は家臣団の調停に明け暮れる国主の座が煩わしくなると同時に、内訌を繰り返す越後軍団を率いて乱世を生き抜く自信を喪い、二十七歳の若さで政務を放擲して隠退を決意した。

そして血腥い殺戮の俗世を離れて僧籍に入り静かな余生を送る覚悟を固めると、すでに隠棲している旧師天室光育に心境を吐露した長文の書状を認めて届けさせると、六月に春日山城を脱出して紀伊國高野山に向かった。

国主逃亡という未曽有の大事に直面した副将長尾政景は、直ちに中條藤資を説得し、大熊朝秀を抑えて領地紛

争を解決させると、本庄實乃と直江實綱に政務を代行させておいていそぎ景虎のあとを追った。

景虎が妙高山麓の関山権現（妙高市関山）で参籠しているところへ追いついた政景は執拗に帰国を説得した。

政景の熱情に承服した景虎は、春日山城へ戻った。

そして、あらためて諸将に忠誠を誓わせると、なお証しに人質を出させて謀叛心を起こさせぬよう束縛した。

景虎の逃亡を知った大熊朝秀は、好機到来と武田信玄に内通すると居城の箕冠城（上越市板倉区山部）を捨てて一旦隣國越中へ退き、信玄の来援を待っていた。

長尾家支配に変わった越後國にあって肩身の狭い思いをしていた上杉守護家の旧臣大熊朝秀は、この機に乗じて主家を再興しようと志して決起したのであるが、それは一旦長尾家に引き継がれて固まった新体制を顛覆させることであり、新国主景虎に対する謀叛であった。

春日山城へ戻った景虎は直ちに大熊朝秀討伐の軍を起こして上野家茂らを越中國へ向かわせ、ふたたび越後國へ追い込んだところを駒返（糸魚川市青海）で挟撃した。

敗れた大熊朝秀は主家の領国だった越後國を捨てて甲斐國へ逃れて信玄を頼り、以後忠勤を励んだという。

このころ憲政は景虎が回復してくれた平井城へ戻っていたので、川中島合戦も景虎出奔事件も知らなかった。

## 四

景虎は今川義元の調停を忠実に守ったが老獪な信玄は勝手に振る舞い、微笑外交と実力行使で北信濃衆恫喝を繰り返し、ついに姻戚高梨政頼の支城飯山城（飯山市）を攻めてきたのでついに立ち上がらざるを得なくなった。

景虎の信濃出兵は新井から富倉峠を越えて飯山城に入り本陣にしていたから、陥とされてはならなかった。

やむなく出陣して飯山城を囲む甲斐軍を襲撃したが、信玄が決戦を回避したので追撃して善光寺に布陣した。

そして上野原（長野市上野）で衝突したが信玄に躱され持久戦になってしまい、竜頭蛇尾に終わった。

翌年二月二十八日、元号が『永禄』に改元された。

景虎は将軍足利義輝から再度の上洛を求められると同時に、信玄との講和を斡旋する御内書が下された。

景虎は将軍の仲裁調停を無条件で受け入れたが、このとき信玄は信濃國侵略の汚名を払拭すべく承諾の条件に『信濃國守護職』の任命を要求して補任されたという。

この年四月、平井の憲政はまた北條氏康が攻めてくるとの情報を得て、逸早く景虎の許へ逃げ帰ってきた。

このときも憲政は再度、

「関東管領職を譲るから、上杉の家名を護ってくれるよう」

懇願したが、律儀な景虎は固辞して受けなかった。

もはや関東に君臨する自信を喪ってしまった憲政は、以後きっぱりと関東を捨てて隠棲することに決めた。

憲政が関東への未練を絶って御舘に腰を据えてから一年後の永禄二年（一五五九）四月、景虎は将軍要請に応じて五千の軍勢を率い、二度目の上洛の途に就いた。

このとき景虎は、拝謁した将軍義輝から直々に、

「関東管領に叙任する」

内決を得たが、景虎は、

「尪弱（可弱い）の身としていかで重職を拝受せんや」

そう言上して、またしても辞退してしまった。

五月一日には御所に参内して、正親町帝に拝謁し、天盃を賜って従四位下少将叙任と剣を賜った。

このとき景虎は、将軍義輝から、

「文の裏書」「塗輿」「菊・桐の文章」「朱柄の傘」「屋形号」の使用を許可された。

先年の「白傘袋」「毛氈の鞍覆」許可と合わせて、これを『上杉の七免許』と褒め称えられた。

御礼言上に拝謁した景虎は、将軍義輝にあらためて、

「上杉憲政、及び信濃國の諸将を保護助勢して、関東に号令し、武田信玄を討伐せよ」

と命じられた。

前回上洛時の後奈良帝の綸旨と併せて、皇室と幕府からの命を受けた景虎の越後軍団は官軍になったのだ。

意気揚々と帰国した景虎は、翌永禄三年（一五六〇）三月椎名康胤に助勢して隣國越中富山の神保長職を討伐して帰国すると、憲政に小田原を攻めることを告げた。

そして八月、関東管領上杉憲政を奉じ八千余の軍勢で春日山城を発向すると、三國峠を越えて景虎自身はじめて関東へ侵入し、廐橋城（前橋市）で関東の諸将に、

「管領の失地回復に協力するよう」

大動員を呼び掛けた。

景虎出陣の報を受けた北條氏康はただちに対抗して河越城に進出し、さらに松山城に出張って出方を窺うと同盟者の武田信玄に助勢を求めた。

信玄は夫人同士が姉妹で誼を通じている石山本願寺の顕如光佐に使者を送り、加賀、越中両國の一向宗徒に景虎不在の越後國を攻略するよう唆した。

景虎はこの年動かず、廐橋城で越年した。

明けて永禄四年（一五六一）、小田原攻めに関東の諸将を動員して、岩槻城主太田資正、忍城主成田長泰、羽生城主廣田式部、藤田城主藤田右衛門佐、深谷城主上杉憲盛らを先鋒に立ててそのあとに越後軍団の諸将を配した。

十一万五千の大軍は小田原街道を放火しながら進撃し、稲毛、小杉、小机、権現山、信濃坂、大倉などの砦を陥として三月十三日未明先陣は大磯二陣は小磯に着陣、景虎は高麗山麓山下に本陣をおいて小田原城を囲んだ。

籠城の北條軍は難攻不落の堅城を誇って怯まず、合戦上手の景虎も手古摺って長期戦になってしまった。

その間に武田信玄の信濃國出陣や、越中一向宗徒の不穏な動きの報らせが次々に届いた。後方攪乱である。

景虎は、越中國への出陣から一年に亙る長期遠征に加えての小田原長陣の不利を諭す佐竹義重、小田氏治、宇都宮廣綱らの忠告を受け入れて攻城を断念し、閏三月三日に包囲陣を解くと兵を纏めて鎌倉へ引き揚げた。

景虎は氏康が動かないことを探ると、憲政の意を体して鶴岡八幡宮の社前で上杉氏を継承することにした。

そして十六日、景虎は関東の諸将が列座するまえを将軍義輝から認可された網代の輿に乗り、朱柄の傘、梨地の持槍、毛氈鞍覆の引き馬を揃えた荘厳な隊列を整えて鶴岡八幡宮に向かい、社前で憲政から正式に上杉の家名と関東管領職を譲られてその就任式を執り行った。

景虎は憲政の養子になって上杉氏を相続したのでその偏諱を受けて、長尾平三景虎から上杉政虎になった。

余談だが、このときこんな話が残っている。

居並ぶ諸将が小腰を屈めて敬礼するなかにあって一人成田長泰だけは馬上で景虎を出迎えた。見咎めた景虎は長泰に近づくと持っていた青竹で無礼打ちにした。

打たれた長泰は何故咎められたのか判らず、満座のなかで恥をかかされたことを怒ってその場から忍城へ帰ってしまい、景虎を見限って以後北條方になったという。

このことはいずれもが傲慢だったのではなく、成田氏は保元の乱で源義朝に従い、頼朝の奥州征伐にも加わって武功を立てたので鎌倉幕府が馬上礼を許していた。

長泰はその慣例に従ったまでのことであり、景虎は成田氏の家格を知らなかったための悶着だったのである。

## 五

景虎を政虎とあらためさせて上杉家を継承させ、家名の安泰を果たした憲政は、楽隠居を決め込んだ。

いっぽうこの年五月みずから法号を謙信と称した政虎のほうは留守将の桃井右馬助と長尾小四郎から受けた報告のなかで気懸かりなことがあった。

ひとつは奥信濃の割ヶ嶽城（長野県上水内郡信濃町）が甲斐軍の攻撃を受けて落城、破却されたことであり、もうひとつは川中島の清野氏居館跡に信玄が海津城を築城して城将に高坂弾正昌信、副将に小幡山城守虎盛を据えて千人の兵を常駐させているということであった。

このことは、信玄が国境を脅かして越後軍を誘い出し、川中島で殲滅しようとする決意の表れであった。

報告を受けた謙信は海津城攻撃を逸ったが、関東遠征のあとなので兵馬を休養させることが先決であった。

そして夏が過ぎて秋の農作業も一段落し、馬も肥えたところで出陣を決意して春日山城の留守将に義兄長尾政

景、越中國の備えには齋藤下野守と山本寺伊豫守を魚津城に派遣して固めさせると、八月十四日に出陣した。

憲政は政景と久々で対面して、越後國入りしたときに坂戸城で休息したときのことを思い出して懐しんだ。

先鋒を村上義清らの信濃衆につとめさせた謙信は、軍団を二手に分けて、本隊は新井（妙高市）から富倉峠を越えて信濃國に入り、飯山を経て善光寺に至り、別隊は関山を経て信濃國に入り、野尻湖の西を通って豊野から千曲川、犀川沿いに善光寺に至って本隊と合流させた。

謙信は集結した一万三千のうち五千を残留させておいて八千を率い、小市で犀川を渡ると海津城を左に見て川中島を南下し、千曲川を渡って妻女山に布陣した。

いっぽう信玄は海津城からの狼煙と早馬で謙信の出陣を知ると、得たりやおうと立ち上がり十八日に甲府を出陣して釜無川沿いに諏訪を目指し、和田峠を越えて上田に入ると屋代から小牧山、室賀峠を越えて山田に至り二十四日にいったん川中島西方の茶臼山に着陣したのち川中島を過って海津城に移動し二万の軍勢を集結させた。

両軍僅か一里（四キロ）を隔てた指呼の間であった。

九月九日夜、信玄は高坂昌信、眞田幸隆らに一万二千を預けて妻女山を背後から攻めて追い出させ、信玄本隊八千が八幡原で待伏せる〈啄木鳥の戦法〉を採った。

だが、謙信は海津城の炊飯の煙がいつもより多いのに気付いてそれを察知し、裏をかいて夜半に妻女山を降りると雨宮の渡しから千曲川を越えて八幡原に着陣した。

頼山陽がその著書『日本外史』のなかで賦している、

「鞭聲粛々夜河を渡る――」

の漢詩はこのときの謙信の心境を詠んだものである。

十日卯刻（午前六時）頃から両軍は激突し前半は越後軍が有利に展開したが、高坂隊らが到着してからは挟撃した甲斐軍が有利になるもついに雌雄決せず、越後軍は敵中突破して丹波島から犀川を渡り善光寺へ引返した。

現在川中島古戦場跡に〈三太刀七太刀の跡〉の碑が建っているし、両雄が一騎討ちの像もあって実しやかに伝えられているが、これは武田方の『甲陽軍艦』によるもので、ドラマのクライマックスとしては最高の設定であるが、一級史料といわれている『上杉家御年譜』には、

「荒川伊豆守馳乗り信玄と見すまし三太刀まで討共不徹信玄太刀抜き合する間もなく團を以て受はずず（以下略）」

そう明記されている。

この合戦について秀吉はのちに、

「卯ノ刻（六時）より辰ノ刻（八時）までは上杉軍の勝なり。辰ノ刻より己ノ刻（十時）までは武田軍の勝なり」

つまり、「勝敗決せず」「引き分け」と判定している。

この合戦のあと謙信は、また関東に出陣していった。

六月に帰国するとふたたび北條氏康が出張ってきて謙信に従属した諸将を寝返らせていたし、武田信玄も十一月に越後國は積雪で動けぬと見て上野國へ侵入し、氏康

と連合で松山城を奪還されてしまった。
謙信は雪中強行軍で関東に出陣し、廐橋城に入った。
この出馬を知った北條・武田連合軍は松山城を退いて帰国したので、謙信は当面の敵を失いここで越年した。
この陣中で謙信は、将軍義輝から関東管領職を授かると同時に、偏諱を賜って、政虎を輝虎と改名した。

## 六

憲政は家名を継承してくれた謙信が幕府から正式に関東管領職を叙任されたことをよろこび、面目を施した。
二年つづいて廐橋城で越年した謙信は、正月早々から北條氏康に寝返った関東の諸将を再従属させて六月に帰国したのだが、追っ掛け岩槻城の太田資正から、
「氏康と信玄がまたもや松山城を攻めている」
急報を受けてやむなく出陣し、十二月中旬こんどは沼田城（沼田市）に入り三年つづいて上野國で越年した。
さらに翌年も廐橋城で越年したが、次の永禄七年（一五六四）は四月に帰国して留守将の義兄長尾政景に休暇を与えたのだが、これが痛恨の極みになってしまった。
上杉守護家の旧臣琵琶島城（柏崎市）主宇佐美定満は、謙信政権の中枢にいる長尾政景と仲が悪かった。
政景は意志の疎通を図ろうとして坂戸城に招いた。
だが、定満のほうは頑なに心を閉じたまま出席した。
宴酣になって谷後（南魚沼郡湯沢町）の野尻池で舟遊びに興じたとき、定満は隠し持った短刀で政景を刺すと抱き合ったまま水中深く没して無理心中してしまった。
政景の家臣たちは定満を謙信の刺客かと疑った。
事件の急報を受けた謙信は激怒して、即刻琵琶島城と所領を没収すると、宇佐美氏一族を国外追放に処した。
その謙信の果断な処分が却って証拠湮滅の疑惑を生み、政景謀殺の噂がますます真実味をおびていった。
その噂も信玄の北信濃進攻によっていつか消えた。
謙信は七月下旬に春日山城を発向して、八月十日に犀川を渡り川中島に着陣すると、信玄もそれに呼応して川中島の南端塩崎（長野市篠ノ井）に出張り布陣した。
謙信は三年まえに取り逃がした無念を晴らそうといきり立ったが、信濃國全域をほぼ制圧して事実上川中島四郡も手中に収めている信玄は敢えて雌雄を決することを避けて謙信の誘いに乗ってこなかった。
信玄に躱された謙信は気勢を削がれてしばらく沈黙したので、両軍は対峙したままで膠着してしまった。
そのあいだに小競り合いが数回あったがいずれも激突するまでにはいたらず、ひと月あまり対陣したあと九月中旬にどちらからともなく陣払いして帰国していった。
謙信が軍を退いたのはこの対陣中に武田方の市川城主市川孫三郎が信玄に不信を抱いて謙信に投降してきたことによって、中野、小菅、富井坂、大田切、小田切、計

見の諸郷が勢力圏内に入って緩衝地帯ができたからだ。
第一回から十二年が経ち謙信は三十五歳になった。
永祿八年（一五六五）の正月は春日山城で迎えた。
憲政は管領になった謙信が五年つづいて関東で越年して失地回復を図ってくれていることを頼もしく思った。
三月、将軍義輝から謙信に、
「北條氏康と和睦して速やかに上洛するよう」
内書が届いた。
謙信も一日も早く上洛して三好、松永を討伐したいのは山々であったが、目下関東情勢は予断を許さず、北條氏康と武田信玄をおいたまま行く手に立ちはだかる一向一揆を切り抜けて上洛するのは至難の業であった。
謙信が焦慮に駆られているあいだに、五月十九日将軍義輝が松永久秀と三好義繼の軍勢に京二條の新館を夜襲されて自害したという悲報が届き、無念の臍を噬んだ。
この年謙信はまたまた氏康侵攻の報らせを受け、十一月に三國峠を越えて関東に出陣し、廐橋城で越年した。
憲政は、謙信が京の下剋上鎮圧より関東奪還を重視していることに満足し、ますます信頼を深めていった。
謙信は翌年も翌々年もこんどは沼田城で越年した。
そうしているうちに永祿十二年（一五六九）になって氏康のほうから突然和睦を求めてきた。氏康の全面降服ではなく、対等の立場で同盟しようというのである。
氏康はこれまで今川義元、武田信玄と三国同盟を結んでいたのだが、義元が織田信長に斃されると信玄が徳川家康と盟約を交わして今川領への同時侵攻を謀ったので、氏康は女婿でもある今川氏眞を援けて信玄と敵対することになりいそぎ謙信に和睦を求めてきたのであった。
氏康にしてみれば謙信と同盟すれば信玄は腹背に敵を受けることになり、迂闊に動けなくなる利点があった。
その年六月謙信と氏康は起請文を交換して正式に和睦が成立し、長年に亙る関東での抗争に終止符を打った。
いくつかの和睦の条件のなかに人質の交換があって、
「妻子のない謙信からは部将柿崎景家の子晴家を、氏康からは嫡男氏政の二男國増丸（源五郎）を」
それぞれ差し出すことに決まった。
だが氏政が五歳の幼児を人質にするのを不憫がって氏康に泣きついたので、氏康はやむなく謙信に詫びを入れて自身の七男氏秀を差し出すことに変更してもらった。
翌年四月十日。謙信は沼田城で氏秀と対面した。
氏秀を伴い帰国した謙信はこの十七歳の人質を憐れんで、十一年まえ義兄政景の二男喜平次顯景（後の景勝）を養子にしていたが、氏秀をも養子に迎えて顯景の妹を娶らせさらに謙信の前名を与えて三郎景虎と名告らせた。
憲政は謙信が氏康の子を養子にしたのが不満だった。

## 七

氏秀が養子になった年の四月二十三日永祿が元亀と改元されたので、翌年は元亀二年（一五七一）になった。

その年十月三日に氏康が五十七歳で病歿した。

すると嫡男氏政はとつぜん遠交近攻策を無視して謙信との同盟を絶ち、敵対していた信玄と盟約を結んだ。

遠国謙信より隣国信玄のほうが脅威だったのだろう。

だが、氏政の思惑は外れて、その信玄は二年後上洛遠征の途次に病に倒れ、帰国も叶わず歿してしまった。

氏康、信玄の大物好敵手がいなくなって当面ひと息吐いた謙信は、流浪将軍足利義昭から再三救援要請の督促を受けている織田信長討伐の軍を起こす覚悟を固めた。

そして麾下の部将たちに軍役を課して兵員と武具の調達を義務づけた。天正三年（一五七五）十二月十六日付であるところから『天正三年軍役帳』といわれている。

その三十九名の部将と十七名の同心が調達する兵力は槍、荷駄、鉄砲、弓、大小旗手、騎馬など合計五、五七〇余名で、これをもって上杉軍団六千名といわれている。

有事にはこれに農兵と支配下にある関東、北陸の武将軍団が加わるから数万の大軍団になるのである。

六月、鞆に隠棲している将軍義昭から内書が届き、

「西國の毛利輝元と同盟して織田信長を挟撃するよう」

要請してきた。

信長は天正四年（一五七六）二月築城なった安土城（滋賀県近江八幡市）に移って備えを固め、配下の諸将を越中、能登両國に出張らせ前線基地にする策に出た。

この信長の動きを察知した謙信は、機先を制して上洛の道を開くため九月に素早く越中國（富山県）に出陣して諸城を陥とし七尾城（七尾市）を包囲して越年した。

年が明けて総攻撃の計画を立てているところへ関東の結城晴朝ら諸将から北条氏政が侵攻してきたとの救援要請が届いたので、一旦兵を退いて帰国することにした。

だが、帰国すると将軍義昭の内書が追い掛けてきた。

（上洛か、関東出陣か）

思案しているところへこんどは七尾城の長綱連が、

（信長に援軍を要請した）

急報が届いた。

謙信はすぐさま関東救援を取り止めて能登へ向かい、閏七月十七日天神川原に着陣して七尾城を攻め立てた。

難攻不落の七尾城も予てから謙信に心を寄せてきていた遊佐續光と温井景隆の内応であっさり落城した。

このとき織田救援軍は加賀一向一揆の抵抗に遭っていたが漸く活路を開くと一気呵成に湊川（現手取川）を渡って集落を焼き払い伏兵を警戒しながらすすんできた。

この報に謙信は雌雄を決すべく勇躍加賀へ向かった。

織田軍は金澤付近まできて七尾城の落城を知った。

総大将柴田勝家は全軍の士気を鼓舞して上杉軍団との

決戦に猛進するよう命じたが、羽柴秀吉が、
「救援軍の目的がなくなったからには、無益の損失を避けて全軍をこの場から引き揚げさせるべきではないか」
そう自重すべきを主張して勝家を諌めた。
勝家は秀吉の申し入れを頑として承諾しなかったので、秀吉は自軍を纏めるとさっさと引き返してしまった。
秀吉のとった行動は軍律違反であり敵前逃亡である。
このことで織田軍の士気は著しく低下し、戦闘力が萎えてしまったので、勝家はやむなく軍を返すことを決意して、九月二十三日夜陰に紛れて撤兵を開始した。
ところが生憎折からの秋雨で湊川が増水してしまっていて、浅瀬を知らぬ織田軍は渡ることができず行く手を遮られまごついているところへ追いついた上杉軍に背後を衝かれて逃げ場を失い、千人余りが討ち取られ、溺死者は数知れずの大打撃を受けて這々の態で退散した。
織田軍に大勝した謙信だったが、関東の情勢が気懸かりだったので、深追いせずに一旦帰国することにした。
春日山城で謙信は『麾下諸将名簿』を作成した。『上杉謙信自筆将士書上』と言われているもので奥書に『天正五年十二月二十三日法印大和尚謙信』と署名していることからこれは明らかに『上杉軍団動員名簿』である。
そこには上杉三十九将だけでなく上野、越中、能登、加賀の諸将をも含めた八十一将が書き連ねられている。
謙信は結城晴朝からの頻繁な出馬要請に応えて翌天正六年（一五七八）正月十九日名簿記載の諸将に対して、
「関東出陣の大動員令」
を発し、雪融けを待って三月十五日に出陣と定めた。

# 第二十話　御館の乱

三月十五日の出陣を目前にして謙信は九日に厠で倒れ昏睡状態のまま十三日に身罷った。

謙信は二人の養子長尾政景の二男景勝と北條氏康の七男景虎のどちらを後継者にするか決めていなかったので相続争いが起こった。

勝利した景勝は景虎の籠もった御館を破却することにしたので憲政は春日山城内のいずれかに安住の場所を与えて貰おうとして城へ向かう途中見知らぬ下級武士に景虎側と間違われて斬り捨てられ敢えない最期を遂げた。

## 一

二月に入ると、謙信が正月十九日付で発令した、

『関東遠征の大動員令』

を受けた越後軍団の諸将や近国の諸将から続々と、

『出陣承諾書』

が提出されて遠征の士気は弥が上にも盛んになった。

そして兵力を調達した部将たちが春日山城下の府内に集結し、溢れた大軍団は近隣の村郷にまでおよんだ。

そこへ討伐相手の北條氏政と武田勝頼から使者がきて、謙信と和睦し上洛に協力する旨の誓書が届けられた。

氏政は謙信に決戦を挑まれては勝算がなかったから矛先を信長討伐に向けさせるべく義弟勝頼と図って協力を申し出たのであろうし、勝頼にしてみても謙信に与することが先年長篠設楽ヶ原（愛知県新城市）での大敗の汚名を挽回する好機と考えて氏政に乗ったのであろう。

ともあれ、このことでひとまず関東の平穏は保たれたので、謙信は関東への出陣を上洛大遠征に切り替えた。

だが、いよいよ三月十五日の発向が迫ってきた九日の午刻（正午）ごろ、突然春日山城中で異変が起こった。

謙信が厠で倒れたのである。脳卒中であった。

謙信は酒豪で使用した馬上杯が遺っているから行軍中も飲んでいたのであろう。肴は梅干しを好んだという。

大酒と塩分の過剰摂取では頑健な身体も堪らない。

酒豪の謙信は以前にも軽い脳溢血を起こしていて足が不自由になったので青竹を杖にしていた。まえに述べた鶴岡八幡宮の社前で成田長泰を殴打したのはこの青竹である。合戦のときには采配替わりにしていたという。

医師団による懸命な治療や医薬も効なく謙信は昏睡状態のままなので、見守る宿将たちは眉を曇らせていた。

謙信は景勝、景虎のいずれを後継者にするのか決めていなかったので宿将たちはそのことが気掛かりだった。

直江大和守景綱の後室（未亡人）が枕許にすすんで、

「御家督は景勝公へお譲り給うや」

そう耳許で大声で叫んだところ謙信は微かに頷いたようだったので、並居る宿老たちは安堵したという。

だがこれが事実なら揉めるはずがない。謀叛したのは景虎だとするためにのちにつくった話ではなかろうか。

謙信はついに意識が戻らぬまま四日後の十三日未刻（午後二時）に息を引き取った。享年四十九歳であった。

『上杉家御年譜』には、

このとき謙信は二月になぜか京から画工を招いて自分の肖像を描かせているし、そのうえ、

四十九年一睡夢
一期榮華一盃酒

という句まで詠んでいる。

これが最後の寿像となり辞世の句となったのであるが、人は誰しも自分の寿命を知るはずがないから辞世の句はのちに誰かが作ったものではないかと疑いたくなる。

だが、よく考えてみれば生涯の年数はあとで誰かが書き替えればいいわけでやはりこれは謙信の作であろう。

余計な推量はひとまずおくとして、この謙信の急逝は家臣団にとってまさに〝巨星墜つ〟の衝撃だった。

『上杉家御年譜』の天正六年三月十三日のところにも、

「未刻　御病悩相協ス　享年四十九齢ニテ遠行シ玉フ
越後ノ貴賤暗夜ニ燈ヲ失ヒタルカ如ク　何カ議ン　諸國ヨリ来リ集ル軍兵等モ此變故ニ逢フテ　進退度ヲ失ヒ愁涙袂ヲ濡ス　抑今般大等ヲ議リ　其年功ヲ遂スシテ吾儕空ク帰國セハ武夫ノ本懐何ノ時カ達ンヤ　唯管領ノ御爲ニ悲ノミニ非ス　天下國家ノ爲ニ是ヲ哀ム」

そう記述されている。

葬儀は謙信が天文二十二年に最初の上洛をしたとき、高野山の総本山金剛峯寺に参詣して無量光院住職阿闍梨清胤を訪ね眞言密教に入門していたことから導師は春日山北丸大乗寺の住職長海法師がつとめて執り行われた。

謚号は〈不識院殿眞光謙信法印大阿闍梨〉である。

遺骸は遺言により甲冑を装着して甕に納められ、上洛大遠征の出陣姿のまま不識院内に埋葬された。

謙信の石棺は慶長三年（一五九八）秀吉から會津へ国替えを命ぜられたときに春日山から會津へ移したし、同六年家康に米澤へ国替えさせられたときも同様に會津から米澤へ移していて、現在歴代藩主の御霊屋が左右に並ぶ上杉家墓所（米澤市御廟）の正面奥に安置された。

二

謙信の死は越後國の住人たちにとって暗夜に燈を失ったも同然の思いであったというが、今日まで庇護され安楽な暮らしを与えられてきた古管領憲政にとっては暖かい日差しで柔かく包み込んでくれていた日輪を突然何者かに奪われてしまったような不安と恐怖に襲われた。

「跡目は景勝なのか、それとも景虎なのか」

それが憲政にとっては心配なのであった。

もし北條氏康の子景虎になれば、宿敵関係の憲政は用捨なく討たれるか追放されるのではないかと戦いた。

たしかに謙信は生前二人の養子のどちらを後継者にするか定めていなかったが、前に触れた直江景綱後室の話は別にしても、景勝は父政景が横死したとき十歳の少年だったので謙信が手許へ引き取り春日山城外郭の中ノ城に上田長尾の老臣宮嶋三河守を付けて保護させている。

そして天正四年（一五七六）正月十一日長尾喜平次顯景だった景勝に上杉の名字と弾正少弼の官位を譲った。

謙信が将軍義輝から与えられた称号である。

もう一人の養子景虎は北條氏秀のころはじめ武田信玄の養子になっていたが、北條・今川・武田の三国同盟が破棄されて小田原へ戻されたあと、こんどはあらためて上杉の人質に送られてきたのであった。

謙信は景勝同様氏秀をも養子にすると、上杉三郎景虎を名告らせ姪（景勝の妹）を娶らせて二の丸においた。

景虎は景勝の一歳年長であった。

むかし、ある歴史雑誌にこの二人の将来について、「もし謙信が老齢まで生きつづけていたら、越後生まれで人脈のある甥（姉の子）の景勝を越後国主に、北條氏政と兄弟関係にある景虎を関東管領に据えたであろう」

そう書いたことがある。

いまでもその思いは変わらない。

私がそう断定する根拠として、さきに触れた天正三年の『軍役帳』に景勝は中ノ城にいたことから御中城様として一門六人衆の筆頭に挙げて軍役を課しているが、そこに景虎の名はないことでも謙信の心中が推し量れる。

そんな下種の勘繰りは扨置いて先を急ぐことにする。

三月十五日に挙行された謙信の葬儀がおわると動員令を受けて集合した諸将は三々五々国許へ帰っていった。

春日山城下が静謐を取り戻し、近臣の者たちもそれぞれ落ち着いたころに、突然城内で異変が起こった。

中ノ城の景勝が直江景綱の後室に促されて素早く国主の座本丸（實城）に移って金蔵を抑えたのである。

それを知った景虎の近臣たちは本丸を奪取しようと二の丸から攻め上ったが、本丸は流石に要害堅固で攻め倦み形勢不利になったので、ついに景虎は二の丸を捨てて妻子を伴い憲政が安穏に暮らしている御舘を占拠した。

御舘は土塁と空堀だけで籠城に足る備えはなかった。

憲政は宿敵氏康の子の景虎が侵入してきたので危険を感じて奥に逼塞していたが、その様子はなく安堵した。

こうして景勝と景虎が睨み合っているあいだにそれぞれを支持する武将たちが両陣営に続々と集まってきた。
謙信の甥で最初に養子になった景勝を支持する部将のほうが多いと考えられていたのだが、いざ対立すると意外なことに景虎の許に集まった部将のほうが多かった。
景虎には兄の北條氏政と妹婿の武田勝頼が控えているから、景虎側のほうが絶対有利と判断されたのである。
景虎はその援軍を待っているようで、動かなかった。
そうなれば景勝側は北條、武田の援軍がくるまえに決着をつけなければならなかったから戦略に苦慮した。
あれこれ対策を回らしているうちに武田勝頼が数多の軍勢を率いて信濃との国境を越え、頸城郡大出雲原（妙高市小出雲）まで迫ってきているとの急報が届いた。
武田の大軍に春日山城を包囲されて糧道を絶たれれば、堅城を捨てて野戦を余儀なくされ衆寡敵せずになる。
重臣や有力部将たちが鳩首凝議した結果、
「背に腹はかえられぬ、和睦するより仕方あるまい」
そう結論づけられた。
その武田軍は、景勝の出方を窺っているかのように大出雲原で人馬を休めたまま動かずにいた。
だが、なぜ動かぬのか不気味でもあった。
このとき勝頼は義兄氏政に頼まれて出兵したものの、
「北條軍が小田原を発向した」
報がいっこうに届かぬので不審を抱きはじめていた。

氏政は父氏康の死後謙信との盟約を破棄して勝頼の父信玄に乗り換えた表裏者であるから信用できなかった。
（このたびも共同で景虎を支援しようと示し合わせておきながら、自分は高みの見物を決め込むのではないか）
そんな疑念が湧いてきて大出雲原で様子見に出たのであった。これが景勝にとっては物怪の幸いになった。
春日山城では景勝と諸将が協議して具体化を急いだ。
探索ったところ、勝頼の寵臣跡部大炊介と長坂長閑齋に賄賂を贈れば両名がよしなに取り計ってくれるということを突き止めたので、さっそく冨永清兵衛と吉田十右衛門を甲斐府中の躑躅ヶ崎館へ送ることにした。
和睦の条件については景勝が、
「東上野の所領に黄金一万両を添えるではどうじゃ」
そう切り出した。
諸将は景勝の気前のよさにおどろいた。
景勝はみなを納得させるように、
「勝頼は長篠で大敗いたしておるから領地も軍資金も喉から手が出るほど欲しいに違いない。小出しに釣り上げていったのでは揶揄われているとみて乗ってはこまい」
そう諭した。
交渉事は相手が納得する条件を出さねば成立しないことは勿論だが、そこのところをさらに耳を疑う好条件を提示すれば即座に飛びついてくるにちがいないのだ。
諸将は景勝の桁外れな椀飯振る舞いに舌を捲いた。

だが、景勝は別に惜しくはなく意に介さなかった。
それというのは自分の生命と越後一國の対価と思えば安いものだったし、もとをただせば東上野は古管領上杉憲政の領国であり、黄金は謙信が本丸の金蔵に貯えてあった三万両の一部なのだから、どちらも他人の所有物だったわけで、自腹ではないので痛くも痒くもなかった。
甲府へ着いた冨永と吉田は跡部と長坂に会って賄賂を与えると景勝の口上を伝えて勝頼への取次を依頼した。
跡部と長坂は賄賂の虜になって景勝からの和睦の申し入れを好意的に解釈して、勝頼に積極的に勧めた。
勝頼にしてみてもこの条件は垂涎の的であった。
氏政とともに景虎に助勢したところでこれほどの見返りがあるとは思えないし、景勝とは和睦に同意するだけで手に入る棚牡丹だから天秤に掛けるまでもなかった。
勝頼は信疑のほどが定かでない氏政よりも即断即決する景勝のほうが確実性があると踏んで和睦に同意すると、こんどは小田原勢を迎え撃つための布陣を固めた。

## 二

そのころ北條の援軍がようやく三國峠に到着した。
はじめ景勝は、北條軍侵攻の抑えに北上野廐橋城の北條輔廣、景廣父子と沼田城の河田重親を当てにしたのだが、どちらも景虎支持に回ってしまったので、上田荘坂戸城の兄長尾義景を頼みにせざるを得なくなった。
このとき北條軍を率いてきたのは氏政の舎弟北條新四郎となっているのだが、それがはたして誰なのか。
氏政の弟は景虎のほかに五人いる。列記してみると、
瀧山城（八王子市高月町）の氏照。
鉢形城（埼玉県大里郡寄居町）の氏邦。
韮山城（伊豆の国市韮山）の氏規。
唐澤山城（佐野市）の氏忠。
小机城（横浜市港北区小机町）の氏光。
である。
三國峠に近いのは鉢形城の氏邦と唐澤山城の氏忠なのだが果たして誰だったのか寡聞にして不明である。
ともあれ、八月下旬に三國峠を越えて侵入してきた北條軍は、景勝の兄長尾義景の坂戸城の支城樺野澤城（南魚沼市塩澤）を奪取したものの、長尾勢の頑強な抵抗に遭って動けず、徒らに糧米を減らすのみであった。
北條軍が大軍ならば一気に圧し潰されるところだが、申し訳程度の軍勢だったので長尾勢は持ち堪えられた。
景勝は北條軍が攻め入ってきたことによって勝頼の心境に変化が起こらないかどうかが心配になってきた。
和睦を破棄して北條と連合されれば一転不利になる。
景勝は勝頼の妹於菊を娶って絆を固めることにした。
勝頼に否やはなく騒乱のなかで忽々に婚儀が調った。
十月十六日に甲府を出立した於菊の輿は、甲斐軍の兵

士たちに護られて信濃國を経ると飯山から富坂峠を越えて越後國に入ったところでこんどは物々しい越後軍の兵士に引き継がれて二十日に無事春日山城へ到着した。

十月初旬に甲斐軍の退陣を知った北條軍の援将は、越後の豪雪に閉ざされて動けなくなるまえにと、沼田城の河田重親と厩橋城の北條輔廣、景廣父子にそれぞれ僅かの兵を預けておいて小田原へ引き揚げてしまった。

北條景廣は、父輔廣と河田重親に兵を預けて樺野澤城に残しておくと、自身の将兵を連れて御舘へ急いだ。

武田と北條の援兵が去ったあとは景勝と景虎派にわかれた越後諸将だけの対立になった。

下越の国人揚北衆は景勝を支持したが、中越の有力諸将が景虎支持に回ったため春日山と下越が遮断されてしまい不利な状態からはじまったので、勢いに乗る景虎派は栃尾（長岡市）の本庄忠長が景勝派の与板（長岡市）を攻めたが直江式部らの防戦に遭って引き退った。

信濃國から遠路参陣してきた飯山城（飯山市）主の桃井伊豆守は果敢に春日山城を攻めたが、景勝派は充分に引き付けておいてから大手の千貫門を開いて討って出たので桃井方は総崩れになり、桃井伊豆守は討ち死にした。

両派がおなじ越後の諸将なので矛先が鈍り雌雄を決するまでにいたらぬうちに景虎を救援にきた武田勝頼が景勝方に寝返ってしまったので、北條と武田の支援があるとみて景虎を支持した諸将のなかで動揺が起こり、一人二人と櫛の歯が欠けるように離散していってしまった。

なかでも鮫ヶ尾城（妙高市新井）の堀江宗親は景虎方の有力部将であったが、逸早く景勝側の安田信元に内通してきて降服の意を表すと鮫ヶ尾城で蟄居を約した。

そして景虎には鮫ヶ尾で小田原との通行路を確保する旨を言上して許しを得ると、さっさと帰ってしまった。

いっぽう二千の将兵を率いて樺野澤城を出立し御舘へ向かった北條景廣は、途中諸処で景勝側と遭遇して交戦しながらすすみようやく府内に辿り着いたものの御舘へは入ることができず、残兵を集めて來迎寺で越年した。

## 四

翌天正七年（一五七九）正月。

越後國は現在でもそうだが冬は豪雪で難儀する。

このころ内陸は大雪に閉ざされて人の往来もままならなかったが、府内は日本海に面した海岸地帯なので海から吹きつけてくる強風によって少しずつ雪が消えてゆき、正月も下旬になると馬が自在に動けるようになった。

晦日、北條景廣は明日御舘入りを決断して來迎寺を出ると八幡宮に参籠してそこで英気を養う酒宴を催した。

この報らせを受けた景勝は、北條勢が御舘へ向かう途中急襲を謀り中川口の土手の陰に兵を配置して待った。

そのなかに荻田孫十郎という十六歳の若武者がいた。

翌二月朔日は昼下がりまで待ちつづけ、痺れをきらしたころになってようやく北條勢がやってきた。
景勝勢の伏兵たちは得たりやおうと立ち上がり、獲物を狙う猛獣さながらに素早く北條勢に襲いかかった。
不意を衝かれた北條勢は隊列を乱して四散した。
荻田孫十郎は北條景廣の周辺に人影が消えたその一瞬の隙を衝いて馬上の景廣に長柄の槍を突きつけた。
手応えがあって素早く二の槍、三の槍を繰り出した。
北條景廣は荻田の槍を脇腹に受けたのだが怯まず、その柄を斬り落とすと素早く馬腹を蹴って走り去った。
そして、景廣は辛うじて御舘へ辿り着けたものの、深傷に耐え難くその日の夕刻に息を引きとってしまった。
頼みの勇将の死に御舘陣営はますます戦意喪失した。
翌日、景勝は御舘を攻めた。景虎勢は城を出て防戦したが形勢不利になると御舘へ退いて固く門を閉ざしてしまうので攻め倦み、外構えを焼き払って兵を収めた。
景虎側はよく御舘に籠城して救援を待ったが、小田原の北條、甲斐の武田が退いてからは国内の諸将だけになってしまい、それも景虎を見限って密かに帰国する者などが出て戦力は著しく低下していってしまった。
景勝は兵力の損耗を避けて兵粮攻めに出た。これなら空腹に耐らず投降してくるのを待っていればよかった。
さらに糧道を絶ってしまえばもっと早く陥ちる。
御舘へ食糧を供給しているのは刈羽郡枇杷島城（柏崎市）の琵琶島彌七郎であることを突き止めさせた景勝は、枇杷島城を攻撃に向かわせたので、多勢に無勢では勝ち目がないと諦めた彌七郎は戦わずして軍門に降った。
御舘では食糧の補給が止まってしまったので、備蓄が減ってゆくにつれて戦意は著しく衰えていった。
「腹が減っては軍ができぬ」
で夜陰に乗じて戦列を離脱逃走する者が続出した。
こうなってしまってはもう御舘は持ち堪えられない。
景虎は小田原の兄氏政を頼って脱出することにした。
三國峠までは遠く追い付かれる虞があるので、新井から富倉峠を越えて信濃國へ入ることにした。飯山には討ち死にした桃井義孝の残党がいるはずだし、そこまでは行けずとも三里ほどすすめば鮫ヶ尾城に堀江宗親がいて小田原との通行路を確保しているはずであった。
景虎は糧道を絶った景勝が総攻撃をかけてくるまえに急ぎ御舘を脱出することにして、準備を急がせた。
内室（景勝の妹）と九歳の嫡男道満丸、古管領憲政と宗四郎憲藤父子らは非戦闘員だから危害を加えられることはあるまいと御舘へ残すことにして、景勝勢が寝静まった未明に乗じて本庄新六郎、東條佐度守ら少数の部将たちと残存の雑兵二、三百人に護られて御舘を捨てた。
この日天正七年（一五七九）三月十七日。
夜が明けて景虎の御舘脱出を知った景勝はただちに追撃を命じ、自身も出馬して指揮を執った。

追い付かれた景虎側は氏政から派遣された平野次右衛門と篠窪出羽守の援兵少数が踏み止まって防戦したが、敢えなく崩されて平野と篠窪はともに討ち死にした。

景勝勢が小田原勢の抵抗に遭っているあいだに景虎は辛うじて鮫ヶ尾城に辿り着き、堀江宗親を頼った。

宗親は景虎に後ろめたい思いを抱きつづけていたので拒絶し難く、やむなく城門を開いて城中へ招じ入れた。

景虎勢は途中で討ち死にしたり離脱した者が多く出て、鮫ヶ尾城へ入ったのは僅かになってしまっていた。

追いついた景勝勢は、日暮れ近くになってきたので城の周辺に包囲網を布いておいてその夜は野営した。

翌朝未明、景勝勢は城下を焼き払って合戦に備えた。

そして景勝は、はじめ景虎支持だった堀江宗親から内応を受けた安田信元に宗親の去就を確認させた。

信元が密かに宗親に会ってそのことを糺すと、

「決して裏切りなどはいたさぬゆえご安堵召されよ。今夜二の丸へ火を放って城門を開きわが手勢が城外へ討って出ると見せかけるゆえそれを合図に攻め入られよ」

宗親は莞爾と笑ってそう答えた。

信元は宗親の態度を信ずるに足ると見て納得した。

その夜半、二の丸あたりから火の手が上がった。

景勝勢は城を出てきた宗親をはじめその手勢を離れた場所に収容すると、未明を待って一斉に攻め入った。

景虎勢はこれを最期と奮戦したが、所詮は衆寡敵せずで一方的になり、つぎつぎと討ち死にしていった。

午の刻（正午）ごろまでは辛うじて持ち堪えたものの、もはやこれまでと見切りをつけた景虎は奥へ入ると切腹して果てた。まだ二十六歳の青年武将であった。

景虎のあとを追った近江の宇野喜兵衛がその最期を見届けると、首を討って持ち帰り景勝の首実検に供した。

その宇野喜兵衛は、景勝の越後國平定後に剃髪して勘（かん）齋（さい）と号し、一向宗に帰依すると本願寺に依頼して『西生』という寺号を請け、仏門に帰依したという。

## 五

景虎を斃した景勝は、家臣たちが後世まで悔いを残さぬよう御舘を消してしまおうと考えて破却を命じた。

その御舘に残されていて夫景虎の死を知った内室は、悲しみのあまり嫡男道満丸を道連れにして自害した。

もう一人、いつか氏康の子景虎に討たれるのではないかという強迫観念に駆られながら舘の奥に隠棲し、息を潜めて暮らしていた憲政は景虎の自刃で愁眉を開いた。

だが謙信が安息できる場所をと造営してくれた御舘が取り壊されるとなって行き場を失った憲政は、春日山城へ行って景勝に安住の場所を与えて貰おうと考えた。

そこで憲政は次男憲藤を伴って春日山城へ向かった。

二人が四ツ屋の木戸まできたとき偶然出会った桐澤具（きりさわとも）

繁の手の者が、憲政父子を景虎に与力していた敵方と思い込んで、捨て置けぬとばかりにその場で斬り捨てた。

七十三歳の古管領上杉憲政の呆気ない最期であった。誤解されての非業の死は不運であり哀れでもあった。

憲政の墓は照陽寺（米澤市城南五丁目）にあり、墓前に〈當寺関基上杉憲政公御墓〉の石柱が立っている。

墓碑の戒名は〈慶雲院殿泰公宋營大居士〉である。

建長四年（一二五二）五月、式乾門院の藏人藤原重房が鎌倉幕府六代將軍に迎えられた宗尊親王に供奉して関東へ下向するとき、丹波國何鹿郡八田郷上杉荘（京都府綾部市上杉町）を賜ってその荘名を姓としてから三二七年つづいた藤原姓上杉氏は憲政の代で断絶した。

そのあと、平姓長尾景虎が憲政から上杉氏を託されて家名をまもり、ときの権力者によって越後國から陸奥國會津、出羽國米澤と国替えさせられたが、しぶとく生き残り廃藩置県まで十四代二七五年つづいた。

（完）

## 主な参考文献


太平記
鎌倉大草紙
上杉家御年譜（謙信・景勝）
上杉氏系図
上杉氏外姻譜略
上杉御家中諸士略系譜
上杉史料集
上杉謙信のすべて　渡辺慶一編　新人物往来社
足利将軍列伝　桑田忠親編　秋田書店
鎌倉街道　蜂矢敬啓　有峰書店
関東合戦記　伊禮正雄　新人物往来社
小田原北條記（上・下）　岸正尚訳　教育社
後北條記　鈴木良一　有隣新書
戦国合戦事典　小和田哲男　ＰＨＰ文庫
年表日本歴史（3）　鎌倉・室町・戦国　筑摩書房



この作品は同人誌『まんじ』
一一八号（平成二十二年十一月）から
一三九号（平成二十八年二月）まで
二十回連載したものです。

# あとがき

これは室町時代の足利政権下で東国を支配する鎌倉府の関東管領として君臨した上杉氏の物語である。

私の歴史研究はこの上杉氏の系譜を辿ることからはじまった。

上杉氏は丹波國でおこり、関八州での長い最盛期のあと、越後國で終末を迎えている。

それらの地域を訪ね歩いて取材を繰り返し、史料を収集してきた。

歴史雑誌で上杉氏が絡む特集が企画されるたびに執筆させてくれたので、いつか断片的ながらかなりの量が活字になって残っていた。

それを再取材して穴を埋め、繋げておこうと思い立った。

さいわい『まんじ』の同人なので発表の場はある。

しかも季刊誌だから三箇月ごとの締切りなので、その都度取材をしては掲載をつづけることができる。

そろそろ寿命の尽きる秒読みに入る年齢なのではたして完結できるか不安はあったが、未完で終わってもやむなしと覚悟して書きはじめたところ、どうやら脱稿できて寿命のほうが余ってしまった。

『史遊会』と『まんじ』の盟友新井宏さんが一冊に纏めることを薦めて下さり、上梓の運びになってからは読者の視点に立って構成などの助言をいただき、編集や装訂でもたいへんお世話になった。厚くお礼を申し上げる。

ち さか　せいいち
千坂　精一

昭和 5 年(1930)1 月生まれ
日本ペンクラブ　会員
史遊会　顧問
まんじ　同人

主な著書

『上杉騒動秘話』　(ダイヤモンド社)
『上杉謙信の決断と戦略』　(ダイヤモンド社)
『特攻基地の少年兵』　(光人社)

その他

『別冊歴史読本』　(新人物往来社)
『歴史と旅』　(秋田書店)

ほか雑誌に上杉氏の歴史などを執筆
童門冬二氏主宰の同人誌『時代』に歴史小説を発表
同誌休刊後は三戸岡道夫氏主宰の同人誌『まんじ』に歴史小説を発表

関東管領始末記(非売品)
平成二十八年(二〇一六)九月十日印刷発行
著　者　千坂精一
編集・装訂　新井　宏
出版協賛　史遊会サロン
印刷製本　日東ワークスモトヤマ
東京都世田谷区弦巻三・一三・一八
弦巻オリンピックマンション二〇二
郵便番号　一五四・〇〇一六